

加古川市

坂 元 遺 跡 Ⅲ

(主) 加古川小野線(東播磨南北道路) 道路改築事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県加古川市坂元・野口に所在する、坂元遺跡の本発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、(主) 加古川小野線（東播磨南北道）道路改築事業に伴い、兵庫県東播磨民局加古川土木事務所の委託により、兵庫県教育委員会が平成16（2004）年度および平成19（2007）年度に実施した。また整理事業は、同事務所の委託により、平成21・22（2009・2010）年度にかけて、兵庫県立考古博物館において実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（2004年当時）および兵庫県立考古博物館（2007年当時）の岸本一宏、久保弘幸、山田清朝、篠宮正が担当した。また本発掘調査に先立って実施した分布調査、確認調査の担当者については、本文中に記載している。
4. 本発掘調査においては、株日建技術コンサルタント（調査番号2004013）、㈱バスク（同2004139）、㈱GIS関西（同2007101）に委託し、空中写真撮影・測量を実施した。
5. 整理業務に際しては、遺物写真の撮影を㈱タニグチ・フォトに委託した。また、放射性炭素による年代測定をパリノ・サーヴェイ㈱に委託し、その成果を本書に収録している。
6. 本遺跡出土須恵器の原産地分析については、大阪大谷大学の三辻利一氏、調査中に地形形成史の観点から現地指導をいただいた立命館大学の青木哲哉氏には、本遺跡周辺の微地形分析結果について、それぞれ玉稿を頂戴している。
7. 本書の執筆は、各地区の調査担当者がおこない、文責は本文目次に示している。その他は久保が執筆した。また編集は、篠宮正の協力のもとに久保が担当した。
8. 本発掘調査および本書に関連する図面・写真・出土遺物は、すべて兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1）および魚住分館（兵庫県明石市魚住町清水立合池の下630-1）において保管している。
9. 本発掘調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。

三辻利一（大阪大谷大学）・青木哲哉（立命館大学）

凡　例

1. 本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用いている。
2. 本書中の図で示した方位および座標値は、特に但し書きの無い限り、世界測地系によるものである。
3. 本発掘調査に際しては、地区ごとに遺構番号を付与した。その際、遺構種別にかかわらず、すべての遺構に対して発見順に連続する番号を与え、本書においてもそのままの遺構番号を表示する。従って遺構番号は、遺構種別ごとに1番から連続するものではない。ただし、掘立柱建物跡のように複数の遺構（柱穴）によって構成される遺構については、地区ごとに1番から連続する遺構番号を与えている。
また、遺構番号の表示の際には、「SK-A69」のように、遺構種別- 地区・遺構番号を記載する。
4. 本文および図版中で用いた遺構の略称は、下記のとおりである。

SA : 横 SB : 掘立柱建物跡 SD : 溝 SK : 土坑 SR : 旧河道 SX : 不明遺構

P : 柱穴

本文目次

I 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
II 調査の概要	
1. 調査に至る経緯	5
2. 発掘調査の概要	5
3. 整理事業の概要	8
III 遺構と遺物	
1. 確認調査時出土の遺物（篠宮）	9
2. A・D地区の調査（久保・篠宮）	10
(1) 層序	
(2) 遺構と遺物	
3. B・E地区の調査（久保・篠宮）	35
(1) 層序	
(2) 遺構と遺物	
4. C地区の調査（岸本）	52
(1) 層序	
(2) 遺構と遺物	
5. F地区の調査（岸本）	56
(1) 層序	
(2) 遺構と遺物	
6. G地区的調査（山田）	61
(1) 層序	
(2) 遺構と遺物	
IV 自然科学的分析	
1. 坂元遺跡Ⅲにおける放射性炭素年代測定（AMS測定）（パリノ・サーヴェイ株）	71
2. 坂元遺跡Ⅲ出土土器の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株）	73
3. 坂元遺跡Ⅲ出土須恵器の産地問題（三辻利一）	81
4. 坂元遺跡Ⅲにおける地形環境（青木哲哉）	84
V 結語	95
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	坂元遺跡と周辺の遺跡分布	2
第3図	確認調査出土の遺物	9
第4図	掘立柱建物跡・掲載柱穴位置図	11
第5図	柱穴A107・A117	14
第6図	旧西国街道側溝検出位置	57
第7図	F地区出土の遺物	57
第8図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	77
第9図	胎土中の砂の粒径組成	77
第10図	破壊物・基質・孔隙の割合	78
第11図	出土須恵器の両分布図	83
第12図	調査地区周辺の地形面区分図	85
第13図	調査地区周辺の微地形	87
第14図	A-1地区北半部トレンチ断面図	89
第15図	A-1地区南半部トレンチ断面図	90
第16図	A-2地区トレンチ断面図	91
第17図	C地区・F地区トレンチ断面図	92

表目次

第1表	(主)加古川小野線(東播磨南北道)道路 改築事業に伴う坂元遺跡調査一覧	5
第2表	確認調査トレンチの成果	6
第3表	整理事業の工程	8
第4表	掘立柱建物跡一覧	63
第5表	土坑一覧	63
第6表	地区間溝対応	63
第7表	土器一覧	64~69
第8表	石器一覧	70
第9表	金属器一覧	70
第10表	放射性炭素年代測定結果	72
第11表	暦年較正結果	72
第12表	胎土分析試料一覧および胎土分析結果	73
第13表	薄片観察結果	76
第14表	出土須恵器の分析値	82

写真目次

写真1	調査区空中写真(A・B・D・E地区全体)	7
写真2	胎土薄片(1)	79
写真3	胎土薄片(2)	80

図版目次

図版1	確認調査トレンチ位置および 本発掘調査位置
図版2	A・B・D・E地区遺構全体図(1)
図版3	A・B・D・E地区遺構全体図(2)
図版4	A・D地区地層断面
図版5	A-2・B・E地区地層断面
図版6	掘立柱建物跡A1・2
図版7	掘立柱建物跡A3~A6
図版8	掘立柱建物跡D4・D30・D22
図版9	A・D地区土坑(1)
図版10	A・D地区土坑(2)
図版11	A・D地区土坑(3)
図版12	A・D地区土坑(4)
図版13	A・D地区土坑(5)
図版14	A・D地区土坑(6)
図版15	A・D地区溝(北東群)
図版16	A・D地区溝(中央群)
図版17	A・D地区溝(南西群)
図版18	A・D地区溝断面(1)
図版19	A・D地区溝断面(2)
図版20	A・D地区溝断面(3)
図版21	掘立柱建物跡B6
図版22	掘立柱建物跡E1・E2
図版23	掘立柱建物跡E3・E4
図版24	掘立柱建物跡E5
図版25	B・E地区土坑(1)
図版26	B・E地区土坑(2)
図版27	B・E地区土坑(3)
図版28	B・E地区溝(南西群)
図版29	B・E地区溝(中央群)
図版30	B・E地区溝B-42
図版31	B・E地区溝断面(1)
図版32	B・E地区溝断面(2)
図版33	B・E地区溝断面(3)
図版34	B・E地区溝断面(4)
図版35	C地区平面
図版36	C地区断面
図版37	F地区平面・断面
図版38	F地区溝断面

- 図版39 G地区平面・断面・出土遺物
- 図版40 A・D地区出土の遺物(1)
- 図版41 A・D地区出土の遺物(2)
- 図版42 A・D地区出土の遺物(3)
- 図版43 A・D地区出土の遺物(4)
- 図版44 A・D地区出土の遺物(5)
- 図版45 A・D地区出土の遺物(6)
- 図版46 A・D地区出土の遺物(7)
- 図版47 A・D地区出土の遺物(8)
- 図版48 A・D地区出土の遺物(9)
- 図版49 B・E地区出土の遺物(1)
- 図版50 B・E地区出土の遺物(2)
- 図版51 B・E地区出土の遺物(3)
- 図版52 B・E地区出土の遺物(4)
- 図版53 B・E地区出土の遺物(5)
- 図版54 B・E地区出土の遺物(6)
- 図版55 B・E地区出土の遺物(7)
- 図版56 C地区出土の遺物
- 中 SB-D4(南から)
- 下 SB-B1(北東から)
- 写真図版11 1 A-1地区西壁断面(東から)
- 2 SB-A1内焼土検出状況(西から)
- 3 SD-A5断面(南から)
- 4 SD-A5下底勾玉出土状況(南から)
- 5 SD-A230あぜ断面(西から)
- 6 SD-A229・230断面(西から)
- 7 SD-A231・232断面(西から)
- 8 SD-A230下底土器出土状況(西から)
- 写真図版12 上 SK-A69遺物出土状況(東から)
- 中 SK-A69遺物出土状況(東から)
- 下 SK-A69遺物出土状況(東から)
- 写真図版13 1 SD-A230土器出土状況(西から)
- 2 SB-A231土器出土状況(北から)
- 3 SD-A230上層土器出土状況
- 4 SD-A232土器出土状況(南から)
- 5 P-A107土器出土状況(北から)
- 6 P-A117土器出土状況(東から)
- 7 SD-D59土器出土状況(西から)
- 8 SK-D39断面(西から)
- 写真図版14 1 SD-B4断面(南から)
- 2 SK-B42東端土器出土状況(西から)
- 3 SK-B42土器出土状況(北から)
- 4 SK-B42断面(東から)
- 5 SK-B7南北セクション(東から)
- 6 SK-B7土器出土状況(北から)
- 7 SD-B4(東から)
- 8 作業状況(北から)
- 写真図版15 上 D・E地区全景(南から)
- 中 E地区遺構密集部(西から)
- 下 D・E地区掘立柱建物跡群(南から)
- 写真図版16 上 SB-E4(西から)
- 中 SB-E1~E3(北から)
- 下 SB-D4(南から)
- 写真図版17 1 E地区南部全景(南から)
- 2 SD-E1~E5(北から)
- 3 SK-E45断面(西から)
- 4 SK-E45遺物出土状況(東から)
- 5 SD-E10~E12断面(西から)
- 6 SD-E12土器出土状況(西から)

写真図版目次

- 写真図版1 上 耳環(A-1地区P-A207出土)
- 下 勾玉(A-1地区SD-A5出土)
- 写真図版2 上 遺跡遺景(空中写真・東から)
- 下 遺跡遺景(空中写真・北から)
- 写真図版3 上 遺跡近景(空中写真・北から)
- 下 遺跡近景(空中写真・東から)
- 写真図版4 上 A地区(空中写真・東から)
- 下 B地区(空中写真・東から)
- 写真図版5 上 D・E地区(空中写真・北から)
- 下 C地区(空中写真・西から)
- 写真図版6 上 F地区(空中写真・東から)
- 下 G地区全景(北西から)
- 写真図版7 上 A-1地区全景(南から)
- 下 A-1地区全景(北から)
- 写真図版8 上 A-2・B地区全景(北から)
- 中 A・B地区全景(南から)
- 下 B地区全景(北から)
- 写真図版9 上 A-1地区掘立柱建物跡群(南から)
- 中 SB-A1(南から)
- 下 SB-A6(東から)
- 写真図版10 上 SB-A4(北東から)

	7 SD-E14下底土器出土状況(南から)	写真図版30 出土遺物 (9) A-2地区 SD-A230
	8 SK-E45石鑿出土状況(東から)	写真図版31 出土遺物 (10) A-2地区 SD-A230
写真図版18	上 C地区全景(西から)	写真図版32 出土遺物 (11) A-2地区 SD-A229・A230
	中 SD-C2(南から)	
	下 SD-C2北端土層断面(南から)	写真図版33 出土遺物 (12) D地区 SD-D58
写真図版19	上 F地区全景(北から)	写真図版34 出土遺物 (13) D地区 SD-D58
	中 F地区全景(東から)	写真図版35 出土遺物 (14) A・D地区 SD-A231・D57・D59
	下 SD-F7と西国街道(南から)	
写真図版20	1 C地区SD-C2内土器出土状況(北から)	写真図版36 出土遺物 (15) A-2地区 SD-A232
	2 西国街道の現状(西から)	写真図版37 出土遺物 (16) A・D地区
	3 SD-F7(東から)	写真図版38 出土遺物 (17) A・D地区
	4 西国街道北側溝椾出状況(東から)	写真図版39 出土遺物 (18) A・D地区 包含層
	5 SD-F7西端部土層断面(東から)	写真図版40 出土遺物 (19) A・D地区
	6 SD-F7中央部土層断面(東から)	石器・金属器
	7 Po-F1包含層下部土器出土状況(西から)	写真図版41 出土遺物 (20) B・E地区 SK-B7・E45
写真図版21	1 A-1地区地質トレンド(北から)	写真図版42 出土遺物 (21) E地区
	2 A-1地区地質トレンド断面(東から)	写真図版43 出土遺物 (22) B地区 SD-B4
	3 A-2地区地質トレンド(南から)	写真図版44 出土遺物 (23) B地区 SD-B2~B4
	4 A-2地区地質トレンド断面(東から)	写真図版45 出土遺物 (24) B・E地区
	5 A-2地区地質トレンド断面(北東から)	写真図版46 出土遺物 (25) E地区 SD-E12
	6 F地区地質トレンド(北から)	写真図版47 出土遺物 (26) E地区 SD-E12
	7 F地区地質トレンド断面(東から)	写真図版48 出土遺物 (27) E地区 SD-E16
	8 F地区地質トレンド断面(東から)	写真図版49 出土遺物 (28) E地区 SD-E16
写真図版22	出土遺物 (1) A・D地区	写真図版50 出土遺物 (29) E地区 SD-E16
写真図版23	出土遺物 (2) A-1地区 SK-A69・A90	写真図版51 出土遺物 (30) E地区 SD-E10・E14
写真図版24	出土遺物 (3) A-1・2地区	写真図版52 出土遺物 (31) E地区 SD-E88
写真図版25	出土遺物 (4) A-2地区 SD-A230	写真図版53 出土遺物 (32) B・E地区
写真図版26	出土遺物 (5) A-2地区 SD-A230	写真図版54 出土遺物 (33) B・E地区 包含層・石器・金属器
写真図版27	出土遺物 (6) A-2地区 SD-A230	
写真図版28	出土遺物 (7) A-2地区 SD-A230	写真図版55 出土遺物 (34) C地区
写真図版29	出土遺物 (8) A-2地区 SD-A230	写真図版56 出土遺物 (35) F地区

I 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

坂元遺跡は、兵庫県南西部を占める播磨地域の東部に位置し、加古川市野口町坂元から同町野口にかけて広がる遺跡である。遺跡は、別府川左岸（東岸）に北東から南西へと広がる完新世段丘上に立地しているが、広い意味では加古川左岸（東岸）の遺跡と呼んでも差し支えないだろう。東西500m、南北800m以上の広大な範囲を占め、遺跡からは、現在の海岸線まで約4.5km、加古川までは約4kmを測る（第1図）。

加古川は兵庫県下最大の河川で、丹波から北播磨地域にかけての広範な流域面積をもち、東播磨地域を流下して瀬戸内海に注いでいる。別府川はその東に沿うように流れる小河川で、三木市志染町付近に発する草谷川、印南野台地に発する畠川、坂元遺跡の北東に広がる段丘に発する白ヶ池川等の小河川を集めて、加古川市と播磨町の境界にあたる東播磨港へ注ぐ。遺跡南部には、国道2号線が東西に延びるが、これと一部重複しつつ平行して旧西国街道、あるいは古代山陽道が延びている。

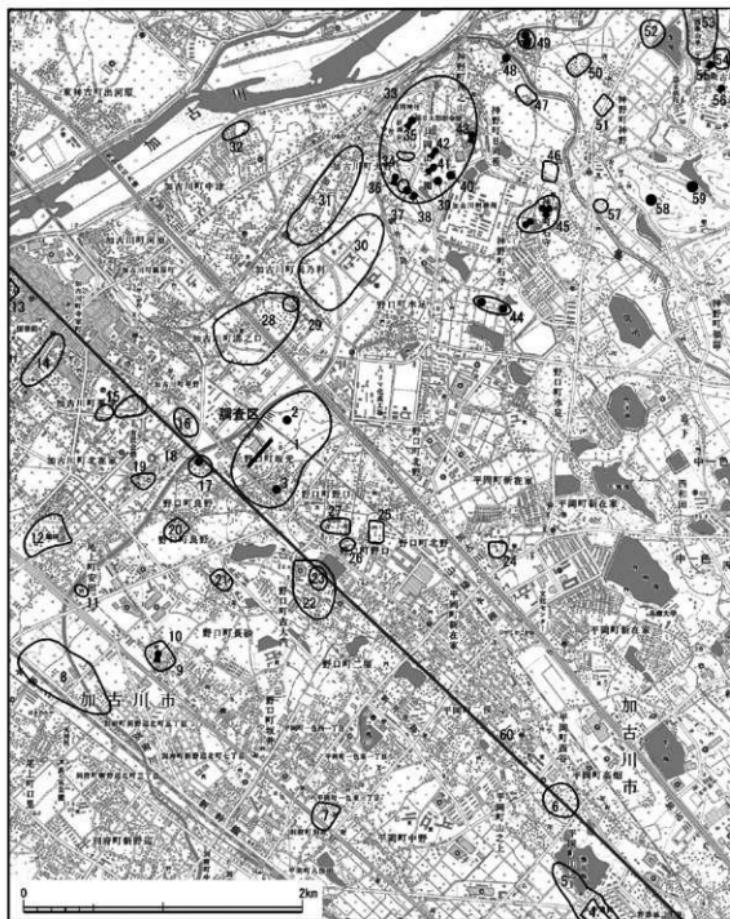
このように南北方向に延びる河川、東西方向への幹線道路に臨み、海岸線にも近いという位置にあることが、本遺跡の地理的環境を語る際、最大の特徴として指摘しうるだろう。

青木哲哉氏によれば、遺跡が立地する完新世段丘は遺跡北部では2面に区分され、その間を間没旧河道が複雑に交錯しているという。これらのうち完新世段丘Ⅰは、完新世に入って以降、縄文時代晚期までの間～おそらくは縄文海進直後の海退によって～段丘化したと考えられており、その後、縄文時代晚期には人間活動の痕跡が残されるようになる（青木哲哉 2009）。



第1図 遺跡の位置

1. 地理的環境



- | | | | | |
|-------------|------------------|------------|------------|-------------|
| 1. 坂元遺跡 | 13. 加古川城跡 | 25. 野口廣寺 | 37. 日岡山塚群墓 | 49. 二塚古墳群 |
| 2. 坂元埴輪冢跡 | 14. 萩津大年遺跡 | 26. 野口城跡 | 38. 猪塚古墳 | 50. 高田橋居跡 |
| 3. 伝和泉式部籠印塔 | 15. 菓津遺跡 | 27. 教信寺 | 39. 西原古墳 | 51. 手木橋居跡 |
| 4. 大中遺跡 | 16. 平野遺跡 | 28. 溝之口遺跡 | 40. 東車塚古墳 | 52. 神野遺跡 |
| 5. 山之上遺跡 | 17. 具平塚遺跡 | 29. 溝之口廣寺 | 41. 南大塚古墳 | 53. 西条古墳群 |
| 6. 長塙遺跡 | 18. 具平塚古墳 | 30. 美乃利遺跡 | 42. 西大塚古墳 | 54. 西条廣寺 |
| 7. 一色構居跡 | 19. 北在家遺跡 | 31. 大野遺跡 | 43. 北大塚古墳 | 55. 人塚古墳 |
| 8. 浜の宮遺跡 | 20. 織田構居跡 | 32. 中津構居跡 | 44. 足水古墳群 | 56. 尼塚古墳 |
| 9. 長砂遺跡 | 21. 長砂構居跡 | 33. 日岡山古墳群 | 45. 石守古墳群 | 57. 天神前遺跡 |
| 10. 聖陵山古墳 | 22. 古大内遺跡 (賀古駅家) | 34. 日岡遺跡 | 46. 石守廣寺 | 58. 神野大林窯跡群 |
| 11. 安田構居跡 | 23. 古大内城跡 | 35. ひれ基古墳 | 47. 石守構居跡 | 59. 神野北山遺跡 |
| 12. 鶴林寺 | 24. 横倉城跡 | 36. 勸使塚古墳 | 48. 若神社古墳 | 60. 今山陽道 |

地図は国土地理院発行25,000分の1地形図「加古川」・「三木」・「高砂」・「東二見」を使用した。

第2図 坂元遺跡と周辺の遺跡分布

2. 歴史的環境

後期旧石器時代

加古川流域には多くの後期旧石器時代遺跡が分布し、県下では当該期の遺跡が最も集中する地域の一つである。坂元遺跡に近接するこの時期の遺跡としては、加古川市日岡遺跡（34）でナイフ形石器・細石刃核が出土しているほか、加古川市から播磨町にかけて広がる山之上遺跡（5）（播磨町域では大中遺跡（4））からは、ナイフ形石器が多数見いだされている。東播磨地域に分布する当該期の遺跡の大半は、段丘縁辺に構築された溜池岸から石器が採集されたもので、本来の地層中から発掘された例は、明石市西脇遺跡のみである（稻原昭嘉 1996）。坂元遺跡自体でも、平成15・16（2003・04）年度の調査で、ナイフ形石器・台形石器などが出土しているが、原位置を離れた資料である（兵庫県教育委員会 2009）。

縄文時代

加古川市域では縄文時代の遺跡は少なく、市内八幡町宮山遺跡で後期の敷石住居跡が検出されているほか、晩期の土器が東神吉遺跡をはじめとする数遺跡で、弥生土器とともに出土している例が見られる程度であった。従って、前回の坂元遺跡の調査で検出された晩期の埋甕群は注目に値する（兵庫県教育委員会 前掲）。

弥生時代

弥生時代になると、加古川下流域の遺跡は急増する。別府川周辺では、溝之口遺跡（28）、美乃利遺跡（30）、大野遺跡（31）などが拠点的集落として展開し、本遺跡でも弥生時代中期後半に集落が成立して後期にまで継続する。溝之口遺跡は弥生時代を通じて集落として展開し、古墳時代以降にも継続する、拠点集落と呼ぶのに相応しい遺跡である。弥生時代の集落としては、居住域、墓域、水田域が見いだされている。溝之口遺跡の西に隣接する美乃利遺跡は、前期の水田跡、中期の集落跡が確認されている。その北に位置する大野遺跡でも中期～後期の集落が検出されている。別府川流域に展開するこれらの弥生時代遺跡群が、相互に深い関わりをもっていたことは、ほぼ疑う余地がないだろう。さらに下流域に目を向けると、後期に成立する北在家遺跡（19）がある。

古墳時代

本遺跡の周辺では、遺跡の北方に広がる段丘・丘陵に日岡山古墳群（33）、西条古墳群（53）、二塚古墳群（49）、石守古墳群（45）、水足古墳群（44）などが知られている。

日岡山古墳群は、全長85mの前方後円墳である福墓古墳（日岡陵古墳）をはじめとして、5基の前方後円墳、20基を超える円墳から成る大規模な前期の古墳群で、そのうちの東車塚古墳（40）と勘使塚古墳（36）からは、三角縁神獣鏡が出土している。

西条古墳群は、帆立貝式の人塚（55）、尼塚（56）、前方後円墳の行者塚の3基からなる中期の古墳群で、中でも行者塚は全長110mを測る、加古川流域最大の古墳である。古墳の整備計画に伴い、1995・96年に発掘調査が行われ、墳頂部の埋葬施設から中国製（3世紀）の帶金具が出土したほか、馬具、鉄錠などが出土した。また、前方部西側の造り出しからは、家形埴輪のほかアケビ・ヒシの実・鳥・魚形などの土製品が出土し、前方後円墳の造り出しの機能を推定する上で重要な資料が得られた。

二塚古墳群（49）、石守古墳群（45）は、横穴式石室をもつ後期の古墳群である。

遺跡の南西にある聖陵山古墳（10）は、全長70mの前期の前方後円墳である。古墳は海拔4mの海岸砂丘と推定される場所に築かれており、築造当時は海岸線にきわめて近かったとされる。明治以降の造成によって墳丘の形状は損なわれているが、その造成時に出土したという銅鏡のほか、竪穴式石室の天

2. 歴史的環境

井石とみられる石材が残されている。大阪湾から播磨灘にかけて海岸線にならぶ、処女塚、五色塚ほかの古墳とともに、海と深い関わりのある古墳である。

奈良時代以降

奈良時代になると、当時最大の幹線道路であった山陽道が敷設される。古代山陽道（60）は、坂元遺跡の南縁付近に位置していたと推定されている。坂元遺跡の南東には、賀古駅家に比定される古大内遺跡（22）があり、兵庫県立考古博物館による学術調査によって、駅館とそこへの進入路が復原されている（兵庫県教育委員会 2010b）。延喜式によれば、賀古駅家は馬40匹を配備する日本最大の駅家であった。この時期と並行して、坂元遺跡では集落が展開するが、周辺では野口廃寺（25）、石守廃寺（46）、西条廃寺（54）をはじめとする古代寺院が造営されており、山陽道を基軸にした古代寺院・集落の展開が看取される。

なお満之口遺跡では、奈良時代になると規格的な配置をもつ建物群が形成され、墨書き土器、石斧なども出土していることから、官衙的性格をおびると推定されている。

中世になると、坂元遺跡周辺には多くの遺跡が展開するが、中でも大野遺跡には、方形に区画された屋敷地群が形成されるようになり、加古川の水運を利用した集落の一形態と推定されている（兵庫県教育委員会 2010a）。

引用・参考文献

- 加古川市 1989 加古川市史 第1巻
加古川市 1996 加古川市史 第4巻 史料編 I
稻原昭嘉 1996 「明石市西脇遺跡出土の石器群について」 旧石器考古学 52
兵庫県教育委員会 2009 坂元遺跡I - JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-
青木哲哉 2009 「坂元遺跡の地形環境」 坂元遺跡II - 東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘調査
報告書- 兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会 2009 坂元遺跡II - 東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書-
兵庫県教育委員会 2010a 大野遺跡-（一）別府川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-
兵庫県教育委員会 2010b 兵庫県古代官道間違遺跡調査報告書 I

II 調査の概要

1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所が実施した、主要地方道加古川小野線（東播磨南北道）道路改築事業に伴うものである。当該事業地には、当時、本書に収録した坂元遺跡が周知されていたが、兵庫県教育委員会では平成15（2003）年度以降、坂元遺跡周辺の事業対象地において、第1表に示すとおり分布調査、確認調査を実施した。その結果、坂元遺跡の範囲が從来周知されていた範囲よりもはるかに広いことが確認され、事業地内における本発掘調査が順次実施された。

調査年度	調査番号	調査種別	調査期間	担当者	調査面積 (m ²)
2003	2003091	確認調査	2003/7/14～2003/7/17	篠宮正	139
	2003244	分布調査	2004/1/20	甲斐昭光	300
2004	2004013	本発掘調査	2004/5/27～2004/8/27	岸本一宏・久保弘幸・篠宮正	3,338
	2004139	本発掘調査	2004/8/27～2004/11/6	岸本一宏・久保弘幸・篠宮正	40
2004	2004179	確認調査	2004/5/27～2004/8/27	岸本一宏・久保弘幸・篠宮正	1,843
	2005225	工事立会	2006/3/13・16	中川涉	30
2006	2006002	確認調査	2006/4/24・25	渡辺昇	110
	2006011	工事立会	2006/4/17～2006/5/1	長瀬誠司	30
2006	2006090	本発掘調査	2006/9/25～2007/2/5	西口和彦・鈴木敬二・小川弦太	4,878
	2006192	確認調査	2006/10/2～2006/10/4	鈴木敬二	60
2006	2006136	確認調査	2006/11/15	中川涉	8
	2007101	本発掘調査	2007/10/1～2007/10/23	山本三郎・山田清朝	127
2008	2008145	本発掘調査	2008/9/16～2008/11/21	別府洋二・深江英恵	1,130

第1表 (主) 加古川小野線（東播磨南北道）道路改築事業に伴う坂元遺跡調査一覧
(調査番号網掛けは、報告書に収録の調査および関連する調査)

2. 発掘調査の概要

(1) 確認調査

平成15（2003）年度の確認調査（2003091）は、当該坂元遺跡の範囲として周知されていた範囲の南側に隣接する、上記事業地を対象として実施した。調査は、2 m × 5 m のトレンチ14か所を設定して実施した（図版1）。その結果、ほとんどのトレンチで遺物の出土を見たが、遺構が検出されなかった№5～№7を除く範囲について、本発掘調査が必要と判断された。この確認調査による成果を受けて、平成16（2004）年度の本発掘調査（2004013・2004139）が実施された。

平成16（2004）年度の確認調査（2004179）は、同年度の本発掘調査期間中に実施した。調査は、加古川小野線（東播磨南北道）と国道2号線の取り付き部付近について、2 m × 5 m のトレンチ4か所を設定して実施した（図版1）が、遺構は検出されなかった。

平成18（2006）年度の確認調査（2006002）は、加古川小野線（東播磨南北道）と国道2号線の取り付き部、および加古川バイパスへの取り付け部について実施された。調査は、2 m × 5 m のトレンチを基本とし、国道2号線への取り付け部に3か所、加古川バイパスへの取り付け部に8か所を設定して実

2. 発掘調査の概要

施した。その結果、加古川バイパスへの取り付け部では遺構は検出されなかつたが、国道2号線への取り付け部のトレンチNo.3で遺構が確認された。この確認調査による成果を受けて、平成19(2007)年度の本発掘調査(2007.10.1)が実施された。

確認調査における個々のトレンチの成果は、第2表のとおりである。

調査番号	トレンチNo.	遺構	遺物
2003091	1	なし	なし
	2	湧水のため確認できず	なし
	3	溝	土師器・須恵器
	4	溝	土師器・須恵器
	5	流路	土師器・須恵器
	6	なし	土師器・須恵器
	7	なし	須恵器
	8	溝	土師器・須恵器
	9	湧水のため確認できず	なし
	10	溝	土師器・須恵器
	11	溝	須恵器
	12	柱穴	土師器・須恵器
	13	なし	土師器・須恵器
	14	溝	土師器・須恵器・瓦・埴輪
2004179	0	なし	なし
	1	なし	なし
	2	なし	なし
	3	なし	土師器

第2表 確認調査トレンチの成果

(2) 本発掘調査

平成16（2004）年度の調査

本発掘調査は、5月27日から11月6日にわたり、合計5,181m²を対象として実施した。調査に際しては対象地内に道路が存在したため、これを切り替える必要から調査を二分して実施した。そのため事業者側（加古川土木事務所）との調査契約が二分され、調査番号も二分されることとなったが、実質的には一連の調査である。

【調査の体制】

平成16（2004）年度

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第2班 岸本一宏・久保弘幸・篠宮 正

平成19（2007）年度

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館

調査第1班 山本三郎・山田清朝

【調査の方法と成果の概要】

事業予定地内は北東-南西に延びている。既述のように、調査はまず調査地を縦断する道路部分を除外して実施して、道路の切り替えを行った後、道路敷下にあたる部分の調査を実施した。また、調査区内には既設の水路があり、この部分については調査から除外した。

こうした事情で調査区が複数に分断されたため、調査の便宜上、最初に着手した調査区（2004013）をA-1・A-2・B・Cの3地区に、次いで着手した調査区（2004139）をD・E・F地区と呼称した。平成19（2007）年度の調査区については、これらと一緒にして本書に収録する都合上、G地区と呼称しておく。

いずれの地区においても、重機（バックホー）により表土を除去した後、人力掘削・遺構検出作業を実施した。遺構面の図化は、2004013では㈱日建技術コンサルタントに、2004139では㈱バスコに、2007101では㈱GIS関西にそれぞれ委託し、空中写真測量によっておこなった。ただし、遺構の詳細図化および地層断面図化は、調査員および調査補助員がこれを実施した。なお平成16（2004）年度の調査では、遺構面の調査終了後、立命館大学講師青木哲哉氏（地理学）に依頼して、遺跡が立地する地形面の形成の観点から、現地において調査指導をいただいた。



写真1 調査区空中写真（A・B・D・E地区全体）

3. 整理事業の概要

3. 整理事業の概要

整理事業は、平成21・22（2009・2010）年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。その工程は、第3表のとおりである。整理事業は久保の担当の下、考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存班（課）がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。金属器の保存処理については、すべて考古博物館において実施した。また、本書に収録した遺物写真については、㈱タニグチ・フォトに委託して撮影を実施した。

本発掘調査時に、遺跡内で採取した材・土壌等の試料による放射性炭素年代の測定、および土器の胎土分析についてはパリノ・サーヴェイ隸に委託し、その成果は本報告書に収録している。また、本発掘調査時に現地指導をいただいた、立命館大学講師青木哲哉氏からは、遺跡周辺の微地形発達についての王稿を頂戴し、本書に掲載している。

年度	水洗い	ネーミング	接合・補強	実測・拓本	復元	写真撮影	写真整理	図面補正	トレース	レイアウト	分析鑑定	保存処理	報告書刊行
2008													
2009													
2010													

第3表 整理事業の工程

【整理事業の体制】

平成20（2008）年度 整理保存班 篠宮 正

平成21（2009）年度 整理保存班 姫田淳子

平成22（2010）年度 整理保存課 山本 誠

【整理事業に携わった嘱託員等】（五十音順）

荒木由美子・大西美緒・大前篤子・荻野麻衣・小谷桂加・島村順子・長濱重美・浜脇多規子・

藤井光代・藤池かづさ・前田恵梨子・増田麻子・眞子ふさ恵・嶋岡美見・吉田優子・吉村あけみ

III 遺構と遺物

1. 確認調査時出土の遺物

確認調査の成果については、前章で概要を記したが、以下ではその出土遺物のうち主要なものについて記載する。(第3図 写真図版22) (1~9)

本発掘調査A-1地区の範囲内にあるNo13からは須恵器の壺Bと鉢が出土している。壺Bの1は低い高台を貼り付けた底部に直線的に開く口部を持つ。底部は回転ヘラ切り後、丁寧なナデを行う。右回転ロクロである。

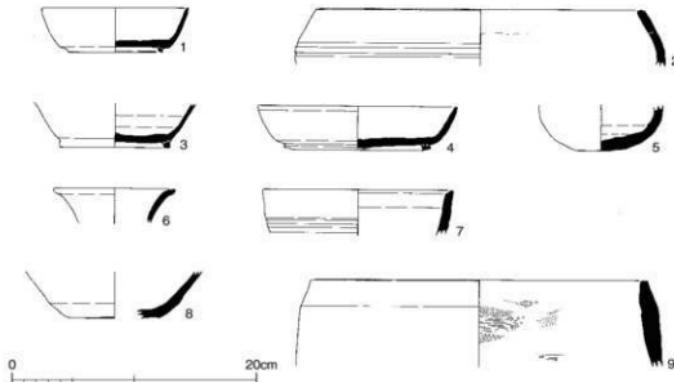
鉢2は口縁部が内寄し口縁直下に2条の沈線を巡らす。右回転ロクロである。

No14からは須恵器壺Bの3が出土している。口縁部は欠損している。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。右回転ロクロである。

本発掘調査A-2地区の範囲内にあるNo11からは須恵器の壺Bと甌が出土している。壺Bの4は体部が浅く、低く突出した高台が付く。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。内面は多方向の丁寧なナデを行う。右回転ロクロである。甌5は底部のみの破片で、底部内面に直径7mmの突押しの痕跡が残る。外面は自然釉が付着している。

本発掘調査F地区の範囲内にあるNo4からは須恵器の壺と直口壺が出土している。壺6は口頸部のみで大きく外反し、口縁先端は丸く仕上げる。内面の回転ナデは粗い。右回転ロクロである。直口壺7は直立する口頸部で、外面に2条の沈線を巡らす。口縁端部内面には面を作る。右回転ロクロである。

本発掘調査B地区とF地区の間の本発掘に至らなかった地区からは須恵器鉢と土師器甌が出土している。須恵器鉢8は底部が回転糸切りの東播系須恵器である。土師器甌9は上端部の破片である。内面は横方向のハケ調整で仕上げる。



第3図 確認調査出土の遺物

2. A・D地区の調査

2. A・D地区の調査

(1) 層序 (図版4)

A・D地区では、広範囲に現代の厚い盛土があり、その下に現代の水田土壤および床土が見られる。ほとんどの場合、その直下から古代～中世の遺物包含層（古土壤）となる。遺物包含層はシルト質の極細砂・細砂を主体としており、少量の礫を含む場合が多い。

A・D地区北壁および西壁の南部では、5・6（a・b）層が、西壁の北～中部では8（a～d）層が、それぞれ遺物包含層と認められた。これらのうち8（a～d）層は、層の下面に顕著な凹凸が認められたこと、層の堆積構造に人為的攪拌とみられる部分が存在したことから、水田土壤と判断できる。擾乱による層の断絶のため、5・6（a・b）層と8（a～d）層の正確な対比はできなかったが、広範囲に安定的な堆積が認められた8a・8c層が、5・6層に対応する可能性がある。

遺物包含層の堆積から見ると、調査区内には本来2枚の遺構面が存在した可能性があるが、調査区内での遺物包含層の平面的広がりが必ずしも安定的ではなく、段丘面の凹凸に沿った堆積物の消長があり、広い範囲で包含層が存在しない部分も見られたこと、調査区内に多くの擾乱部が存在していたことなどから、複数面で調査することは困難と判断し、段丘被覆層上面のみで遺構検出を行うこととした。

遺物包含層の下位には、黄褐色ないしにぶい黄褐色シルト質砂からなる段丘被覆層（以後「地山」とする）が見られ、以下はよく綿まとった段丘礫層となる。

(2) 遺構と遺物

A・D地区では、掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝が検出された。遺構は南北方向に長い地区内で、明瞭な偏在状況を見せている。掘立柱建物跡はA-1・D地区の中央部から南部にかけて、土坑はA-1・D地区の北半から中央部にかけてとA-2地区に、溝はA-1・D地区北半とA-2地区に、それぞれ集中する。以下では、遺構種別ごとに記載を行う。

1. 掘立柱建物跡

A・D地区では、合計9棟の掘立柱建物跡が検出した（第4表）。建物跡は、南北に長いA-1・D地区の中央部から南部付近にまとまった分布を見ることができる。建物の方位には齊一性が認められないが、建物の形式はよく類似するものが見られる。

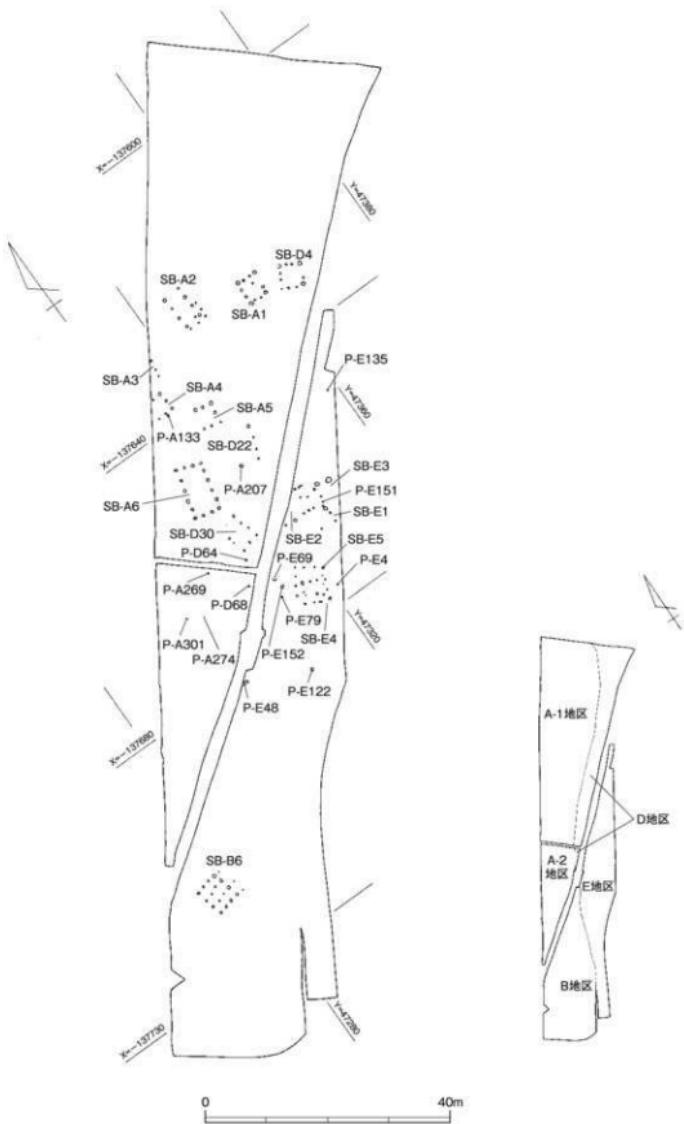
【SB-A1】

遺構 (図版6)

3間×3間の側柱式の建物跡である。ただし、東辺の柱のうちの1本（P83）が、ほぼ1間分、西側（建物内部側）に寄る。柱間は、P83を除くならば、0.88m～1.36mとばらつきが大きく、柱根の並びも特に南北両辺でばらつきが大きい。柱穴は円形ないし不整形を呈し、長径40cm～88cmを測るが、四隅の柱穴規模が明らかに大きい。床面積は約12.5m²である。P76とP79を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N3.3°Eである。床面に直径30cmほどの、円形の焼土を検出した。

出土遺物 (図版46 写真図版22) (157)

P-A74から土師器甕157が出土している。口頸部のみで、大きく外反する。



第4図 捨立柱建跡・掲載柱穴位置図

2. A・D地区の調査

【SB-A2】

遺構（図版6）

1間×3間の側柱式の建物跡である。また建物跡の南東側に沿って、L字形に並ぶ柱穴5基があり、この建物跡に属する施設と判断した。建物跡の柱間は、1.76m～2.08mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径36cm～72cmを測る。また建物跡南東側の柱穴群は長径36cm～44cmを測り、建物跡の柱穴よりも明らかに規模が小さいことから、軒を支持する等の補助的な柱穴であったと推察される。床面積は約16.4m²である。P-A95とP-A98を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N4.0°Eである。

出土遺物（図版46 写真図版22）（156）

P-A59から須恵器坏G156が出土した。口縁部を欠く。底部は平底で、回転ヘラ切り後、ナデを行う。内面は多方向の仕上げナデを行う。右回転ロクロである。

【SB-A3】

遺構（図版7）

調査区内では東側の柱列3間分のみが検出された。柱間は、1.36m～1.52mを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、長径24cm～30cmを測る。P-A120とP-A122を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N6.5°Eである。

出土遺物（図版46 写真図版22）（155）

P-A120から須恵器坏155が出土している。口縁部のみで、直線的に外方に開く。

【SB-A4】

遺構（図版7）

側柱式の建物跡で、調査区内では2間×2間の分が検出された。建物跡の西側は、調査区外へのびる。柱間は、1.36m～1.60mを測る。柱穴は円形、梢円形ないしは隅丸方形を呈し、長径28cm～60cmを測る。P-A123とP-A125を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N4.5°Eである。

出土遺物（図版46 写真図版22）（154）

P-A125から須恵器坏H蓋154が出土している。天井部を欠く。天井部から口縁部にかけては丸く作り、口縁端部は外反して開く。右回転ロクロである。

【SB-A5】

遺構（図版7）

2間×2間の側柱式の建物跡であるが、建物跡西辺中央の柱穴が、擾乱によって消失している。柱間は、1.28m～1.68mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径40cm～64cmを測る。P-A141とP-A143を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N7.0°Eである。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SB-A6】

遺構（図版7）

3間×5間の側柱式の建物跡である。柱間は1.28m～1.84mを測るが、建物跡中央の桁行き3間分で

は、柱間が南北端の各1間よりも大きい。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径48cm~64cmを測る。床面積は33.6m²を測る。P-A149とP-A154を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N14.0°Eである。

出土遺物（図版46 写真図版22・38）（146~150）

須恵器壺H蓋・壺H身、土師器壺I・壺が出土している。

須恵器壺H蓋146・147がある。146は天井部の中央部と口縁部を欠く。天井部と口縁部の境に丸い稜を持つ。天井部は回転ケズリで、内面は仕上げナデを行う。右回転ロクロである。P-A164出土。147は天井部と口縁部の境を丸く作る。口縁端部内面に段の名残がある。P-A213から出土。壺H身148は小ぶりで内傾し、立ち上がりは短い。P-A154出土。

土師器壺I149は小片であり、二次焼成を受けてススが付着している。P-A154出土。

壺150は底部が丸底気味で口体部は大きく開く。底部は回転ヘラ切りの後、ナデを行う。内面は丁寧なナデを行う。P-A164出土。

【S B-D 4】

遺構（図版8）

3間×3間の側柱式の建物跡である。柱間は1.04m~1.36mを測るが、建物跡東辺では、P-D5とP-D7の間の柱穴を欠く。柱穴は円形、橢円形ないし隅丸方形を呈し、長径24cm~80cmを測る。四隅に位置する柱穴は、他の柱穴より明らかに大きく、この点でS-B-A1に類似する。床面積は12.7m²を測る。P-D5とP-D8を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N25.0°Eである。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【S B-D 30】

遺構（図版8）

3間×3間の側柱式の建物跡である。柱間は1.04m~1.76mを測るが、捲乱により北西隅の柱穴を失っている。建物跡中央の桁行き1間分は西辺で1.04m、東辺で1.52mを測り、南北端の各1間よりも明瞭に小さい。柱穴は隅丸方形・長方形を呈し、長辺で40cm~52cmを測る。床面積16.0m²を測る。P-D3とP-D36を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N14.0°Wである。

出土遺物（図版46 写真図版22・38）（151~153）

須恵器壺H蓋・壺、土師器のケズリ滓が出土している。

須恵器壺H蓋151は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境を丸く作る。右回転ロクロである。P-D33出土。

壺152は口縁部のみで、外方に開く。口縁端部は丸く仕上げる。右回転ロクロである。P-D34出土。

土師器のケズリ滓153はケズリ面の断面形がU字形を呈し、縦方向に砂粒が動いた痕跡が残る。反対面は横方向の皺が残る。P-A186出土。

【S B-D 22】

遺構（図版8）

調査区内では柱穴4基のみが確認された。あるいは櫛の可能性もあるが、ここでは掘立柱建物跡として記載する。柱間は1.36m~1.92mを測る。柱穴は不整円形ないし橢円形を呈し、長径24cm~48cmを測

2. A・D地区の調査

る。P-D24とP-D27を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N21.5°Eである。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

2. 柱穴

多数の柱穴が検出されたが、掘立柱建物跡に属する柱穴以外に、樋、杭列等まとまりのある遺構として復元できるものはなかった。出土遺物も僅少で、所属時期が特定できないものが多い。以下では、主に図化可能な遺物を出土した柱穴について記載する。なお遺構の位置は、第4図に記載している。

【P-A107】(第5図)

遺構

A地区中央部に位置する大型の柱穴であるが、掘立柱建物跡には含まれない。歪んだ梢円形を呈し、長径58cm、短径50cm、深さ15cmを測る。柱穴としたが、明確な柱痕は認められなかったことから、あるいは土坑とすべきかもしれない。内部は砂質シルトで埋没しており、検出面近くで遺物が出土した。

出土遺物

土師器の破片が出土しているが、図示できない。

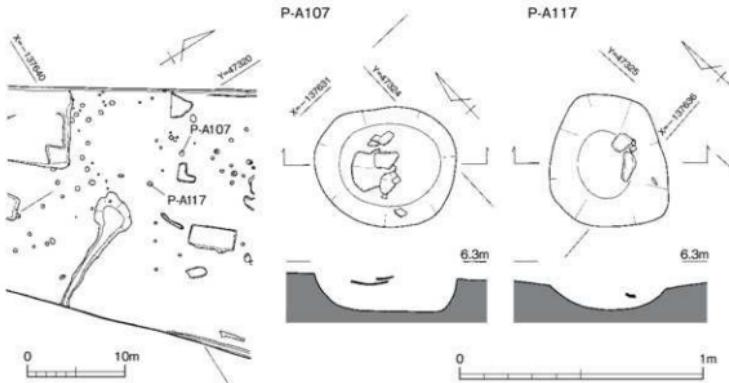
【P-A117】(第5図)

遺構

A地区中央部に位置する大型の柱穴であるが、掘立柱建物跡には含まれない。歪んだ隅丸長方形を呈し、長径54cm、短径48cm、深さ10cmを測る。柱穴としたが、明確な柱痕は認められなかったことから、あるいは土坑とすべきかもしれない。内部は砂質シルトで埋没しており、検出面直下で遺物が出土した。

出土遺物

土師器の破片が出土しているが、図示できない。



第5図 柱穴A107・A117

【P-A133】(図版46 写真図版38) (160)

A地区中央部に位置する。土師器壺160が出土している。小ぶりの楕で半球形である。底部はケズリの後、ナデを行う。

【P-A274】(図版46 写真図版38) (161)

A地区中央部に位置する。土師器皿161が出土している。大形の皿の口縁部で、端部内面に段を作る。

【P-A301】(図版46 写真図版38) (162)

A地区中央部に位置する。土師器壺162が出土している。口縁部の一部である。内面に横方向のハケ調整を行う。

【P-D64】(図版46 写真図版38) (158)

D地区中央部に位置する。須恵器壺I160が出土している。口縁部の一部である。右回転ロクロである。

【P-D68】(図版46 写真図版38) (159)

D地区中央部に位置する。須恵器壺A159が出土している。腰部は丸く、口縁部は外反する。底部は回転ヘラ切り後ナデを行う。左回転ロクロである。

【P-A269】(図版46 写真図版38) (163)

A地区南部に位置する。焼成粘土163が出土している。甕の体部の可能性もある。外面にハケ調整を行い、ヘラで線を描いている。

【P-A207】(図版46 写真図版1) (M2)

A地区中央部に位置する。耳環M2が出土している。直径2.2cmのC字形で、断面形は0.7cm×0.5cmの梢円形である。材質は青銅に金メッキを施している。

3. 土坑

A・D地区では、合計33基の土坑が検出された。土坑は、A-1区の北東部に10基、中央部に14基、A-2区に9基がそれぞれ明瞭な群をなして分布しており、A-1区の南部は空白域となっている(図版9)。一部の土坑が廃棄土坑と推定されるほかは、形態などに規格性や特徴がなく、また出土遺物も僅少であることからその機能等は明らかではない。以下では北東群、中央群、南西群と呼称して記述を進める。

《北東群》

【SK-A8】

遺構(図版9)

不整梢円形を呈し、長径200cm、短径116cm、深さ12cmを測る。土坑底面は皿状の緩やかな凹みを見せる。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物(図版40 写真図版24) (26)

須恵器壺A26が出土している。口部は直線的に外方に開く。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。口縁端部には重ね焼の痕跡が残る。右回転ロクロである。

【SK-A15】

遺構(図版9)

長い楕形を呈し、長径328cm、短径152cm、深さ32cmを測る。土坑中央をSD-A5が切り込んでいる。

2. A・D地区の調査

土坑底面は逆台形状の掘り込みを見せる。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A29】

遺構（図版10）

不整梢円形を呈し、長径204cm、短径148cm、深さ14cmを測る。土坑底面は皿状の緩やかな凹みを見せる。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版48 写真図版40）（S1）

S1は、サヌカイト製のナイフ形石器である。小型の横長剥片を素材とし、その打面部付近に背面側から急斜度の二次加工を施している。背面側に石核素材剥片の腹面（底面）と、複数の剥離痕をとどめることから、後期旧石器時代後半期の所産と考えられる。肉眼観察では、二上山産のサヌカイトと判断する。

【SK-A30】

遺構（図版10）

不整な隅丸五角形を呈し、溝SD-A5がほぼ中央を切っている。長径216cm、短径160cm、深さ36cmを測る。土坑底はやや不整形な凹凸を見せる。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A31】

遺構（図版10）

不整な瓢形を呈し、長径120cm、短径72cm、深さ12cmを測る。土坑底は緩やかな凹みを見せる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A32】

遺構（図版10）

不規則なV字形に折れ曲がった不整な長形を呈しており、長径276cm、短径72cm、深さ4cmを測る。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A222】

遺構（図版12）

両端の細い梢円形を呈し、長径160cm、短径88cm、深さ8cmを測る。土坑底は皿状を呈する。土坑内は

地山ブロックを含む砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A223】

遺構（図版12）

東側をSD-A4に切られるが、歪んだ隅丸長方形を呈するものと思われる。また南西部に柱穴1基がある。短径92cm、深さ4cmを測り、土坑底は概ね平坦である。土坑内は細粒の砂・砂礫で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A224】

遺構（図版12）

一端が細く突出した不整円形を呈する。長径80cm、短径56cm、深さ12cmを測る。土坑底は逆台形状の掘り込みを見せる。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A228】

遺構（図版12）

歪んだ楕形を呈するが、南部を擾乱により破壊されているため全形は不明である。短径164cm、深さ10cmを測り、土坑底は概ね平坦である。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

《中央群》

【SK-A51】

遺構（図版10）

卵形を呈する土坑で、中央付近に柱穴1基が掘り込まれている。また、北辺にSD-A38が接する。土坑底面は不規則な凹凸を見せる。長径264cm、短径160cm、深さ8cmを測る。土坑内は細粒の砂または礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A63】

遺構（図版11）

方形が隅部で連結したような、不整形な土坑である。北西側を擾乱によって破壊されており、全形は明らかではない。短径164cm、深さ8cmを測る。土坑底はほぼ平坦である。

2. A・D地区の調査

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A64】

遺構（図版10）

長楕円形を呈する土坑で、北東部中央を柱穴によって切られている。土坑底面は皿状の凹みを見せ、長径192cm、短径48cm、深さ4cmを測る。縼粒の砂で埋積され、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版40 写真図版24）（18・19）

須恵器壺G蓋と土師器壺が出土している。

須恵器壺G蓋18は天井部の中心部を欠く。天井部は回転ケズリを行い、口縁端部は丸く作る。かえりは高い位置で三角形を呈す。内面は仕上げナデを行う。右回転ロクロである。土師器壺19は小片で口部は外方に直線的に開き口縁部は内面に段を作る。外面は横方向のミガキを行い、内面はミガキを行うが摩滅している。

【SK-A65】

遺構（図版11）

搅乱のため北東側を破壊されているが、残存部から楕円形の土坑と思われる。短径208cm、深さ6cmを測る。土坑底面はほぼ平坦である。土坑内は疊混じりの砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没と考えられる。

出土遺物（図版40 写真図版24）（28）

棒状土錘28が出土している。断面形は円形で、一端が残る。端部から1cmの位置に直径5mmの孔を穿つ。

【SK-A66】

遺構（図版11）

不整形な土坑である。長径256cm、短径200cm、深さ12cmを測る。土坑底面は緩やかな皿状に凹む。土坑内は地山ブロックを含む砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没と考えられる。

出土遺物（図版40・48 写真図版24・40）（23・25・S2）

須恵器壺B・壺、イイダコ壺、石錘が出土している。

須恵器壺B23は大ぶりで、口縁部と底部を欠く。高台の断面はM字形を呈する。右回転ロクロである。壺24は口頸部の破片で、僅かに外反し口縁端部を三角形に作る。イイダコ壺25は釣鐘形で、把手部分に直径1.8cmの孔を穿つ。

S2は、サヌカイト製の有茎式石錘である。図左面中央に素材剥片の腹面、右面下部の広い範囲に背面をとどめる。二次加工は両面から施されるが、先端部付近でやや急斜度となる。両側縁は緩やかな膨らみの弧状を呈し、鈍い逆剥部から幅広の茎部に至る。弥生時代中期の所産と考えられる。肉眼観察では、讃岐地方産のサヌカイトと判断する。

【SK-A67】

遺構（図版10）

北西側を搅乱で破壊されているが、残存部から円形または楕円形の土坑と推定される。短径120cm、

深さ 6 cm を測る。土坑底面は不整形な凹凸が見られる。土坑内は地山ブロックを含む砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A68】

遺構（図版11）

不整長楕円形を呈し、長径140cm、短径48cm、深さ 4 cm を測る。土坑底面は緩やかな船底状に凹む。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A69】

遺構（図版14）

北西部1/4程度が擾乱によって破壊されているが、不整楕円形を呈するものであろう。長径232cm、短径157cm、深さ10cmを測る。土坑底面はおむね平坦で、土坑内の堆積状況からは、自然埋没と考えられる。土坑全体から数群に分かれて遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（図版40 写真図版23）（12-17）

須恵器壺H蓋・瓶、土師器甕が出土している。

須恵器壺H蓋12は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境を丸く作る。天井部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。右回転ロクロである。瓶13は口頸部の一部である。口縁直下に肥厚した丸い稜を作る。右回転ロクロである。

土師器甕14-17は小形の14と大形の15と細長い16・17とに分けられる。14は球形の体部に大きく開く口頸部が付く。全体的に摩滅が著しい。体部側面に小さな黒斑が残る。15は縦長の体部に外反する口頸部が付く。口縁端部は外面に面を作る。全体的に摩滅が著しい。

16・17は体部が張らない縦長で、短く外反する口頸部が付く。16は内面に粘土紐の積上げ痕跡が残る。17は外面を口頸部までハケ調整を行う。

16・17は形態や法量などからマダコ壺の機能が考えられる。

【SK-A84】

遺構（図版11）

北西部を擾乱により破壊されているため全形は不明であるが、残存部からは長楕円形と推定される。土坑底面は緩やかな船底状に凹む。短径56cm、深さ 5 cm を測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A87】

遺構（図版11）

不整長楕円形を呈する土坑で、長径110cm、短径33cm、深さ 5 cm を測る。土坑底面は緩やかな船底状

2. A・D地区の調査

に凹む。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A89】

遺構（図版11）

南西隅の一部を揺乱で破壊されているが、全体に不整台形を呈する。長辺332cm、短辺280cm、深さ8cmを測る。土坑内は大礫級の砾を多量に含む砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没と考えられる。

出土遺物（図版40 写真図版24）（20～22）

須恵器壺B蓋・壺B・甕が出土している。

須恵器壺B蓋20は天井部を欠く。口縁端部は強く屈折する。壺B21は小ぶりである。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。高台の断面形は正方形である。内面は多方向の仕上げナデを行う。右回転ロクロである。甕22は体部上半部から頸部にかけての破片で、頸部は外反する。体部は並行タタキで、カキ目を施す。内面は同心円当具痕が残る。

【SK-A90】

遺構（図版12）

北東隅の一部を揺乱で破壊されているが、全体に一边が大きく歪む不整台形ないし不整三角形を呈する。長辺320cm、短辺312cm、深さ10cmを測る。土坑底は緩やかな凹凸があるものの、概ね平坦である。土坑内の堆積物は多量の砾を含み、人為的な影響が存在した可能性がある。

出土遺物（図版40 写真図版23）（10～11）

須恵器壺H蓋・管状土錐が出土している。

須恵器壺H蓋10は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境は丸く作る。天井部は回転ヘラ切り未調整である。右回転ロクロである。管状土錐11は端部が僅かに欠けるが、ほぼ完形である。表面は凹凸があり、摩滅が著しい。

【SK-A100】

遺構（図版12）

北側と南東側を揺乱で破壊されているため、全形は不明である。短辺108cm、深さ6cmを測る。土坑底は凹凸が顕著である。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A226】

遺構（図版12）

南西部を揺乱で破壊されているため、全形は明らかではないが、残存部は一端が細く突出する瓢形を呈する。長辺152cm、深さ5cmを測る。土坑底は皿状を呈し、土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-D19】

遺構（図版14）

D地区に位置するが、A地区中央群に接する。卵形の土坑で、長径156cm、短径112cm、深さ6cmを測る。土坑底は皿状を呈し、緩やかに起伏する。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

《南西群》

【SK-A246】

遺構（図版13）

東西を他の遺構で切られるため、全形は不明である。短径68cm、深さ13cmを測る。土坑底は緩やかな凹凸を見せる。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版40 写真図版24）（29）

棒状土錐29が出土している。断面形は円形で、一端が残る。端部から1cmの位置に直径6mmの孔を穿つ。

【SK-A247】

遺構（図版13）

東側を他の遺構で切られるため全形は不明であるが、残存部からは横円形の土坑であったと推定される。短径84cm、深さ12cmを測る。土坑底は緩やかな凹凸を見せる。

出土遺物（図版40 写真図版38）（27）

須恵器壺27が出土している。体部下半から底部の破片である。球形を呈し、体部下半から底部は回転ケズリを行い、L字形の高台を貼り付ける。右回転ロクロである。

【SK-A248】

遺構（図版13）

北側を他の遺構で切られるため全形は不明であるが、残存部からは歪んだ円形ないし横円形の土坑と思われる。土坑内は礫混砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版40 写真図版24）（30）

棒状土錐30が出土している。断面形は円形で、両端ともに欠損するが、孔の一部が残る。

【SK-A253】

遺構（図版13）

隅丸の三角形を呈する。東西を他の遺構で切られるため、全形は不明である。長径112cm、短径88cm、深さ4cmを測る。土坑底は概ね平坦である。土坑内は粗砂とシルトのブロック状埋土で充填されており、人為埋没と考えられる。

2. A・D地区の調査

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A254】

遺構（図版13）

歪んだ隅丸方形を呈する。長径176cm、短径160cm、深さ14cmを測る。土坑底は概ね平坦である。土坑内は細粒の砂ないし疊混砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A255】

遺構（図版13）

L字形に屈曲した土坑であるが、北部を他の遺構に切られるため全形は不明である。短径116cm、深さ8cmを測る。土坑底は概ね平坦である。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A258】

遺構（図版13）

歪んだ楕円形を呈する。長径88cm、短径56cm、深さ12cmを測る。土坑底は概ね平坦である。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A262】

遺構（図版13）

北西側は他の遺構に切られるため、全形は明らかではないが、残存部は不整形な心臓形を呈する土坑である。短径120cm、深さ10cmを測る。土坑底は緩やかに凹む。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-A266】

遺構（図版13）

楕円形の土坑2基が、溝で連結されたような形態を呈するが、北西側を他の遺構に切られるため、全形は不明である。短径42cm、深さ22cmを測る。土坑底は凹凸の多い不規則な掘り込みを見せる。土坑内は疊混粗砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-D39】

遺構（図版14）

A-1地区の最南端に接するD地区に位置するので、南西群に含めておく。幅広の楕円形を呈する土坑で、長径62cm、短径38cm、深さ14cmを測る。土坑底は楕状を呈する。土坑内は地山のブロックを含むシルト質砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

4. 溝

溝は、A-1地区北東部とA-2地区にまとまった分布を見せるが、A-1地区中央部ではA-D地区境界付近にごく散漫に分布するのみで、分布の漂淡が明瞭である。A-1地区北東部の溝は、2条が平行してのびる例が目立つ。これに対しA-1地区中央部からD地区の溝は、規模・方位等に規格性が認められない。またA-2地区的溝は多数が重複しつつ東西方向にのびるもののが顕著で、その多くはB-E地区へと続くが、A-D地区とB-E地区の間に調査除外部分が存在するため、両地区間の遺構の対応関係については、不明確な部分が残る。以下では、北東群・中央群・南西群の順に記述を進める。

なお、A-D地区間にまたがる溝についてはA地区の遺構番号を代表として、A-B地区間にまたがる溝については、B地区に含めて記載を行う。また遺構番号の対応関係については、巻末に対応表を掲載している（第6表）。

《北東群》

【SD-A1】

遺構（図版15・18）

SD-A1に切られる浅い溝である。北西-南東方向にのび、幅40cm、深さ5cmを測る。溝内は極細砂～細砂で埋積される。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A2】

遺構（図版15・18）

A-1地区の北西隅に位置するが、調査区内では掘方部分がわずかに検出されたのみであり、全容は不明である。概ね、北東-南西方向にのびるものと思われる。溝内はシルト質の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A3】

遺構（図版15）

A-1地区の北東に位置し、SD-A4、A5と平行する。調査区北側へとのびるが、調査区内では1.5m程度の延長しかない。幅90cmを測る。

2. A・D地区の調査

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A4 SD-A5】

遺構（図版15・18）

明らかに平行してのびることから、一括して記述する。A-1地区の北東側からほぼ平行して直線的に約20mのび、ほぼ90°カーブして調査区西壁に至る。途中、SK-A15・30・32を切る。溝の延長方向は、座標軸に対して概ね45°の傾きを見せている。幅はSD-A4では0.3m～1.0m、SD-A5では0.3m～0.8mを測る。溝底は凹凸がやや目立つ。溝内は細砂～粗砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

SD-A4と5の間は平坦面となっており、その幅は1.3m～2.0mを測る。こうした状況からSD-A・5は、道路側溝であった可能性が考慮される。

出土遺物

SD-A4（図版45 写真図版37）（131～133）

須恵器壺G蓋・壺B・壺が出土している。

須恵器壺G蓋131は天井部の中心部を欠く。天井部は回転ケズリを行い、口縁端部は丸く作る。かえりは短く突出する。壺B132は回転ヘラ切りの底部に断面方形の高台を貼り付ける。壺133は口頸部の破片である。外傾する頸部の中央部に沈線を巡らす。

SD-A5（図版45・48 写真図版37・40・1）（140・M1・S5）

須恵器把手・楕形滓・勾玉が出土している。

須恵器把手140は舌状を呈し、上方に反り上がる。楕形滓M1は小ぶりで不整形であり、外面は彎曲し、小環や土が付着している。内面は流動している部分と気泡が存在する部分がある。

勾玉S5は翡翠製である。C字形をなし、中央部は身が厚く、端部は薄い。孔は両面穿孔である。

【SD-A6 SD-A7】

遺構（図版15・18）

前述のSD-A4・5の東側に接し、これとほぼ平行してのびる溝である。SD-A6は延長5.5m、SD-A7は延長3.0m前後、幅20cm前後を測る。溝内はシルト質砂～細砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A27】

遺構（図版15）

前述のSD-A4・5の東側に位置し、これとほぼ平行してのびる溝で、延長1.8m、幅20cm前後を測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A28】

遺構（図版15）

前述のSD-A7とSD-A4・5との間に位置する。延長2.0m、幅25cm前後を測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A36】

遺構（図版15・18）

ゆるやかに蛇行しつつ北東-南西方向にのびる溝で、延長15mにわたって検出された。最大幅80cmを測る。溝内はシルト質砂・細砂で埋積されており、自然埋没と考えられる。SD-A5を切る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A37】

遺構（図版15・18）

ゆるやかにカーブして北東-南西方向にのびる溝で、延長6mにわたって検出された。一部が攢乱によって破壊されたため明確ではないが、最大幅は60cmを超える。溝内は細砂・粗砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。SD-A5を切る。

出土遺物（図版45 写真図版37）（139）

須恵器櫛139が出土している。短頸櫛の口頸部で、大きく外傾する。口縁端部は外面を肥厚させ丸く仕上げる。

【SD-A38】

遺構（図版15・18）

ゆるやかにカーブして北東-南西から東西方向にのびる溝で、延長約19mにわたって検出された。攢乱によって4か所が破壊される。最大幅は70cm前後を測る。溝内は中疊混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A39 SD-A40】

遺構（図版15・18）

平行して、西北西-東南東方向に直線的にのびる溝である。SD-A39は延長3.3m、SD-A7は延長1.2m前後、幅はともに15cm前後を測る。溝内は細砂・中砂で埋積されており、自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

2. A・D地区の調査

【SD-A52】

遺構（図版15・18）

ゆるやかに蛇行して北西- 南東方向にのびる溝で、延長約4.5mにわたって検出された。幅20cm前後を測る。溝内はシルト質細砂で埋積されている。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A70】

遺構（図版15・18）

ほぼ直線的に北西- 南東方向にのびる溝で、延長約4.5mにわたって検出された。擾乱で破壊された部分があるため明確ではないが、最大幅60cm前後を測る。溝内は細砂～中砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A86】

遺構（図版15・18）

不規則に蛇行しつつ東北東- 南南西方向にのびる溝で、延長約11mにわたって検出された。擾乱で破壊された部分があるため明確ではないが、最大幅140cm前後を測る。溝内は地山ブロックと大礫級の礫を含むシルト質砂で埋積されており、堆積状況から人為埋没の可能性が考慮される。

出土遺物（図版45 写真図版37）（135～138）

須恵器坏G・坏B・稜楕・皿が出土している。

須恵器坏G135は口縁部を欠く。底部は回転ヘラ切り後、雑なナデを行う。内面は仕上げナデを行う。坏B136は口部が直線的に大きく開き、底部は扁平な高台を貼り付ける。稜楕137は体部の稜が鋭さを欠く。口縁部は外反する。稜以下は回転ケズリの後、回転ナデを行う。皿138は浅く、口縁部は直線的に大きく開く。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。

【SD-A88（SD-D3）】

遺構（図版15・18）

ほぼ直線的に北西- 南東方向にのびる溝で、延長約7mにわたって検出された。東側と中央は擾乱で破壊される。最大幅120cm前後を測る。溝内は礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-D18】

遺構（図版15・20）

調査区東壁に沿うように北東- 南西方向にのびる溝で、延長約16.5mにわたって検出された。調査区内では西側の掘方が検出されたのみであり、幅については不明である。溝内は砂を主体とする堆積物で

埋積されており、自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-D21】

遺構（図版15・20）

S D - D 18に沿うようにのびる。延長約2.7mにわたって検出された。最大幅55cm、深さ6cmを測る。

溝内はシルト質の砂で埋積されている。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

《中央群》

【SD-A103】

遺構（図版16・20）

わずかに曲がりながら北東- 南西方向にのびる溝で、延長約2.7mにわたって検出された。最大幅40cm、深さ6cmを測る。溝内はシルト質の砂で埋積されており、自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A119 (SD-D20)】

遺構（図版16・20）

わずかに曲がりながら北北東- 南南西方向にのびる溝で、延長約13.3mにわたって検出された。南端はD地区の外へのびる。北端部は長径4mほどの不整形な土坑状に広がっており、深さ約30cmを測る。ここからのびる溝部分は、最大幅100cm、深さ10~20cmを測る。土坑状を呈する部分、溝部分ともに下層は砂礫ないし砾を含む砂で、上層は細粒の砂で埋積されている。水流の影響を受けた自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版45・48 写真図版37・40）(134・S 3)

須恵器棱桿と石棒が出土している。

須恵器棱桿134は体部の稜は鋭さを欠く。口縁部は外反する。稜以下は回転ケズリの後、回転ナデを行う。

S 3は結晶片岩製の、石棒と推定される石製品である。上下両端と片面を古くに欠損するが、本来は円柱状を呈していたのであらう。意図的な剥離は行われておらず、硬質の素材であるためか、明瞭な研磨の痕跡も認められない。

【SD-A169】

遺構（図版16・20）

直線的に東西にのびる。延長約3.0mにわたって検出され、西側は調査区外へのびる。最大幅30cm、深さ8cmを測る。溝内は極細砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

2. A・D地区の調査

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A191 (SD-D45)】

遺構（図版16・20）

掘立柱建物跡B-D2と重複する溝で、その柱穴を切っている。中央で屈曲する不整形な溝で、延長約3.7mを測る。幅は20cm~50cm、深さ3cm前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版45 写真図版37）（130）

須恵器壺H身130が出土している。小ぶりで、立ち上がりは内傾し短い。受部は外上方に伸びる。

【SD-A192】

遺構（図版16・20）

北東-南西方向にのびる溝で、北端は擾乱によって破壊されている。延長約1.9mにわたって検出された。最大幅16cm、深さ2cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積され、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-D2】

遺構

D地区北部に位置する溝であるが、調査区内ではきわめて痕跡的で、かろうじて断面で観察されたに過ぎない。遺構を図化するには至らなかった。

遺物（図版46 写真図版38）（144）

須恵器壺144が出土している。底部の破片で回転糸切りの後、外方に大きく開く高台を貼り付ける。内面は仕上げナデを行う。右回転口クロである。

【SD-D40】

遺構（図版16・20）

調査区東壁に沿うようにのび、南端は屈曲して東壁外へのびる。延長約3.3mにわたって検出された。最大幅60cm、深さ6cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-D47】

遺構（図版16・20）

浅い土坑状を呈し、溝と呼称するのは相当ではないかもしれない。延長約2.0mにわたって検出された。最大幅100cm、深さ12cmを測る。S-B-D2と重複し、埋土はその柱穴に切られる。溝内はブロックを含む砂で埋積されており、人為埋没の可能性がある。

出土遺物（図版46 写真図版38）（145）

須恵器椀145が出土している。底部は平高台で、回転糸切りの痕跡が残る。体部は弯曲しながら立ち上がる。底部内面は僅かに段が残る。

《南西群》

【SD-A229 (SD-D57・58)】

遺構（図版17）

ほぼ東西方向にのびる溝で、D地区でSD-D57・58に分岐する。SD-A230から分岐するよう見えるが、断面④（図版17）で見る限り、SD-A230が埋没した後に掘削された溝である。その状況から、SD-A230埋没後には、これと重なる位置に掘られたものであろう。延長約4.5mにわたって検出され、最大幅106cm、深さ36cmを測る。埋土下層は砂礫層であり、水流の影響を受けた堆積と判断されるが、中層は地山ブロックを含み人為的影響が考慮される。上層は細砂以下の細粒堆積物である。

出土遺物（図版43 写真図版32・35・37）（85-111）

須恵器坏H蓋・坏H身・坏I・坏G・坏A・坏・坏B蓋・椀・台付皿・瓶類・平瓶・壺、土師器坏・高坏・甕・鉢・竈、棒状土錐が出土している。

須恵器坏H蓋85・95は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境を丸く作る。天井部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。95の底部には乾燥時の板痕跡が残る。85の内面は多方向の仕上げナデを行う。右回転ロクロである。

坏H身86・87・96は小ぶりで、立ち上がりは内傾し短い。受部は87・96が外上方に伸び、86は短く水平に伸びる。86・87の底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。86の内面は仕上げナデを行う。いずれも右回転ロクロである。

坏I97の底部は回転ヘラ切りを行い、口縁部は僅かに外反する。内面には自然釉が掛かる。

坏G99の底部は回転ヘラ切りを行い、口部は直線的に外方に開く。口縁端部に重ね燒の痕跡が残る。右回転ロクロである。坏A98は口部が内反気味に立ち上がり、底部は回転ヘラ切りである。

坏100・101は底部を欠く。いずれも右回転ロクロである。

坏B蓋102は天井部が直線的にのび、口縁部は拡張し断面三角形の段を作る。右回転ロクロである。椀89は口縁部と底部の間に沈線を巡らす。台付皿88は底部が残るのみである。底面は回転ケズリの後、高台を貼り付け、回転ナデを行う。皿内面と高台端面は使用による摩耗が著しい。

瓶類103は口頭部で、直線的に上方にのびる。平瓶104・105は肩が張った体部を持つ。104は肩部に口頭部を斜めに付け、口頭部の中央に2条の沈線を巡らす。底部は丸く回転ケズリを行う。平瓶105は丸底で、手持ちケズリを行う。肩部に沈線を巡らす。

壺90は底部で、大きく外方に開く高台を貼り付ける。底面は回転ヘラ切り後、丁寧なナデを行う。内面の中心に自然釉が掛かっているため、口頭径が比較的小さい。右回転ロクロである。

土師器坏91・106の底部は浅い丸底である。106は外側が横方向のミガキを行い、内面はナデの後、暗文を付ける。

高坏92・107はいずれも脚部のみである。92は中実で脚裾部は直線的に開くが、端部を欠く。外側は縱方向のミガキを行う。107は脚裾部に向って外反する。

甕108は小形の甕の口頭部である。口頭部は外反し、内面は横方向のハケ調整を行う。

鉢111は体部から口縁部にかけて僅かに外傾する。外側は縱方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調

2. A・D地区の調査

整後、体部内面のみミガキを行う。

竈109・110は一部のみ残る。109は上部の一部で、約6cm下に鉗が付く。110は竈焚口の左側の一部分で庇が付く。体部はハケ調整を行い、端部は強くナデを行う。

棒状土錘93・94は断面円形で、両端に穿孔を持つ。93はほぼ完形で、孔間は6.7cmを測り、94は孔間3cmを測る。

【S D - A230】

遺構（図版17）

蛇行しつつ東西方向にのびる溝である。SD-A229の項で述べた状況から、分岐部以西はSD-A229として掘り直されたものかもしれない。延長約15.0mにわたって検出され、最大幅220cm、深さ50cmを測る。最下層は一部が砂礫によって埋積されており、水流の影響と考えられる。上位の堆積物も、砂が主体であり、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版41・42・48 写真図版25-31・40）(31-84・S 4)

須恵器壺H蓋・壺H身・壺B蓋・壺B・壺A・壺・稜椀・椀・壺・甕・綠釉陶器椀・土師器壺・高壺・皿・椀・甕・瓶・鍋、棒状土錘、平瓦、砥石が出土している。

須恵器壺H蓋31・32は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境は丸く作る。天井部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。内面は一方向の仕上げナデを行う。右回転ロクロである。壺H身33-36は小ぶりで、立ち上がりは内傾し短い。受部は33・35が上方に内弯気味に作り、34が短く水平に伸びる。36は長く水平に伸びる。33・34の底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。34の内面は一方向の仕上げナデを行う。いずれも右回転ロクロである。

壺B蓋37-40は37・39が口縁部を強く屈折させ、40が拡張し断面三角形の段を作る。天井部は37・38が回転ケズリを、39・40は回転ヘラ切りを行う。37・39は中央部が僅かに尖った扁平なつまみを貼り付ける。39・40の内面は丁寧なナデを行う。壺B41-46は中形の41-45と大形の46がある。いずれも底部は回転ヘラ切り後、高台を貼り付ける。42・45の高台は断面形が丸い。44のみ左回転ロクロで、他は右回転ロクロである。

壺A47-54は51を除き、底部は回転ヘラ切りで、51のみ回転ケズリを行う。内面は49が仕上げナデを行い、51は多方向の丁寧なナデを行う。54は使用による摩耗が認められる。

壺55は底部を欠く。口部は深く、直線的に外方に開く。右回転ロクロである。稜椀56は体部に棱を作り、底部は丸底気味に回転ケズリを行い、高台を貼り付ける。内面は多方向の仕上げナデを行う。

椀57は平高台で回転糸切り痕跡が残る。底部から体部にかけての内面は段が残る。右回転ロクロである。壺58は内面の自然釉の状況から広口壺で、体部は屈折する。底部端に外向きのしっかりした高台を貼り付ける。壺59は長頸壺の頸部で、細長く外反する頸部中央部に2条の沈線を巡らす。壺60は肩が張った体部に短く外反する口頭部が付く。口縁端部は上方に拡張し、面を作る。体部下半部は回転ケズリを行う。部分的に灰色の自然釉が掛かる。壺61は下膨れの小ぶりの壺である。底部は平高台で回転糸切りを行う。灰色の自然釉が掛かる。壺62は耳壺などの大形の壺の底部である。平底で回転糸切り後、粗いナデを行う。右回転ロクロである。甕63・64は短頸のものと長頸のものがある。短頸甕63は外傾する口頭部の下端部に体部のタタキが残る。口縁端部は三角形に仕上げ、上方と外方に面を作る。

長頸甕64は外傾する頸部を2条の沈線で三分割し、下段にカキ目を施した後、斜線文を加えている。上段と中段は櫛描波状文を施文する。口縁端部は肥厚させ、絞杉状にキザミを入れる。

綠釉陶器碗65は平高台で、回転糸切り後、ナデを行う。内外ともに灰白の釉が掛かる。

土師器坏66・68は66・67が底部を欠く。口縁端部が外反し、67の内面には沈線が巡る。68は平底で、回転ヘラ切りを行う。右回転ロクロである。

高坏69は脚部の破片で、縦方向にケズリを行い、十面を作り出している。脚内面は横向にケズリを行う。坏部との接合面は粗いキズを付ける。

皿70は浅く大きく外反する。右回転ロクロである。

椀71・72はいずれも底部のみである。71は平高台で回転ヘラ切りの痕跡が残る。72は回転糸切りの痕跡が残る。いずれも右回転である。

瓶73・74は中形の73と大形の74である。73は球形の体部に外反する口頸部が付く。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は縦方向のケズリを行う。口縁部はヨコナデを行い、内面は横向のハケ調整が残る。74は縦長の体部に外方に屈折する口頸部が付く。口縁端部は上方に拡張し、面を作る。体部外面は縦方向のハケ調整を行う。口頸部内面は横向のハケ調整を行う。

瓶75は底部全体に噴気孔が開いており、底部側面に小孔を開ける。鍋76は半球形の体部に外傾する口頸部が付く。体部外面は縦方向のハケ調整を行い、口縁内面は横向のハケ調整を行う。外面にはスヌが付着している。

棒状土錘77は端部を欠くが、かろうじて孔が残る。

平瓦78・84はいずれも一枚作りである。凸面のタタキで大きく4種類に分類できる。78・79は細かい斜格子タタキである。80・81は大きな格子タタキである。82は細かい繩目タタキである。83・84は目の粗い繩目タタキである。82～84の繩目の軸は瓦の長軸に平行である。78・80・81・84は凹面に糸切りの痕跡が残り、82以外は布目が残る。

砥石S4は凝灰岩製で、片面の小口面が残り、敲打による整形を行っている。断面が方形の4面の砥面を持つ。砥面には微細な擦痕が残る。

【 S D - A 229・230】(図版44 写真図版32) (112・113)

S D - A 229・230のいずれか確定できない遺物として、須恵器脚台と平瓦が出土している。

須恵器脚台112は壺類の脚台部で、脚柱部と脚裾部の間に沈線を巡らせ、稜を作る。平瓦113は凸面に粗い不定形な格子タタキを残す。端部はタタキ残しの部分がある。凹凸面ともに糸切りの痕跡が残る。

【 S D - A 231 (S D - D 59)】

遺構 (図版17)

S D - A 230の南に位置し、これに切られる。また西側は擾乱によって破壊されている。東西方向にのびる溝で、延長9.0mにわたって検出された。最大幅50cm、深さ20cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物 (図版44・48 写真図版35・40) (114~118・56)

須恵器坏A・坏B・把手付壺、土師器羽釜、管状土錘、石製紡錘車が出土している。

須恵器坏A 114は底部を回転ヘラ切りする。口部は直線的に外傾する。

坏B 115は底部を回転ヘラ切りの後、高台を貼り付ける。口部は内反気味に開く。内面は多方向の仕上げナデを行う。

把手付壺118はやや扁平な球形を呈する体部に把手が一対付く。口縁部と底部を欠く。体部はタタキ

2. A・D地区の調査

仕上げで、カキ目を施す。内面は同心円当具痕跡が残る。把手は断面形が円形で環状を呈する。

土器器羽釜116は直線的な体部で、口縁部直下に水平に伸びる鉗を貼り付ける。外面にスヌが残存する。管状土錘117は両端部を欠く。中央部が僅かに膨らむ。

紡錘車S 6は滑石製で一部が残るのみである。断面系は台形を呈し、直径3.5cm以上、軸の孔径5mmを測る。外面には格子を充填した鋸歯文を刻む。

【 S D - A232 (S D - D60)】

遺構（図版17）

大きく蛇行しながら東西方向にのび、調査区東壁際で南へ蛇行して調査区東壁沿いにのびる溝である。S D - A245・250・252・259に切られる。また、S D - A231とは上層の堆積物が共通している。延長約22mにわたって検出された。最大幅100cm、深さ52cmを測る。溝内は細粒の砂ないし疊混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版44・45 写真図版36・37）（119～129）

須恵器坏H身・坏H蓋・坏A・坏B・椀、土器皿・甕が出土している。

須恵器坏H身119は立ち上がりが直立し、受部は外上方にのびる。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。内面は仕上げナデを行う。右回転ロクロである。坏H蓋126は外方に開く口縁部の蓋である。

坏A120・121・127・128は中形の120・121・127と小形の128がある。120は底部がやや膨らむ。回転ヘラ切りの後ナデを行い、ヘラ記号「×」を記す。内面は一方向の仕上げナデを行う。口縁部には重ね焼の痕跡が残る。右回転ロクロである。121・127は平底で回転ヘラ切りの後ナデを行う。内面は仕上げナデを行う。128は底部を回転ヘラ切り後、手持ちケズリを行う。坏B122は大振りで浅い。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。高台の断面形は正方形である。内面は多方向の仕上げナデを行う。右回転ロクロである。

椀129は平高台で、回転糸切りの痕跡が残る。内面は底部から体部にかけて段がある。左回転ロクロである。

土器器皿123はやや上げ底気味の底部に外方に短く開く口体部を持つ。口縁部内面には沈線が巡る。底部は指オサエを行い、内面は多方向のナデを行う。

甕124・125は124が中形で、125が大形である。124は球形の体部に外反する口頸部が付く。体部は八ヶ調整を行う。125は縦長の体部に外反し、内弯気味に開く口頸部が付く。

【 S D - A236】

遺構（図版17・19）

S D - A230とほぼ平行する溝である。曲がりまで対応していることから、この両者は同時に成立していた可能性が高いと推定される。延長約8.0mにわたって検出されたが、東側は擾乱によって破壊されている。最大幅30cm、深さ6cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A245】

遺構（図版17・19）

ほぼ東西方向にのびる溝で、SD-A232・251と重複してこれらを切っている。延長13mにわたって検出された。最大幅1.0m、深さ20cmを測る。溝内はシルト質の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A250】

遺構（図版17・19）

調査区東壁に沿って曲がりながらのびる溝で、延長23mにわたって検出された。最大幅130cm、深さ10cmを測る。溝内はシルトブロックを含む細粒の砂で埋積されており、人為埋没の可能性がある。

出土遺物（図版45 写真図版38）(141)

須恵器壺B蓋141が出土している。丸い天井部に屈折する口縁端部を持つ。天井部は回転ケズリを行う。内面はナデを行う。

【SD-A251】

遺構（図版17・19）

東西にのびる溝で、東側でSD-A245に切られる。延長約6.6mにわたって検出された。最大幅80cm、深さ15cmを測る。溝内は細粒の砂・シルト質砂で埋積され、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版46 写真図版38）(143)

平瓦143が出土している。凸面は不定形な斜格子タタキが残る。凹面は糸切りの痕跡と布目が残る。

【SD-A252】

遺構（図版17・19）

SD-A250の北西部で、これと平行するように曲がりながらのびる溝である。延長約11mにわたって検出された。最大幅150cm、深さ12cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A257】

遺構（図版17・19）

東北東～西南西方向にのびる溝で、延長約7.5mにわたって検出された。最大幅90cm、深さ12cmを測る。溝内は疊混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-A263・264】

2. A・D地区の調査

遺構（図版17）

近接して平行しながら断続的にのびる溝である。S D-A 263は幅50cm、264は80cmを測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

なお S D-A 259・260・261・265については、B地区へのびることが明らかであり、かつB地区での延長が大きいため、B・E地区の項で記載する。

5. 水田面249

遺構（図版17）

A-2地区南部で検出された。畦・溝等、水田面に伴う遺構は残存していなかったが、地層の攪拌状況から水田面と判断した。

遺物（図版47 写真図版38・40）（164・M 3）

須恵器鉢と鉄滓が出土している。

須恵器鉢164は束縛系の鉢の口縁部である。口縁端部は肥厚し面を作る。

鉄滓M 3は不整形を呈する。片面に土が付着していることから椀形滓の一部と考えられる。反対面には気泡は存在しない。

6. 包含層出土の遺物（図版47 写真図版39）（165～184）

須恵器坏H身・坏H・坏A・坏蓋・坏B蓋・坏B・長頸壺・壺・直口壺・灰釉陶器椀・青磁碗・土師器坏・皿・イイダコ壺・棒状土錘・管状土錘を図化した。

須恵器坏H身165は立ち上がりが内傾し、受部は外上方にのびる。右回転口クロである。坏H167は底部か天井部か不明である。外面は回転ケズリの後、ヘラ記号を刻む。坏A166は底部が膨らみ、口部は外反する。底部は回転ヘラ切り後ナデを行う。内面は使用による摩耗が著しい。右回転口クロである。

坏蓋168は天井部の破片で、つまみが外れた痕跡が残る。内面にはヘラ記号が残る。坏B蓋169は口縁端部が屈折して短く垂下する。天井部は回転ケズリ後、輪状のつまみを貼り付ける。坏B170は大形品で底部は回転ケズリを行い、高台を外向きに貼り付ける。右回転口クロである。

長頸壺171は口頸部の破片で頸部中央部に2条の沈線を巡らす。体部に近い部分には絞りの痕跡が残る。壺172は小形の壺で、頸部を絞って作る。直口壺173は体部から内弯気味に直立する口頸部が付く。頸部には沈線を巡らす。体部はタタキ成形後、カキ目を施し、肩部にはおそらく3単位の円形浮文を貼り付ける。

灰釉陶器椀174は底部の破片で回転ケズリの底部に外向きの高台を貼付けている。底部内面には重ね焼の高台の痕跡が付着する。高台外と体部内外に灰白色の釉が掛かる。

青磁碗175は龍泉窯系の鍋蓮弁碗である。外面は広形蓮弁文を刻む。胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉が掛かる。13世紀後半から14世紀

土師器坏176は小ぶりで、底部はケズリ後、ミガキを行う。内面は放射状の暗文を施す。皿177は器壁が厚い。内面はナデを行うが、外面は摩滅が著しい。

イイダコ壺178は釣鐘形で、把手部分に直径2.0cmの孔をあける。

棒状土錘179～182は断面形が円形で、179～181は一端が残る孔を穿つ。182は両端を欠損する。管状土錘183・184は184が完形で、183は一端を欠損する。中央部がやや膨らむが、成形は雑である。

3. B・E 地区の調査

(1) 層序

B・E 地区の層序も、A・D 地区とほぼ同様である（図版 5 - ②～④）。現地表は概ね平坦であるが、段丘面の標高が下がる調査区西側・南側では厚い盛土があり、その下位に現代の水田土壤および床土が見られる。その直下からは古代～中世の遺物包含層（古土壤）となる。遺物包含層はシルト質の極細砂～細砂を主体としており、少量の礫を含む場合が多い。

B 地区北壁（②）では 3・4 a 層が遺物包含層である。E 地区南および東壁では、水田の開墾に伴う削平のため遺物包含層の遺存状況は劣悪で、現代の水田土壤の直下が遺構検出面となる部分も見られた。

E 地区北部では、A・D 地区と概ね対応する遺物包含層が認められた。

遺構検出は段丘被覆層（地山）上面のみで実施した。

(2) 遺構と遺物

B・E 地区では、掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝が検出された。遺構は A・D 地区から続く南北方向に長い調査区内に偏在し、その状況は概ね A・D 地区での分布状況と対応する。掘立柱建物跡は B 地区に 1 棟が単独で位置するほかは、いずれも A・D 地区で掘立柱建物跡がまとまる領域の東側に位置する。土坑の分布は A・D 地区と比較して希薄で、B 地区中央部および E 地区の北部に散漫に分布する。溝は南部に旧河道と思われる、規模の大きなものがある。A-2 地区の東側にあたる範囲には、東西方向の溝が重複しながら顯著なまとまりを見せてている。

1. 掘立柱建物跡

B・E 地区では、合計 6 棟の掘立柱建物跡が検出された。建物跡は、B 地区の中央付近に 1 棟が位置するほかは、E 地区の中央部～北半部に分布する。この位置は、A・D 地区で掘立柱建物跡がまとまる範囲の東側にあたり、基本的には同一範囲と考えてよい。

【SB-B6】

遺構（図版21）

3間×3間の総柱式の建物跡である。柱間は梁行きで 1.20m～1.44m、桁行きで 1.40m～1.80m を測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、建物跡外周では長径 46cm～72cm、同中央では 24cm～36cm を測り、中央の 4 基は明らかに小形である。こうしたことから、建物跡中央に位置する柱 4 基は、床面を支持する束柱であったと考えてよからう。床面積は、20.3m²である。P-B23 と P-B26 を結ぶ辺で測定した方位は、N15.0°W である。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SB-E1】

遺構（図版22）

1間×3間の側柱式の建物跡であるが、西側柱穴のうち P-E55 と P-E159との間の柱穴を欠く。柱間は梁行きで 1.68m～2.68m とばらつきが大きいが、桁行きは 2.52m・2.68m である。柱穴は隅丸長方形ないし不整円形を呈し、長径 32cm～40cm を測る。床面積は、16.0m²である。P-E57 と P-E104 を結ぶ辺で測定した方位は、N3.0°E である。

3. B・E 地区の調査

出土遺物（図版54 写真図版53）（314）

P-E 104より土師器把手314が出土している。舌状を呈し上方に彎曲しており、断面は扁平である。

【S B-E 2】

遺構（図版22）

側柱式の建物跡で、調査区内では2間×3間分まで確認された。柱間は梁行きで1.72m～2.20mを測る。柱穴は不整橢円形を呈し、長径24cm～40cmを測る。床面積は建物跡がこれ以上広がらないとすれば、22.5m²である。P-E 100とP-E 109を結ぶ辺で測定した方位は、N87.0°Wである。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【S B-E 3】

遺構（図版23）

側柱式の建物跡で、調査区内では1間×2間分まで確認された。

北側の柱穴2基は、調査時点では土坑S K-E 142・143として認識していたが、他の柱穴との配置関係から見て掘立柱建物跡として復元可能と考える。なおS K-E 143では、断面調査で柱痕が検出されている（図版26）。本来は、これらも柱穴として記載すべきであろうが、ここでは敢えて遺構名（土坑）を変更せずに記載する。

柱間は2.20m～2.24mを測る。柱穴は橢円形ないし不整隅丸方形を呈し、長径40cm～112cmを測る。

P-E 103とP-E 143を結ぶ辺で測定した方位は、N15.0°Eである。

出土遺物（図版49 写真図版42）（197）

S K-E 143より須恵器坏A 197が出土している。口部は外方に直線的に開く。底部は回転ヘラ切りを行う。左回転ロクロである。

【S B-E 4】

遺構（図版23）

2間×3間の側柱式の建物跡である。柱間は梁行きでは1.60m～1.80mであるが、桁行きの中央では1.08m、両端では1.32m～1.68mとばらつきが大きい。柱穴は隅丸方形ないし円形、不整円形を呈し、長径24cm～68cmを測る。床面積は13.2m²を測る。P-E 21とP-E 22を結ぶ辺で測定した方位は、N63.5°Wである。

出土遺物（図版54 写真図版53）（315～317）

須恵器坏A・坏B蓋・高坏が出土している。

須恵器坏A 315は口部が直線的に外方に開く。底部は回転ヘラ切り後ナデを行う。右回転ロクロである。P-E 22出土。

坏B蓋316は口縁端部が屈折して短く垂下する。天井部は自然釉が掛かる。右回転ロクロである。P-E 138出土。

高坏317は脚部の一部である。脚端部は外方に大きく広がり、薄く作る。脚柱部は力キ目調整を行う。右回転ロクロである。P-E 21出土。

【S B - E 5】

遺構（図版24）

3間×3間の側柱式の建物跡である。柱間は梁行きでは1.08m～1.50mとばらつきが大きい。柱穴は不整円形ないし隅丸方形を呈し、長径16cm～44cmを測る。床面積は20.4 m²を測る。P-E 23とP-E 129を結ぶ辺で測定した方位は、N 55.5°Wである。

出土遺物（図版54 写真図版42）（313）

P-E 129より須恵器壺H身313が出土している。立ち上がりは短く内傾し、受部は外上方に短く伸びる。右回転口クロである。

2. 柱穴

掘立柱建物跡に属さない柱穴より出土した遺物について、以下に記載する。遺構の位置については、第4図に示している。

【P-B 48】（図版54 写真図版53）（324）

B地区の北端に位置する。須恵器壺324が出土している。平高台の椀で底部は回転糸切りの痕跡が残る。底部内面は僅かに段が残る。

【P-E 156】（図版54 写真図版53）（318）

須恵器壺H蓋318が出土している。天井部と口縁部の境はなく、天井部を欠く。口縁端部は丸く仕上げる。右回転口クロである。

【P-E 151】（図版54 写真図版53）（319）

須恵器壺I319が出土している。底部を欠く。体部は丸く口縁部は外方に開く。右回転口クロである。

【P-E 79】（図版54 写真図版53）（320）

須恵器壺320が出土している。底部を欠く。体部は丸く、口縁部は外方に開く。右回転口クロである。

【P-E 152】（図版54 写真図版53）（321）

須恵器壺G321が出土している。口径10.2cmで外方に直線的に開く。右回転口クロである。

【P-E 122】（図版54 写真図版53）（322）

須恵器壺322が出土している。大振りの壺で、口縁部分に僅かに段差がある。

【P-E 135】（図版54 写真図版53）（323）

須恵器壺B323が出土している。底部の一部で、断面長方形の高台を貼り付けている。右回転口クロである。

【P-E 42】（図版54 写真図版53）（325）

須恵器壺325が出土している。直口の口縁部のみである。内弯気味に外方に開く。中央部に2条の沈線を巡らす。

【P-E 69】（図版54 写真図版53）（326）

土師器鉢326が出土している。底部を欠くが、内弯する球形の体部を持つ。口縁端部は外方に摘み上げる。体部外面は縱方向のハケ調整を行う。内面にコゲが残る。

3. 土坑

合計13基が検出された。うち5基がB地区に、他はE地区北部に位置する（図版25）。また、当初土坑と認識して調査したS K-E 142・143は、調査の結果掘立柱建物跡S B-E 3の柱穴と判断されたた

3. B・E 地区の調査

め、ここではこの2基を除く11基について記載を行う。

【SK-B7】

遺構（図版25）

不整橢円形を呈する大形の土坑で、長径6.4m、短径4.2mを測る。これに対し、深さは10cmとごく浅い。土坑底面はほぼ平坦である。土坑内下層には、地山ブロックが多く含まれることから、人為的な影響が考慮される。人為的に掘削された土坑というよりは、むしろ耕作などがやや深い層まで及んだ結果かもしれない。

出土遺物（図版49 写真図版41）（185）

須恵器壺H身185が出土している。大形の壺で、立ち上がりは内傾し、受部は外上方に短くのびる。底部は回転ケズリを行う。内面は同心円置台の痕跡が残る。右回転ロクロである。

【SK-B35】

遺構（図版25）

橢円形を呈する土坑で、長径110cm、短径96cm、深さ12cmを測る。土坑底面はほぼ平坦である。土坑内は砂質シルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-B36】

遺構（図版25）

不整円形を呈する土坑で、長径168cm、短径148cm、深さ20cmを測る。土坑底面には緩やかな段が見える。土坑内は細粒の砂で埋積されているが、断面観察によると1・2層が5層を切るように堆積しており、埋没過程で二次的な掘削が行われた可能性がある。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-B37】

遺構（図版25）

歪んだ橢円形を呈する土坑で、長径110cm、短径76cm、深さ16cmを測る。土坑底面は凹状の緩やかな凹みを見せる。土坑内はシルト質の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-B38】

遺構（図版25）

橢円形を呈する土坑で、長径86cm、短径70cm、深さ12cmを測る。土坑底面はほぼ平坦である。土坑内はシルト質の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-E 33】

遺構（図版26）

中央部を溝に切られるため判然としない部分があるが、概ね橢円形を呈する土坑で、長径120cm、深さ12cmを測る。土坑底面は偏った凹みを見せる。土坑底面には薄い炭層が堆積している。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-E 45】

遺構（図版27）

2条の溝に切られ、南側を擾乱によって破壊されているため、形状、大きさともに判然としないが、残存部の長径4.9m、深さ16cmを測る。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版49・55 写真図版41・54）（186～192・S 7）

須恵器坏H蓋・坏H身・坏I・坏G・高坏・蓋、土師器椀、石鏡が出土している。

須恵器坏H蓋186は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境を丸く作る。天井部は回転ヘラ切り未調整である。右回転ロクロである。坏H身187は立ち上がりが内傾し、受部は外上方に短くのびる。外面は鉄分が付着している。

坏I 188は底部が回転ヘラ切りで、体部と口縁部との境は稜を作り口縁部は外反する。右回転ロクロである。

坏G 189は丸底で、口体部は直立する。底部は回転ヘラ切り後、手持ちケズリを行う。右回転ロクロである。

高坏190は坏部に低い脚台が付く。坏部は回転ケズリを行い、脚台を貼り付ける。内面は雑な仕上げナデを行う。脚台は大きく外方に開き、脚端部を屈折させる。

蓋191は大形で天井部に孔の開く直立するつまみを持つ。体部はタタキ後、カキ目調整を行う。内面は同心円当具痕が残る。

土師器椀192は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。

S 7は、サヌカイト製の凹基無茎式石鏡である。先端部を欠くが、両側縁は膨らみをもつ脚部から緩やかに屈曲して先端部に至る。脚部は左右非対称で、基部の抉りはやや深い。二次加工は、図右面では精緻であるが、左面ではそれと比して粗雑な印象を受ける。讃岐地方産のサヌカイトと判断する。

【SK-E 118】

遺構（図版26）

擾乱のため上部の1/2強を破壊されているが、橢円形の土坑であったと思われる。残存部の長径112cm、深さ42cmを測る。土坑内は砂ないし砂礫で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

3. B・E 地区の調査

【SK-E 119】

遺構（図版26）

幅の広い橢円形の土坑で、長径212cm、短径160cm、深さ11cmを測る。土坑内は礫を含む細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版49 写真図版42）（193・194）

須恵器甕と平瓦が出土している。

須恵器甕193は短頸で口縁部は大きく外傾する。頸部と口縁部は2条の沈線で分かれる。口縁端部は強くナデを行い、上と外に面を作る。体部内面は同心円当具の痕跡が残る。平瓦194は一枚作りである。凸面は大きな格子タタキである。凹面に糸切りの後、布目が残る。

【SK-E 120】

遺構（図版26）

北西部を捲乱で破壊されているが、不整橢円形の土坑と思われる。長径192cm、深さ18cmを測る。土坑内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版49 写真図版42）（195・196）

須恵器坏Aと坏B蓋が出土している。

須恵器坏A 195は浅めの坏で、口体部は外方に直線的に開く。底部は回転ヘラ切りを行う。坏B蓋196は天井部に丸みを持っており、回転ヘラ切り後、扁平な宝珠つまみを貼り付ける。

【SK-E 136】

遺構（図版27）

中央部を溝で切られたため形状は判然としないが、長形の土坑である。長径216cm、短径88cm、深さ28cmを測る。細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SK-E 168】

遺構（図版27）

半ば以上を溝で切られたため形状は判然としないが、残存部からみると不整円形の土坑である。

出土遺物（図版49 写真図版42）（198・199）

須恵器坏H蓋、土師器鉢が出土している。

須恵器坏H蓋198は小ぶりの蓋で、天井部と口縁部の境を丸く作る。口縁部外面に粘土紐接合痕跡が残る。右回転口クロである。土師器鉢199は口体部が内弯して立ち上がる。

4. 溝

B・E 地区の溝は、地区の南西部付近、中央部、およびE 地区北東部に分布が集中する。また B・E 地区の溝は、その過半が A-2 地区の溝と連続するものであるが、溝の重複が複雑であるためと、調査区間に調査除外部分が存在するため、地区間で遺構の対応が困難なものがいくつかある。遺構の対応関係については本文中でも触れるが、章末の第6表にも示している。ここでは、分布の集中を単位として

記述を進める。なお前章で述べたとおり、SD-A 259・260・261・265については、本章で記載を行う。

《南西群》

【SD-B 1 (SD-E 3)】

遺構（図版28・31）

緩やかに曲がりながら東西方向にのびる溝で、南端はSD-E 1に切られている。北側はSD-B 41につながる可能性があるが、間に調査除外部分を挟むため確認できなかった。SD-B 41には、SD-B 5が続く可能性もある。最大幅56cm前後、深さ17cmを測る。溝内は細砂～中砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-B 2・3 (SD-E 4)】

遺構（図版28・31）

SD-B 2・3は接するように平行して北東～南西方向にのび、合流する溝である。検出面および断面での検討では、明瞭な重複関係は見られなかった。南側はやや屈曲してSD-E 4に続く。SD-B 2の最大幅は64cm、B 3の最大幅は54cmを測る。深さはB 2が12cm、B 3が8cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版50・55 写真図版44・54）（200・S 8）

土師器甕200が出土している。小形の甕で、口頸部は短く外反する。体部は剥離している。

S 8は、サヌカイト製の凹基無茎式石罐である。基部の抉りは浅く、全体に長五角形を呈する。二次加工は表裏から施されるが、図左面で細かい剥離痕がやや卓越する。風化が進行し、稜線が鈍化している。形態および風化度から、縄文時代（晩期）の所産と思われる。

【SD-B 4】

遺構（図版28・32）

ほぼ南北にのびる大規模な溝で、調査区北西壁付近でやや東寄りに曲がる。断面形は緩やかなV字形を呈しており、旧河道ないしは旧河道に人為的な造作が施されたもの的可能性があろう。最大幅4.2m、検出面からの深さは1.6mを測る。溝の最下層には疊混じりの砂が堆積しており、流水の影響が強かったと考えられる。これより上位は砂ないしシルト質の砂で順次埋積されており、自然埋没と判断できる。

出土遺物（図版50 写真図版43・44）（202・222）

須恵器坏H蓋・坏H身・坏B・坏・皿・椀・高坏・甌・壺・直口壺・鉢・甕、土師器甕、弥生土器甕、棒状土錐・管状土錐が出土している。

須恵器坏H蓋202は小ぶりの蓋で、天井部は丸く、天井部と口縁部の境はない。天井部は回転ヘラ切り未調整である。内面は一方向の仕上げナデを行う。右回転ロクロである。坏H身203・205は小ぶりの203・204と大ぶりの205がある。203は立ち上がりが弯曲し上方に向う。受部は水平にのびる。204は立ち上がりが内傾するが端部を欠損する。受部は水平にのびる。205は立ち上がりが短く内傾し、受部は外上方に短くのびる。底部は回転ヘラ切りを行い葉の圧痕が残る。203・204は左回転ロクロ、205は右回転ロクロである。

3. B・E 地区の調査

坏B207は底部の破片で、回転ケズリ後、高台を貼り付ける。右回転ロクロである。坏206は口体部が外方に大きく開く。口縁部には重ね焼の痕跡がある。

皿208は口体部が大きく外反して聞くおそらく高台が付く。口縁端部に重ね焼の痕跡が残る。右回転ロクロである。柄209は口縁部と体部と底部の境に沈線を巡らす。底部は回転ヘラ切りで左回転ロクロである。

高坏210は脚裾部の破片で、透かし孔の切り込みの一部が残るが、単位は不明である。

皿211・212はいずれも体部は完存している。211は口縁端部を欠損する。体部は扁球形で、体部に2条の沈線を巡らし、注孔を開ける。頭部は絞って作り、口縁部との境に2条の沈線を巡らす。体部最大部と頸部はカキ目を施す。212は頸部以上を欠損する。扁球形の体部中央部に2条の沈線を巡らし、注孔を開ける。内面は突押しを行い、自然釉が掛かる。

壺213は口頸部で、大きく外反し、口縁端部は面を作る。直口壺214は肩の張った体部に直立する口頸部が付く。肩部と口頸部中央部に2条の沈線を巡らす。底部は手持ちケズリを行う。右回転ロクロである。

鉢217は大形で、口体部は外傾する。口縁部は肥厚し、段を作れる。体部はカキ目を施す。

甕215・216は短頸甕である。215は小形でタタキ成形の体部に外反する口頸部が付く。口縁部は肥厚し、外面に段を作り、口縁端部は内寄する。216は中形でタタキ成形の体部に外反する口頸部が付く。口縁部は肥厚し、外面に段を作り、口縁端部は丸く収める。

土師器壺218・219は218が小形、219が中形の甕である。218は球形の体部に外反する口頸部が付く。体部外面は縱方向のハケ調整を行い、口縁内面は横方向のハケ調整を行う。体部に黒斑が存在する。胎土には角閃石を含む。219は口頸部がく字形に屈折する。

弥生土器甕220は小形で、平底である。体部最大径は上部にあり、口頸部はく字形に屈折し、上外方に開く。底部は葉脈の圧痕が残る。体部から頸部の外面にかけてタタキ調整を行う。内面はハケ調整を行い、下半部を縱方向のケズリを行う。

棒状土錘221は断面形が円形で、両端を欠くが、孔はかろうじて残る。管状土錘222は大形で、筒状である。

【 S D - B5 (S D - E5) 】

遺構（図版28・31）

緩やかに曲がりながら、東西方向にのびる溝である。上述のとおり、北側はS D - B 41につながる可能性があるが、間に調査除外部分を挟むため確認できなかった。最大幅70cm前後、深さ8cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【 S D - B8 】

遺構（図版28・31）

ほぼ直線的に東南東-西北西方向にのびる溝である。S D - B 4が埋没した後に、その上面を切って造られている。最大幅32cm前後、深さ10cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版50 写真図版45）（226）

土師器甕226が出土している。大形の甕の口縁部で、器壁を厚く作る。

【SD-B9】

遺構（図版28・31）

蛇行しながら南東- 北西方向にのびる溝である。SD-B4が埋没した後に、その上面を切って造られている。また、南端はSD-B42に接する位置にあり、これとつながる可能性もあるが、幅の点で大きな差があることから別の遺構として取り扱った。最大幅30cm前後、深さ8cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版50 写真図版45）（201）

須恵器坏H身201が出土している。立ち上がりは短く内傾し、受部は水平に短くのびる。右回転ロク口である。

【SD-B10】

遺構（図版28・31）

ほぼ直線的に南東- 北西方向にのびる溝である。SD-B4が埋没した後に、その上面を切って造られている。最大幅50cm前後、深さ12cmを測る。溝内下部は砂礫で、上部は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-B41】

遺構（図版28・31）

ほぼ直線的に南東- 北西方向にのびる溝で、調査除外部分を挟んでSD-B1もしくはB5へ続くものと思われる。最大幅75cm前後、深さ8cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-B42】

遺構（図版28・30）

ほぼ直線的に南東- 北西方向にのびる溝である。調査除外部分を挟んで、SD-E2へと続く。最大幅120cm前後を測る。溝の北部では、須恵器甕、土師器甕等がまとまって出土しており、廃棄されたものと思われる。溝内下部は砂礫で、上部は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版50 写真図版45）（223-225）

須恵器甕と土師器甕が出土している。

須恵器甕223・224は中形の短頸甕である。223はタタキ成形の体部に外反する口頸部が付く。口縁部は肥厚し、外面に段を作る。224はタタキ成形の体部に外反する口頸部が付く。口縁部は屈曲し段を作

3. B・E 地区の調査

る。

土師器羽釜225は縦長の体部に外反する口頸部が付き、頸部に水平にのびる鉤を貼り付ける。胎土には角閃石が含まれる。

【 S D - B 44】

遺構（図版28・31）

蛇行しつつ南北方向にのびる溝で、途中 S D - B 9 と交錯してこれを切る。最大幅34cm前後、深さ12cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【 S D - B 45】

遺構（図版28・31）

B地区南東隅に位置する短い溝である。延長1.3m、最大幅26cm前後、深さ6cmを測る。溝の北部では、溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【 S D - B 46】

遺構（図版28・31）

直線的に南北方向にのびる溝で、途中 S D - B 47と分岐し、北端は S D - B 42に接する。最大幅14cm前後、深さ3cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【 S D - B 47】

遺構（図版28・31）

S D - B 46から分岐して北東- 南西方向にのびる溝である。最大幅16cm前後、深さ5cmを測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【 S D - E 1】

遺構（図版28・31）

直線的に北東- 南西方向にのびる、大規模な溝である。最大幅2.7m前後、深さ60cmを測る。断面形は緩やかなV字形を呈しており、旧河道ないしは旧河道に人為的な造作が施されたもの可能性がある。溝内は細粒の砂ないし疎混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版53 写真図版54）（302・M 4）

平瓦と釘頭が出土している。

平瓦302は近代の焼し瓦で側面に中野木戸製の刻印を押印している。釘隠M 4は直径5.1cmの円形で縁を作る。厚さは0.5mm以下で、3箇所の釘が残る。釘は長さ1.1cm、約0.5mmの円形である。頭部は直径2mmである。

《中央群》

【SD-B30 (SD-A265・SD-E6)】

遺構（図版29・33）

北東-南西方向に直線的にのびる溝で、西はA地区、東はE地区へ続く。最大幅56cm前後、深さ20cmを測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-B31 (SD-A261・SD-E7)】

遺構（図版29・33）

北東-南西方向に直線的にのびる溝で、西はA地区、東はE地区へ続く。最大幅56cm前後、深さ10cmを測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

SD-B31（図版51 写真図版45）(227)

須恵器皿B227が出土している。底部から体部にかけて屈折し、口部は直線的に外傾する。底部外周には高台を貼り付ける。

【SD-B32 (SD-A260・SD-E8)】

遺構（図版29・33）

わずかに蛇行しつつ北東-南西方向にのびる溝で、西はA地区、東はE地区へ続く。最大幅70cm前後、深さ14cmを測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

SD-B32（図版51 写真図版45）(228)

須恵器皿H身228が出土している。小ぶりの壺で立ち上がり短く上方に向う。受部は水平に短くにのびる。右回転口クロである。

SD-A260（図版46 写真図版38）(142)

平瓦142が出土している。凸面は不定形な小さな斜格子タタキが残る。凹面は微かに布目が残る。

【SD-B33】(SD-A259・SD-E9)

遺構（図版29・33）

緩やかに蛇行しつつ北東-南西方向にのびる溝で、西はA地区、東はE地区へ続く。最大幅54cm前後、深さ12cmを測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

3. B・E 地区の調査

【 S D - E 132】

遺構（図版29・33）

S D - B 32とB 33との間に位置する溝で、方位は両者とほぼ同様である。最大幅52cm前後、深さ10cmを測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【 S D - E 10 (S D - D 60 ?)】

遺構（図版29・33）

直線的に北東- 南西方向にのびる溝で、西はS D - D 60へ続く可能性があるが、間に調査除外部分を含むため確認できなかった。最大幅58cm前後、深さ24cmを測る。溝内は細粒の砂ないし疊混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。下記に述べるS D - E 11・E 12とは隣接しており、規模・方向性も酷似している。

出土遺物（図版53 写真図版51）(281-284)

須恵器壺A・壺B・甕、土師器壺Bが出土している。

須恵器壺A 281は口部が直線的に外方に開く。底部は回転ヘラ切りを行う。口縁端部には重ね焼の痕跡が残る。右回転ロクロである。壺B 282は底部が厚く、口部は外方に直線的に開く。底部は回転ヘラ切り後、外傾する高台を貼り付け、丁寧なナデを行なう。

甕283は口縁部の破片で、頸部からは段を付け外方に開く。口縁部外面に櫛工具の列点文を施文する。

土師器壺B 284は丸底気味の底部に高台を貼り付ける。口縁端部は丸く收める。内面は暗文を施す。

【 S D - E 11 (S D - D 59 ?)】

遺構（図版29・33）

直線的に北西- 南東方向にのびる溝で、西はS D - D 59へ続く可能性があるが、間に調査除外部分を含むため確認できなかった。最大幅50cm前後、深さ18cmを測る。溝内は細粒の砂ないし疊混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版53 写真図版45）(285-289)

須恵器壺A・円面硯、土師器壺・椀、棒状土錘が出土している。

須恵器壺A 285は底部から体部の破片で、底部は膨らみ、回転ヘラ切りを行なう。

円面硯286は脚部のみ残り、背が高い。脚裾は大きく屈曲させる。長方形の透かし孔を推定6箇所開ける。

土師器壺287は口部の破片である。外面は横ミガキ、内面は放射状の暗文を施す。椀288は底部の破片で、外向きの高い高台を貼り付ける。

棒状土錘289は断面形が円形で、一端が残る。端部から1cmの位置に直径5mmの孔を穿つ。

【 S D - E 12 (S D - D 57 ?)】

遺構（図版29・33）

直線的に北西- 南東方向にのびる溝で、E地区西端でわずかに北向きに屈折する。西はS D - D 57へ続く可能性があるが、間に調査除外部分を含むため確認できなかった。最大幅58cm前後、深さ24cmを

測る。溝内は細粒の砂ないし礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版51 写真図版46・47）（229～254）

須恵器坏H身・坏B蓋・坏B・坏A・壺・甕、土師器坏・甕、イイダコ壺、壁土が出土している。

須恵器坏H身229は小ぶりで、立ち上がり内傾し、断面三角形を呈する。受部は外上方に短くのびる。右回転ロクロである。

坏B蓋230～232は230・231が天井部に丸みをもっており、232は扁平である。230は口縁端部が下方に屈曲し、丸く收める。天井部は回転ケズリ後、扁平なつまみを貼り付ける。内面は多方向のナデを施す。231は口縁端部が下方に強く屈曲する。天井部は回転ケズリを行う。つまみ部分は欠損している。232は口縁端部が下方に短く屈曲する。天井部は回転ケズリを行い、つまみを貼り付ける。いずれも右回転ロクロである。坏B 233～239は口縁を欠く233・234と浅い235・236・238・239と深い237がある。233～236・238は底部を回転ヘラ切りし、外向きの高台を貼り付ける。237は口体部が深く口縁部が外反する。底部に背の高い高台を貼り付ける。239は底部と体部の境が突出する。底部は回転ヘラ切り後、高台を貼り付ける。233・235は使用による摩耗が顕著である。237が左回転ロクロ以外は右回転ロクロである。坏A 240は口体部が直線的に外方に聞く。底部は回転ヘラ切りを行う。

壺241～243は241と242が口頸部、243は体部以下である。241・242は口頸部が大きく外反する。右回転ロクロである。243は縦長の体部の下半部と底部を回転ケズリし、底部に高台を貼り付ける。底部中心に自然釉が掛かる。甕244は口頸部が直立し、口縁端部は内傾する面を持つ。

土師器坏245～250は小形の245・246と中形の248・249と大形の250と深手の247に分けられる。246～249は口縁端部の内面に段を作る。247・250は外面をミガキ、248・249は内面に放射状の暗文を施す。

甕251は縦長の体部に舌状の把手を貼り付ける。口頸部はく字状に屈折する。

イイダコ壺252は釣鐘形で、把手部分に直径1.6cmの孔をあける。体部は内面に指による成形痕が残る。把手部には黒斑が残る。

壁土253・254は焼成粘土塊で植物質の圧痕や孔が多数残る。

【S D - E 13】

遺構（図版29）

E地区中央東側に位置する溝で、方向・規模などから S D - E 14へ続く可能性があるが、両者の間は2m以上開いているため、別の遺構として取り扱う。直線的に北西-南東方向にのびる溝である。最大幅53cm前後を測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【S D - E 14】

遺構（図版29・33）

大きく曲がって東西方向にのびる溝である。E地区西壁際で S D - E 12に切られる。最大幅30cm前後、深さ28cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。溝内は細粒の砂ないし礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版53 写真図版51）（290～294）

須恵器坏B蓋・壺蓋、土師器皿、棒状土錘が出土している。

3. B・E 地区の調査

須恵器坏 B蓋290・291は口縁端部が下方に強く屈曲する。290は天井部と口縁部の間にケズリの稜線が残る。いずれも右回転ロクロである。

壺蓋292は小ぶりで、天井部と口頸部の間に沈線を巡らす。天井部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。土師器皿293は底部がやや膨らむ。全体的に摩滅が著しい。

棒状土錘294はほぼ完形で、断面は円形で、両端に穿孔する。孔間は8.2cmを測る。

【 S D - E 15 (S D - D 57?) 】

遺構（図版29・33）

蛇行しつつ北西- 南東方向にのびる溝である。西は S D - D 57へ続く可能性があるが、間に調査除外部分を含むため確認できなかった。最大幅75cm前後、深さ13cmを測る。溝内は細粒の砂ないし礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版53 写真図版53）（295・296）

須恵器坏 A と土師器甕が出土している。

須恵器坏 A 295は小ぶりで、口体部は外方に直線的に開く。口縁部には重ね焼の痕跡が残る。土師器甕296は口頸部がく字形に屈折する中形の甕である。体部外面は縱方向のハケ調整を行い、口縁部内面は横方向のハケ調整を行う。

【 S D - E 16 (S D - A 229 · D 57 · D 58 · D 40?) 】

遺構（図版29・34）

大きく曲がりながら北西- 南東方向にのびる溝で、E地区西半では、梢円形の幅広い掘り込みを見る。西側は S D - A 229 · D 57 · D 58へ続く可能性があり、また S D - D 40へも続く可能性があるが、間に調査除外部分を含むため確認できなかった。東半の最大幅86cm前後、深さ28cmを測り、西半では幅2.8mを測る。溝内下層は砂礫、上層は砂ないし礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版52 写真図版48~50）（255~280）

須恵器坏 H蓋・坏A・坏B蓋・高坏・壺・長頸壺・横瓶、土師器坏・鉢・甕・竈が出土している。

須恵器坏 H蓋255~257は小ぶりの蓋で、255・256は天井部が丸く、257はやや平らである。口縁部の境はない。255・257の天井部は回転ヘラ切り未調整であり、256は手持ちケズリを行う。255の内面は一方向の仕上げナデを行う。いずれも右回転ロクロである。

坏 A 258~261は258・259が小形で、260・261は中形である。いずれも底部は回転ヘラ切りを行い、右回転ロクロである。坏 B 蓋262は内面にかえりを持つ。天井部は回転ケズリの後、扁平なつまみを貼り付ける。内面は多方向のナデを行う。

高坏263・264は263が脚上部、264が脚裾部である。263は長脚2段、2方向の透かしを開ける。上段は貫通していない。坏部内面には無文の置台の痕跡が残る。264は脚端部を下方に屈折させる。

壺265は丸底で、体部下半部の沈線以下を手持ちケズリする。底部内面には突押しの痕跡が残る。長頸壺266は肩部から口頸部の破片で、接合の痕跡が残る。頸部中央部には2条の沈線が巡る。

横瓶267は口頸部の破片で外反し、口縁部は丸く收める。体部内面は同心円当具の痕跡が残る。

土師器坏268~270は深手の268と小形の269と大形の270がある。268と270の口縁部内面には段を付ける。270の底部は手持ちケズリの後、ミガキを施す。269の内面は放射状の暗文を、270の内面は2

段に暗文を施す。

鉢271は口部が内凹する。外面は縦方向のハケ調整を行う。鉢279は浅い半球形で底部を欠損する。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を行う。

甕272～278は小形の272・273と中形の274～277と大形の278がある。272・274～278は口頸部がく字状に屈折する。体部外面の調整は274・276～278が縦方向のハケ調整を行う。内面は274・275が横方向のハケ調整を行う。

甕280は焚口の右袖の下部で、短い庇を貼り付ける。体部はハケ調整を行い、端部は強くナデを行う。下部先端には接地黒斑が存在する。

【 S D - E 17】

遺構（図版29・34）

E地区中央部では北西-南東方向の溝が卓越するが、S D - E 17は北東-南西方向にのびる。直線的な溝であるが、南側ほど幅を広げる。この間、重複する北西-南東方向の溝をすべて切っている。南端は攪乱によって破壊されている。最大幅1.5m前後、深さ10cmを測る。溝内は細粒の砂ないし礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版53 写真図版53）（297・298）

須恵器坏B・甕が出土している。

須恵器坏B 297は底部から体部にかけての破片で、底部外周に外向きの高台を貼り付ける。甕298は長頸甕で、外反する頸部から屈折して口縁部を作る。頸部はヘラ描波状文の後、沈線で区画する。口縁部の外面は櫛状工具による列点文を施文する。

【 S D - E 66】

遺構（図版29・34）

北東-南西方向に、蛇行しながらのびる溝である。この間、S D - E 10・E 11・E 12と重複し、すべてを切っている。この点で、先述のS D - E 17と同様である。南端は攪乱によって破壊されている。最大幅42cm前後、深さ3cmを測る。溝内は細粒の砂ないし礫混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（図版53 写真図版53）（299）

須恵器坏H身299が出土している。小ぶりで立ち上がりは短く直立し、受部は水平に短くのびる。右回転口クロである。

【 S D - E 67・E 68・E 88】

遺構（図版29）

S D - E 67・E 88は、調査上溝として遺構番号を与えたが、地山が緩やかに傾斜して下がる部分に沿ってのびてあり、むしろ地山の傾斜部～微凹部に堆積した遺物包含層とすべきかもしれない。いずれも地形の傾斜に沿って北西-南東方向にのびる、幅広く浅い凹みである。S D - E 68は、このS D - E 67の北部を切って、これと同一方向にのびる近代～現代の溝である。

出土遺物

S D - E 68（図版53 写真図版53）（300・301）

3. B・E 地区の調査

須恵器壺B蓋と壺がある。

須恵器壺B蓋300は口縁端部が下方に短く突出する。天井部は回転ヘラ切り後、回転ナデを行う。内面は一方向の仕上げナデを行い、壺Bの高台の重ね焼き痕跡が残る。右回転ロクロである。

壺301は肩の張った体部に細い頸部と高台が付く。肩部には1条の沈線が巡る。外面と底部内面の中心には自然釉が掛かる。

S D - E 88 (図版54 写真図版52) (303~312)

須恵器壺B蓋・高环・壺・鰐・横瓶、平瓦が出土している。

須恵器壺B蓋303~305は303が口縁端部を下方に強く屈曲させ、304・305は下方に短く突出させる。303・304の天井部は回転ケズリを行う。

高环306・307は短く外反する脚部で、脚端部は下方に突出させる。

壺308は底部から体部下半部分で、平底の底部は未調整で、外周のみ回転ケズリを行う。壺309は肩部が屈折する壺で、底部には外向きの高台を貼り付ける。

鰐310は頸部以上を欠損する。扁球形の肩部に1条の沈線を巡らす。注口部分は欠損している。底部は回転ケズリを行う。内面は突押しを行い、自然釉が掛かる。

横瓶311は口頸部の破片で、外方に直線的に開き、口縁端部は丸く收める。体部内面は同心円当て具の痕跡が残る。

平瓦312は1枚作りである。凸面には不定形な斜格子タタキが残る。凹面には布目痕跡が残る。

【S D - E 86】

遺構 (図版29)

S D - E 17・E 66と同じく、北東- 南西方向にのびる。南端は搅乱によって破壊されており、ごく短い部分しか検出できなかった。最大幅22cm前後を測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【S D - E 87】

遺構 (図版29)

S D - E 17・E 66と同じく、北東- 南西方向にのびる。南端は搅乱によって破壊されており、ごく短い部分しか検出できなかった。最大幅30cm前後を測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【S D - E 90】

遺構 (図版29)

北東- 南西方向にのびる溝で、北端はS D - E 68に接する。S D - E 66の延長部である可能性があるが、間にS D - E 68・E 88を挟むため明確ではない。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

《北東群》

【SD-E 116】

遺構（図版34）

E地区北端に位置する溝で、E地区西壁に沿ってほぼ南北方向にのびる。最大幅56cm前後、深さ10cmを測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

5. 包含層出土の遺物（図版55 写真図版54）（327~334）

須恵器壺H身・壺B蓋・皿・短頸壺・提瓶、白磁碗、丸瓦を図化した。

須恵器壺H身327は立ち上がりが短く内傾し、受部は水平に短くのびる。底部は回転ヘラ切りを行う。右回転ロクロである。

壺B蓋328はかえりを持つ蓋で、かえりは口縁部より下に突出する。天井部は回転ケズリ後、回転ナデを行う。重ね焼の痕跡から身とセットで焼成している。

皿329は口部が外方に開く大振りの皿である。底部は回転ヘラ切り後、ナデを行う。皿330は口部部が大きく開く皿で、口縁端部は外反し尖る。底部は厚く、回転ヘラ切りを行い、高台を貼り付ける。

短頸壺331は肩部が屈折し、口縁部が短く直立する壺で、底部を欠損する。体部下半は回転ケズリを行う。肩部には蓋の痕跡が残る。左回転ロクロである。

提瓶332は小形の提瓶で、体部に一部が残る。体部成形時の底部は回転ケズリを行い、丸く仕上げる。口縁部の反対側の内面には自然釉が掛かる。

白磁碗333は白磁碗V類で、内外に灰白色の釉が掛かる。12世紀後半に位置付けられる。

丸瓦334は玉縁式の丸瓦で、凸面は縱方向にナデを行い、凹面は布目の痕跡が残る。

4. C地区の調査

4. C地区の調査

C地区は今回の調査区の中では南東端に位置し、平面形は三角形に近く、面積は332m²である。

調査区の調査前の地表面は建物が撤去され、盛土により周辺建物周囲や国道2号線とほぼ同じ高さになっていた。

調査の方法は、地表から1.5m前後の深さの耕土下まで重機により掘削を行い、耕土下端から約15cm下にある厚さ約10cmの遺物包含層については人力により掘削した。遺物包含層の下面是遺構面となっていたことから、遺構検出のために精査を行った。検出した遺構は最大幅約4m、深さ1m以上の流路(SD-C2)とその西側で検出した幅20~30cm程度の小規模な溝3条であった(図版35)。

遺物には流路と包含層から出土したものがあり、流路からは弥生時代後期後半、包含層からは調査区全体にわたって奈良~室町時代に属する土器片が出土している。

(1) 層序(図版36)

盛土される前の地目は水田であったようで、厚さ約1.5mの盛土直下には耕土(第1層)が認められた。耕土の下層には旧耕土と思われるオリーブ灰色の第4・6層があわせて15cm程度の厚さで存在していた。

旧耕土の下層には灰色を呈する遺物包含層(第8層)が厚さ10cm程度堆積しており、そこからは奈良時代~室町時代の土器片が調査区全面にわたって出土した。なお、流路部分では遺物包含層が凹面をなすように低くなっている。その上部には小さな碟を含む暗青灰色の第7層が堆積していたが、この部分は浅い流路状になっていた可能性がある。

遺物包含層の下層は灰色を呈する地山(第10層)となり、流路の底部付近では灰色で小粒の砂礫層(第19層)が認められた。

(2) 遺構と遺物

1. 溝

C地区の遺構面は水平に近いが、わずかに西側が高く東側が低い傾斜面となっている。C地区の東端付近で北東~南西方向にのびる流路(SD-C2)を検出した。また、SD-C2の西側に約4m離れてSD-C2と同一方向に近いSD-C1・C4と、SD-C4と直交する方向で重複して存在するSD-C3を検出した。これら3条の溝は幅20~30cm程度と小規模なものである。

【SD-C2】

遺構(図版35・36 写真図版18)

SD-C2は調査区隅付近に存在していたため、最長でも約8.0mの長さしか調査できなかつたが、最大幅約4.0m、検出面からの深さは最深部で約1.1mとその規模は大きい。流路の西岸側は検出面より1段低くなっている部分があり、この部分は検出面からの深さ約30cmで、流路中軸に沿って幅約1.0mの平坦な面となっていることから、意識的に加工された部分である可能性が高い。また、この平坦面の西側法面の一部には、平面三日月形に似たステップのような平坦面も認められる。なお、この平坦面部分を除いた流路の幅は約2.5mとなる。

流路の東岸は、西岸よりも約20cm低いことから、東岸にも西岸と同様の平坦面が存在している可能性がある。ただし、調査区内の幅約1.5mの範囲内では、たちあがりは確認できなかつた。なお、東岸の法面には、検出面から約40cm下がった位置で円碟の集積が認められたが、その機能を解明できる資料は

得られなかった。

流路の横断面形状は逆台形に近く、底面はほぼ平坦であり、その幅は約1.7mである。また、南北方向の深さの差もほとんどなく、標高4.5m前後となっている。流路の埋土のうち、最下層である18層には流路底の砂層を多く含むうえに植物遺体を含んでいることから、溝底と埋土最下層がまじりあった層と判断できる。その上部にある15~17層は炭化物や植物遺体を多く含んだ黒色系の土層であることから、溝の底さらしがおこなわれないまま徐々に埋まっていったことを示しているものと思われる。また、17層には弥生時代後期の土器を含んでいた（写真図版20-1）。この土器のうち、ほぼ完形に復元できた大型鉢は、流路中央部の南端付近で出土したものである。11~13層は淡い色を呈し、地山である10層のブロックを含んでいることから、洪水によってもたらされた土層である可能性が高い。なお、8層下端から11層上面にかけては平安時代末~鎌倉時代初頭の土器が出土していることから、この流路がわずかな窪地を残してほぼ埋まった時期を示しているものと思われる。したがって、この流路は弥生時代後期後半から平安時代末頃までの間、徐々にその底を浅くしながら機能していたものと推定されよう。

なお、流路の方向や規模、横断面の形状ならびに下層の堆積土、出土土器の時期から、B地区の大溝（SD-B4）につながる同一の流路の可能性がある。仮に同一とすれば流路底の標高は、SD-C2が4.5m前後、SD-B4が4.2m前後であることから、ほぼ北方向に流れていることになり、現在の別府川とは逆方向になる。

出土遺物（図版56 写真図版55）（335・336）

SD-C2からは17層を主として弥生時代後期後半の土器が出土している。

335は、ほぼ完形に復元できた大型鉢である。口径は30.3cmを測り、器高は16.0cmとなっている。口縁部は体部からゆるやかに外折させて短くおさめる。口縁部には注口部を造出している。体部はわずかに外膨らみとなり、径5.7cmとやや大きめの平底になっている。体部外面は太筋のタタキ、内面は横向のハケ調整となっている。外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。体部下半の調整は不明瞭であるが、外面はタタキを縱方向のナデで消しており、内面はヘラミガキを加えているようである。なお、底面には微妙に木葉底と判断できる痕跡を残している。

時期的には弥生時代後期後半に属するものと思われるが、私見による大中2期（岸本一宏2007「大中跡の住居跡と土器- 大中遺跡出土土器の変遷」 大中遺跡III 兵庫県文化財調査報告第319冊）に相当する時期と判断される。

336は弥生土器の底部である。底径5.3cmで外面にはタタキ痕が残り、内面はイタナデのようである。

【SD-C1】

遺構（図版35・36）

SD-C1は調査区内の北東部で検出した、長さ約3.5m、幅35cm、検出面からの深さ8cmの小規模な溝である。南西端は徐々に底を減じて自然消滅しているが、北東端は用地外にのびている。南西側に存在するSD-C4と方向や位置関係が似ていることから、連続する同一の溝であった可能性もある。溝埋土は灰色のシルト~極細粒砂で、土器は出土していないものの、包含層出土土器から中世の所産である可能性が高い。方向はSD-C2とほぼ同一であることから、同時期に存在していた可能性もある。
出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

4. C地区の調査

【SD-C3】

遺構（図版35・36）

SD-C3は後述するSD-C4と直交に近い方向の小規模な溝であるが、SD-C4の南半がSD-C3であるかどうかの判断はできなかった。東方向にのびる部分は長さ約3.5m、検出面での幅は20cm、検出面からの深さは15cmあり、やや深いものである。東端は自然消滅している。埋土は下層に黄灰色のシルト・極細粒砂が認められるが、上層はその他の小規模溝と同一である。遺物は出土しておらず、時期の確定も難しいが、他の小規模溝と同時期である可能性が高い。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-C4】

遺構（図版35・36）

SD-C4はSD-C1の南西側にあり、同一方向・同一規模に近い小規模な溝である。SD-C3との重複部分も加えた長さは約5.5mであるが、南端は用地外にのびている。北端は浅くなつて自然消滅しているが、SD-C1と連続した溝であった可能性がある。SD-C1・C3・C4はいずれも水田耕作に関係する溝と思われるが、その機能を具体的に述べる根拠はもない。SD-C4の検出面での幅は約30cm、検出面からの深さは約10cmで、埋土は他の小規模溝と同じく灰色を呈していたが、特にSD-C3とは同一であった。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

2. 包含層出土の遺物（図版56 写真図版55）（337～343・M5）

337は須恵器壺Bあるいは皿Bの底部と思われる破片である。貼付輪高台の外径は10.3cm、高台はあまり外へはふんばらないが、内側にあることから奈良時代前半の可能性が高い。

338は須恵器壺底部である。外側に大きくふんばる脚台は径9.9cmを測り、体部は脚部のすぐ外側で大きく屈曲してたちあがることから、奈良時代前半の所産である可能性が高い。

339は東播系須恵器こね鉢の破片である。細片であるが、口径は27.0cmに復元できる。口縁端部は外側に肥厚させて断面三角形状を呈している。口縁端部の厚さがやや狭く、14世紀前半に比定できるものと思われる。

340は土師器土鍋の口縁部から体部にかけての小片である。口径の復元は不可能であるが、器厚は10cm程度の浅いものになる可能性が高い。播磨地域でよくみられる器種であり、鈎状の突出部が低く丸みをもつていてことから、15世紀後半～16世紀前半の所産と考えられる。焼成はややあまく軟質で、胎土にはクサリ礫を多く含んでいる。

341・342は青磁碗の破片である。341の口縁部径は15.4cmと推定され、内外面に施釉しているが、文様は認められない。342の底部は高台内側を除いた全面に釉を施している。高台内側の釉はかきとっているが、高台中央部は円形に釉を残している。342の高台径は5.9cmである。341の釉の色は灰色、342は灰オリーブ色であることから同一個体である可能性は低いものの、時期的には両者とも15世紀代に属するものと判断される。

343は平瓦の破片である。一側辺は端部まで遺存しているものの、その他は破面となっている。凹面

には細かい布目が全面に認められ、凸面にはハケ目のようにもみえるナデが施されている。灰黄色を呈し、やや軟質の焼成となっている。時期は不明である。

M 5 は全長7.4cmの鉄製角釘で、一辺 $7.5 \times 8.0\text{cm}$ と太い。頭部は片側に打ち広げられ、平面 $1.4 \times 1.7\text{cm}$ の橢円形状を呈しており、側面では5mm程度と厚くなっている。頭頂部にやや丸みをもたせている。現重量は26.2gで、機械掘削時に出土していることから、時期的にも近世以降である可能性が非常に高い。

5. F 地区の調査

5. F 地区の調査

F 地区は、C 地区と同様に、南北道路の国道 2 号線との交差点の隅切部分にあたる。したがって、平面形は三角形に近く、面積は 526m² である（図版 37 写真図版 19・20）。

調査前の地表面は盛土により周辺建物周囲や国道 2 号線とほぼ同じ高さになっており、工事用車両の駐車場になっていた。

調査の方法は、C 地区と同様に地表から 1.2m 前後の深さの耕土下まで重機により掘削をおこない、耕土下端から約 15cm 下にある厚さ約 10cm の遺物包含層下端までについては人力により掘削した。遺物包含層の下面是造構面となっていたことから、造構検出のために精査をおこなった。検出した造構には旧西国街道の側溝と推定される溝や小規模な溝多数があり、その一部は以前に建っていた建物の関係による 13 × 8 m 規模の長方形の壊乱穴により破壊されていた部分も認められた。

遺物は溝と包含層から出土したものがあるが、溝出土のものは細片に限られる。包含層からは弥生時代後期～中世の土器が少量ながら出土しており、完形に近い須恵器壺蓋も認められた。

(1) 層序（図版 37）

盛土される前の地目は水田であったようで、厚さ約 1.0m の盛土直下には耕土（第 1 層）が認められた。耕土の下層には床土（第 2 層）および旧耕土と思われる黄褐色の第 3 層があわせて 15cm 程度の厚さで存在していた。旧耕土の下層には灰色を呈する遺物包含層（第 4 層）が厚さ 10cm 程度堆積しており、そこからは弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代末～中世の土器が少量ながら出土しており、包含層下端より古墳時代後期の完形に近い須恵器壺蓋（Po-F 1:344）と土師器壺体部の上半部分破片が出土している。

遺物包含層の下層は明黄褐色を呈する地山（第 5 層）となり、小規模な溝はその面で検出した。

(2) 造構と遺物

F 地区の造構面は平坦で、水平に近いが、わずかに 5 cm 程度北東側が高く南西側が低くなっている。

F 地区で検出した造構はすべて小規模な溝であるが、SD-F 7 は旧西国街道の側溝と判断され、それ以外の溝とは性格を異にしているものと思われる。SD-F 2・F 6・F 8・F 9 については水田に関係した溝と想定している。したがって、F 区は居住地ではなく耕作地として利用されていた領域と考えられる。時期を決定できる遺物が出土していないが、中世に属するものと思われる。

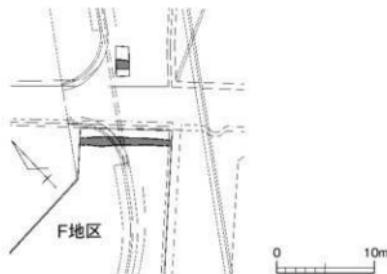
1. 溝

【SD-F 7】

造構（図版 37・38 写真図版 19・20）

SD-F 7 は F 区北端に沿って、北西～南東方向に直線的にのびる溝である。長さ 8.4m にわたって検出でき、東西両側の調査区外にさらにのびている。溝幅は 75cm、確認できた面からの深さ約 70cm で、横断面は長方形に近い逆台形を呈し、溝底は平坦になっている。この溝は形状・深さとも一定で、床土の下面に認められ、西国街道とされる現道と平行方向にあることから、江戸時代に整備された旧西国街道の南側側溝と推定される。ただし、この溝からは出土遺物がなく、時期を確定できなかった。

なお、現道を挟んだ北側についても小規模ながら掘削を行なった結果、F 区で検出した溝と同規模で同形態のものが検出された（第 6 図）。この溝からも遺物が出土しなかつたため時期を確定することが

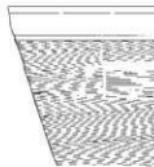


第6図 旧西国街道側溝検出位置

F地区 遺構面上 Po-F1



F地区 包含層



第7図 F地区出土の遺物

5. F 地区の調査

できないが、これら南側・北側の溝が平行方向で同規模であることから、北側の溝についても旧西国街道にともなう溝と推定され、西国街道の北側溝であることが判断されよう。なお、南北両溝で挟まれた道路部分の幅は7.0mとなり、現道幅よりも2.6m広い。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F2】

遺構（図版37・38）

SD-F2は調査区西端で長さ約9mにわたって検出された、幅40cm前後、深さ5cm程度の小規模な溝で、北東-南西方向にのびている。この溝と同一方向のものにはSD-F8・F9があるが、両者の関係は不明である。また、SD-F4またはF3と重複しているが、土層関係によりSD-F2が新しいと判断した。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F3】

遺構（図版37・38）

SD-F3は調査区北西壁に沿うようなかたちで検出された小規模な溝である。検出面での幅30cm前後、深さは4~7cmで、調査区内で2度その方向を変えている。また、約1mの間隔をあいて同規模のSD-F5が平行に走っていることから、両溝は、たとえば耕き跡といったような耕作痕であり、同一の水田であった可能性がある。

また、SD-F6についても同一方向で同規模であることから、同様のことがいえるであろう。なお、南西端のSD-F4と交差している部分は擾乱穴により破壊されているが、その西側の溝はSD-F4の続きである可能性がある。また、北東端でSD-F7とも交差しているが、本溝の方が時期的に古い。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F5】

遺構（図版37・38）

SD-F5はSD-F3の西側で、調査区北西壁に沿うようなかたちで検出された小規模な溝である。SD-F3と約1mの間隔をあいて平行であることから、SD-F6と同様に、同一の機能が考えられる。SD-F5は調査区内では3箇所で途切れたり、調査区南西端では遺存していなかった。

また、SD-F3とも平行であり、その方向を変える屈曲部分も同じ位置となっている。SD-F5は検出面での幅25cm前後、検出面からの深さは4cm前後である。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F6】

遺構（図版37・38）

SD-F6はSD-F5と約70cmの間隔をおいて、SD-F3とともに平行に走っていた溝と思われるが、その多くが遺存していなかった。もとはこれらの溝と同様に存在していたと思われる。検出面での幅は30cm前後、深さは約4cmで、調査区内で3条に途切れています。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F4】

遺構（図版37・38）

SD-F4は調査区を東西方向に横断するかたちでほぼ中央で検出された、幅35cm前後、深さ4cm前後的小規模な溝である。調査区内では約28mにわたって検出されたが、両側とも調査区外にのびている。ほぼ一直線にのびているが、一部擾乱穴により破壊され、調査区西部では途切れが認められる。また、南西端のSD-F2と交差している部分はSD-F4の続きである可能性がある。なお、調査区内ではこの溝と平行方向の溝は検出されず、他の小規模溝よりも土層的に古く、その方向はほぼ東西に合致していることから、別の機能を与えるほうがよいのかもしれない。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F8】

遺構（図版37・38）

SD-F8は調査区北東部で検出した、幅20cm前後、深さ3cm程度の小規模な溝である。約2.5~3mの距離をおいて東側にはSD-F9がほぼ並行して存在していることから、同一の機能をもった溝であろう。SD-F8は途切れながらも約9.5mにわたって検出した。北側は調査区外にのびている可能性が高いが、南側は自然消滅している。SD-F8・F9と平行方向の溝は、調査区西端で検出されたSD-F2であるが、その間隔は約17mである。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【SD-F9】

遺構（図版37・38）

SD-F9もSD-F8同様、調査区北東部で検出した、幅20cm前後、深さ3cm程度の小規模な溝である。SD-F8とは約2.5~3mの間隔でほぼ並行して存在している。同一機能の溝と推定される。SD-F9は約11mにわたって検出されたが、数箇所で途切れている。南側は自然消滅しているが、北側は調査区外にのびている可能性が高い。南端部分ではSD-F4と重複し、本溝のほうが古いことが土層関係から判断できた。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

5. F 地区の調査

2. 包含層出土遺物（第7図 写真図版56）（344~353）

344は調査区南端中央部に近い包含層下面（Po-F 1 写真図版20-8）から出土した、完形に近い須恵器蓋である。口径は12.6cm、器高3.7cmで、口縁端部は丸くおさめ、天井部外面の回転ヘラケズリの範囲が狭いことから、MT85型式段階もしくはTK43型式期の所産と判断される。

なお、調査区南東隅に近い部分（Po-F 10）から土師器壺の体部上半が出土している（写真図版20-7）。

345は須恵器坏身の破片で、口径は12.0cmを測り、外面は静止ヘラケズリになっている。たちあがり部は内上方に長くのびていることから、MT85型式段階もしくはその前のTK10型式期の可能性もある。F区南東部から出土したものである。

346・347は須恵器坏Bの破片である。346の高台径は10.0cmで、高台位置は外側に近いが、体部に丸みがあることから、奈良時代前半の可能性がある。調査区南東隅に近い部分から出土したものである。

347は底部と体部の屈曲が鋭く、高台も外側にあることから奈良時代後半の可能性がある。高台径は11.5cmを測る。調査区中央北寄りの西部から出土している。

348は須恵器の鉢Eである。口径は25.0cmを測り、残存高は約13cmである。体部から口縁部にかけて直線的で、口縁部はやや内湾する。口縁端部は内傾する面をもち、体部外面にはカキメが認められる。奈良時代と思われるが、詳細な時期は不明である。調査区南東部から出土したものである。

349は東播系須恵器こね鉢の口縁部片である。口径は29.0cmを測る。口縁端部の玉縁状肥厚はやや小さく、端面が垂直に近いことから、13世紀後半から14世紀前半の可能性がある。調査区南東部出土である。

350は備前焼擂鉢の小片である。口径は31.5cmと推定され、口縁部は大きく上方に拡張されるが、端部は丸くおさめられている。備前IV期で、内面には櫛による擂目が一部残存している。調査区北部出土。

351はIV類の白磁碗口縁部片である。口縁端部は玉縁状に肥厚させており、口径は16.2cmを測る。外面の玉縁の約8mm下からは露胎となっている。白磁碗IV類は12世紀後半~13世紀前半の時期が与えられている。調査区南西部から出土したものである。

352は龍泉窯系I-2a類の青磁碗の口縁部片である。内面に團線および片切彫の蓮華文を施す割花碗で、12世紀後半~13世紀前半の時期が与えられているものである。口径は16.1cmを測り、口縁端部は若干外傾しているが、外面の口縁部直下は釉が厚く、表面では図のように窪んだ印象は受けない。釉は灰オリーブ色を呈し、胎土は灰白色である。調査区北端部分から出土したものである。

353は調査区南東部から出土した弥生土器底部である。器種は櫛であろう。底径は4.5cmで、突出気味の底部となっている。底部側面にはユビオサエ痕が密に残っている。体部外面には平行タタキ痕が残るが、内面は磨滅により調整痕の観察はできない。残存高は4.8cmである。外面の底面全体と体部の一部にかけて黒斑が認められる。弥生時代後期でも後半に属するものと思われるが、後期末まで降るものではないと判断できる。

6. G 地区の調査

(1) 層序

坂元遺跡のなかで最も南西部に位置する調査区である。調査区は狭く、調査面積は127m²である。調査地内の基本層序は、上から盛土・旧耕作土・暗灰黄色シルト混じり極細砂（床土）・暗灰色シルト混じり極細砂・細砂・暗黄灰色極細砂混じりシルト（基盤層）の堆積が認められた。

基盤層の上の暗灰色シルト混じり極細砂・細砂は、顯著に土壤化された層で、いわゆる包含層に相当する層である。埋土中からは、奈良時代を中心とした須恵器（358）等が出土している。基盤層上面が、遺構棟出面に相当する。調査区内においては、ほぼ同レベルでその標高は5.60mである。

(2) 遺構と遺物

検出した遺構は溝状遺構4条（SD-G1～SD-G4）に限られる。SD-G1を除いては、東西方向から北西-南東方向に弧状をなし、互いにほぼ平行関係にある（図版39）。

【SD-G1】

遺構（図版39）

調査区東隅で検出した。検出した長さは1.60mで、西端は調査区内で収束し、東端は調査区外へのびている。横断面は皿形をなし、検出面における幅は40cmを測る。最深部における検出面からの深さはわずか2cmである。埋土は、暗灰色シルト混じり極細砂・細砂1層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物

全く出土していない。

【SD-G2】

遺構（図版39）

SD-G1の南西側で検出した。検出した長さは約11mで、途中1箇所で途切れている。西端は後世の攪乱を受けているが、調査区内で収束している。東端は調査区外へのびている。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は50cm～70cmを測り、最深部における検出面からの深さはわずか6.5cmである。埋土は、暗灰色シルト混じり極細砂1層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物

須恵器と土師器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。SD3と同様、奈良時代を中心とした時期のものである。

【SD-G3】

遺構（図版39）

SD-G2の南西側で検出した。検出した長さは約14mで、両端とも調査区外へのびている。なお、当溝の西端部は2方向に分岐している。当溝は2段にわたり掘削されており、横断面は下側がリ字形、上側が逆台形をなす。検出面における幅は90cm～1.15mを測り、最深部における検出面からの深さは22cmである。埋土は、暗灰色シルト混じり極細砂1層からなる。自然堆積後、土壤化した層と判断される。

6. G地区の調査

出土遺物（図版39）（354～358）

須恵器と土師器が出土している。土師器については、甕等が出土しているが、小片のため図化できなかった。須恵器は、杯H蓋（354）・杯A（355）・杯B（356・357）・杯B蓋（358）が出土している。杯H蓋は6世紀後半に、他は8世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

【 S D - G 4 】

遺構（図版39）

S D - G 3 の南西側で検出した。検出した長さは約11mで、両端とも調査区外へのびている。横断面は深い皿形をなす。検出面における幅は30cm～40cmを測り、最深部における検出面からの深さは9cmである。埋土は、暗灰色シルト混じり極細砂1層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物

須恵器と土師器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。S D - G 3 と同様、奈良時代を中心とした時期のものである。

III 造構と遺物

建物番号	形式	規模	規模(m ²)	長軸方位	建物番号	形式	規模	規模(m ²)	長軸方位
A 1	側柱	3x 3	12.5	N3.3° E	D 22	-	? x 3	-	N21.5° E
A 2	側柱	1x 3	16.4	N4.0° E	B 1	総柱	3x 3	20.3	N15.0° E
A 3	側柱	? x 3	-	N6.5° E	E 1	側柱	1x 3	16.0	N3.0° E
A 4	側柱	? x 2	-	N4.5° E	E 2	側柱	2x 3(?)	22.5	N87.0° W
A 5	側柱	2x 2	9.1	N7.0° E	E 3	側柱	1x 3	-	N15.0° E
A 6	側柱	3x 5	33.6	N14.0° E	E 4	側柱	2x 3	13.2	N63.5° E
D 4	側柱	3x 3	12.7	N25.0° E	E 5	側柱	3x 3	20.4	N55.5° E
D 30	側柱	2x 3	16.0	N14.0° W					

第4表 挖立柱建物跡一覧

番号	地区	群	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	地区	群	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
A- 8	A- 1	北東	200	116	12	A- 246	A- 2	南西	-	68	13
A- 15	A- 1	北東	328	152	32	A- 247	A- 2	南西	-	84	12
A- 29	A- 1	北東	204	148	14	A- 248	A- 2	南西	-	148	16
A- 30	A- 1	北東	216	160	36	A- 253	A- 2	南西	112	88	4
A- 31	A- 1	北東	120	72	12	A- 254	A- 2	南西	176	160	14
A- 32	A- 1	北東	276	72	4	A- 255	A- 2	南西	-	116	8
A- 51	A- 1	中央	264	160	8	A- 258	A- 2	南西	88	56	12
A- 63	A- 1	中央	-	164	8	A- 262	A- 2	南西	-	120	10
A- 64	A- 1	中央	192	48	4	A- 266	A- 2	南西	-	42	22
A- 65	A- 1	中央	-	208	6	D- 19	D	中央	156	112	6
A- 66	A- 1	中央	256	200	12	D- 39	D	南西	62	38	14
A- 67	A- 1	中央	-	120	6	B- 7	B		640	420	10
A- 68	A- 1	中央	140	48	4	B- 35	B		110	96	12
A- 69	A- 1	中央	232	157	10	B- 36	B		168	148	20
A- 84	A- 1	中央	-	56	5	B- 37	B		110	76	16
A- 87	A- 1	中央	110	33	5	B- 38	B		86	70	12
A- 89	A- 1	中央	332	280	8	E- 33	E		120	-	12
A- 90	A- 1	中央	320	312	10	E- 45	E		490	-	16
A- 100	A- 1	中央				E- 118	E		112	-	42
A- 222	A- 1	北東	160	88	8	E- 119	E		212	160	11
A- 223	A- 1	北東	-	92	4	E- 120	E		192	-	18
A- 224	A- 1	北東	80	56	12	E- 136	E		216	88	28
A- 226	A- 1	中央	152	-	5	E- 168	E		-	-	-
A- 228	A- 1	北東	-	164	10	S K- E142・S K- E143は、掘立柱建物跡の柱穴として扱う					

第5表 土坑一覧

対応関係が確 実なもの	A 88/D 3	A 260/B 32/E 8	対応関係が不 確実なもの	D 40/E 16?
	A 119/D 20	A 261/B 31/E 7		D 57/E 12?
	A 191/D 45	A 265/B 30/E 6		D 57/E 15?
	A 229/D 57/D 58/E 16	B 1/E 3		D 59/E 11?
	A 231/D 59	B 2/B 3/E 4		D 60/E 10?
	A 232/D 60	B 42/E 2		
	A 259/B 33/E 9	B 5/E 5		

第6表 地区間満対応

6. G 地区の調査

第7表-1 土器一覧

件番 番号	試験 番号	写真 図版	種 所	器 種	部 位	調査 番号	地 区	直 徳	直 徳2	直 徳3	元の直徳 (D・E地区)	法量 (cm)			実測 面積 分 析	
												口 径	器 高	底 幅	直 徳合計	
1	第1回	22	直徳器	坪B	口縁 - 底部	2003091	A-1地区	(複数Nr1)				(11.8)	3.6	2.7	34.0	
2	第3回	22	直徳器	跡	口縁部	2003091	A-1地区	(複数Nr13)				(25.8)	4.7+		34.1	
3	第4回	22	直徳器	坪B	体 - 底部	2003091	A-1地区	(複数Nr14)				3.7+	9.0		33.7	
4	第5回	22	直徳器	坪B	口縁 - 底部	2003091	A-1地区	(複数Nr11)				(16.2)	3.6	12.1	34.2	
5	第6回	22	直徳器	跡	高部	2003091	A-1地区	(複数Nr11)				3.7+			34.3	
6	第7回	-	直徳器	香	口縁部	2003091	F地区	(複数Nr4)				9.7	2.9+		33.5	
7	第8回	-	直徳器	直口香	口縁部	2003091	F地区	(複数Nr4)				(15.4)	3.7+		33.6	
8	第9回	-	直徳器	跡	底部	2003091	B-F地区間	(複数Nr6)				3.8+	(7.5)		33.8	
9	第10回	-	土器類	電	上部	2003091	B-F地区間	(複数Nr6)				(26.5)	7.7+		33.9	
10	40	23	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-1地区	SK-A90				(10.9)	3.2		32.9	
11	40	23	土器類	晝伏土器	近形	2004013	A-1地区	SK-A90				45.4	1.2	8.8	32.8	
12	40	23	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-1地区	SK-A89				(10.1)	3.2+		32.4	
13	40	23	直徳器	底	口縁部	2004013	A-1地区	SK-A89				(9.0)	2.5+		32.7	
14	40	23	土器類	篠	口縁 - 底部	2004013	A-1地区	SK-A89				13.8	9.8		32.0	
15	40	23	土器類	篠	口縁 - 体部上半	2004013	A-1地区	SK-A89				(18.2)	8.4+		32.6	
16	40	23	土器類	篠(マダコ型)	口縁 - 体部上半	2004013	A-1地区	SK-A89				12.9	11.9+		32.5	
17	40	23	土器類	篠(マダコ型)	口縁 - 体部上半	2004013	A-1地区	SK-A89				12.2	14.2+		32.4	
18	40	24	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-1地区	SK-A64				9.6	1.8		32.0	
19	40	24	直徳器	环	口縁部	2004013	A-1地区	SK-A64				(18.7)	2.0+		32.1	
20	40	24	直徳器	坪H裏	体 - 口縁部	2004013	A-1地区	SK-A89				(14.3)	1.3+		32.6	
21	40	24	直徳器	坪B	高部	2004013	A-1地区	SK-A89				2.3+	(8.5)		32.7	
22	40	24	直徳器	篠	體 - 体部上半	2004013	A-1地区	SK-A89				9.4+			32.2	
23	40	24	直徳器	坪B	体 - 底部	2004013	A-1地区	SK-A66				5.5+	(10.9)		32.5	
24	40	24	直徳器	篠	口縁部	2004013	A-1地区	SK-A66				(30.3)	4.7+		32.4	
25	40	24	土器品	イイダコ型	上半部	2004013	A-1地区	SK-A66				7.1+			32.3	
26	40	24	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-1地区	SK-A88				(12.4)	3.1		32.2	
27	40	24	直徳器	坪B	体部上半 - 底部	2004013	A-2地区	SK-A247				6.8+	10.1		31.6	
28	40	24	土器品	伴生土器	一筋(縫隙あり)	2004013	A-1地区	SK-A65				3.7+	2.0	7.6	17.3	31.8
29	40	24	土器品	伴生土器	一筋(縫隙あり)	2004013	A-2地区	SK-A246				3.6+	2.1	8.8	12.4	30.1
30	40	24	土器品	伴生土器	一部	2004013	A-2地区	SK-A248				2.7+	2.1	9.9	30.2	
31	41	25	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			9.0	3.4		32.7	
32	41	25	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(12.2)	3.6		32.6	
33	41	25	直徳器	坪H裏	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			10.8	4.2	6.0	32.5	
34	41	25	直徳器	坪H裏	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤縫隙			10.9	3.3	(6.4)	32.7	
35	41	25	直徳器	坪H裏	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(11.1)	3.3+		32.9	
36	41	25	直徳器	坪H裏	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(10.0)	2.5+		32.8	
37	41	25	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(14.1)	3.1		32.7	
38	41	26	直徳器	坪H裏	体 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤縫隙			(16.0)	1.5+		32.7	
39	41	25	直徳器	坪H裏	天井 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			(15.4)	2.3		32.5	
40	41	26	直徳器	坪B	天井 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(18.0)	2.6+		32.9	
41	41	26	直徳器	坪B	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(16.0)	4.0	(11.5)	32.7	
42	41	26	直徳器	坪B	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(15.5)	4.3	11.9	32.9	
43	41	26	直徳器	坪B	高部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			2.0+	10.0		32.6	
44	41	26	直徳器	坪B	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(16.1)	4.5	(11.1)	32.6	
45	41	25	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(17.4)	4.6	14.3	32.6	
46	41	26	直徳器	坪B	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			(22.4)	5.4	(17.4)	32.9	
47	41	27	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(10.0)	3.8	2.5	32.5	
48	41	26	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			13.8	3.5	11.4	32.7	
49	41	26	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			13.8	3.3+	11.3	32.4	
50	41	27	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230				(32.4)	3.0	9.0	32.5	
51	41	26	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			16.7	4.7	14.0	32.6	三辺No1
52	41	27	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			(16.2)	3.7	(13.1)	32.7	
53	41	26	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			13.3	3.5	9.4	32.4	
54	41	27	直徳器	坪A	口縁 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			(13.4)	3.5	9.0	32.7	
55	41	27	直徳器	坪	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤縫隙			(14.7)	5.1+		32.8	
56	41	27	直徳器	坪板	体 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			5.6+	9.5		32.6	
57	41	27	直徳器	坪	体 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			3.1+	6.2		32.7	
58	41	27	直徳器	坪	体 - 底部	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤縫隙			8.2+	(10.9)		32.9	
59	41	28	直徳器	坪	體部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層			8.7+			32.4	
60	41	28	直徳器	坪	口縁 - 体部上半	2004013	A-2地区	SD-A230	下盤			5.4	7.7+		32.5	

III 透構と遺物

第7表-2 土器一覧

件番 番号	部類	写真 図版	種 類	部 位	調査 番号	地 区	直 徳	横徳2	面 位	元の遺構 (D・E地区)	法量 (cm)			実測 番号	分 析	
											口 径	器 高	底 幅	重 量(g)		
61	41	28	須磨器	晋	体 - 腹部	2004013	A-2地区	SD-A230	略2層		9.1+	8.8		105		
62	41	27	須磨器	晋	高部	2004013	A-2地区	SD-A230			6.6+	13.2		052		
63	41	28	須磨器	晋	口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230			(21.5)	5.2+		070		
64	41	28	須磨器	晋	口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		(37.3)	13.4+		103	三辺No2	
65	41	27	須磨陶	晋	高部	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		1.3+	6.1		064		
66	42	29	土師器	环	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		(13.5)	3.2+		056		
67	42	29	土師器	环	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		2.3+			055		
68	42	29	土師器	环	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		12.1	3.0	7.5	056		
69	42	29	土師器	萬叶	脚部上半	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		3.9+			088		
70	42	29	土師器	萬叶	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		(37.0)	1.7+		058		
71	42	29	土師器	萬叶	高部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		1.6+	6.3		088		
72	42	29	土師器	萬叶	底部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		1.0+	6.2		053		
73	42	29	土師器	萬叶	口縁 - 体部上半	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		(12.3)	10.9+		062		
74	42	29	土師器	萬叶	口縁 - 体部上半	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		(25.7)	6.8+		275		
75	42	29	土師器	萬叶	直部	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		5.7+	11.0		099		
76	42	29	土師器	萬叶	口縁部	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		(37.4)	6.2+		081		
77	42	29	土製品	棒状土器	一部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		4.4+	幅2.1		15.9+	300	
78	42	30	瓦	平瓦	一部(側面あり)	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		15.6+	幅12.6	厚1.9		705	
79	42	30	瓦	平瓦	一部(側面あり)	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		10.5+	幅12.3	厚1.7		703	
80	42	30	瓦	平瓦	一部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		11.0+	幅11.9	厚2.5		704	
81	42	30	瓦	平瓦	一部	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		7.5+	幅2.1	厚2.0		707	
82	42	31	瓦	平瓦	一部	2004013	A-2地区	SD-A230	下層		11.5+	幅7.5	厚2.6		706	
83	42	31	瓦	平瓦	一部(側面あり)	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		11.1+	幅11.8	厚1.7		701	
84	42	31	瓦	平瓦	一部(側面あり)	2004013	A-2地区	SD-A230	上層		13.2+	幅12.3	厚2.2		708	
85	43	32	須磨器	环II重	天井 - 口縁部	2004013	A-2地区	SD-A229	下層		13.1	3.8		062		
86	43	32	須磨器	环II重	脚部	2004013	A-2地区	SD-A229	下層		(11.7)	3.9	7.9	065		
87	43	32	須磨器	环II重	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A229	上層		(10.1)	2.3+		064		
88	43	32	須磨器	环II重	高部	2004013	A-2地区	SD-A229	上層		1.7+		(11.5)	050		
89	43	32	須磨器	环II重	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A229	中層		9.5	3.3+		060		
90	43	32	須磨器	晋	高 - 腹部	2004013	A-2地区	SD-A229	中層		2.9+		11.8	061		
91	43	32	土師器	环	口縁 - 体部	2004013	A-2地区	SD-A229	下層		(14.6)	3.7+		063		
92	43	32	土師器	萬叶	脚部	2004013	A-2地区	SD-A229	上層		7.3+			054		
93	43	32	土製品	棒状土器	近壳形	2004013	A-2地区	SD-A229	下層		8.0	幅2.1		33.1	298	
94	43	32	土製品	棒状土器	一部(側面あり)	2004013	A-2地区	SD-A229	下層		8.3+	幅2.1		26.1+	306	
95	43	33	須磨器	环II重	天井 - 口縁部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	11.5	3.9		160		
96	43	33	須磨器	环II重	口縁 - 体部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(10.5)	2.4+		164		
97	43	33	須磨器	环II重	口縁 - 体部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	10.5	3.4	7.0	159		
98	43	33	須磨器	环A	口縁 - 底部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(12.9)	3.9	8.1	158		
99	43	33	須磨器	环G	口縁 - 底部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	10.6	3.5	8.3	156		
100	43	33	須磨器	环	口縁 - 体部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(13.4)	3.6+		162		
101	43	33	須磨器	环	口縁 - 体部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(15.8)	3.1+		161		
102	43	33	須磨器	环II重	体 - 口縁部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(14.8)	1.4+		163		
103	43	33	須磨器	环G	口縁部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(5.8)	3.4+		165		
104	43	37	須磨器	晋	口縁 - 体部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	11.2	19.5+		288		
105	43	33	須磨器	晋	体部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58		10.3+		157		
106	43	34	土師器	环	口縁 - 腹部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(14.3)	4.1	(7.7)	168		
107	43	34	土師器	高环	脚部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58		6.1+	(10.4)	167		
108	43	34	土師器	晋	口縁部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(12.8)	3.4+		166		
109	43	34	土師器	晋	上部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	(13.4)	幅8.9		169		
110	43	34	土師器	晋	左横下部	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D58	晋16.9	幅12.4		170		
111	43	35	須磨器	环	口縁 - 体部上半	20040139	A-2地区	SD-A229	D地区	SD-D57	(24.8)	9.7+		172		
112	44	32	須磨器	脚台	脚台	20040133	A-2地区	SD-A229 · A230	上層		2.8+		(11.7)	051		
113	44	32	瓦	平瓦	一部(側面・広面面あり)	20040133	A-2地区	SD-A229 · A230	上層		晋10.8+	幅16.7	厚2.4		712	
114	44	35	須磨器	环A	口縁 - 底部	20040133	A-2地区	SD-A231			11.7	4.1+	9.0	107		
115	44	35	須磨器	环II	口縁 - 底部	20040133	A-2地区	SD-A231			17.2	4.0	13.3	111		
116	44	35	土師器	晋	口縁 - 底部	20040133	A-2地区	SD-A231			(18.1)	3.0+		106		
117	44	35	土製品	棒状土器	一部	20040133	A-2地区	SD-A231			晋3.8+	幅21.2		299		
118	44	35	須磨器	环II角	口縁 - 底部	20040133	A-2地区	SD-A231	D地区	SD-D59		24.8+		155		
119	44	36	須磨器	环II角	近光形	20040133	A-2地区	SD-A232			(12.9)	3.0	(8.2)	108		
120	44	36	須磨器	环II角	近光形	20040133	A-2地区	SD-A232			12.6	4.4	8.4	112		

6. G 地区の調査

第7表-3 土器一覧

件番 番号	試段 番号	写真 図版	種 類	基 準	調査 番号	地 区	直 縁	横縁2	基 底	元の遺構 (D・E地区)	法量 (cm)			実測 面積	分 析		
											口 径	器 高	底 径	重 量 (g)			
121	44	36	直底器	坪A	2004013	A-2地区	SD-A232				(14.9)	4.1	10.4		109		
122	44	36	直底器	坪B	2004013	A-2地区	SD-A232				16.3	4.4	12.5		114		
123	44	36	直底器	田	2004013	A-2地区	SD-A232				20.7	2.8	19.0		110		
124	44	36	直底器	俄	2004013	A-2地区	SD-A232				18.0				113	アリ/ノリ	
125	44	36	直底器	俄	2004013	A-2地区	SD-A232				22.6	6.2+			115		
126	45	37	直底器	坪H裏	2004013	A-2地区	SD-A232		下盤	D地区 SD-D40	(15.4)	2.8+			177		
127	45	37	直底器	坪A	2004013	A-2地区	SD-A232		上盤	D地区 SD-D40	(11.8)	3.1			174		
128	45	37	直底器	坪A	2004013	A-2地区	SD-A232		下盤	D地区 SD-D40	3.2+	(6.4)			176		
129	45	37	直底器	坪	2004013	A-2地区	SD-A232		上盤	D地区 SD-D40	2.9+	7.3			175		
130	45	37	直底器	坪H脇	2004013	A-1地区	SD-A191					2.7+				010	
131	45	37	直底器	坪H裏	2004013	A-1地区	SD-A4				(10.3)	1.5+			003		
132	45	37	直底器	坪B	2004013	A-1地区	SD-A4					2.1+	(10.5)			002	
133	45	37	直底器	便	2004013	A-1地区	SD-A4				(12.5)	3.3+			004		
134	45	37	直底器	便	2004013	A-1地区	SD-A419				(15.6)	3.4+			005		
135	45	37	直底器	16.G	2004013	A-1地区	SD-A86				2.6+	7.4			006		
136	45	37	直底器	坪B	2004013	A-1地区	SD-A86				12.6	3.5	8.8		007		
137	45	37	直底器	便	2004013	A-1地区	SD-A86				(15.4)	3.1+			005		
138	45	37	直底器	田	2004013	A-1地区	SD-A86				(17.8)	1.3+	(15.6)		008		
139	45	37	直底器	便	2004013	A-1地区	SD-A37				(19.2)	3.7+			011		
140	45	37	直底器	便	2004013	A-1地区	SD-A5				(3.6)	幅4.2	厚1.8		007		
141	45	38	直底器	坪A裏	2004013	A-2地区	SD-A250				(15.6)	1.7+			102		
142	46	38	瓦	平瓦	2004013	A-2地区	SD-A260				(65.8)	幅7.2+	厚3.8		110		
143	46	38	瓦	平瓦	2004013	A-2地区	SD-A251				(11.0)	幅6.8+	厚1.7		109		
144	46	38	直底器	便	2004013	D地区	SD-D2				2.7+	2.9			171		
145	46	38	直底器	便	2004013	D地区	SD-D47				3.4+	5.4			173		
146	46	22	直底器	坪H裏	2004013	A-1地区	SB-A6	P-A164			3.8+				022		
147	46	38	直底器	坪H裏	2004013	A-1地区	SB-A6	P-A213	柱組		(13.9)	2.2+			015		
148	46	22	直底器	坪H脇	2004013	A-1地区	SB-A6	P-A154			(11.5)	2.3+			019		
149	46	22	土師器	坪I	2004013	A-1地区	SB-A6	P-A154	上面		(10.9)	1.8+			014		
150	46	22	土師器	坪	2004013	A-1地区	SB-A6	P-A164			(13.6)	3.8	(6.9)		021		
151	46	38	直底器	坪H裏	2004013	D地区	SB-D30	P-D33			(10.9)	2.2+			180		
152	46	22	直底器	便	2004013	D地区	SB-D30	P-D34	柱組		(13.9)	2.2+			178		
153	46	38	土師器	ケズリ津	2004013	D地区	SB-D30	P-A186			(11.4)	幅2.1+	厚0.4	1.2+	013		
154	46	22	直底器	坪H裏	2004013	A-2地区	SB-A4	P-A125			(11.4)	2.7+			017		
155	46	22	直底器	便	2004013	A-1地区	SB-A3	P-A120	柱組		(14.2)	2.2+			016		
156	46	22	直底器	坪G	2004013	A-1地区	SB-A2	P-A59	柱組		2.4+	5.5			012		
157	46	22	土師器	便	2004013	A-1地区	SB-A1	P-A74			(25.1)	3.0+			020		
158	46	38	直底器	坪I	2004013	D地区	P-D64				(11.8)	2.1+			179		
159	46	38	直底器	坪A	2004013	D地区	P-D68				(11.0)	3.7+			181		
160	46	38	土師器	坪	2004013	A-1地区	P-A133				(10.7)	3.1+			018		
161	46	38	土師器	田	2004013	A-2地区	P-A274				(19.0)	1.7+			118		
162	46	38	土師器	便	2004013	A-2地区	P-A301				(16.0)	2.0+			119		
163	46	38	土製品	維持粘土	2004013	A-2地区	P-A269					4.6+				117	
164	47	38	直底器	坪	2004013	A-2地区	水田249								101		
165	47	39	直底器	坪H脇	2004013	A-2地区	白合層								039		
166	47	39	直底器	坪A	2004013	A-1地区	白合層								049		
167	47	39	直底器	坪H	2004013	A-2地区	白合層								122		
168	47	39	直底器	天井	2004013	A-2地区	白合層								121		
169	47	39	直底器	坪H裏	2004013	A-1地区	白合層								044		
170	47	39	直底器	坪B	2004013	A-1地区	白合層								042		
171	47	39	直底器	各種	2004013	A-2地区	白合層								129		
172	47	39	直底器	便	2004013	A-1地区	白合層								046		
173	47	39	直底器	森口	2004013	A-1地区	白合層								045		
174	47	39	灰陶陶器	底	2004013	A-2地区	白合層								124		
175	47	39	陶器	底	2004013	A-1地区	白合層								043		
176	47	39	土師器	坪	2004013	A-2地区	白合層								123		
177	47	39	土師器	田	2004013	A-1地区	白合層								048		
178	47	39	土製品	イイダコ骨	上半	2004013	A-1地区	白合層							047		
179	47	39	土製品	伏状土塊	一部(側部あり)	2004013	A-2地区	白合層							17.8+	305	
180	47	39	土製品	伏状土塊	一部(側部あり)	2004013	A-2地区	白合層							11.7+	297	

III 透構と遺物

第7表-4 土器一覧

件番 番号	器形	写真 図版	種 所	器 横	部 位	調査 番号	地 区	遺 墓	遺構 2	面 容	元の遺構 (D・E地区)	法量 (cm)			実測 面積 (m ²)	分 析
												口 径	幅 高	高 度	重 量	
181	47	39	土製品	棒状土器	一部(側部あり)	2004013	A-2地区	鉢食器				径3.4+	幅3.1.7	10.4+	303	
182	47	39	土製品	棒状土器	一部	2004013	A-2地区	臼食器				径4.2+	幅3.1.7	11.4+	304	
183	47	39	土製品	管状土器	一部(側部あり)	2004013	A-2地区	鉢食器				径2.9+	幅3.1.2	4.6+	125	
184	47	39	土製品	管状土器	完形	2004019	D地区	鉢食器	褐色色斑			径3.6	幅3.1.2	5.1	309	
185	49	41	陶器	坪H舟	体・底部	2004013	B地区	S-K-E5				5.8+			136	
186	49	41	陶器	坪H蓋	天井・口縁部	2004019	E地区	S-K-E45				(13.0)	4.4		268	
187	49	41	陶器	坪H舟	体・底部	2004019	E地区	S-K-E45				3.6+			267	
188	49	41	陶器	坪H	口縁・底部	2004019	E地区	S-K-E45				12.5	3.9	6.3	389	
189	49	41	陶器	坪G	口縁・底部	2004019	E地区	S-K-E45				11.0	4.3		269	
190	49	41	陶器	萬字	体部(半・底部)	2004019	E地区	S-K-E45				5.9+	8.9		272	
191	49	41	陶器	萬	天井・口縁部	2004019	E地区	S-K-E45				32.1	9.8+		257 三辺No3	
192	49	41	土師器	桶	口縁・体部	2004019	E地区	S-K-E45				(14.8)	4.6+		266	
193	49	42	陶器	桶	口縁部	2004019	E地区	S-K-E119				(27.0)	9.9+		270	
194	49	42	瓦	平瓦	一部(側面本引)	2004019	E地区	S-K-E119				171.7+	幅27.0+	厚2.3	T14	
195	49	42	陶器	坪A	口縁・底部	2004019	E地区	S-K-E120				(13.7)	2.7		273	
196	49	42	陶器	坪白蓋	天井・体部	2004019	E地区	S-K-E120				2.5+			274	
197	49	42	陶器	坪A	口縁・底部	2004019	E地区	S-K-E143				(12.6)	4.0		226	
198	49	42	陶器	坪H蓋	体・口縁部	2004019	E地区	S-K-E168				11.0	2.2+		277	
199	49	42	土師器	鉢	口縁部	2004019	E地区	S-K-E168				(22.0)	4.6+		278	
200	50	44	土師器	瓶	口縁部	2004013	B地区	S-D-E2-B3				(13.4)	3.4+		134	
201	50	45	陶器	坪H舟	口縁・体部	2004013	B地区	S-D-B9				(13.2)	2.0+		138	
202	50	43	陶器	坪H蓋	天井・口縁部	2004013	B地区	S-D-B4		中腹		12.2	4.1	2.2	145	
203	50	44	陶器	坪H舟	口縁・体部	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		(12.1)	3.3+		148	
204	50	44	陶器	坪H舟	体部	2004013	B地区	S-D-B4				3.0+			133	
205	50	43	陶器	坪H舟	口縁・底部	2004013	B地区	S-D-B4		最下層		14.1	3.6		149	
206	50	44	陶器	鉢	口縁・体部	2004013	B地区	S-D-B4		最上層		(13.7)	2.6+		146	
207	50	44	陶器	坪B	底部	2004013	B地区	S-D-B4				1.6+		(11.8)	128	
208	50	44	陶器	皿	口縁・体部	2004013	B地区	S-D-B4		最上層		(12.0)	2.0+		154	
209	50	44	陶器	瓶	口縁・底部	2004013	B地区	S-D-B4				(11.2)	4.4+		132	
210	50	44	陶器	萬字	脚部(半)	2004013	B地区	S-D-B4		下腹(底)		2.6+	12.8		130	
211	50	43	陶器	瓶	瓶・底部	2004013	B地区	S-D-B4		最下層		10.9			150	
212	50	43	陶器	瓶	体・底部	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		6.1+			152	
213	50	44	陶器	瓶	口縁部	2004013	B地区	S-D-B4				(8.0)	2.2+		129	
214	50	43	陶器	直口壺	口縁・体部	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		6.7	13.8+		151 三辺No4	
215	50	44	陶器	瓶	口縁・肩部	2004013	B地区	S-D-B4		中腹		17.0	7.3+		126	
216	50	44	陶器	瓶	口縁・底部	2004013	B地区	S-D-B4		中腹		21.0	9.5+		127	
217	50	44	陶器	鉢	口縁部	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		(34.0)	5.6+		144	
218	50	44	土師器	瓶	口縁・体部上半	2004013	B地区	S-D-B4		下腹(底)		(15.0)	6.3+		131 1/2 1/2 No2	
219	50	44	土師器	瓶	口縁部	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		(17.0)	4.0+		153	
220	50	43	陶生土器	瓶	口縁・底部	2004013	B地区	S-D-B4		1/2面倒斜S引		11.9	18.1	4.2	147 1/2 1/2 No4	
221	50	43	土製品	棒状土器	一部	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		84.2+	幅3.1.9	14.8+	307	
222	50	43	土製品	管状土器	完形	2004013	B地区	S-D-B4		上腹		86.3	幅2.3.9		136.5 308	
223	50	45	陶器	瓶	口縁・底部	2004013	B地区	S-D-B42				19.0	7.7		142	
224	50	45	陶器	瓶	口縁・体部	2004013	B地区	S-D-B42				15.8	10.7+		141 三辺No5	
225	50	45	土師器	皿	口縁・底部上半	2004013	B地区	S-D-B42				(20.2)	10.2+		143 1/2 1/2 No3	
226	50	45	土師器	瓶	口縁部	2004013	B地区	S-D-B48				(27.0)	3.1+		139	
227	51	45	陶器	坪B	口縁・底部	2004019	B地区	S-D-E31		E地区 S-D-E7		(19.4)	3.5	(16.0)	153	
228	51	45	陶器	坪H舟	口縁・体部	2004019	B地区	S-D-E32		E地区 S-D-E8		(10.4)	2.4+		182	
229	51	46	陶器	坪H舟	口縁・体部	2004019	E地区	S-D-E12				(10.6)	2.6+		210	
230	51	46	陶器	坪B	天井・口縁部	2004019	E地区	S-D-E12				17.7	2.8		208	
231	51	46	陶器	坪B	天井・口縁部	2004019	E地区	S-D-E12				(20.0)	3.0+		199	
232	51	46	陶器	坪B蓋	天井・口縁部	2004019	E地区	S-D-E12				(17.0)	2.2+		232	
233	51	46	陶器	坪B	高部	2004019	E地区	S-D-E12				2.4+	52.2		186	
234	51	46	陶器	坪B	体・底部	2004019	E地区	S-D-E12				3.3+	(12.1)	219		
235	51	46	陶器	坪B	口縁・底部	2004019	E地区	S-D-E12				16.6	4.4	12.0	214	
236	51	46	陶器	坪B	口縁・底部	2004019	E地区	S-D-E12				(17.2)	4.7	52.4	211 三辺No6	
237	51	46	陶器	坪B	口縁・底部	2004019	E地区	S-D-E12				(17.2)	6.3		203	
238	51	46	陶器	坪B	口縁・底部	2004019	E地区	S-D-E12				(16.7)	3.8	(12.0)	197	
239	51	46	陶器	坪B	口縁・底部	2004019	E地区	S-D-E12				(17.2)	4.7	11.6	207	
240	51	46	陶器	坪A	口縁・底部	2004019	E地区	S-D-E12				(13.7)	3.8		196	

6. G 地区の調査

第7表-5 土器一覧

件番 番号	試験 番号	写真 図版	種 所	器 様	部 位	調査 番号	地 区	遺 墓	遺構 2	面 容	元の遺構 (D・E地区)	法量 (cm)			実測 面積	分 析
												口 径	器 高	底 幅	重 量 (g)	
241	51	47	須磨器	菅	口縁部	2004139	E地区	SD-E12				(11.2)	3.1+		218	
242	51	47	須磨器	菅	口縁部	2004139	E地区	SD-E12				(11.6)	5.5+		209	
243	51	47	須磨器	菅	体部下半・底部	2004139	E地区	SD-E12					10.5+		187	
244	51	47	須磨器	楕	口縁部	2004139	E地区	SD-E12				(22.2)	6.9+		202	
245	51	47	土師器	环	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E12				(12.9)	3.0+	(9.0)	220	
246	51	47	土師器	环	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E12				10.6	2.7+		209	
247	51	47	土師器	环	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E12				(15.2)	4.2+		205	
248	51	47	土師器	环	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E12				(16.5)	4.1	(10.6)	222	
249	51	47	土師器	环	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E12				17.2	3.8+		188	
250	51	47	土師器	环	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E12				(19.8)	3.4+		204	
251	51	47	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E12				(22.7)	15.5+		192	
252	51	47	土製品	イイダコ菅	上半部	2004139	E地区	SD-E12					8.2+		206	
253	51	47	土製品	建土		2004139	E地区	SD-E12				(4.0)	幅2.4+	厚5.2, 3+	21.4	201
254	51	47	土製品	壁土		2004139	E地区	SD-E12				(5.4)	幅4.0+	厚2.8+		221
255	52	48	須磨器	HII裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E16		下盤		(10.8)	3.9		240	
256	52	48	須磨器	HII裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E16		下盤		10.9	3.5		244	
257	52	48	須磨器	HII裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E16		下盤		(11.2)	3.5		245	
258	52	48	須磨器	HII	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16				9.8	3.5	5.5	228	
259	52	48	須磨器	HII	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16		下盤		11.2	3.6		238	
260	52	48	須磨器	HII	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(13.5)	4.0	9.1	250	
261	52	48	須磨器	HII	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16		上盤		14.0	4.4+	11.9	233	
262	52	48	須磨器	HII裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(14.7)	2.4		241	
263	52	48	須磨器	萬円	西・脚部上半	2004139	E地区	SD-E16					5.3+		251	
264	52	48	須磨器	萬円	脚部下半	2004139	E地区	SD-E16		下盤			4.2+	9.5	237	
265	52	49	須磨器	菅	体部下半・底部	2004139	E地区	SD-E16		下盤			8.3+		229	三辺測?
266	52	49	須磨器	菅	脚・底部	2004139	E地区	SD-E16		上盤			7.5+		344	
267	52	49	須磨器	楕	口縁部	2004139	E地区	SD-E16				(11.3)	4.2+		225	
268	52	49	土師器	楕	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16				15.7	5.5+		254	
269	52	49	土師器	楕	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(13.0)	3.1	(6.0)	235	
270	52	49	土師器	楕	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(21.1)	4.4+	(15.0)	236	
271	52	49	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E16		下盤		20.0	12.4+		231	
272	52	50	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E16				14.4	4.0+		252	
273	52	50	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(13.1)	5.0+		243	
274	52	50	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(20.1)	6.5+		242	
275	52	50	土師器	楕	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E16				21.7	5.1+		253	
276	52	50	土師器	楕	脚・体部	2004139	E地区	SD-E16		上盤			15.6+		230	
277	52	50	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E16				(24.0)	8.1+		226	
278	52	50	土師器	楕	口縁・体部上半	2004139	E地区	SD-E16		下盤		(31.4)	7.8+		238	
279	52	49	須磨器	楕	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E16		上盤		(31.7)	7.9+		234	
280	52	50	土師器	楕	右横下部	2004139	E地区	SD-E16					14.6+		227	
281	53	51	須磨器	楕A	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E10				13.9	3.5+	11.2	194	
282	53	51	須磨器	楕B	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E10				(16.1)	4.0	12.7	195	
283	53	51	須磨器	楕	口縁部	2004139	E地区	SD-E10				(26.8)	4.9+		196	
284	53	51	土師器	楕B	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E10				(15.5)	3.7+		185	
285	53	45	須磨器	楕A	体・底部	2004139	E地区	SD-E11					2.5+	10.0	183	
286	53	45	須磨器	楕B	脚部	2004139	E地区	SD-E11					6.2+	(15.6)	190	
287	53	45	土師器	楕	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E11				(16.5)	2.7+		191	
288	53	45	土師器	楕	底部	2004139	E地区	SD-E11					2.6+	(14.5)	184	
289	53	45	土製品	棒状土器	一狀(繩文印)	2004139	E地区	SD-E11				(5.1)	幅2.0	20.8+	310	
290	53	51	須磨器	楕B裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E14				17.6	2.8+		215	
291	53	51	須磨器	楕B裏	体・口縁部	2004139	E地区	SD-E14				(17.5)	1.9+		223	
292	53	51	須磨器	楕裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E14				9.6	2.9		213	
293	53	51	土師器	楕	口縁・底部	2004139	E地区	SD-E14				(18.9)	3.5		224	
294	53	51	土製品	棒状土器	近先形	2004139	E地区	SD-E14				(9.9)	幅2.0	17.7	34.5+	216
295	53	51	須磨器	楕A	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E15				(11.6)	3.1+		217	
296	53	51	土師器	楕	口縁部	2004139	E地区	SD-E15				(23.6)	5.1+		212	
297	53	51	須磨器	楕B	底部	2004139	E地区	SD-E17					2.1+	9.8	246	
298	53	51	須磨器	楕	口縁部	2004139	E地区	SD-E17				(27.2)	8.1+		249	
299	53	51	須磨器	楕B角	口縁・体部	2004139	E地区	SD-E66				(10.8)	2.6+		247	
300	53	51	須磨器	楕B裏	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E68				(15.8)	2.4+		295	

III 造構と遺物

第7表-6 土器一覧

件番 番号	器形	写真 図版	種 類	部 位	調査 番号	地 区	遺 種	遺構2	面 位	元の遺構 (D・E地区)	法量 (cm)			実測 番号	分 析
											口 径	器 高	底 径	重 量(g)	
301	53	53	須磨器	晋	2004139	E地区	SD-E68							248	
302	53	-	瓦	平瓦	一筋(側面あじ)	2004139	E地区	SD-E1							
303	54	53	須磨器	坪山型	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E88						265	
304	54	52	須磨器	坪山型	天井・口縁部	2004139	E地区	SD-E88						264	
305	54	52	須磨器	坪山型	体部・口縁部	2004139	E地区	SD-E88						256	
306	54	52	須磨器	萬叶	底・脚部	2004139	E地区	SD-E88						262	
307	54	52	須磨器	萬叶	底・脚部	2004139	E地区	SD-E88						261	
308	54	52	須磨器	晋	体部・半・底部	2004139	E地区	SD-E88						260	
309	54	52	須磨器	晋	体部下半・西部	2004139	E地区	SD-E88						259	
310	54	52	須磨器	晋	底・底部	2004139	E地区	SD-E88						263	
311	54	52	須磨器	坪山	口縁部	2004139	E地区	SD-E88						258	
312	54	52	瓦	平瓦	一部	2004139	E地区	SD-E88						213	
313	54	42	須磨器	坪山型	口縁・体部	2004139	E地区	SB-E5	P-E129					271	
314	54	53	土器器	柄手	把手	2004139	E地区	SB-E1	P-E104	柱穴				280	
315	54	53	須磨器	坪山	口縁・底部	2004139	E地区	SB-E4	P-E22	柱椎				279	
316	54	53	須磨器	坪山型	体・口縁部	2004139	E地区	SB-E4	P-E138					282	
317	54	53	須磨器	萬叶	脚部下半	2004139	E地区	SB-E4	P-E21	柱椎				285	
318	54	53	須磨器	坪山型	体・口縁部	2004139	E地区	P-E156						284	
319	54	53	須磨器	坪山型	口縁・体部	2004139	E地区	P-E151		圓孔				285	
320	54	53	須磨器	坪	口縁・体部	2004139	E地区	P-E79						290	
321	54	53	須磨器	坪G	口縁・体部	2004139	E地区	P-E152						291	
322	54	53	須磨器	坪	口縁部	2004139	E地区	P-E122						283	
323	54	53	須磨器	坪B	底部	2004139	E地区	P-E135						283	
324	54	53	須磨器	坪	底部	2004139	B地区	P-B48						140	
325	54	53	須磨器	柄	口縁部	2004139	E地区	P-E42						287	
326	54	53	土器器	柄	口縁・体部	2004139	E地区	P-E69		柱椎				289	
327	55	54	須磨器	坪H型	近光形	2004139	E地区	包含層						292	
328	55	54	須磨器	坪山型	体・口縁部	2004139	E地区	包含層						295	
329	55	54	須磨器	坪	口縁・底部	2004139	E地区	包含層						296	
330	55	54	須磨器	坪	口縁・底部	2004139	B地区	包含層						135	
331	55	54	須磨器	坪H型	口縁・体部	2004139	E地区	包含層						293	
332	55	54	須磨器	坪A	体部	2004139	C地区	包含層						137	
333	55	54	須磨器	坪	口縁・体部	2004139	E地区	包含層						294	
334	55	54	須磨器	坪	丸瓦	2004139	B地区	包含層						294	
335	56	55	生土器	鉢	近光形	2004139	C地区	SD-C2		下層(黒灰色)				328	JTO / N65
336	56	55	生土器	皿	底部	2004139	C地区	SD-C2		下層(黒灰色)				317	
337	56	55	須磨器	坪B?	底部	2004139	C地区	包含層						313	
338	56	55	須磨器	晋	底部	2004139	C地区	包含層						314	
339	56	55	須磨器	坪	口縁部	2004139	C地区	包含層		灰色 - 黑灰色				311	
340	56	55	土器器	柄	口縁部	2004139	C地区	包含層						316	
341	56	55	西周	碗	口縁・体部	2004139	C地区	包含層						315	
342	56	55	西周	碗	底部	2004139	C地区	包含層						312	
343	56	55	瓦	平瓦	一部	2004139	C地区	包含層						315	
344	56	56	須磨器	坪H型	天井・口縁部	2004139	F地区	Po-F1						327	
345	56	56	須磨器	坪H型	口縁・体部	2004139	F地区	包含層						319	
346	56	56	須磨器	坪H	体・底部	2004139	F地区	包含層						322	
347	56	56	須磨器	坪B	体・底部	2004139	F地区	包含層						325	
348	56	56	須磨器	坪H	口縁・体部	2004139	F地区	包含層		下部				318	
349	56	56	須磨器	坪	口縁部	2004139	F地区	包含層						321	
350	56	56	須磨器	坪H型	底部	2004139	F地区	包含層						324	
351	56	56	白陶	碗	口縁・体部	2004139	G地区	SD-G1						323	
352	56	56	青磁	碗	口縁・体部	2004139	G地区	SD-G1						326	
353	56	56	白生土器	碗	底部	2004139	G地区	包含層						329	
354	56	56	須磨器	坪B?	天井・口縁部	2007101	G地区	SD-G3						330	
355	56	56	須磨器	坪A	口縁・底部	2007101	G地区	SD-G3						327	
356	56	56	須磨器	坪H	口縁・底部	2007101	G地区	SD-G3						332	
357	56	56	須磨器	坪B?	口縁・底部	2007101	G地区	SD-G3						333	
358	56	56	須磨器	坪H型	天井・口縁部	2007101	G地区	包含層						329	

6. G地区の調査

第8表 石器一覧

報告 番号	図版	写真 図版	種 別	器 種	調査 番号	地 区	遺 構	層 位	法量 (cm)				実測 番号
									長さ	幅	厚み	重量(g)	
S1	48	40	石器	ナイフ形石器	2004013	A-1地区	SK-A29		3.55	1.30	0.51	1.9	S03
S2	48	40	石器	石頭	2004013	A-1地区	SK-A66		2.71	1.48	0.39	1.4	S01
S3	48	40	石製品	不明	2004013	A-1地区	SD-A119		16.20	7.72	4.00	662.6	S07
S4	48	40	石製品	砥石	2004013	A-2地区	SD-A230	下層	4.61	3.07	3.12	61.9	S06
S5	48	1	石製品	勾玉	2004013	A-1地区	SD-A5	底	1.75	1.12	0.63	2.1	S05
S6	48	40	石製品	紡錘車	2004013	A-2地区	SD-A231		3.19	1.41	0.80	4.0	S04
S7	55	54	石器	石頭	2004139	E地区	SK-E45		1.85	1.97	0.36	0.9	S08
S8	55	54	石器	石頭	2004013	B地区	SD-B2		2.30	1.55	0.41	0.9	S02

第9表 金属器一覧

報告 番号	図版	写真 図版	種 别	器 種	調査 番号	地 区	遺 構	層 位	法量 (cm)				実測 番号
									長さ	幅	厚み	重量(g)	
M1	45	40	鉄	板形薄	2004013	A-1地区	SD-A5		7.35	5.8	≤1.5	91.8	M04
M2	46	1	銅	耳環	2004013	A-1地区	P-A207		2.2	2.25	0.7		M01
M3	47	40	鉄	板形薄	2004013	A-2地区	水田面249	水田土壤	5.4	5.0	≤2.7	82.6	M05
M4	53	54	鉄	釘頭	2004139	E地区	SD-E1	経5.1	直径1.1			5.8	E鉄01
M5	56	55	鉄	釘	2004013	C地区	包含層	機械剥削	7.4	1.45	0.85	26.2	M02

IV 自然科学的調査

1. 坂元遺跡IIIにおける放射性炭素年代測定（AMS測定）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

加古川市野口町に所在する坂元遺跡IIIでは飛鳥～奈良時代および中世を中心とする遺構が検出された。本報告では、検出された遺構に関する年代資料を得ることを目的として、遺構から出土した炭化材または覆土の放射性炭素年代測定を行う。

1. 試 料

試料は、坂元遺跡IIIで検出された遺構より出土した炭化材3点と炭化物1点および木材1点の合計5点である。各試料の出土遺構等は、測定結果を呈示した第10表に併記する。

2. 分析方法

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀錠（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NE C Pelletron 95DH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて¹⁴Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIB BYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を校正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。

1. 坂元遺跡IIIにおける放射性炭素年代測定 (AMS測定)

表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3. 結 果

同位体効果による補正を行った測定結果を第10表に示す。№1～№3の3点の炭化材は、それぞれ $1,620 \pm 30$ BP、 $1,440 \pm 30$ BP、 $1,510 \pm 30$ BPという年代を示す。№4の炭化物は、これらより若干古い $1,760 \pm 30$ BPである。№5の木材は、5万年よりも古い1年代が測定された。

各試料の較正暦年代を第11表に示す。測定誤差を σ の年代でみると、№1は5世紀初頭から6世紀前半頃、№2は7世紀前半、№3は6世紀後半の年代を示す。これらはいずれも概ね古墳時代の年代に相当する。№4は3世紀前半から4世紀前半の年代となり、弥生時代から古墳時代にかけての年代となっている。

(矢作健二・石岡智武)

第10表 放射性炭素年代測定結果

No	種類	調査番号	地区	遺構他	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
1	炭化材	2004013	A-1地区	SK-A69	$1,620 \pm 30$	-27.53± 0.56	$1,660 \pm 30$	IAAA-92779
2	炭化材	2004013	B地区	SD-B42	$1,440 \pm 30$	-22.29± 0.81	$1,400 \pm 30$	IAAA-92780
3	炭化材	2004139	E地区	SD-E12	$1,510 \pm 30$	-23.91± 0.52	$1,500 \pm 30$	IAAA-92781
4	炭化物	2004013	C地区	SD-C2	$1,760 \pm 30$	-28.32± 0.69	$1,820 \pm 30$	IAAA-92782
5	木材	2004139	A-2地区	暗灰色シルト	>53, 770	-30.08± 0.42	>53, 767	IAAA-92783

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第11表 暦年較正結果

No	補正年代 BP	暦年較正年代 (cal)					Code No.
		誤差	cal AD	AD/BC	cal BP	相対比	
1	$1,616 \pm 28$	σ	cal AD 405	-	cal AD 439	cal BP 1,545 - 1,511	0.489
		2σ	cal AD 486	-	cal AD 531	cal BP 1,464 - 1,419	0.511
2	$1,440 \pm 29$	σ	cal AD 391	-	cal AD 536	cal BP 1,559 - 1,414	1.000
		2σ	cal AD 602	-	cal AD 645	cal BP 1,348 - 1,305	1.000
3	$1,514 \pm 27$	σ	cal AD 569	-	cal AD 653	cal BP 1,381 - 1,297	1.000
		2σ	cal AD 539	-	cal AD 595	cal BP 1,411 - 1,355	1.000
		σ	cal AD 435	-	cal AD 491	cal BP 1,515 - 1,459	0.164
4	$1,760 \pm 29$	2σ	cal AD 509	-	cal AD 517	cal BP 1,441 - 1,433	0.012
		σ	cal AD 529	-	cal AD 614	cal BP 1,421 - 1,336	0.824
		2σ	cal AD 237	-	cal AD 263	cal BP 1,713 - 1,687	0.331
		σ	cal AD 277	-	cal AD 330	cal BP 1,673 - 1,620	0.669
		2σ	cal AD 171	-	cal AD 192	cal BP 1,779 - 1,758	0.023
		σ	cal AD 211	-	cal AD 383	cal BP 1,739 - 1,567	0.977

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

2. 坂元遺跡III出土土器の胎土分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

加古川市野口町に所在する坂元遺跡IIIでは弥生時代から中世にわたる遺物が出土している。本報告では、出土した土師器および弥生土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、坂元遺跡IIIの各時期における土器の製作事情に關わる資料を作成する。

1. 試 料

試料は、坂元遺跡IIIから出土した土器片5点である。各試料には試料№1～5が付されており、№1、2、4が土師器の裏、№3が土師器の羽釜、№5が弥生土器の鉢とされている。時期についての記載は特にない。各試料の実測№、器種、出土地区、遺構などは一覧表にして第12表に示す。

第12表 胎土分析試料一覧および胎土分類

試料№	報告№	種別	器種	調査番号	出土地区	出土遺構	胎土		実測№
							岩石鉱物	粒径	
1	124	土師器	襷	2004013	A-2地区	SD-A232	K2	vf5	113
2	218	土師器	襷	2004013	B地区	SD-B4	C2	vcs	131
3	225	土師器	羽釜	2004013	B地区	SD-B42	C1	fs	143
4	220	弥生土器	襷	2004013	B地区	SD-B4	K2	fs	147
5	335	弥生土器	鉢	2004013	C地区	流路	K2	ms-fs	328

K2類：堆積岩類、火碎岩類の岩石片を含み、バブル型火山ガラスを比較的多く含む。

C類：花崗岩類の岩石片を比較的多く含む。C1類は角閃石の鉱物片を多く伴い、C2類は黒雲母の鉱物片を多く伴う。

粒径：モードとする粒径を示す。vcs：粗粒砂 ms：中粒砂 fs：細粒砂 vf5：極細粒砂

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

2. 坂元遺跡III出土土器の胎土分析

3. 結 果

観察結果を第13表、第8～10図、写真2・3に示す。鉱物片および岩石片の組成をみると、火山ガラスを比較的多く含む試料№1、4、5と花崗岩類の岩石片を比較的多く含む試料№2、3とに2分される。なお、火山ガラスは、平板状を呈するいわゆるバブル型の形態を示す。これまでに兵庫県下各地における弥生土器・土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成については、共通する特徴を見出し、現在はA類からJ類までの分類が設定されている。そのうち、バブル型火山ガラスを多く含む組成としては、A2類とA4類とが分けられる。A類の特徴は、岩石片の種類構成が主にチャートや頁岩、砂岩などの堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火碎岩類および花崗岩類などの深成岩類の3者からなることであり、これらに加えて火山ガラスも主要な碎屑物として含む組成をA2類とした。A4類は、A2類の組成に加えて、緑色岩、珪化岩、変質岩も比較的多く含まれる組成である。今回の火山ガラスを多く含む試料は、緑色岩、珪化岩、変質岩は認められなかったことから、A2類に近い組成である。ただし、いずれの試料も堆積岩類と凝灰岩または流紋岩・デイサイトを含むが花崗岩類は認められていない。以前に分析を行った坂元遺跡II出土弥生土器の胎土では、今回と同様に火山ガラスを多く含む試料が認められたが、それらの試料には花崗岩類の岩石片は極めて微量しか含まれず、砂粒全体の量が少ない試料によっては、今回の試料と同様に花崗岩類の岩石片が認められない試料もあった。しかしこの場合は、花崗岩類の岩石片は本来含まれているものとして考え、花崗岩類の岩石片が含まれていないものもA2類に分類した。ただし、後述するように、このような花崗岩類の出現傾向は、加古川下流域の地質学的背景を反映していると考えられることから、ここではA類とはせずに新たな分類としてK類とする。なお、今後、火山ガラスを含まない組成も予想されることから、今回の試料の分類をK2類としたい。

花崗岩類の岩石片を多く含む組成はC類として分類している。C類については角閃石を比較的多く伴う組成をC1類とし、黒雲母を比較的多く伴う組成をC2類としている。今回の試料のうち、試料№3はC1類に分類されるが、試料№2は黒雲母が極めて微量含まれるのみであり、C1類かC2類かは明瞭ではない。ただし、鉱物片の組成をみると、斜長石の多い組成の試料№3に比べて試料№2は石英やカリ長石が比較的多いという違いが認められる。このことから、試料№2と試料№3は異なる分類である可能性が高いとして、試料№2はC2類に分類する。

胎土中の砂の粒径組成（第9図）では、各試料のモードの粒径は異なっており、試料№1は極細粒砂、試料№2は極粗粒砂、試料№3および4は細粒砂、試料№5は中粒砂および細粒砂である。それぞれ、モードの粒径を構成している主な碎屑物も異なり、試料№1は火山ガラス、試料№2は花崗岩類の岩石片、試料№3は斜長石と角閃石の鉱物片、試料№4は角閃石の鉱物片と火山ガラス、試料№5は石英の鉱物片である。

各試料の碎屑物・基質・孔隙の割合（第10図）をみると、いずれの試料も碎屑物の割合が20%前後を示し、試料間の有意な差異は認められない。

以上述べた試料の胎土分類をまとめて第12表に併記する。

4. 考 察

坂元遺跡IIIの位置する加古川下流域では、これまでに坂元遺跡II、大中遺跡および溝之口遺跡の各地から出土した弥生土器、土師器および埴輪の胎土分析を行っている。これらの土器の在地性の検討には、加古川下流域の地質学的背景と胎土の鉱物・岩石組成との比較から、その整合性が高いか否かという判断をした。ここで、改めて加古川下流域の地質学的背景について確認してみたい。上述した以前の分析

報告でも述べているように、加古川水系流域に分布する地質については、猪木（1981）や河田ほか（1986）および日本の地質「近畿地方」編集委員会編（1987）などにより概要を知ることができる。さらに、詳細には、尾崎ほか（1995）、尾崎・松浦（1988）、藤田・笠間（1983）、吉川ほか（2005）、栗本ほか（1993）、栗本・牧本（1990）のいずれも5万万分の1スケールの地質図によって確認することができる。これらの地質記載から、加古川水系（すなわち支流も含む）流域のうち、下流域から中流域にかけては、中生代白亜紀の流紋岩やディサイト質の溶岩および火碎岩（凝灰岩）からなる相生層群および有馬層群が分布し、上流域には中生代ジュラ紀のチャート・砂岩・頁岩からなる丹波帯が分布する。また、下流域の相生層群からなる山地の縁辺には、第四紀更新世の河成・海成層である大阪層群からなる丘陵も分布している。この大阪層群には、火山ガラスからなるテフラ層が複数狭在している。

ここまで記載により、今回K2類とした胎土の鉱物・岩石組成と加古川下流域の地質学的背景がよく一致していることがわかる。なお、前述したようにK類とした組成は、堆積岩類や火碎岩類を含みながらも花崗岩類の岩石片は極めて微量かあるいは含まれないことを特徴とした。ここで、これまでの分析例をみると、坂元遺跡IIのA類の試料、さらには大中遺跡や満之口遺跡のA類の試料でも、花崗岩類はいずれも極めて微量か含まれないというK類の組成となっている。上述した地質記載において、加古川水系流域の花崗岩類の分布としては、中生代白亜紀～新生代古第三紀に貫入した播磨花崗岩類があげられるが、その分布は極めて局地的であり、全体的な分布としても西側の市川水系流域や揖保川水系流域に比較的広く分布している。このような地質学的背景と上述した各遺跡におけるK類の出現傾向から、K類は加古川下流域という地域性を示す胎土であると考えられる。したがって、今回の試料では、試料No1、4、3の3点は在地性が高く、坂元遺跡周辺も含めた加古川下流域で作られた可能性があると考えられる。

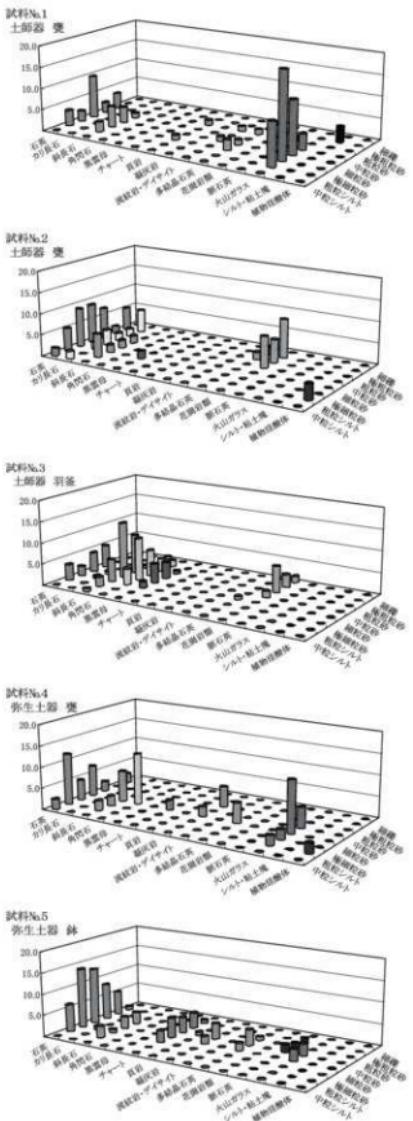
C類の胎土については、加古川下流域の地質学的背景からすれば希な存在である花崗岩類が多く、かつ、堆積岩類も火碎岩類も含まれないことで、明らかに加古川下流域の地質学的背景とは異質である。したがって、C類とされた試料No2と3は、加古川下流域外から搬入された土器である可能性が高いと考えられる。花崗岩類は、近畿地方から中国地方にかけて広く分布することから、現時点ではC類の地域性を推定することはできない。ただし、C1類の鉱物組成からは、由来する地質として角閃石黒雲母花崗閃綠岩が推定され、C2類の鉱物組成からは、黒雲母花崗岩が推定される。ごく大まかな傾向としては、近畿地方に分布する花崗岩類のうち、領家帯を構成する花崗岩類には花崗閃綠岩が多く、山陰帶や山陽帯を構成する花崗岩類には黒雲母花崗岩が含まれている。領家帯の花崗岩類は、紀伊半島北半部を横断し、淡路島中～北部を通り、四国北部を横断する非常に広い分布を示し、山陽帯の花崗岩類は、兵庫県では六甲花崗岩類や上述した播磨花崗岩類などが主な分布である。C類の地域性については、今後、それに分類された土器の考古学調査から推定される地域性を指標としてそこの地域の在地の土器との比較などから検証する必要があると考えられる。

（矢作健二・石岡智武）

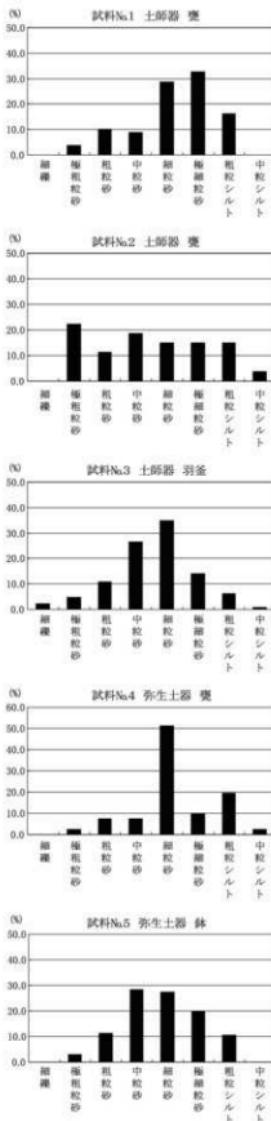
2. 坂元遺跡III出土土器の胎土分析

第13表 薄片観察結果

試料 No.	砂 粒区分	砂粒の種類構成											合計																		
		鉱物片		岩石片			その他																								
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	不透明鉱物	チヤート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・多結晶石英	花崗岩類	脈石英	火山ガラス	シルト・粘土塊	植物片	植物性酸体													
1	砂	細礫												0																	
		極粗粒砂												3																	
		粗粒砂	3						1	1	1	1	1	3																	
		中粒砂	2	1	1												7														
		細粒砂	8	3												10	23														
		極細粒砂	2	4					1	1	2		16	26																	
		粗粒シルト	3	2												8	13														
		中粒シルト												0																	
		基質												307																	
		孔隙												12																	
2	砂	細礫												0																	
		極粗粒砂		3	3												12														
		粗粒砂		1	1												6														
		中粒砂		4	1	1												10													
		細粒砂		5	2	1												8													
		極細粒砂		5	1	1												8													
		粗粒シルト		3	3												2	8													
		中粒シルト		1	1												2														
		基質												179																	
		孔隙												20																	
3	砂	細礫		1												2		3													
		極粗粒砂		2												4		6													
		粗粒砂		1	4	1												14													
		中粒砂		7	12	8	5												34												
		細粒砂		6	1	17	13	6	1																						
		極細粒砂		3	1	7	5	2												18											
		粗粒シルト		5	3												8														
		中粒シルト		1												1															
		基質												429																	
		孔隙												24																	
4	砂	細礫												0																	
		極粗粒砂		1												1															
		粗粒砂												3																	
		中粒砂		1												2		3													
		細粒砂		3	3	5												21													
		極細粒砂		2	1												1		4												
		粗粒シルト		5	1												1		8												
		中粒シルト		1												1															
		基質												173																	
		孔隙												12																	
5	砂	細礫												0																	
		極粗粒砂		1												1		3													
		粗粒砂		6												4		12													
		中粒砂		9	3												4	30													
		細粒砂		14	3												5	29													
		極細粒砂		15	1	1												21													
		粗粒シルト		7	3												11														
		中粒シルト												0																	
		基質												403																	
		孔隙												44																	

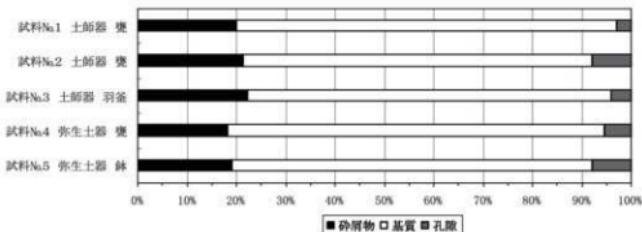


第8図 各粒度階における植物・岩石出現頻度



第9図 胎土中の砂の粒径組成

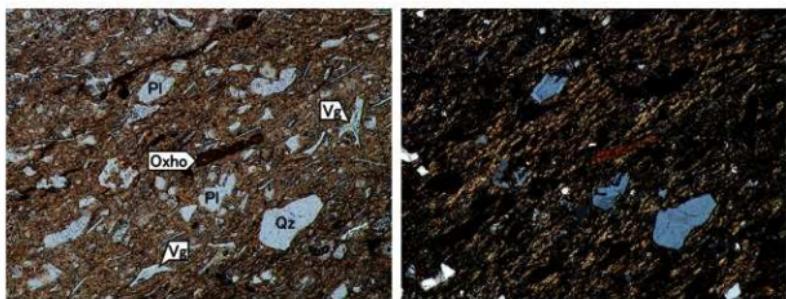
2. 坂元遺跡III出土土器の胎土分析



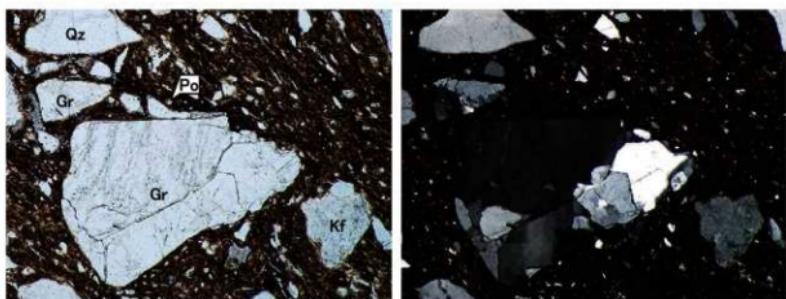
第10図 砕屑物・基質・孔隙の割合

引用文献

- 藤田和夫・笠間太郎, 1963, 神戸地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 115p.
猪木幸男, 1981, 20万分の1地質図幅 姫路・地質調査所.
河田清雄・宮村 学・吉田史郎, 1986, 20万分の1地質図幅 京都及大阪・地質調査所.
東本史雄・牧本 博, 1990, 福知山地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 97p.
東本史雄・松浦浩久・吉川敦之, 1993, 箕面地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 85p.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-, 日本文化財学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質6 近畿地方, 共立出版, 297p.
尾崎正紀・松浦浩久, 1988, 三田地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 93p.
尾崎正紀・東本史雄・原山 誠, 1995, 北条地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 100p.
吉川敦之・東本史雄・青木正博, 2000, 生野地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 産総研地質調査総合センター, 48p.



試料No.1(報告No.124 土師器 壺 2004013 A-2地区 SD-A232)



試料No.2(報告No.218 土師器 壺 2004013 B地区 SD-B4)



試料No.3(報告No.225 土師器 羽釜 2004013 B地区 SD-B42)

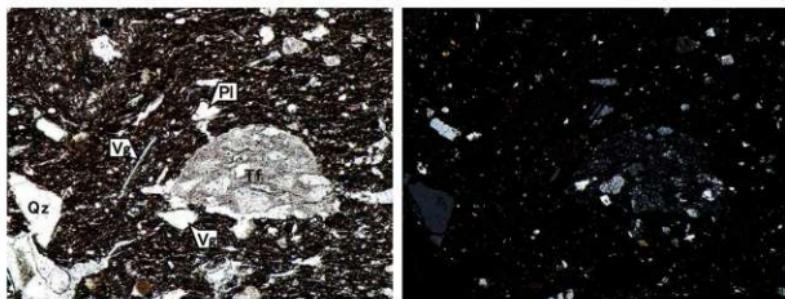
0.5mm

Qz:石英、Kf:カリ長石、Pl:斜長石、Ho:角閃石、Oxho:酸化角閃石、Gr:花崗岩、
Ves:火山ガラス、Po:植物珪藻体。

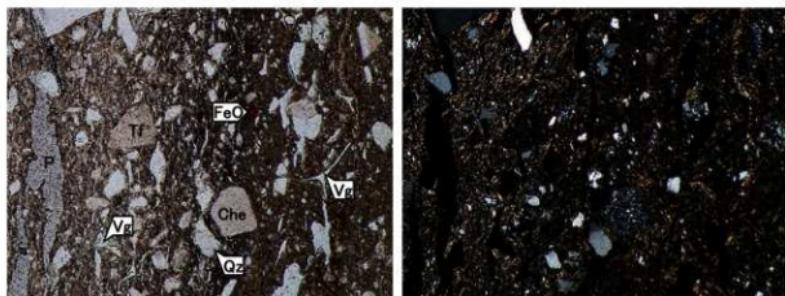
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真2 胎土薄片(1)

2. 坂元遺跡III出土土器の胎土分析



試料No.4(報告No.220 弥生土器 錫 2004013 B地区 SD-B4)



試料No.5(報告No.335 弥生土器 鉢 2004013 C地区 流路)

0.5mm

Qz:石英、Pl:斜長石、Che:チャート、Tf:凝灰岩、Vg:火山ガラス、P:孔隙、FeO:酸化鉄。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真3 胎土薄片 (2)

3. 坂元遺跡III出土須恵器の産地問題

三辻 利一 (大阪大谷大学)

はじめに

エネルギー 分散型の蛍光 X 線分析装置をつかって、全国各地の窯跡出土須恵器の蛍光 X 線スペクトルを比較した結果、K、Ca、Rb、Sr の 4 元素が地域差を示す元素であることが発見された。スペクトルでは K と Ca、Rb と Sr はそれぞれ並んで観測されるので、スペクトル線の高さ（強度）の比較は容易であったのである。この発見が動機となって、胎土分析による須恵器の産地問題の研究が開始された。この発見がなかったら、この研究は進展しなかったであろう。各地の窯跡出土須恵器は K-Ca、Rb-Sr の両分布図上で地域差が目みえる形で表示されることになった。須恵器（粘土）の地域差は岩石に比べて小さいので、この研究を推進する上で、両分布図の果たした役割はきわめて大きい。

窯跡出土須恵器に元素分析によって地域差があることが実証されたが、今度は消費地遺跡出土須恵器の産地をどのようにして推定するかの方法論の開発研究が必要になった。地元に窯跡があれば、当然、地元の製品が消費地遺跡にあることは想定できる。ここから、まず、地元生産地優先の原理が成り立つと考えられた。ただ、須恵器製作技法が朝鮮半島から導入された 5 世紀代には和泉陶邑には 100 基を越える窯跡が発見されているにも関わらず、地方では限られた地域に数基程度の少数の窯跡しか発見されていないという現状から、5 世紀代の地方の古墳から出土する須恵器の産地問題は陶邑からの須恵器の搬入の可能性があるため、地元窯の製品か、陶邑からの搬入品かをどう 2 群間判別分析法が適用された。これまでの研究成果ではこの方法がきわめて有効であることが実証されている。6 世紀代に入ると、地方の須恵器窯跡の数は増えるが、大阪府南部の和泉陶邑に対応して、北部の吹田窯群に 100 基程度の窯跡が発見されている。このため、2 群判別分析法の 2 群の選択は地元窯か、陶邑窯群かという単純な選択だけでは、産地の推定は困難になる。外部生産地として、陶邑と並んで、吹田窯群も選択の対象となる。6 世紀代には産地の選択が少し複雑になる訳である。6 世紀代の須恵器の生産と供給問題は今後の研究課題である。7 世紀代では地方の窯跡はさらに増える。陶邑では依然として 100 基以上の窯跡が発見されており、陶邑での須恵器生産が盛んであったが、地方の窯跡の数が増えるため、地方の窯跡出土須恵器の化学特性の整理が必要になる。現在のところ、この整理はまだ十分には行われていない。したがって、7 世紀代の須恵器の産地推定法は目下、模索段階にある。8 世紀代に入ると、各地にある国工跡の周辺に大規模な須恵器窯跡群が発見されており、ここに製品を主体に生産と供給問題の研究が進む。

今回分析した坂元遺跡III出土須恵器は土器型式から、飛鳥時代、奈良時代のものと推定されている。そこで、7 世紀代の須恵器産地推定法として、まず、地元の産地を優先して、加古川市の神野大林窯群、姫路窯群などとの対応を両分布図上で試みた結果について報告する。

1. 分析法

従来通りであるので、説明を割愛する。分析値は同じ日に測定された岩石標準試料 JG-1 による標準化値で表示した。長年にわたって、大量の土器を分析し、分析値の恒常性を維持する上には、この方法が最適である。

3. 坂元遺跡III出土須恵器の産地問題

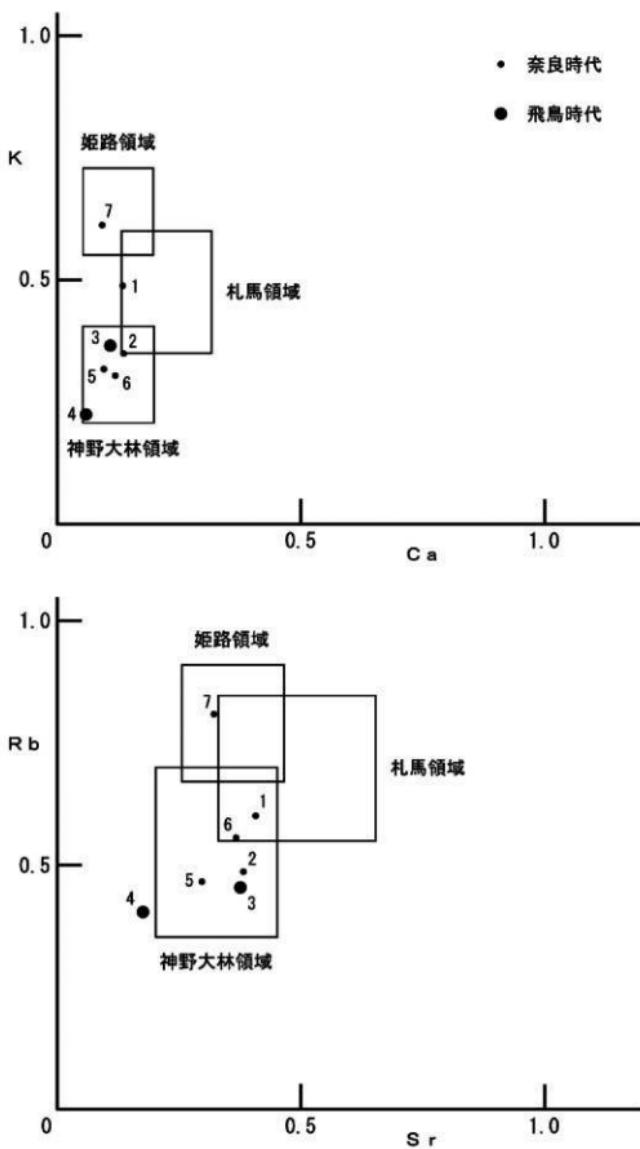
2. 分析結果

分析値は第14表にまとめられている。この結果に基づいて、両分布図を作成し、この分布図上で、試験的に各生産地への対応を試みた。まだ、7世紀代の須恵器産地推定法が出来上がってないからである。第11図にはその結果を示してある。飛鳥時代の2点の須恵器は両分布図で神野大林領域によく対応することが分かる。神野大林窯群が産地の有力候補の一つと考えられる。また、奈良時代の須恵器（№2、5、6）の3点も両分布図で神野大林領域によく対応するので、神野大林窯群が有力な産地候補である。他に産地候補はなければ、神野大林窯群が産地となる。一方、№7の須恵器はK、Rbが他の須恵器に比べて高く、神野領域には対応しない。むしろ、姫路窯群の領域に両分布図でよく対応する。姫路窯群が有力な産地候補であると考えられる。№1の須恵器は神野領域にも、姫路領域にも対応しない。別産地の製品である。土器型式でも異なると見られる。第11図では札馬領域に対応するようみえるが、札馬領域の端に分布しており、札馬窯群が産地であるかどうかは不明である。ここでは産地不明としておく。

このようにして、7世紀代では地元の窯群の中から産地を試験的に求めているのが現状である。今後、7世紀代の窯跡出土須恵器の分析データを整理するとともに、消費地遺跡出土須恵器の分析データも集積することが必要である。それが、須恵器の生産と供給問題の研究を通して、過去を再現する道に通じる。この研究の今後の大きな発展が期待される。

第14表 出土須恵器の分析値

試料 №	報告 №	調査番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	実測 №.
1	51	2004013	A-2地区	SD-A230	須恵器	壺A	奈良	0.489	0.133	2.12	0.602	0.408	0.243	59
2	64	2004013	A-2地区	SD-A230	須恵器	壺	奈良	0.346	0.133	1.70	0.488	0.384	0.147	103
3	191	2004139	E地区	SK-E 45	須恵器	蓋	飛鳥	0.360	0.109	1.92	0.456	0.378	0.173	257
4	214	2004013	B地区	SD-B4	須恵器	壺	飛鳥	0.220	0.062	2.07	0.397	0.178	0.054	151
5	224	2004013	B地区	SD-B42	須恵器	壺	奈良	0.315	0.090	1.70	0.472	0.297	0.111	141
6	236	2004139	E地区	SD-E 12	須恵器	壺B	奈良	0.309	0.123	1.23	0.559	0.365	0.124	211
7	265	2004139	E地区	SD-E 16	須恵器	壺	奈良	0.610	0.089	1.98	0.808	0.318	0.131	229



第11図 出土須恵器の両分布図

4. 坂元遺跡IIIにおける地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができる、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査地区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、坂元遺跡IIIにおける地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査もとづいて地形を分類するとともに、各遺跡の調査地区（A～F地区）で堆積物の観察を実施した。地形分類では、1万分の1空中写真の判読にもとづく調査地区周辺における地形面の区分と、5,000分の1空中写真の判読と現地踏査を通じた調査地区付近における微地形の分類を行った。また、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に発掘調査の成果を加えて、調査地区付近における地形環境の考察を行った。

2. 調査地区周辺の地形分布

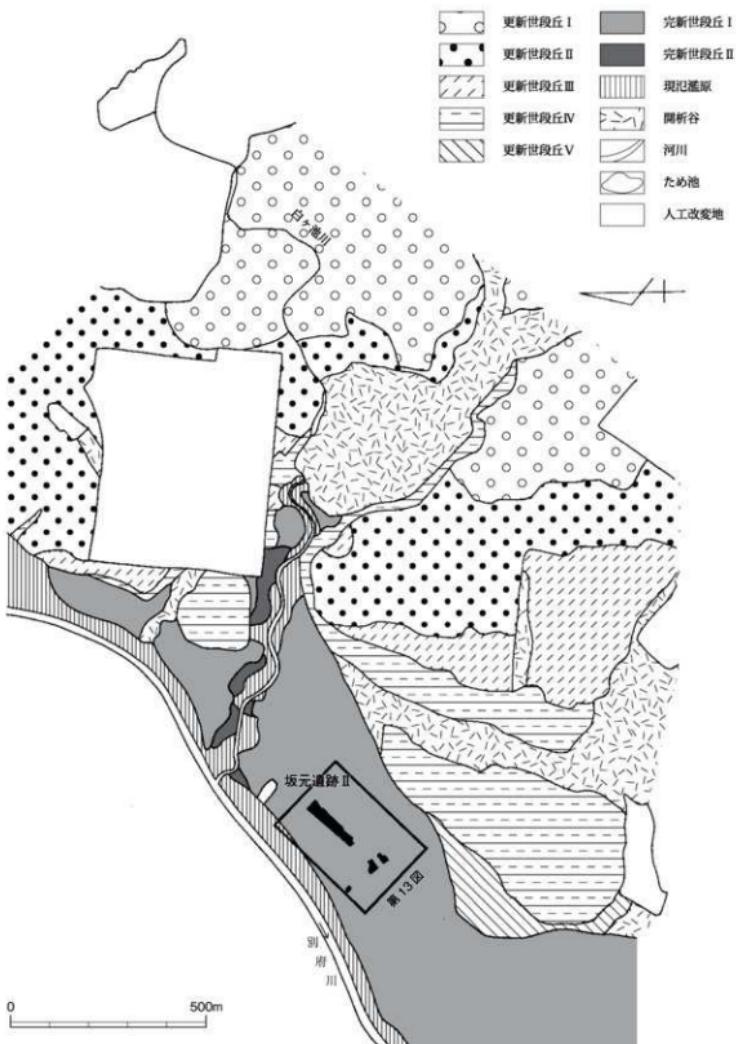
(1) 調査地区周辺の地形面

本遺跡の調査地区は、加古川の分流である別府川の南東岸に位置する。この川は、加古川の下流部に広がる沖積低地の南東部を流れ、加古川の旧河道に沿って概ね南西へ流下した後、流れを南東へ変えて瀬戸内海に注ぎ込む。調査地区的北方約250m地点では、白ヶ池川が別府川に合流する。白ヶ池川は調査地区より約2km北東にあるため池から流れ出し、調査区の北東をおおむね西へ流れる。これらの河川はいずれも小規模である。

白ヶ池川流域から別府川沿いにかけては、印南野台地の北西端にあたる。そこでは、7面の段丘と現氾濫原、開析谷などが認められる（第12図）。中でも、段丘は6面の更新世段丘と2面の完新世段丘に分けられる。本稿では、便宜的に高位の更新世段丘から順に更新世段丘I、II……VI、また完新世段丘については高位のものを完新世段丘I、低位のものを完新世段丘IIと呼ぶ。これらのうち、調査地区は完新世段丘Iに位置する。

白ヶ池川流域と別府川沿いに分布する各地形には、次のような特徴がみられる。

更新世段丘I・II　更新世段丘IとIIは白ヶ池川上～中流部に分布する。白ヶ池川はこれらを横切るように流れる。白ヶ池川流域より東側では、これらの段丘が北西～南東方向に長く延びる。これは印南野台地における段丘分布の特徴であり、そこでは各段丘が南北に向かって階段状に配列する。



第12図 調査地区周辺の地形面区分図

4. 坂元遺跡Ⅲにおける地形環境

更新世段丘Ⅲ～V　更新世段丘ⅢとIVは白ヶ池川中～下流部で認められる。これらは、調査地区の南東を南北方向に延び、それぞれ比高2～3mの段丘崖をもつ。更新世段丘Vは調査地区的南に分布する。この段丘は、北東～南西方向に延び、段丘崖の比高は1～2mである。

完新世段丘I　この段丘は、白ヶ池川の下流部から別府川沿いに発達し、加古川の下流部に広がる沖積低地の南東端を北東～南西方向へ細長く延びる。段丘面は西方へ緩やかに傾斜し、完新世段丘IIとは比高およそ2mの段丘崖で接する。

完新世段丘II　これは白ヶ池川に沿って断続的に認められる。段丘面は、現氾濫原より約50cm高く、白ヶ池川の下流へ行くほど高度を下げる。

現氾濫原　この地形面は、最も低く、河川の氾濫に伴って冠水する危険性が高い。これは白ヶ池川の中～下流部と別府川沿いに分布する。白ヶ池川中～下流部の現氾濫原は現流路に沿って細長く延び、別府川沿いでは低湿なそれが完新世段丘Iの段丘崖下に認められる。

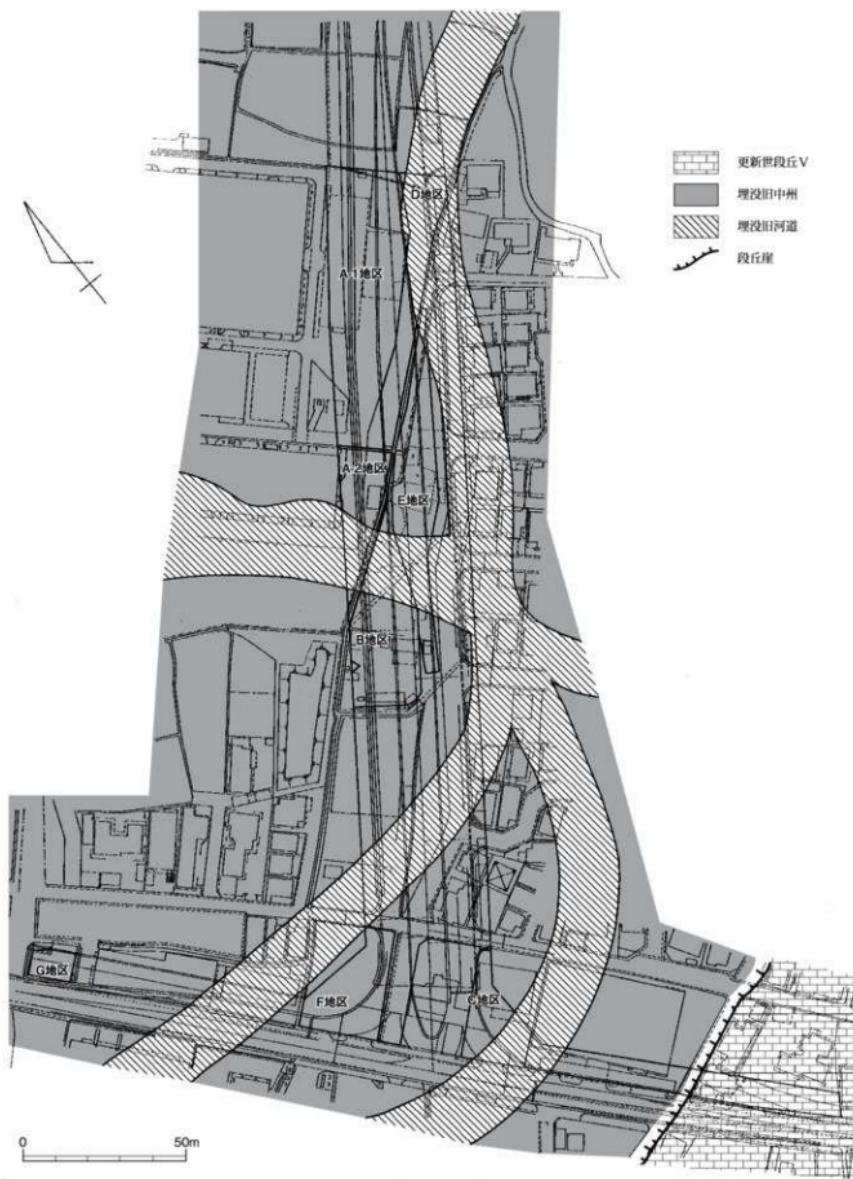
(2) 調査地区付近の微地形

調査地区は完新世段丘Iが比較的よく発達した地点に位置する。ここでは、北東～南北方向に細長く延びる完新世段丘Iが約300mの幅をもつ。南東側には、更新世段丘IVとVがみられ、前者が比高2.5m前後、後者が約1.5mの段丘崖を有する。更新世段丘IVの段丘面からは極めて小規模な河川が完新世段丘I上へと流れ、段丘崖の付近ではこれが地表を穿っている。一方、完新世段丘Iの北西側には別府川に沿う現氾濫原が分布する。これと完新世段丘Iとの境界には、約2～2.5mの段丘崖が認められる。

調査地区が位置する完新世段丘Iは埋没した扇状地が段丘化したものである。そのため、段丘面には埋没旧中州と埋没旧河道が認められる（第13図）。調査地区は3つの埋没旧中州上に分布する。これらは、南西端を除くA地区、B地区南西半部、北西端を除くD地区、およびE地区北東半部が位置するものと、C地区北西部がみられるもの、ならびにF地区が存在するものである。中でも、F地区が位置する埋没旧中州は、そこから南へ50～60mしか発達しておらず、他の埋没旧中州に比べて面積が小さい。

他方、調査地区付近では埋没旧河道が3つ存在すると推定される。一つは、調査地区的北東に隣接する坂元遺跡IIの40区から南北へ延びるもので、D地区北西端からやや屈曲してC地区南東部に至る。二つ目はB地区の南東で一つ目の流路跡から分かれ、F地区的北側へ延びる。これらは加古川の分流跡または白ヶ池川の流路跡にあたる。他の一つは、E地区南西部、B地区北西部、ならびにA地区南西端を南東から北西へ通過するものである。この埋没旧河道は更新世段丘IVから流れる小規模な河川の流路跡と考えられる。

これらのうち、南西端を除くA地区、北東端を除くD地区、およびE地区北東半部に存在する埋没旧中州上には、主に7～8世紀の掘立柱建物跡や土坑が分布し、B地区北西部とA地区南西端を横断する埋没旧河道上からは、12世紀ころの水田跡が検出されている。また、C地区南東部の埋没旧河道上では弥生時代後期と12～13世紀初頭の溝跡が確認され、F地区的埋没旧中州上には中世の溝跡や近世の西国街道跡がみられる。



第13図 調査地区付近の微地形

3. 調査地区における堆積物の特徴

(1) A・B・D・E 地区の堆積物

これらの調査地区における遺構検出面以深には、大きくみて砂礫とそれを覆う洪水堆積物が認められる（第14図・第15図・第16図）。これらのうち、砂礫は扇状地堆積物に相当する。これはさらに細分され、最下位で観察される橙灰色の砂礫（第14図の堆積物16と第15図の堆積物14）は主に径4～12cmの大きい亜角～亜円礫からなる。その上位に位置する砂礫（第14図の堆積物14・15、第15図の堆積物10・11・13、および第16図の堆積物13・15・17・19・21）は、橙灰～灰色を呈し、径1～6cmの亜角～亜円礫を主体とする。これらの間には、灰～青灰色の砂やシルト質砂（第15図の堆積物9・12と第16図の堆積物14・16・18・20）がレンズ状にはさまれる。南西端を除くA地区では、砂礫の上面が1.5～2m高く、旧中州が形づくられている。

A地区南西端では、こうした砂礫を切って旧河道が認められる。これは更新世段丘IVから流下する小規模な河川の流路跡である。旧河道の幅は19.5m以上あり、約1.6mの深さを有する。流路の形成期には、河川の流量がかなり多かったと推定される。この旧河道は灰色のシルト質砂（第16図の堆積物12）、暗灰～灰白色のシルト（第16図の堆積物8・10・11）と砂質シルト（第16図の堆積物9）、および橙色の砂礫（第16図の堆積物7）などによって埋積されている。

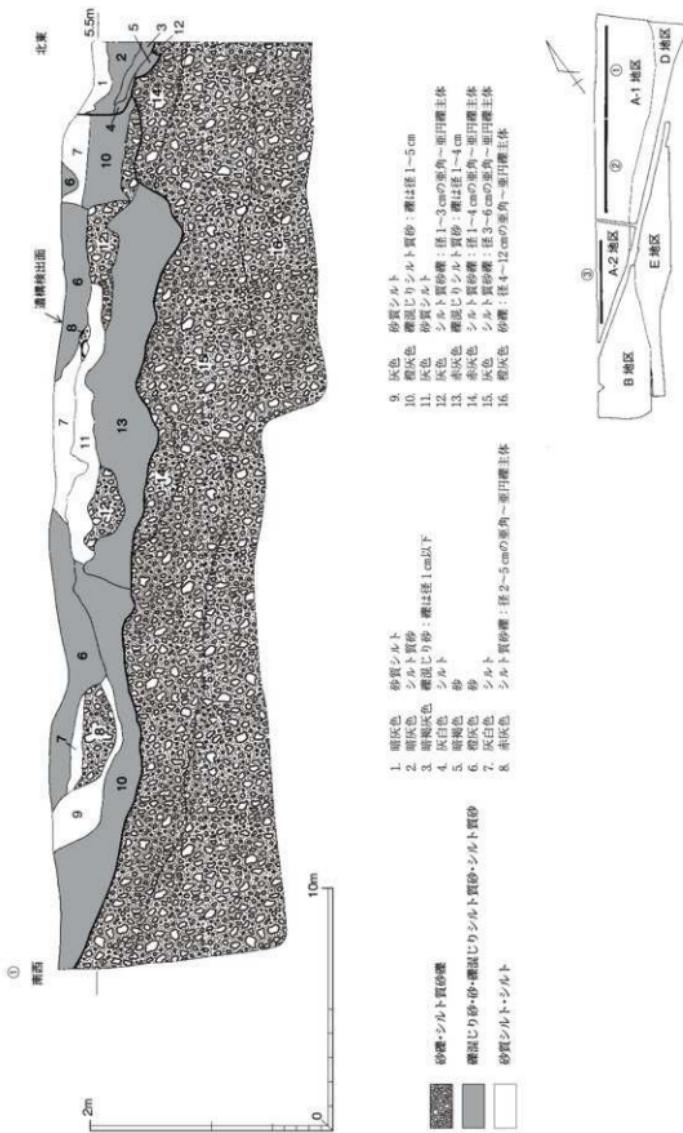
砂礫を覆う洪水堆積物は最大1mの厚さで旧中州と旧河道を被覆する。これは橙灰～灰色の砂礫とシルト質砂礫（第14図の堆積物8・12、第15図の堆積物4・6、および第16図の堆積物5）、橙灰～褐灰色の砂とシルト質砂（第14図の堆積物6・10・13、第15図の堆積物3・7、および第16図の堆積物2・4）、ならびに灰～灰白色的シルト（第14図の堆積物7・9・11、第4図の堆積物2・5、および第16図の堆積物1・3）などに細分される。坂元遺跡IIの40区では、こうした洪水堆積物の最上部に黒灰色のシルトが認められ、その放射性炭素年代測定値は10,470±50yrBP (IAAA-80858) を示す¹⁾。

埋没旧中州上では、遺構検出面より上位の堆積物が基本的に暗灰黄色のシルトと現耕土である。暗灰黄色のシルトは7～8世紀をはじめとする遺物を含み、その下面では同時期の掘立柱建物跡や土坑などが検出されている。一方、A地区南西端の埋没旧河道上では、下位から褐灰色のシルト、灰黄褐色の砂質シルト、黄灰色の砂質シルト、オリーブ褐色のシルト質砂、ならびに現耕土がみられる。現耕土を除く堆積物は、厚さ10cm前後と薄く、更新世段丘IVから流れる小規模な河川の洪水によってもたらされたと考えられる。これらのうち褐灰色のシルト、灰黄褐色の砂質シルト、および黄灰色の砂質シルトは12世紀の水田土壤に該当する。

(2) C 地区の堆積物

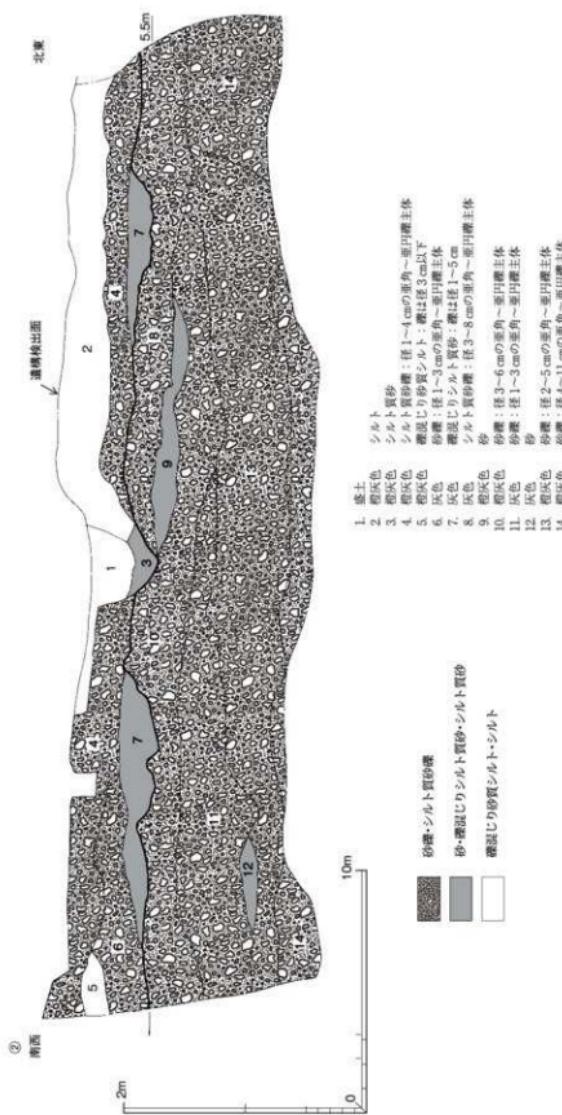
ここでの遺構検出面以深には、A・B・D・E地区と同様に砂礫とその上にのる細粒堆積物が認められる（第17図）。砂礫（第17図上段の堆積物13・14）は、扇状地堆積物に該当し、A・B・D・E地区から連続するものである。これは、暗褐灰～褐灰色を呈し、径1～3cmの亜角～亜円礫を主体とする。

その上位に位置する細粒堆積物は、5つに細分され、黒褐色の砂（同堆積物12）や灰色のシルト質砂（同堆積物10）、灰白～灰色のシルト（同堆積物8・9・11）からなる。全体の厚さは約1.2mで、この細粒堆積物によって扇状地は埋没している。C地区南東部では、この細粒堆積物を切る旧河道が認められる。ただし、トレンチ断面では旧河道の一部しか観察できないため詳細は不明である。この旧河道は黒灰色と黒褐色のシルト（同堆積物6・7）によって埋積されている。

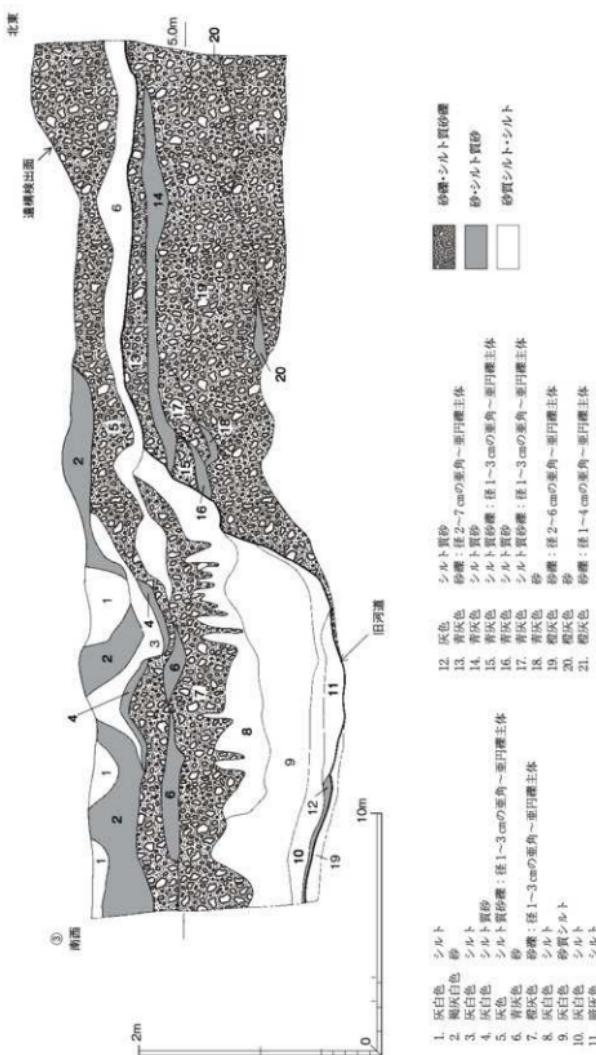


第14図 A-1地区北半部トレーン断面図

4. 坂元遺跡IIIにおける地形環境



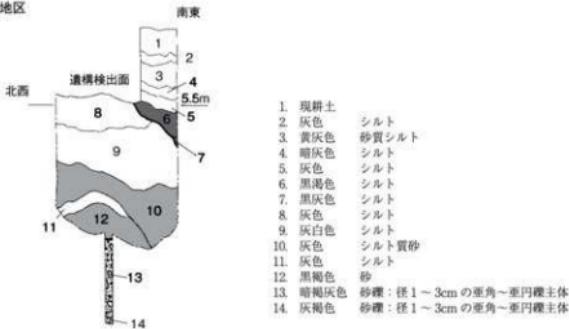
第15図 A-1地区南半部トレーニング断面図



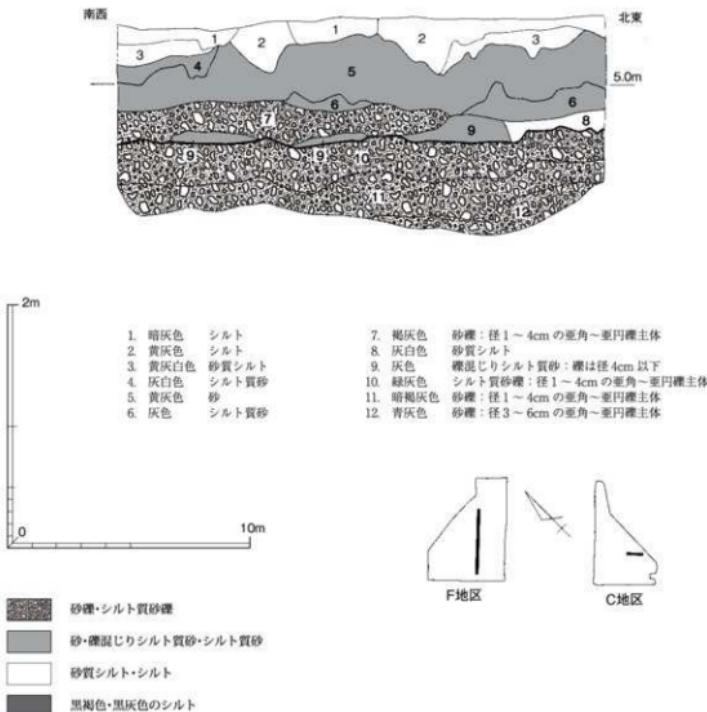
第16図 A-2地区トレンチ断面図

4. 坂元遺跡IIIにおける地形環境

C地区



F地区



第17図 C地区・F地区 トレンチ断面図

遺構検出面より上位には、下位から灰色のシルト（同堆積物5）、暗灰色のシルト（同堆積物4）、黃灰色の砂質シルト（同堆積物3）、灰色のシルト（同堆積物2）、および現耕土（同堆積物1）がみられる。これらのうち、灰色のシルト（同堆積物5）は弥生時代後期や12～13世紀初頭などの遺物を含み、その下面からは同時期の溝跡が検出されている。

(3) F 地区の堆積物

この調査地区における遺構検出面以深には、砂礫とそれを覆う洪水堆積物がみられる（第17図）。この層序はA・B・D・E地区やC地区と同じ傾向である。砂礫は、扇状地の旧中州堆積物に相当し、暗褐灰や青灰色の砂礫（第17図下段の堆積物11・12）と緑灰色のシルト質砂礫（同堆積物10）に細分される。最下位で観察される砂礫は、径3～6cmの比較的大きい亜角～亜円礫を主体とし、その上位にみられる砂礫とシルト質砂礫はそれより細かい径1～4cmの礫を多く含む。

これらを被覆する堆積物は褐灰色の砂礫（同堆積物7）、黄褐～灰色の砂やシルト質砂（同堆積物5・6・9）、灰白～黄灰白色の砂質シルト、ならびに暗灰～黄灰色のシルト（同堆積物1・2・3・8）に細分される。これらは約1mの厚さで旧中州を埋没させている。遺構検出面以浅の堆積物は下位から灰色のシルト、黄褐色の砂質シルト（旧耕土）、および現耕土である。これらのうち灰色のシルトには、中世の遺物が混入し、その下面で溝跡などの遺構が検出されている。

4. 調査地区付近における地形環境の変遷

これまで述べてきた事柄からみて、調査地区付近の地形環境は次のように考察される。

ステージ1　調査地区付近では、加古川の分流や白ヶ池川によって砂礫が堆積した。これに伴って、扇状地が発達し、中州が3つ程度形成された。これらのうち、F地区が位置する中州は面積の小さいものであった。

ステージ2　扇状地の形成後、更新世段丘IVから流れる小規模な河川の流量が増加し、A地区南西端とB地区北西部を南東～北西方向に通過する流路が形成された。流路には、その後シルトや砂質シルトなどの細粒堆積物が洪水に伴って順次堆積し、さらにそれは砂礫によってほぼ埋積されるに至った。

ステージ3　流路の埋積からおよそ10,500年前にかけて、砂礫や砂、シルトなどが数度の洪水によって扇状地上にもたらされた。そのため、旧中州と旧河道は約1mの深さに埋没した。

ステージ4　約10,500年前以降、調査地区付近では加古川や白ヶ池川の下刻による段丘化がみられた。その結果、北東～南西方向に狭長な完新世段丘Iが形成された。これは繩文海進頂期直後の海退に伴ってなされたと考えられている²¹⁾。

ステージ5　その後、白ヶ池川沿いでは扇状地の形成と埋没が再び行われた。これは繩文時代晚期から約2,240年前までのある時期に段丘化し、白ヶ池川に沿って完新世段丘IIが形成された²²⁾。この時期、調査区付近の完新世段丘Iでは洪水のほとんど及ばない安定した環境が続いていた。

ステージ6　弥生時代後期になると、ほぼ安定した環境下であった調査地区付近で人間が活動するようになり、C地区南東部では埋没旧河道上に溝がつくられた。また、7～8世紀には南西端を除くA地区、北東端を除くD地区、およびE地区北東半部の埋没旧中州上で掘立柱建物が建てられた。

ステージ7　12世紀およびそれ以前にA地区南西端の埋没旧河道上には、更新世段丘IVから流れる小規模な河川の洪水が数度及んだ。これによって砂質シルトやシルトなどが堆積した。12世紀には、埋没旧河道上に人間がこれらの堆積物を土壤にして水田稲作を営んだ。なおF地区では、埋没旧中州の面

4. 坂元遺跡Ⅲにおける地形環境

積が小さいため、顯著な人間生活がみられず、中世には溝、近世には道がつくられた。

5. おわりに

本遺跡の調査地区は加古川下流部に広がる冲積低地の完新世段丘Ⅰに位置する。この完新世段丘Ⅰは、北東- 南西方向へ細長く延び、南東では更新世段丘、また北西では別府川が流れる現氾濫原に隣接している。これは、約10,500年前までに形成・埋没した扇状地がその後段丘化したもので、段丘面には、埋没した旧中州と旧河道が認められる。段丘化の時期は縄文海進頂期直後の海退期であると推定され、完新世段丘Ⅰではその後洪水のほとんど発生しない安定した環境が続いた。調査地区では、このような環境下で人間が弥生時代後期から微地形を利用した活動を行った。

埋没旧中州上は、わずかに高いため、排水の便がよく高燥である。そのため、南西端を除くA地区、B地区南西部、北西端を除くD地区、およびE地区北東半部の埋没旧中州上は居住域となり、7~8世紀には掘立柱建物が建てられた。他方、埋没旧河道上は埋没旧中州上に比べてやや低いため居住域や墓域にならず、C地区南東部のそれでは弥生時代後期と12~13世紀初頭に溝がつくられた。また、E地区南西部からA地区南西端を南東- 北西方向に延びる埋没旧河道は更新世段丘Ⅳからの水流によって形成された流路跡で、これに位置するA地区南西端では12世紀に水田稲作が営まれた。以上のように、本遺跡の調査地区では人間生活と地形環境とが密接に係わり合ったのである。

注

- 1) 拙稿「坂元遺跡の地形環境」、兵庫県教育委員会 坂元遺跡Ⅱ 所収、2009年。
- 2) 前掲1)
- 3) 前掲1)

V 結 語

1. 遺構・遺物の時期と概要

今回の調査で出土した遺物には、後期旧石器時代から中世にわたる幅広い年代に属するものが見られるが、遺跡の主体をなす遺構は、奈良時代を中心とする時期に属する。以下では、調査で認められた各時代の遺構・遺物について総覧し、今次調査地における坂元遺跡についてのまとめとしたい。

【後期旧石器時代】

今回出土したナイフ形石器は、横長剥片を素材としており、近畿・瀬戸内地域に典型的に発達する横長剥片剥離技術を基盤とする文化に属する。しかし単独出土の遊離資料であるため、編年的位置について言及することはできない。従前の調査においても、後期旧石器時代の遺物は散発的に出土していることから、坂元遺跡において当該期の集落が成立していた可能性は高いが、長期にわたる居住・開墾等により、この時代の遺構等は相当程度削平を受けたと考えられる。

【縄文時代】

今回の調査で出土したのは、石器のみである。その形態から、一部のものは縄文時代晩期に属すると考えられる。従前の調査においても、この時期の遺物が広い範囲で出土していることから、少なくとも縄文時代晩期の遺跡については、坂元遺跡の領域内に存在したものと考えてよかろう。残念ながら従前の調査を含めても、縄文時代遺跡について復元像を描くに足る資料は得られておらず、後期旧石器時代の遺跡同様、削平の影響が大きいものと思われる。

【弥生時代】

坂元遺跡の北部における従前の調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居群および方形周溝墓群等が検出されているが、今回の調査地では、弥生時代の遺構・遺物ともにきわめて希薄であった。遊離資料としては、弥生時代中期に属する可能性がある石器が見られるほか、遺構に伴うものとしては、わずかに S D - C 2 の下層および S D - B 4 において、弥生時代後期の遺物が出土したにとどまる。この両者は、同一の河道である可能性がある。S D - C 2 は、その規模や堆積状況から旧河道と考えられるが、調査範囲がごく狭いものであったため、河道の成立時期や人為的作成の有無等について検討することは困難である。遺構・遺物の状況から、今回の調査地周辺には、弥生時代の中核的な遺構群は存在しなかったものと考えられる。

【古墳時代～奈良時代】

今回の調査地では、飛鳥時代～奈良時代の遺構・遺物が主体を占めた。

S D - A 229・S D - B 4・S K - B 7 をはじめとする複数の遺構から、古墳時代後期（6世紀後半～末）に属する須恵器が出土しているが、全体から見るとその比率は高くない。

飛鳥時代（7世紀代）の遺物は増加傾向を示し、多くの溝、土坑から出土している（S D - A 230・S K - E 45等）が、二次的な流入状態での出土も多い。

掘立柱建物跡群は S B - A 6 を始めとして須恵器杯 H を出土した建物跡が中核を占めることから、この時期に始まり、奈良時代にかけて形成されたものであろう。

今回の調査地で検出された掘立柱建物跡群を見ると、3間×3間あるいは2間×2間、床面積では10m²から16m²程度と、小規模なものが多い。遺構の状況から見ても、柱穴の配置が不規則であるものや、3間×3間でも四隅の柱穴のみが大きく、他はごく小さいという例（S B - A 1・S B - D 4等）も見られる。また、S B - A 1 で床面に焼土が見られたことから、これら小規模な掘立柱建物跡は、いずれ

も床をもたない構造であった可能性が指摘しうる。以上のような点から、今回検出された小型の掘立柱建物跡が、工房のような日常的居住以外の機能を担っていた可能性を考慮しておきたい。

これに対し旧河道を除く溝の多く、特にA・D地区北部、B・E地区北部に集中する溝群は、奈良時代（8世紀代）を中心としており、一部の掘立柱建物跡を切ることから、掘立柱建物跡群の成立よりもやや遅れて形成された可能性が考慮される。

土坑も、その多くは奈良時代を中心として形成されたものである。

【平安時代以降】

今回の調査区では、平安時代の遺物はきわめて希薄となり、遺構は検出されていない。次に遺構・遺物が明瞭になるのは、平安時代末～鎌倉時代である。この時期のものとしては、A地区の水田249から出土した東播系須恵器鉢が挙げられる。平安時代末～鎌倉時代に属する遺物は広い範囲で見られるものの、量的にはごく希薄であり、明瞭な遺構も見られないことから、広い範囲で耕地化が進行したものと思われる。

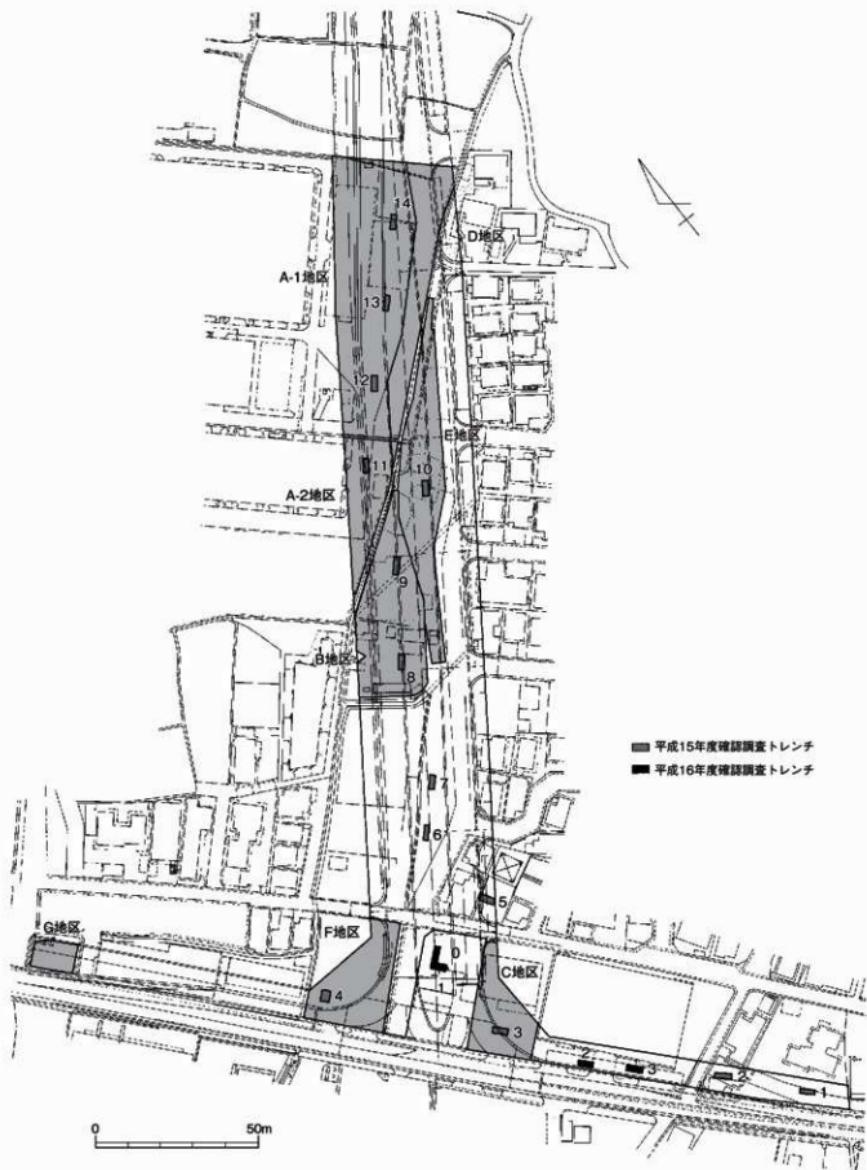
なお、F地区北部で検出された旧西国街道の側溝と見られるSD-F7は、西国街道の成立時期（17世紀）に属する可能性がある。

2. おわりに

坂元遺跡は、その南縁で古代山陽道と接する位置にある。坂元遺跡の南東には賀古駅家に比定される古大内遺跡があり、また、山陽道を中心として古代寺院も多く成立する。今回検出された飛鳥～奈良時代を中心とする遺構群が、このような歴史的環境と無関係であったとは考えにくい。むしろ、古代山陽道・賀古駅家との関連の中で成立した可能性が高いだろう。当該時期の坂元遺跡が担った機能については、今回の調査で得られた資料のみで判断することは難しく、今後に残された課題であると言えよう。

図 版

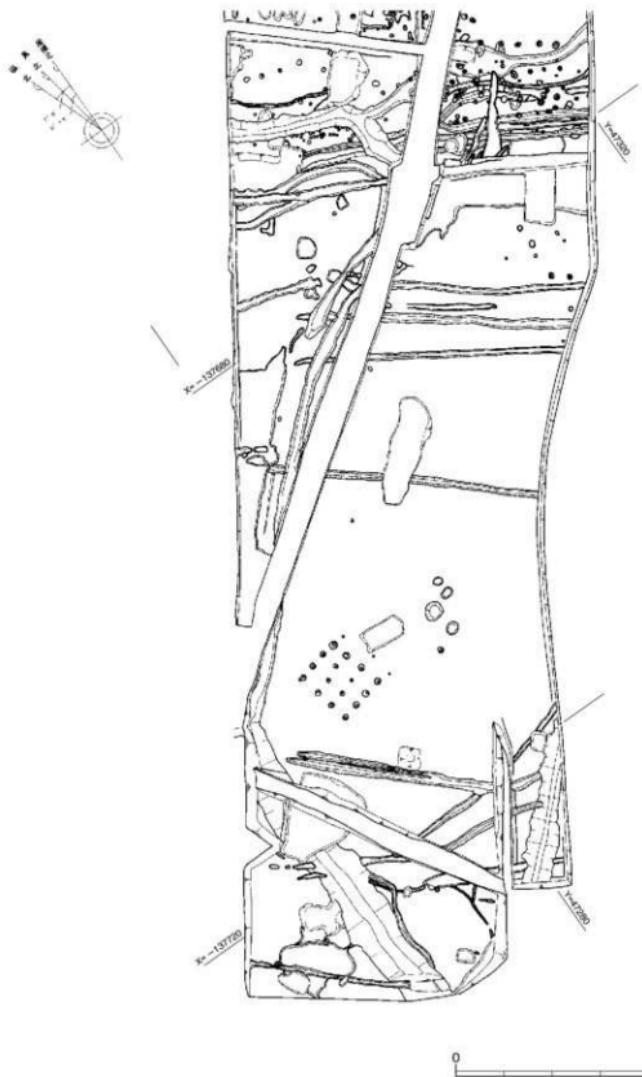
図版1 確認調査トレーニ位置および本発掘調査位置



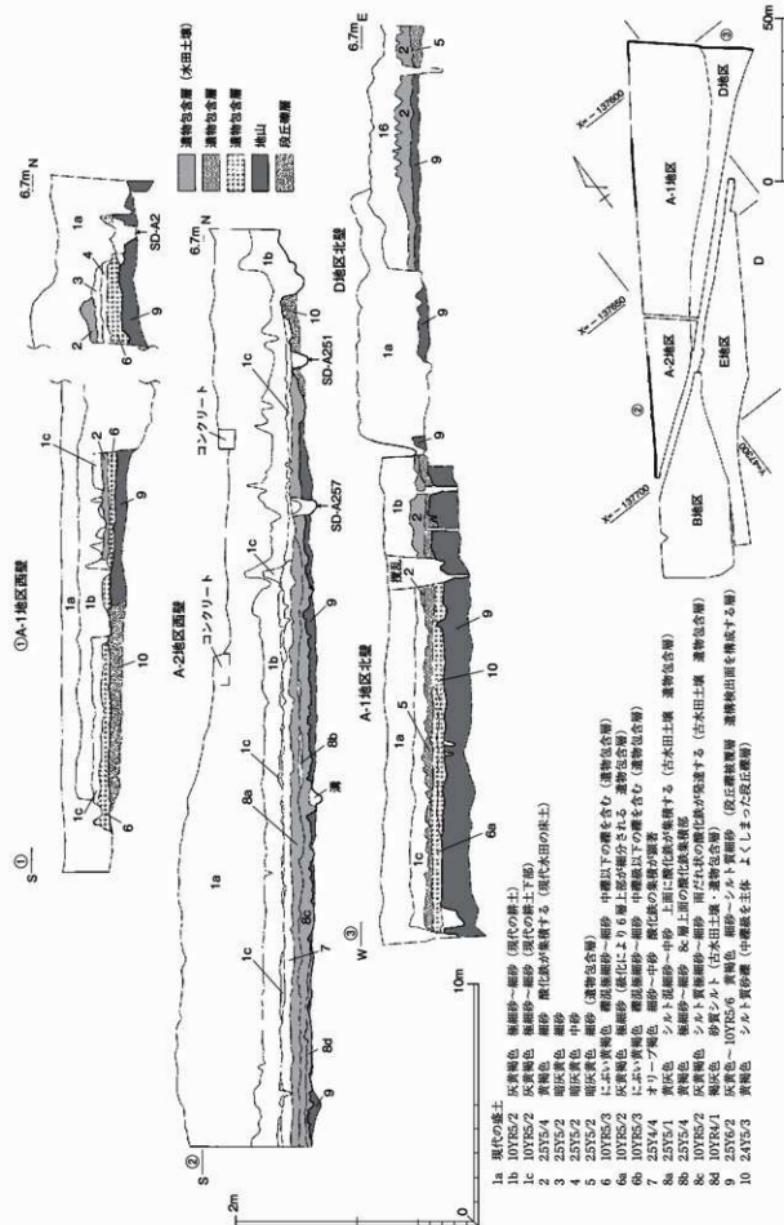
図版2 A・B・D・E地区遺構全体図(1)



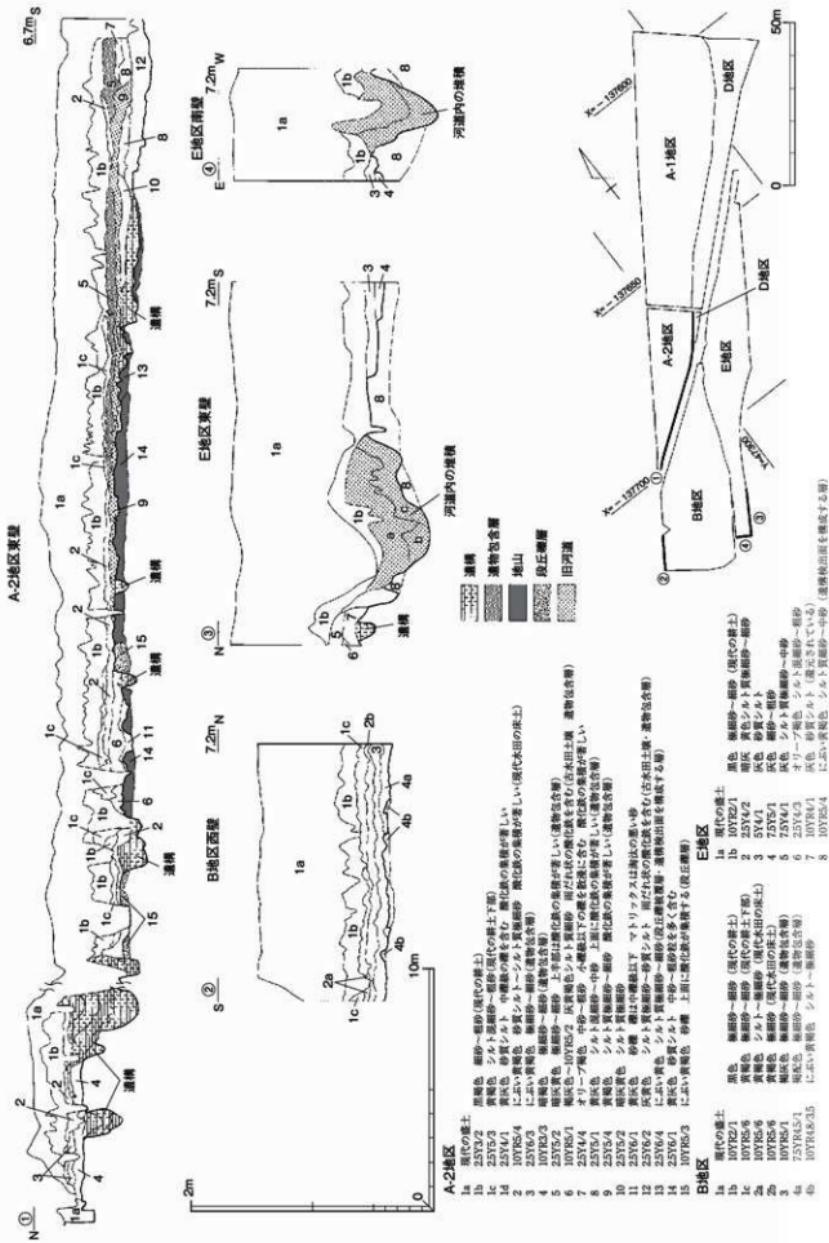
図版3 A・B・D・E地区遺構全体図(2)



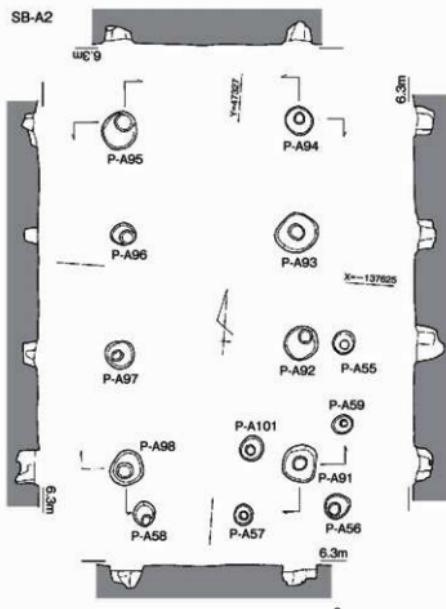
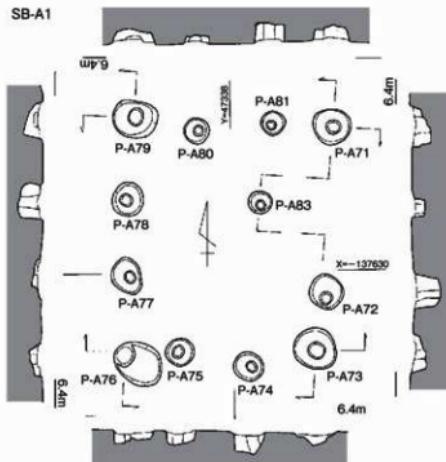
図版4 A・D地区地層断面



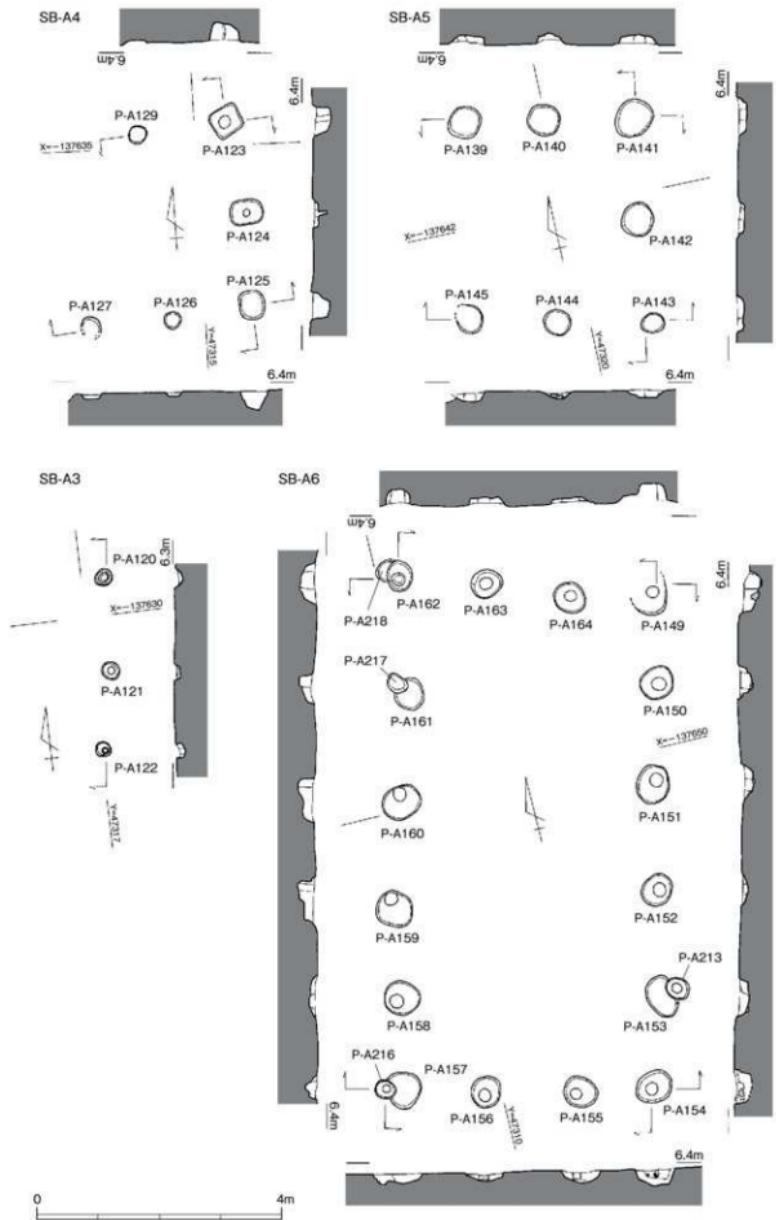
図版5 A-2・B・E地区地層断面



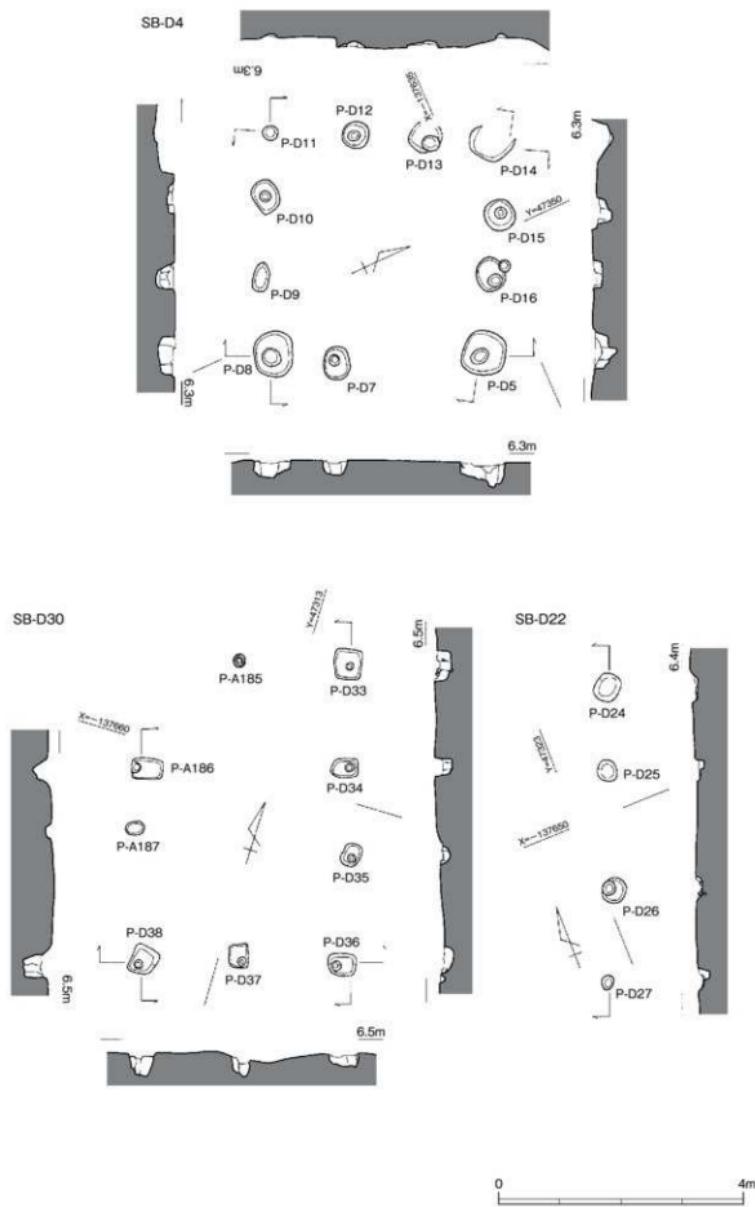
図版6 掘立柱建物跡A1・2



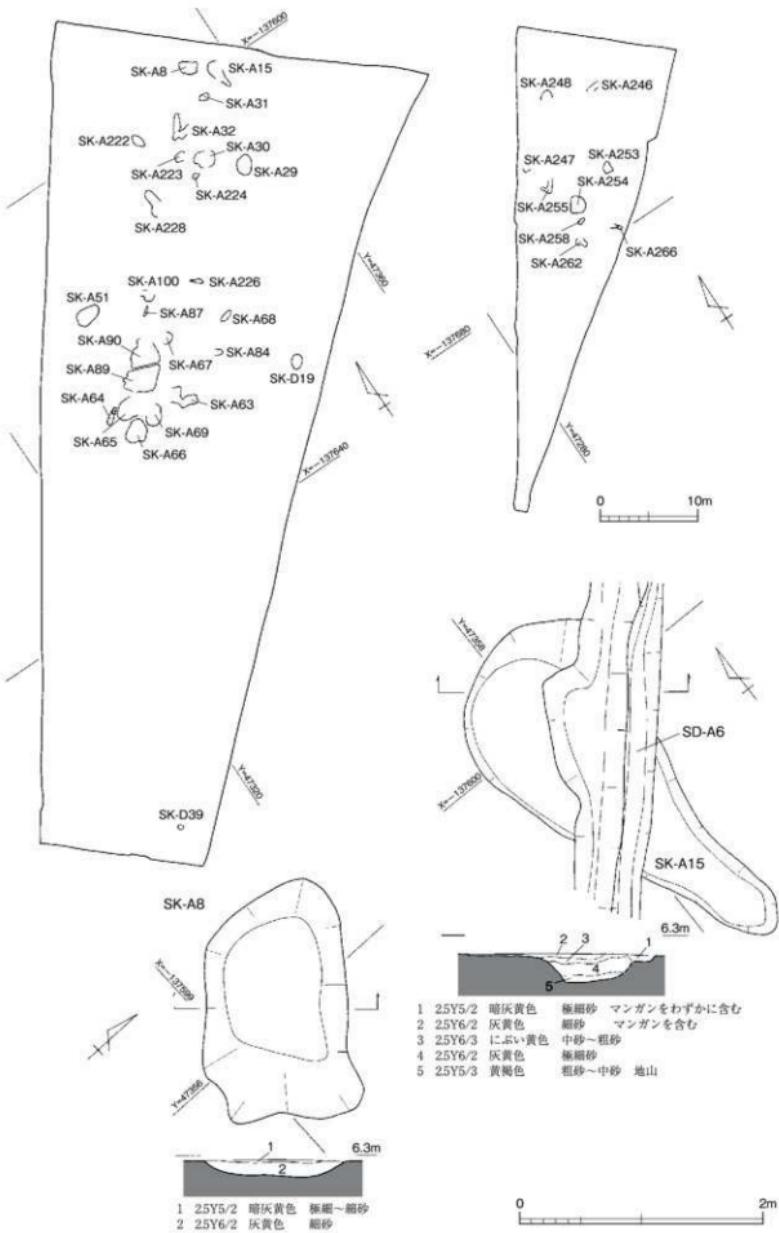
図版7 掘立柱建物跡A3~A6



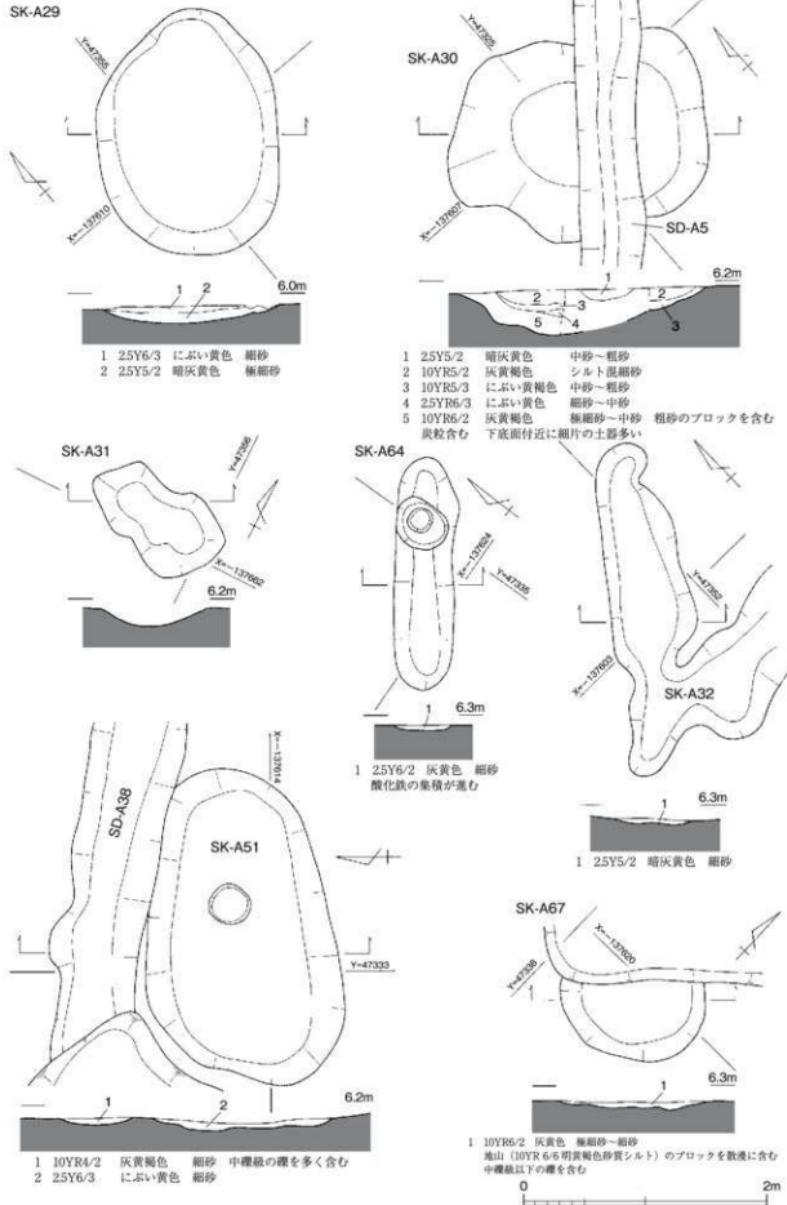
図版8 掘立柱建物跡D4・D30・D22



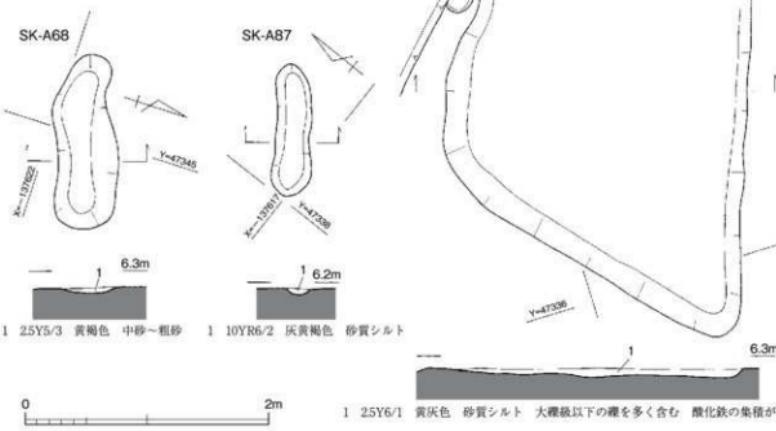
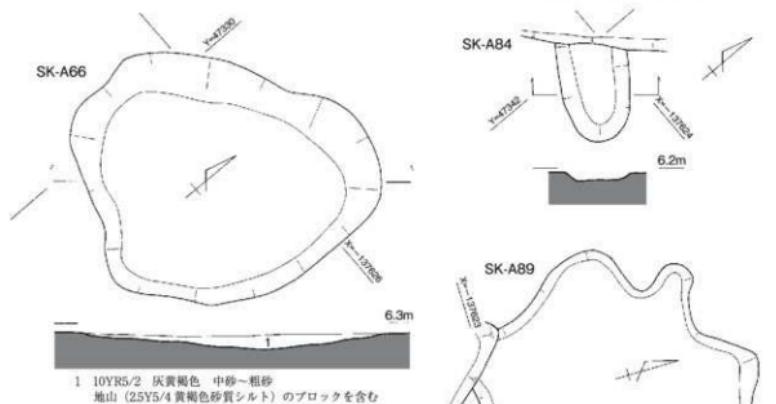
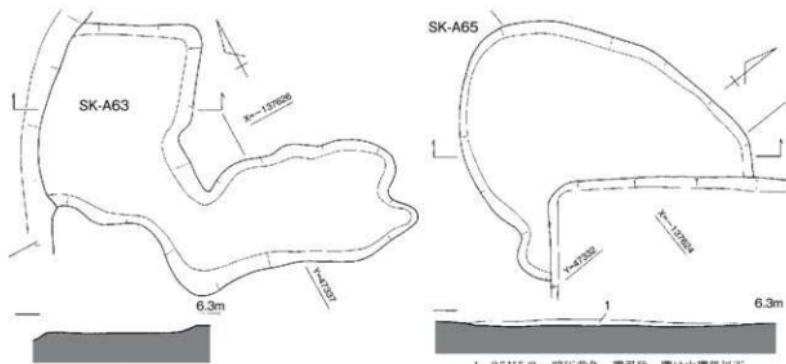
図版9 A・D地区土坑(1)



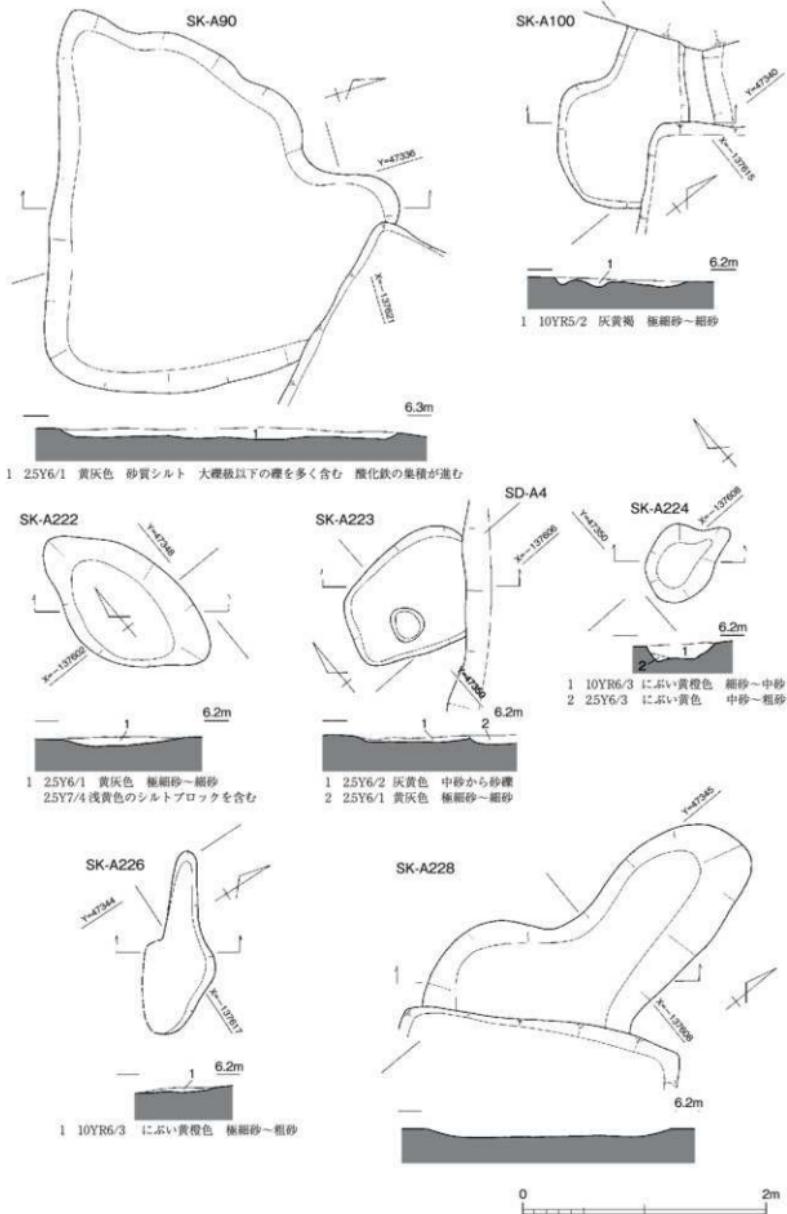
図版10 A・D地区土坑 (2)



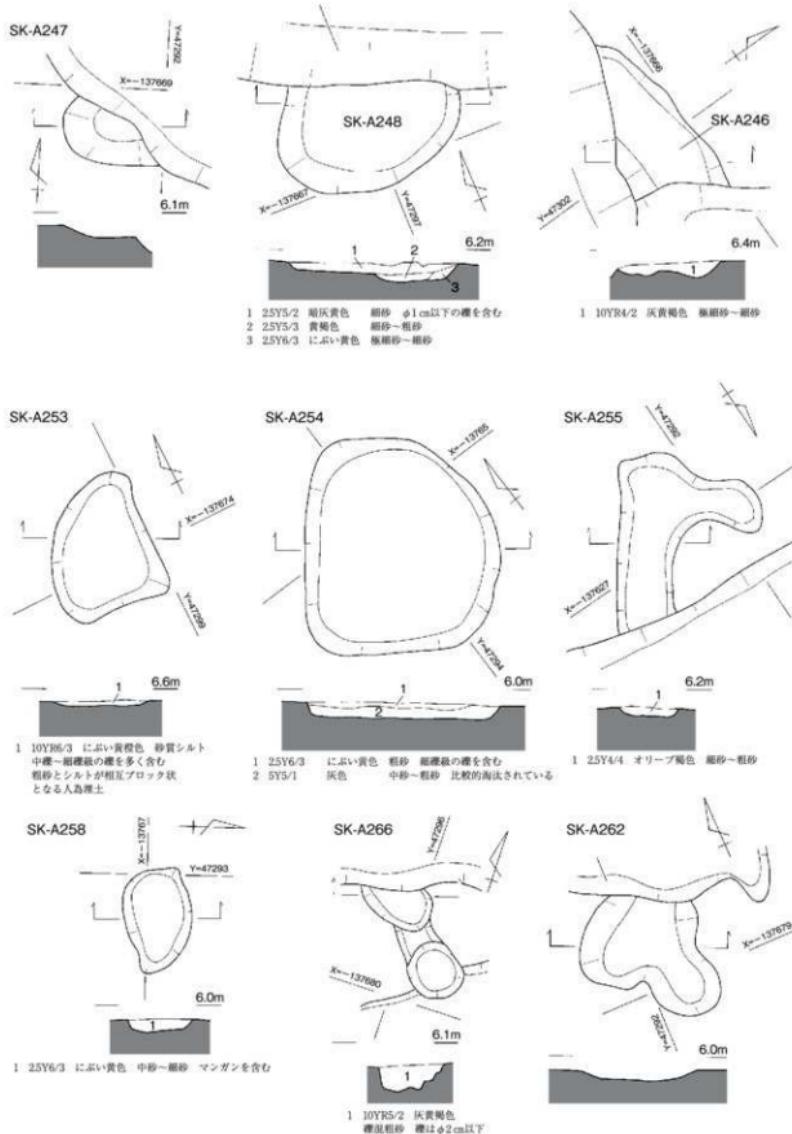
図版11 A・D地区土坑(3)



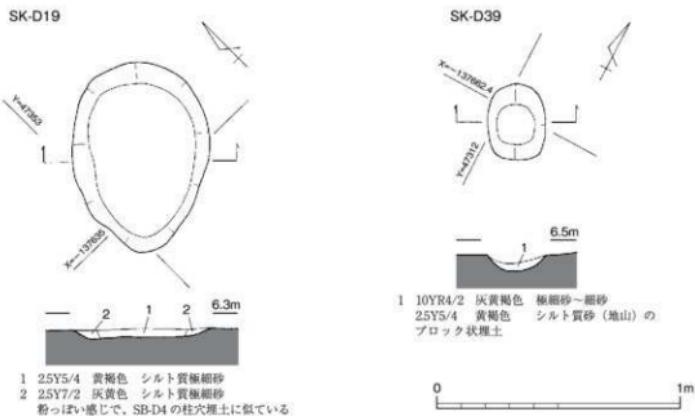
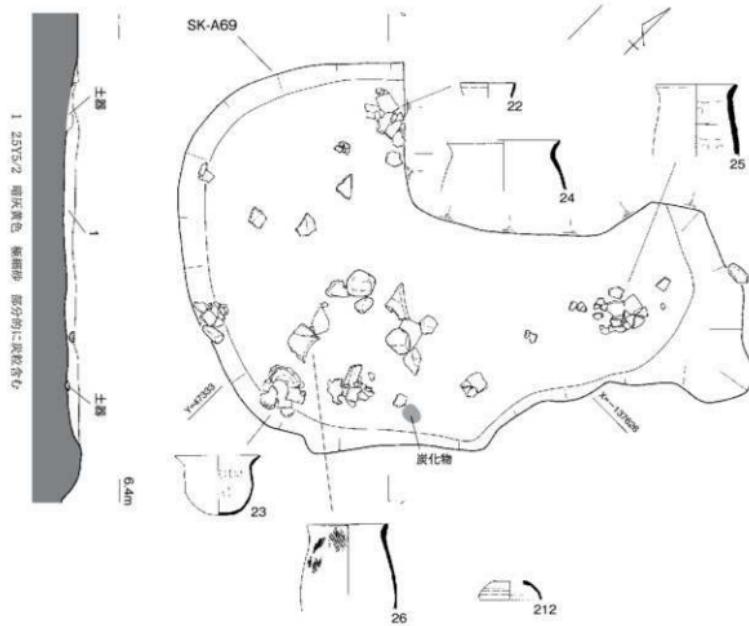
図版12 A・D地区土坑 (4)



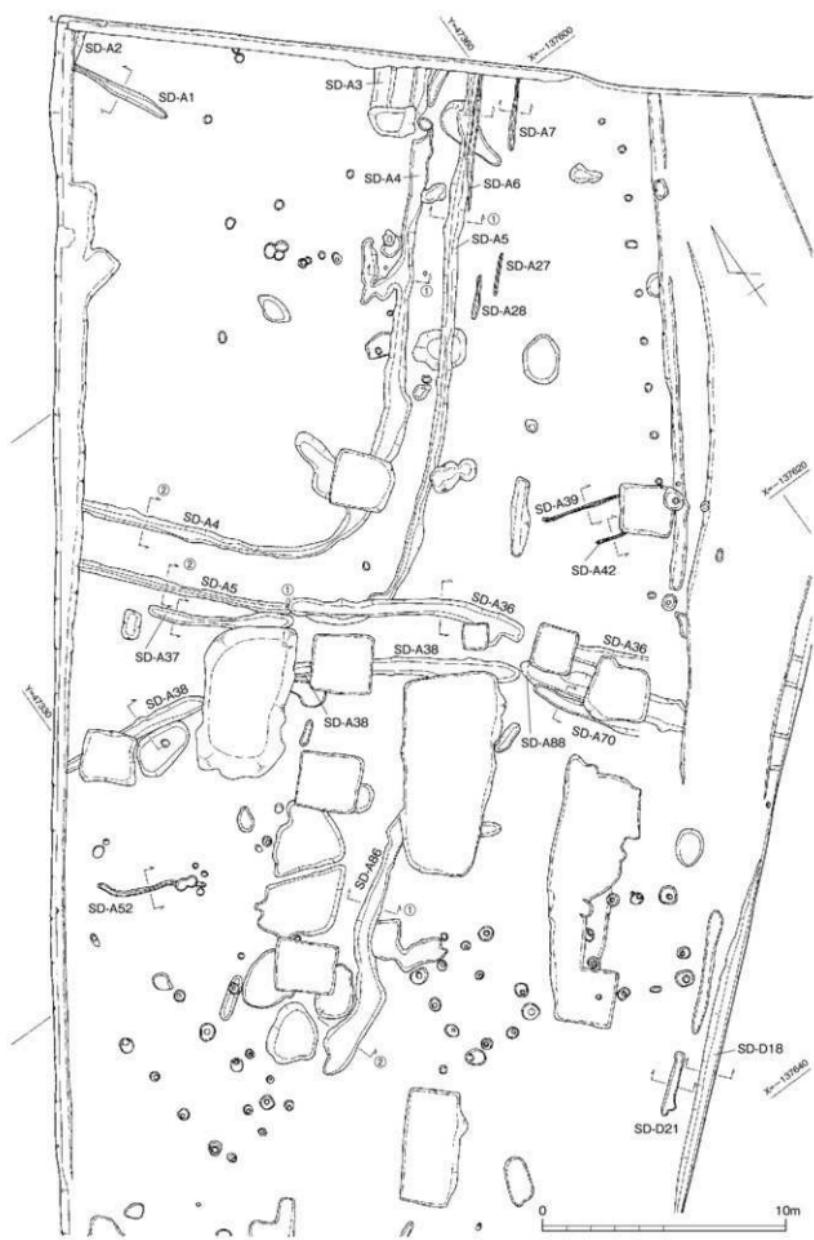
図版13 A・D地区土坑(5)



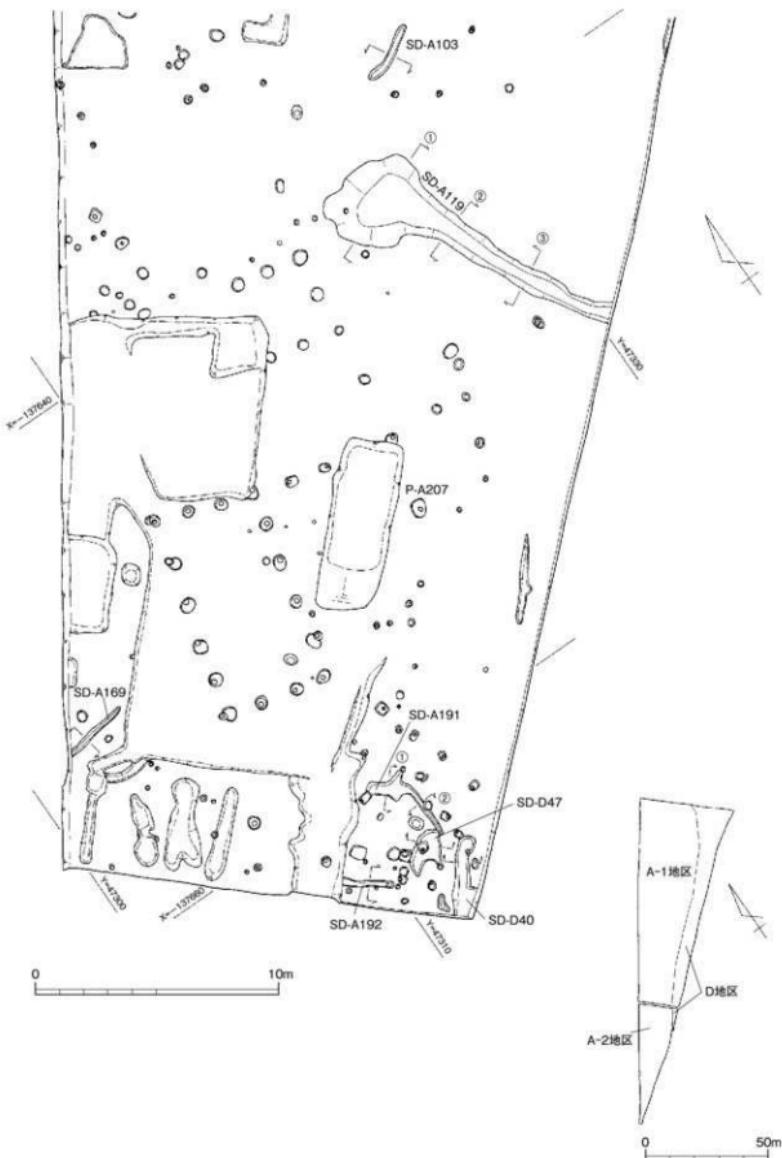
図版14 A・D地区土坑 (6)



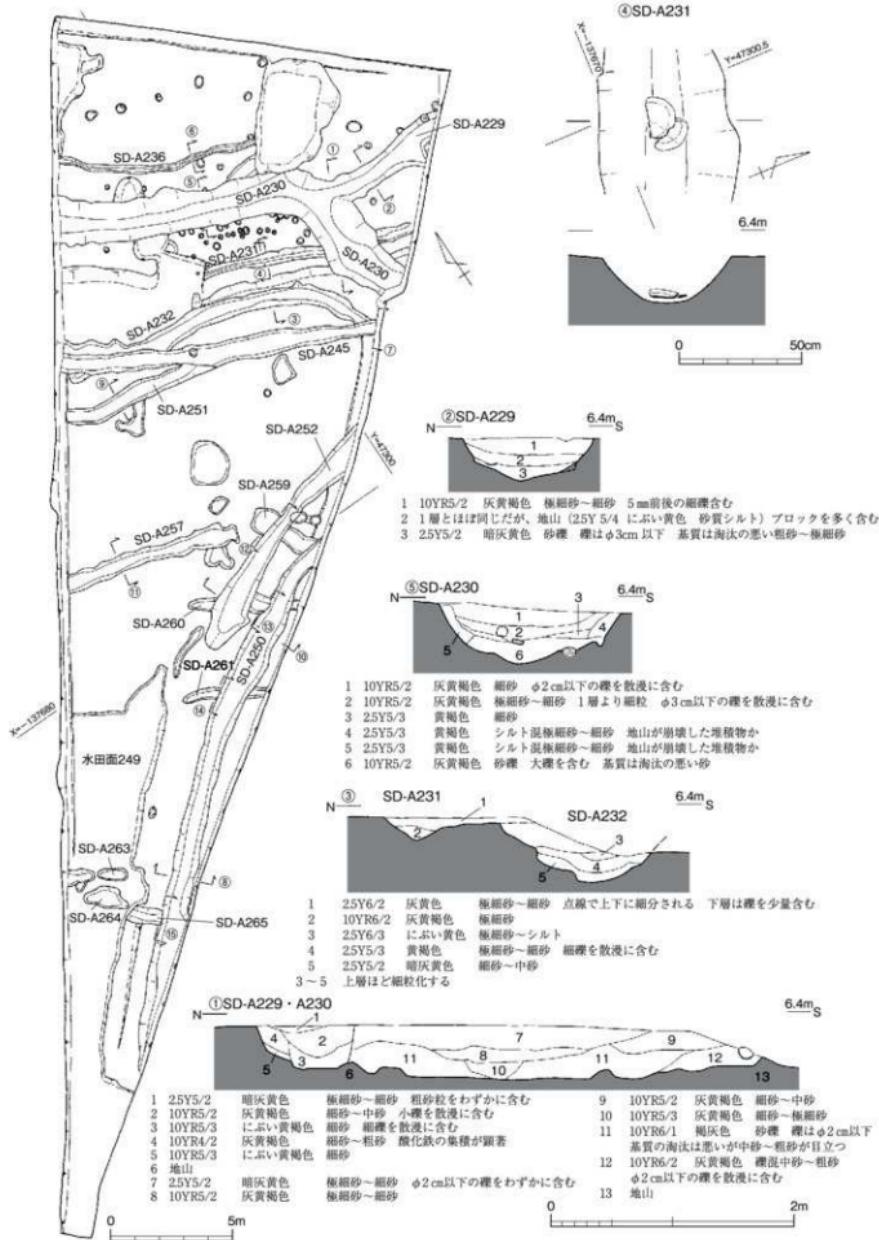
図版15 A・D地区溝(北東群)



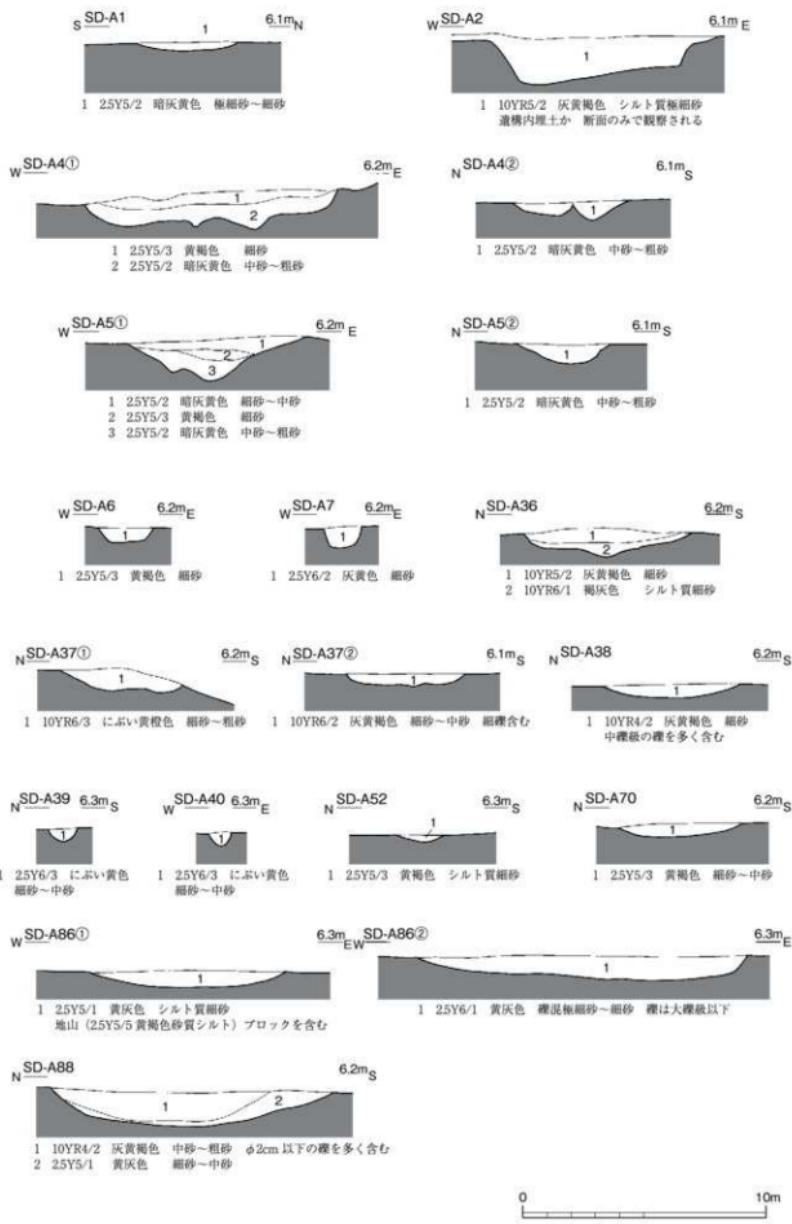
図版16 A・D地区溝(中央群)



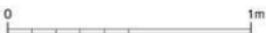
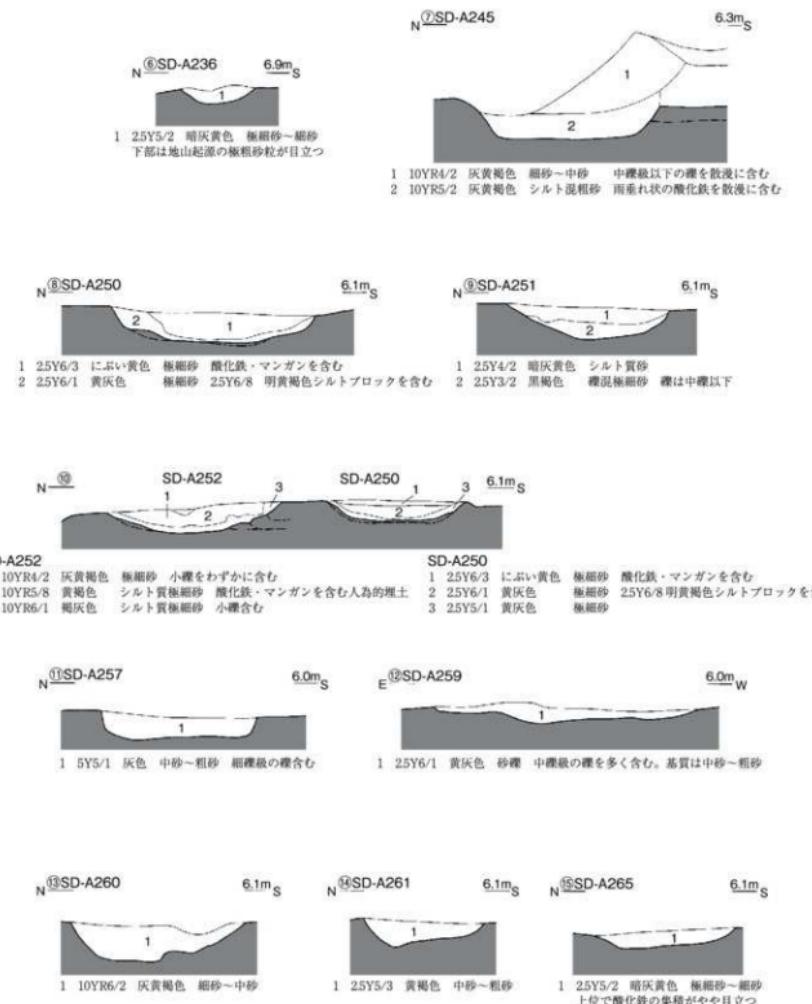
図版17 A・D地区溝(南西群)



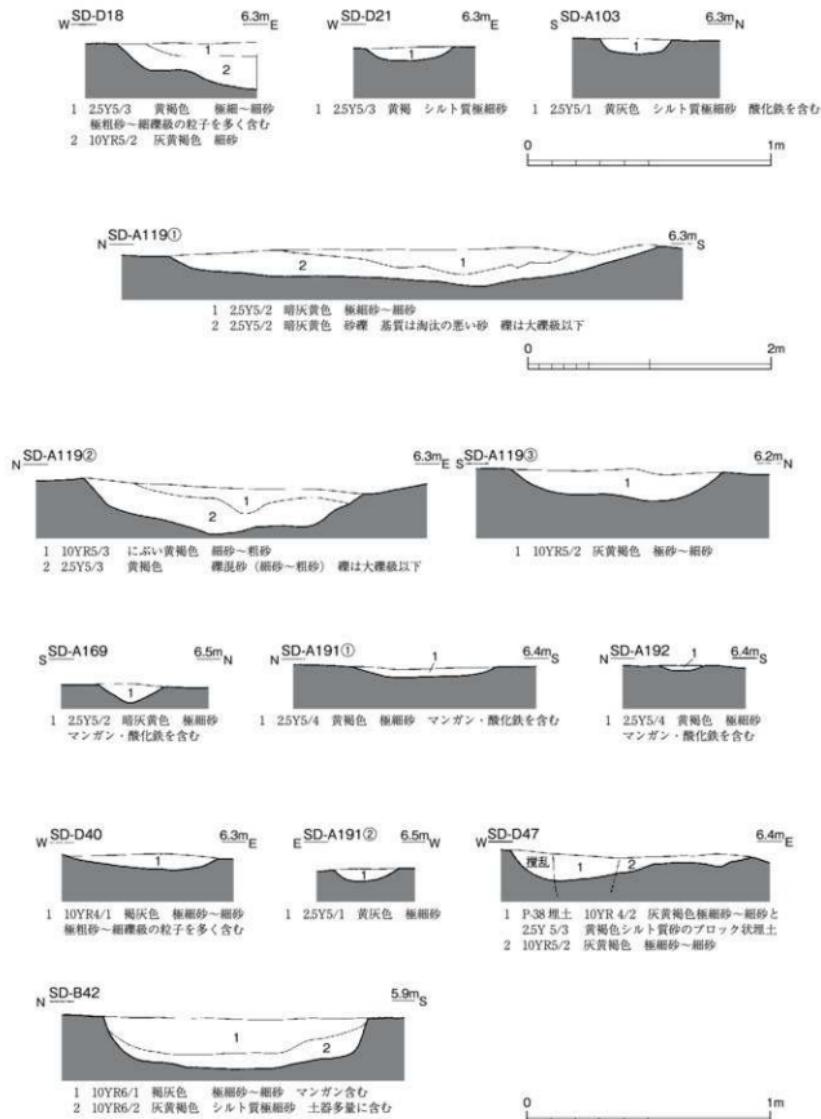
図版18 A・D地区溝断面 (1)

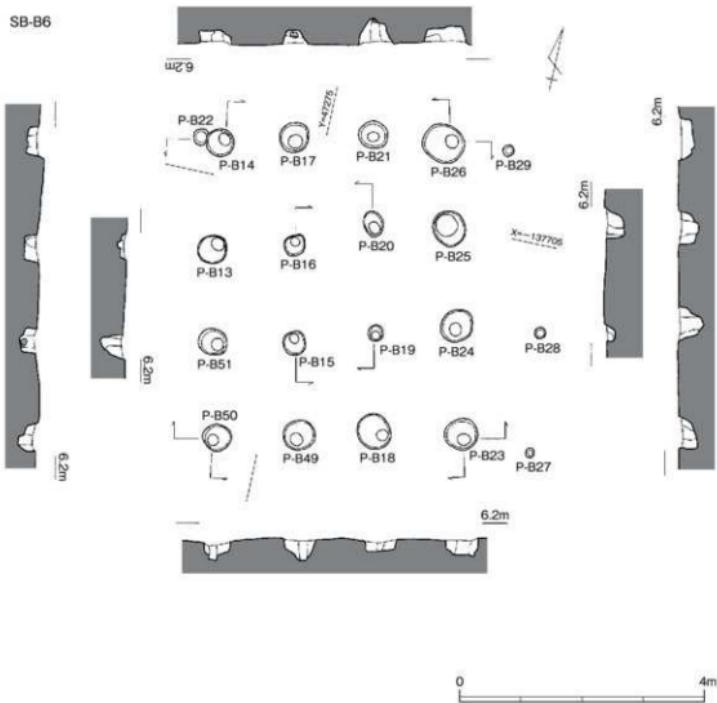


図版19 A・D地区溝断面(2)

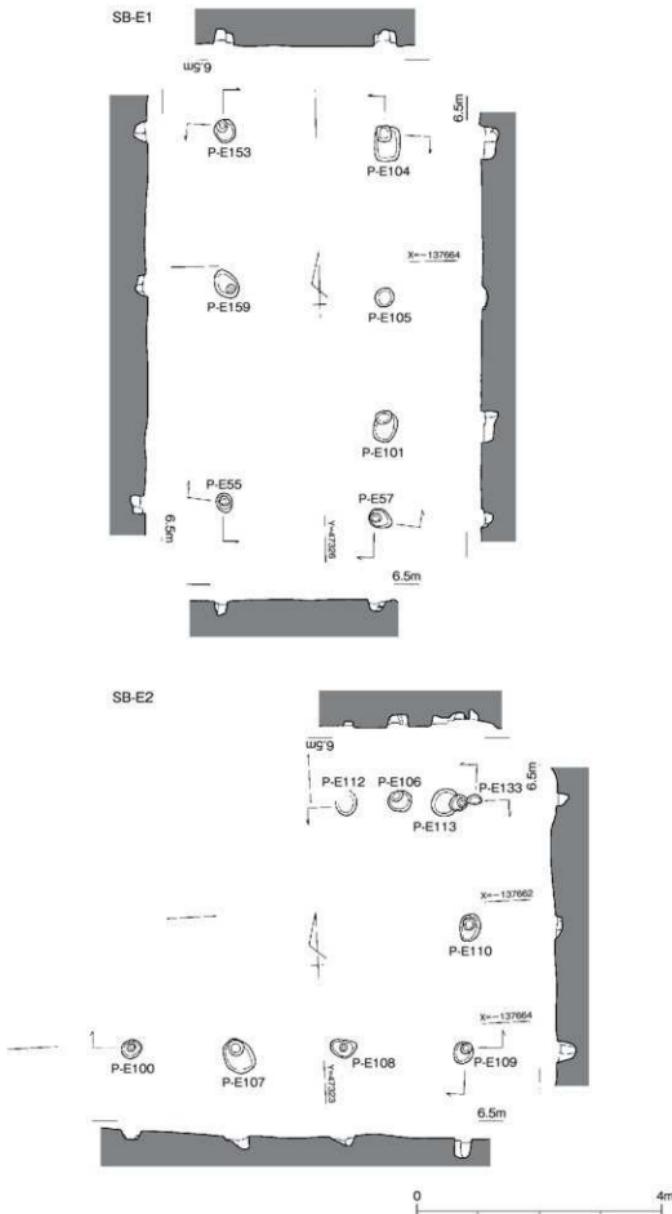


図版20 A・D地区溝断面 (3)

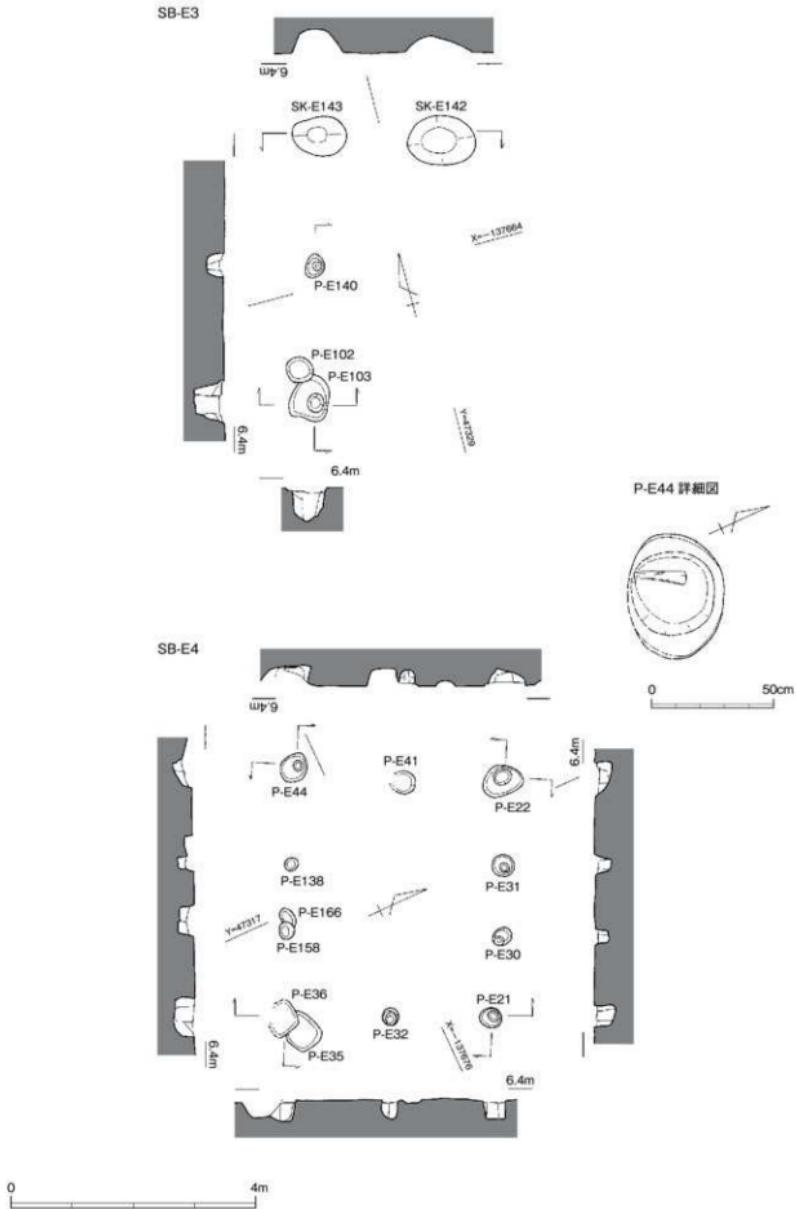




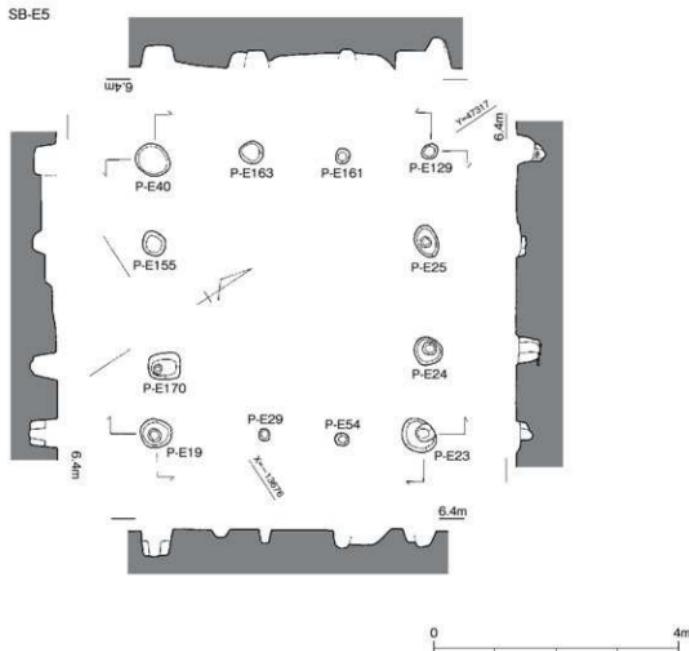
図版22 掘立柱建物跡E1・E2



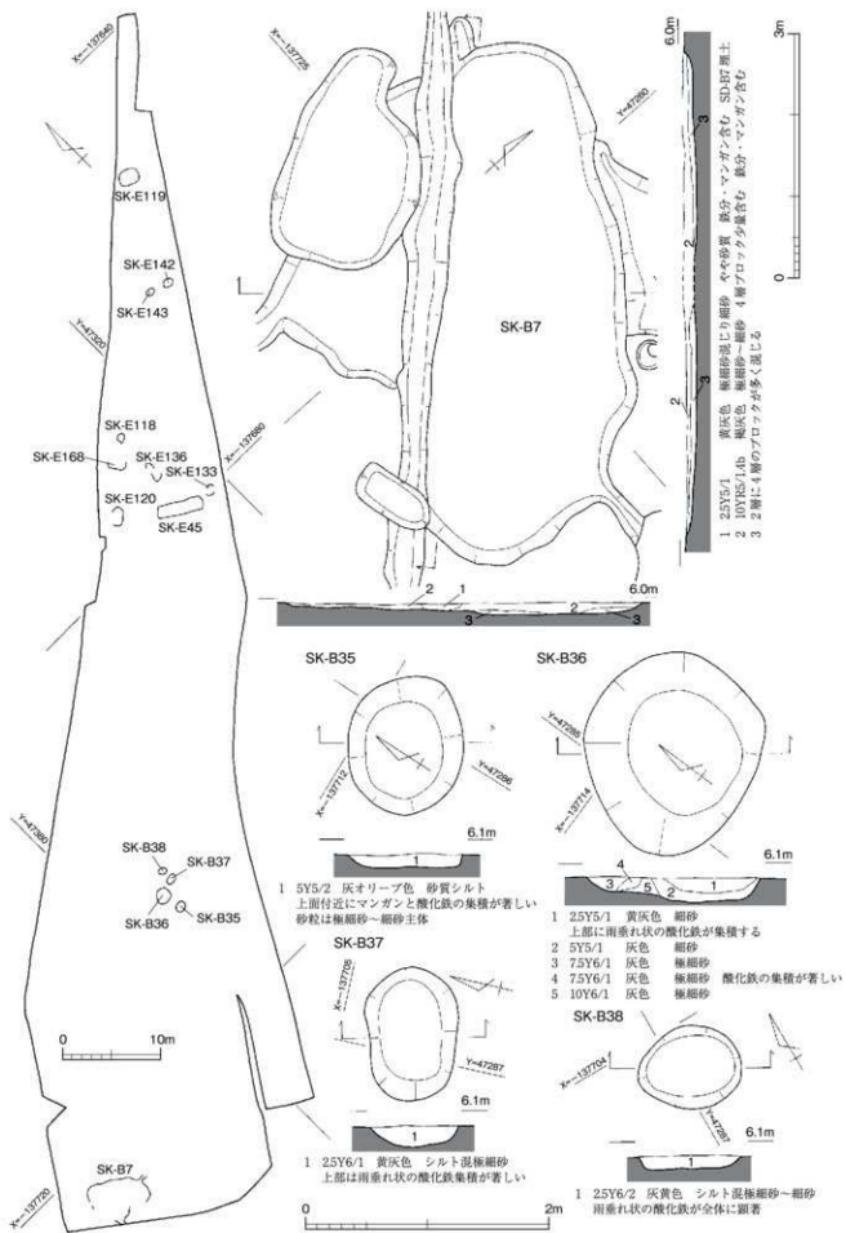
図版23 掘立柱建物跡E3・E4



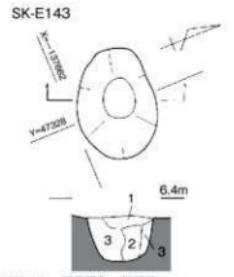
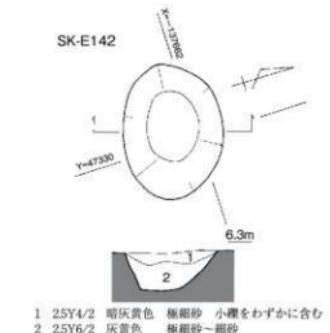
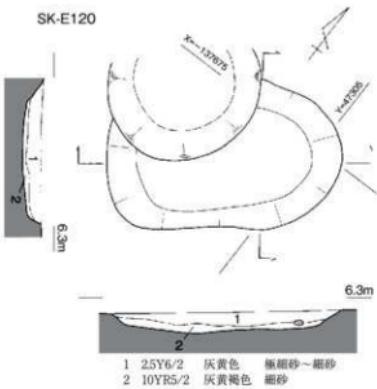
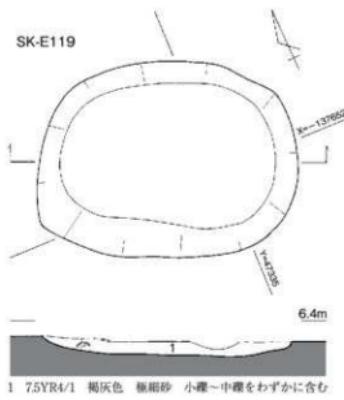
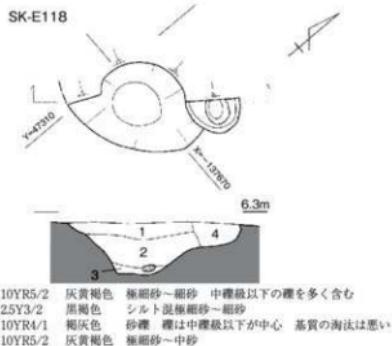
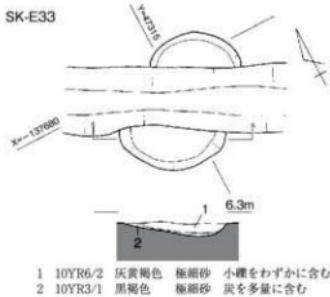
図版24 掘立柱建物跡E5



図版25 B・E地区土坑(1)



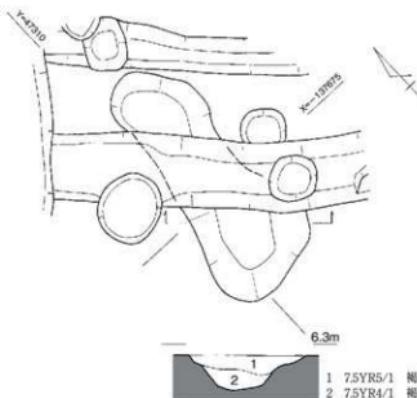
図版26 B・E地区土坑 (2)



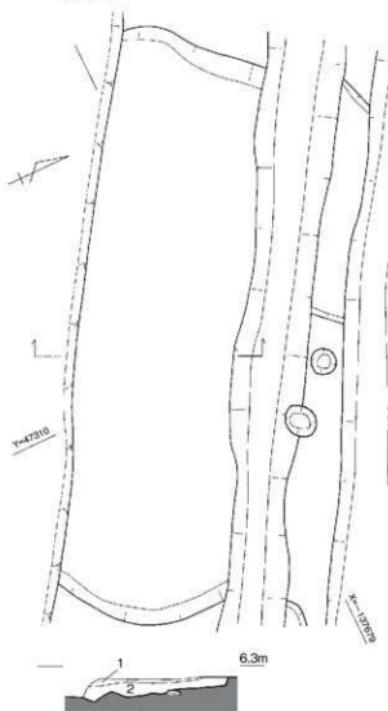
0 2m

図版27 B・E地区土坑(3)

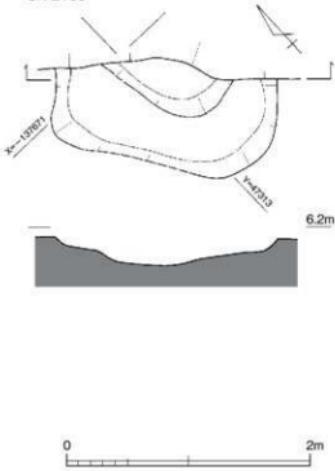
SK-E136



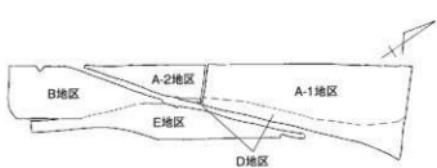
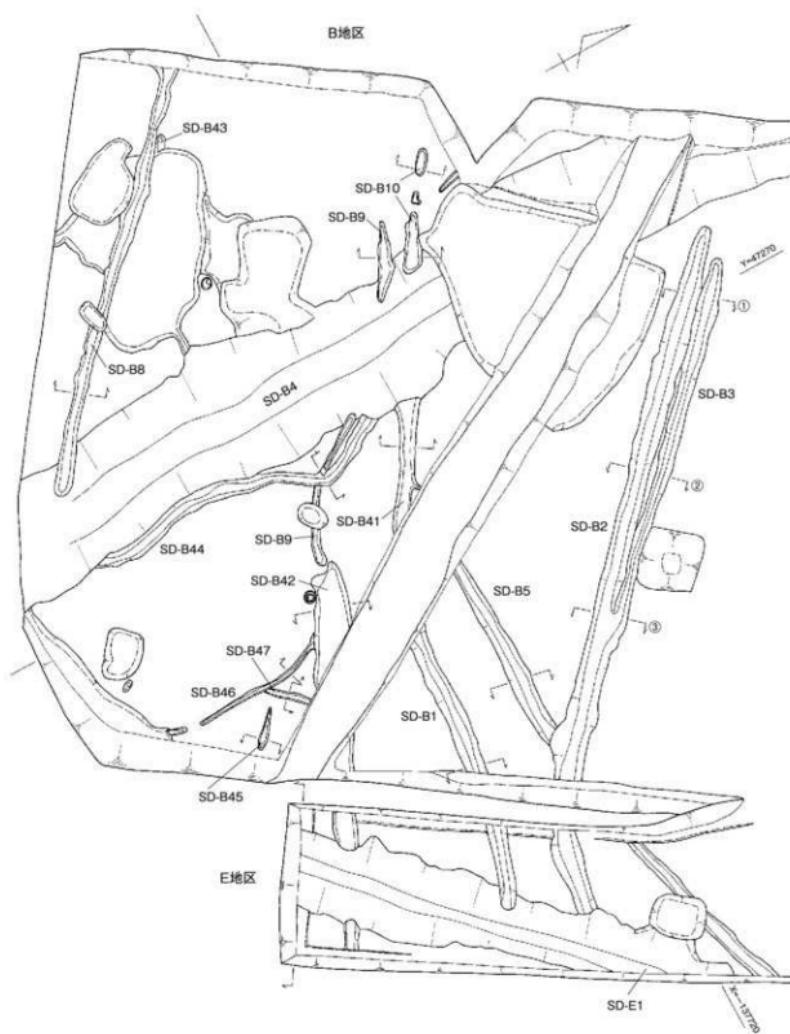
SK-E45



SK-E168

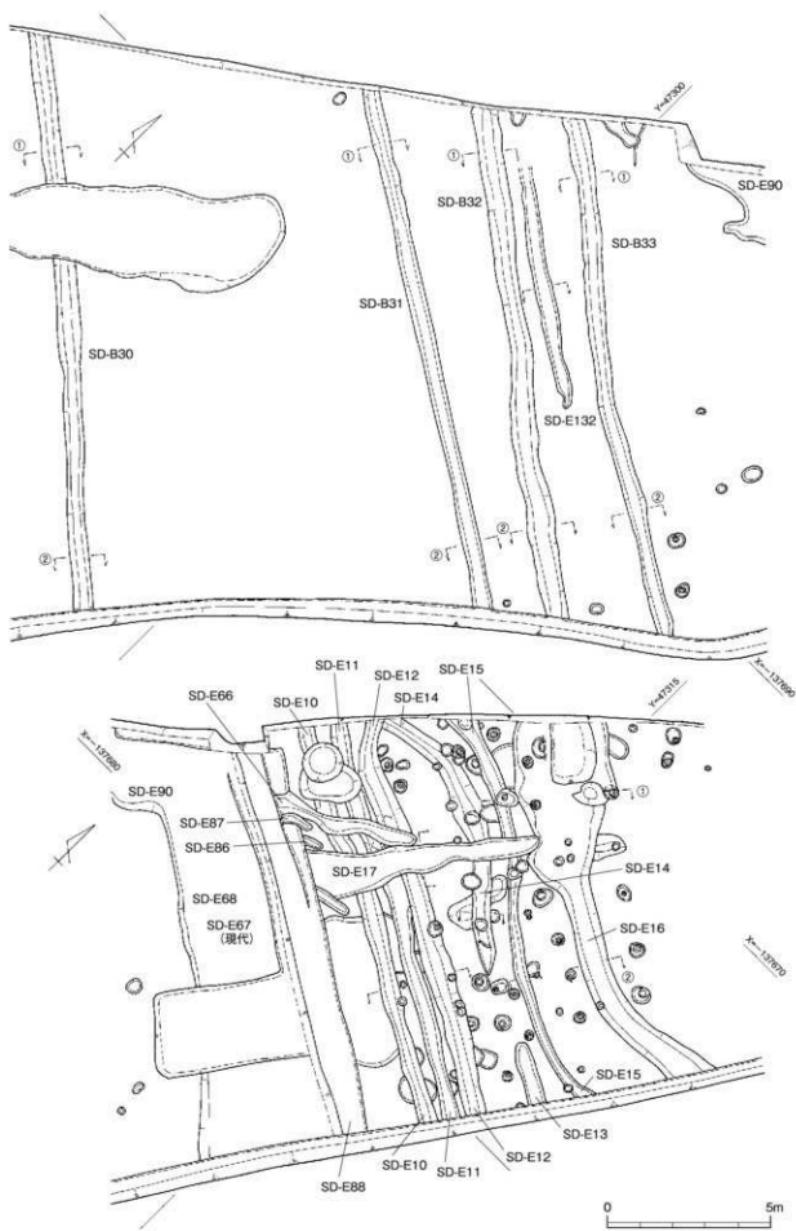


図版28 B・E地区溝（南西群）



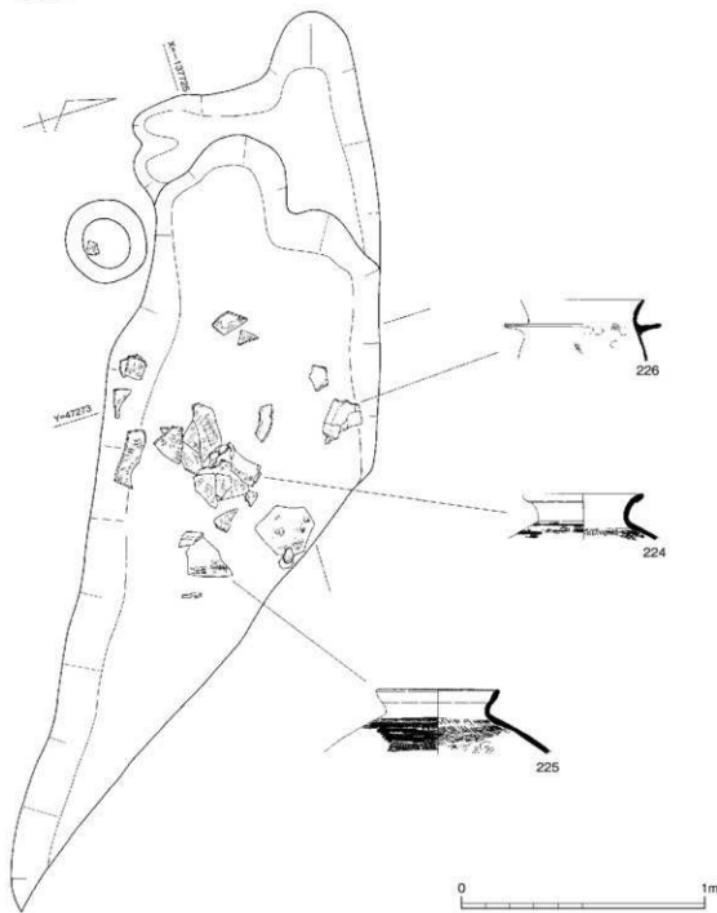
0 5m

図版29 B・E地区溝(中央群)

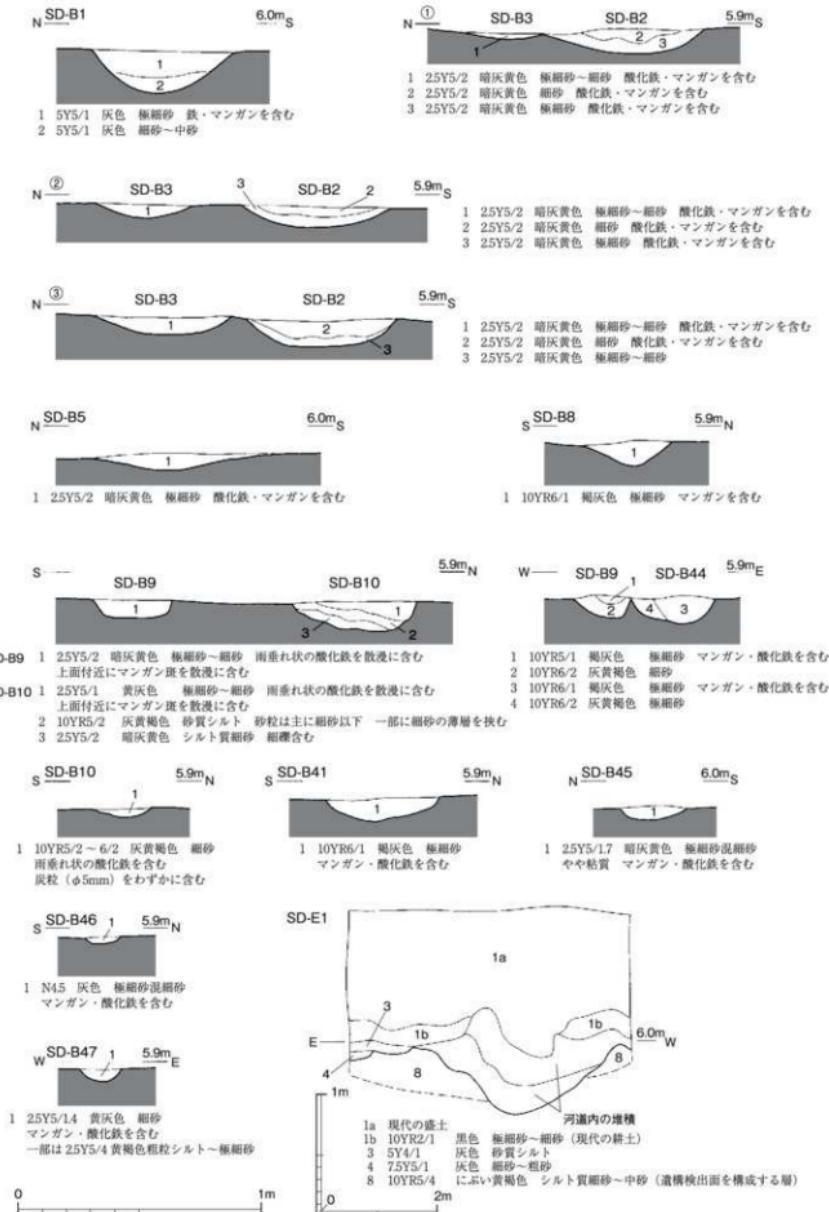


図版30 B・E地区溝B-42

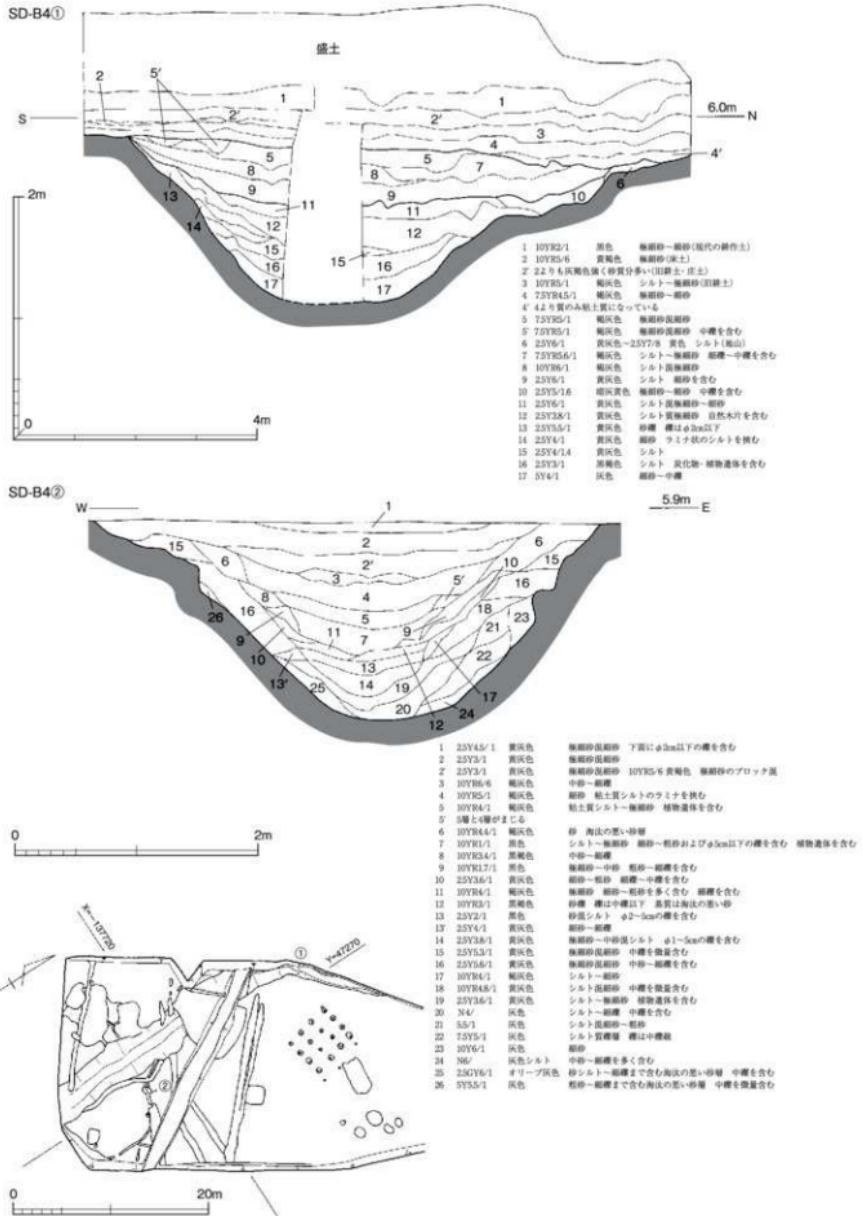
SD-B42



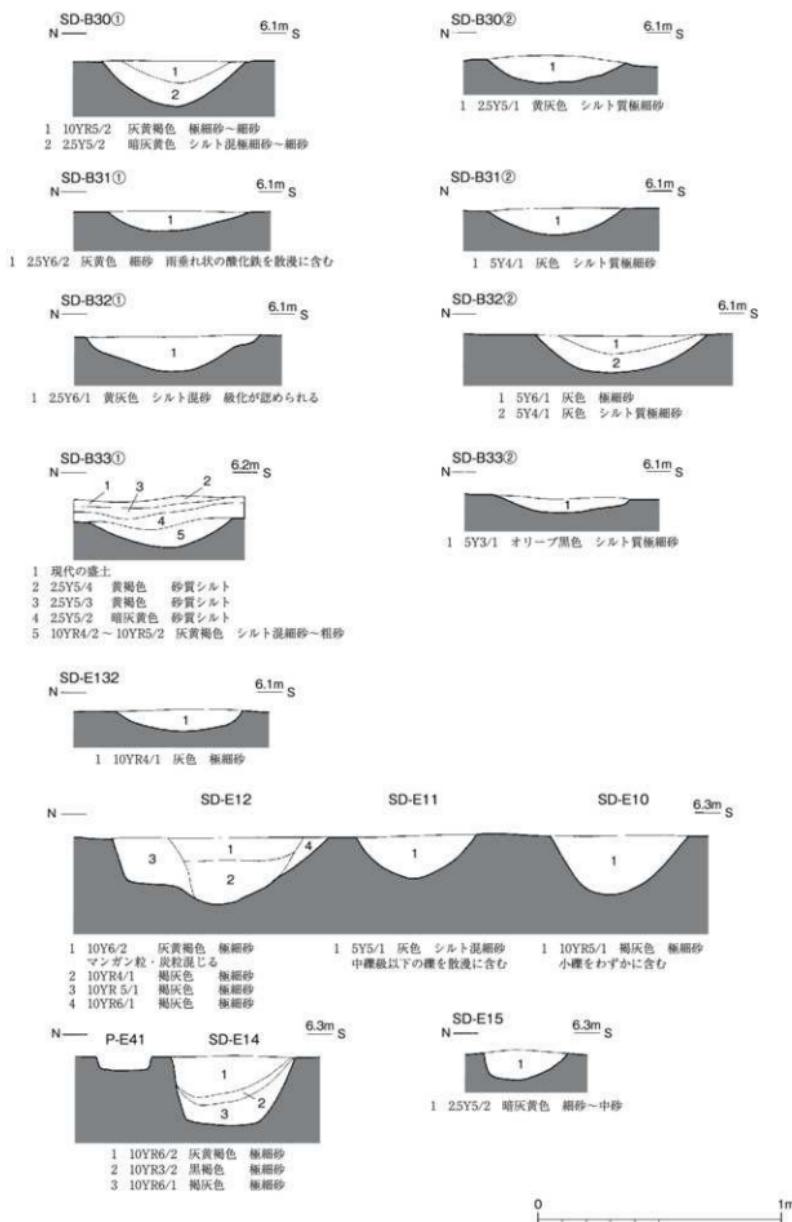
図版31 B・E地区溝断面(1)



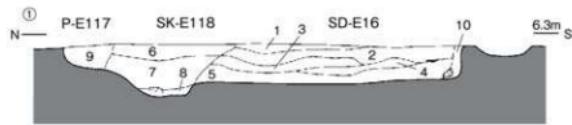
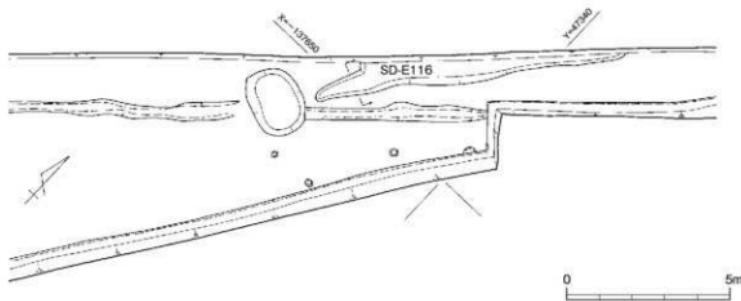
図版32 B・E地区溝断面 (2)



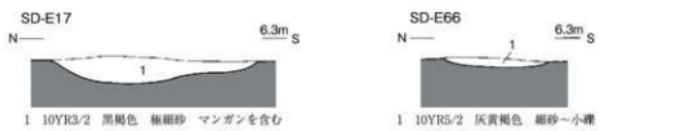
図版33 B・E地区溝断面 (3)



図版34 B・E地区溝断面 (4)

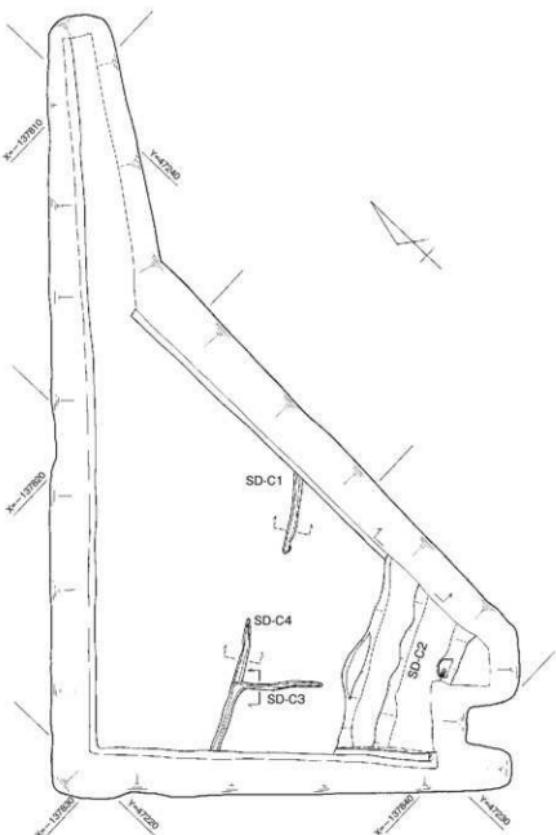


- | | | | | |
|----|---------|------|---------------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～細砂 | 中礫級以下の礫を含む |
| 2 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂 | 地山 (25Y6/4 に bei 黄色シルト混細砂) ブロックを多く含む |
| 3 | 25Y4/2 | 暗灰黃色 | 細砂～中砂 | |
| 4 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | シルト混極細砂～細砂 | |
| 5 | 25Y4/2 | 暗灰黃色 | 砂礫 大礫級の礫を含む | 基質は海浜の悪い砂 |
| 6 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～細砂 | 中礫級以下の礫多く含む |
| 7 | 25Y 3/2 | 黒褐色 | シルト混極細砂～細砂 | |
| 8 | 10YR4/1 | 褐灰色 | 砂礫 磨は中礫級以下が中心 | 基質は海浜の悪い砂 |
| 9 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～中砂 | |
| 10 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～細砂 | 土坑の埋土 |



- | | | | |
|---|---------|-----------|---------|
| 1 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂 |
| 2 | 10YR5/4 | に bei 黄褐色 | シルト質極細砂 |

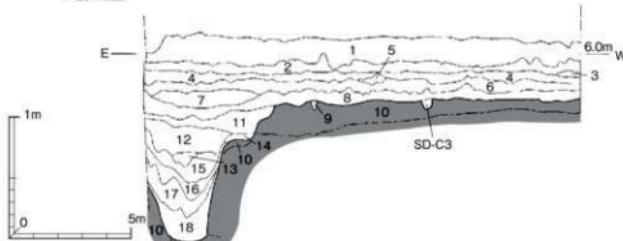
C地区



0 10m

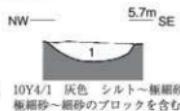
図版36 C地区断面

C地区南壁

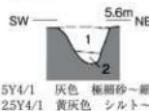


1 SY2/2	オリーブ黒色	極細砂	細砂～中砂を含む 植土
2 NA3/	灰色	極細砂	細砂～中砂および2cm以下の礫を含む 田耕土
3 SC5/1	緑灰色	シルト～極細砂	細砂～中砂を含む
4 SC5/1	オリーブ灰色	シルト～極細砂	極細砂～中砂を多く含む
5 NS4/	暗灰色	極細砂	細砂～中砂を非常に多く含む
6 25Y4/6/1	オリーブ灰色	シルト	極細砂～中砂を含む、4層よりも砂質が強い
7 10BG3/6/1	暗青灰色	シルト	中砂～2cm以下の礫を含む
8 N43/	灰色	シルト～極細砂	細砂～中砂を微量含む 下部に平安時代末頃の土器を含む
9 NS/	灰色	シルト	シルト～細砂がブロック状に混在する 通水理土上
10 NS/	灰色	細砂	シルト～無細砂が多く含む(堆山)
11 7SY4/4/1	オリーブ黒色	シルト～極細砂	細砂がブロック状に混じる
12 10YR4/1	褐色	シルト質極細砂～極細砂	地山(10層)のブロックを含む
13 25Y4/1	黄灰色	シルト質極細砂	11層が最高時、10層をさき上げた部分
14			12層が最高時、11層をさき上げた部分
15 25Y4/1	黒褐色	シルト	炭化物～植物遺体を多く含む
16 25Y2/1	黒色	シルト	炭化物を多く含む、非常に粘質
17 25Y2/4/1	黒色	シルト～極細砂	炭化物・植物遺体を多く含む 幽生時代後期の土器を含む
18 25Y2/6/1	黒褐色	極細砂～細砂	中砂を多く含む 植物遺体を含む
19 7SY4/5/1	灰色	中砂～細砂	海浜の悪い砂層

SD-C1



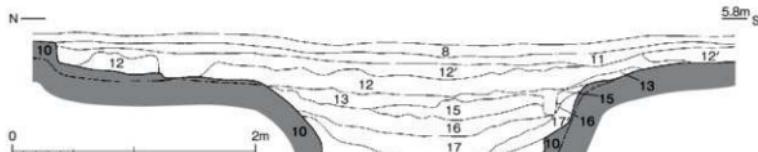
SD-C3



SD-C4



SD-C2



8 N43/ 灰色 シルト～極細砂 細砂～中砂を微量含む 下部に平安時代末頃の土器を含む

10 NS/ 灰色 細砂 シルト～無細砂を多く含む(堆山)

11 7SY3/4/1 オリーブ黒色 シルト～極細砂 細砂がブロック状に混じる

12 10YR4/1 黄褐色 シルト質極細砂～極細砂 粘力的に繊維状に11層が入る(植物の根によるもの)

13 25Y4/1 黄褐色 シルト質極細砂 細砂(10層)のブロックが多く混じる

15 25Y3/4/1 黑褐色 シルト 炭化物・植物遺体を少許含む

16 25Y2/1 黒色 シルト 炭化物を多く含む、非常に粘質

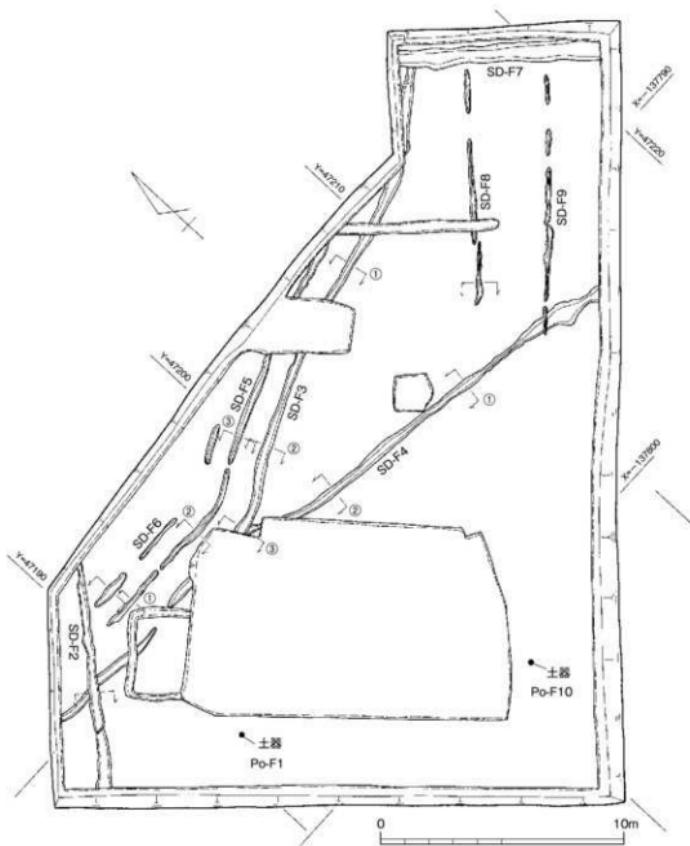
17 25Y2/4/1 黒色 シルト～極細砂 炭化物・植物遺体を多く含む 幽生時代後期の土器を含む

18 25Y2/6/1 黑褐色 細砂 10層のブロックを含む、細砂～中砂を含む 下部は炭化物を含む

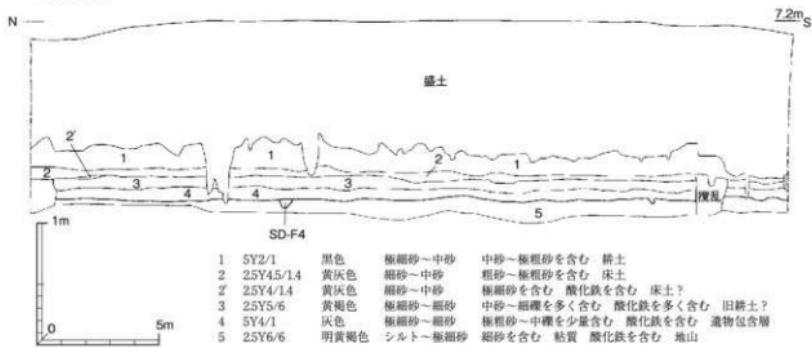
19 7SY4/5/1 灰色 中砂～細砂 中砂を多く含む 植物遺体を含む

海浜の悪い砂層

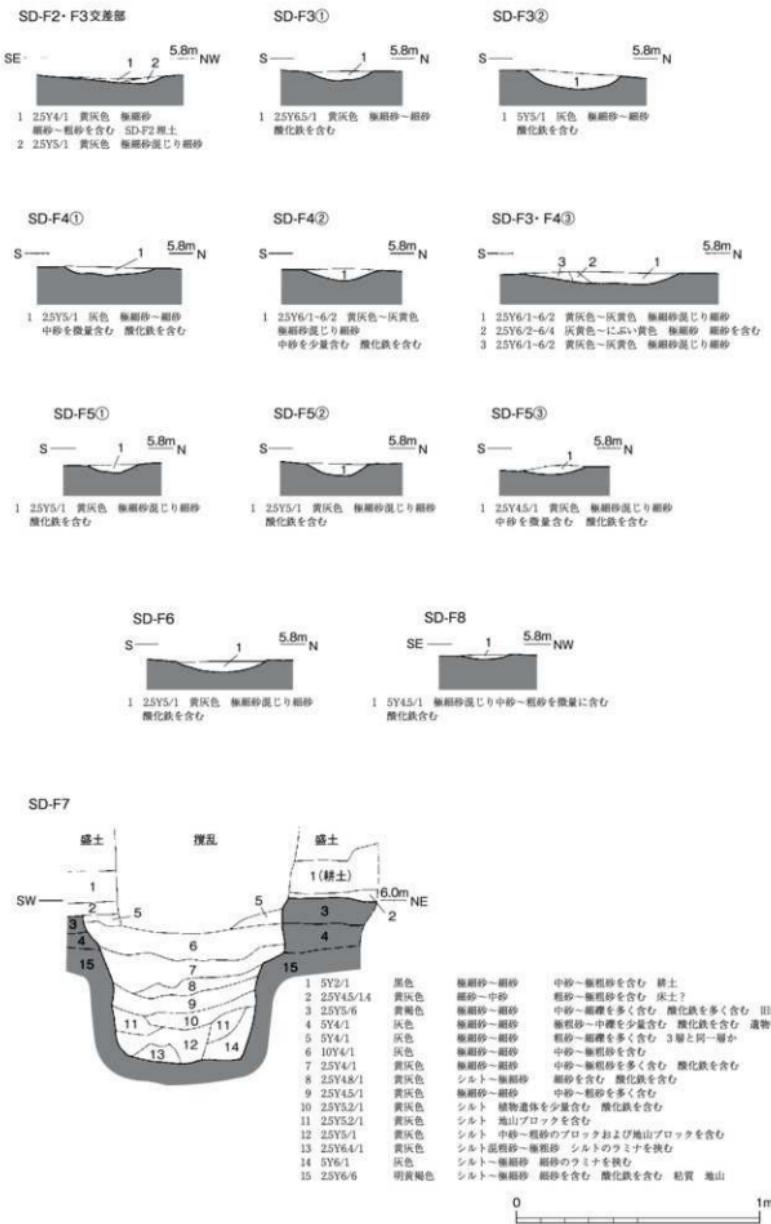
図版37 F地区平面・断面



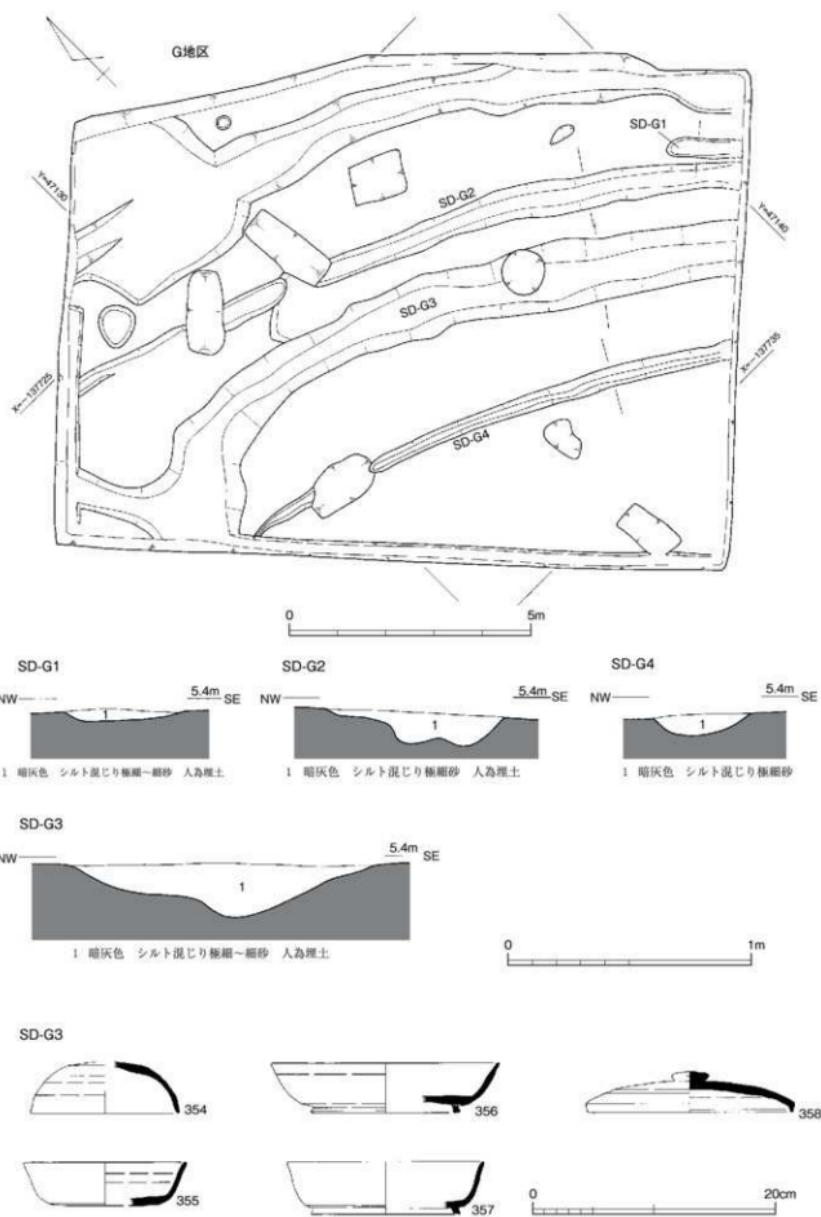
F地区南東壁



図版38 F地区溝断面

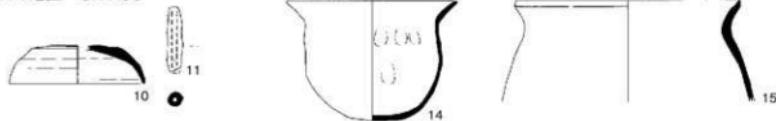


図版39 G地区平面・断面・出土遺物

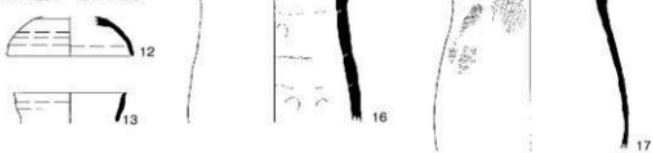


図版40 A・D地区出土の遺物 (1)

A-1地区 SK-A90



A-1地区 SK-A69



A-1地区 SK-A64



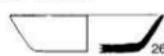
A-1地区 SK-A89



A-1地区 SK-A66



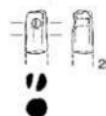
A-1地区 SK-A8



A-2地区 SK-A247

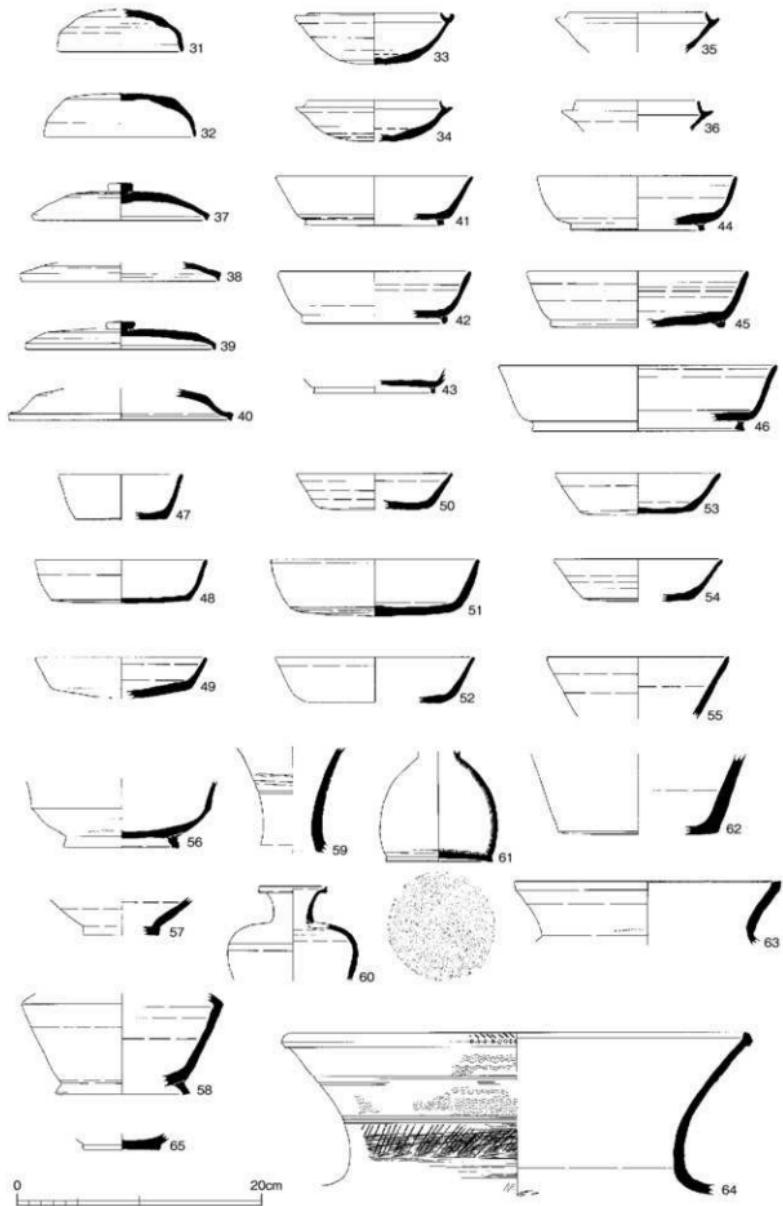


A-1地区 SK-A65

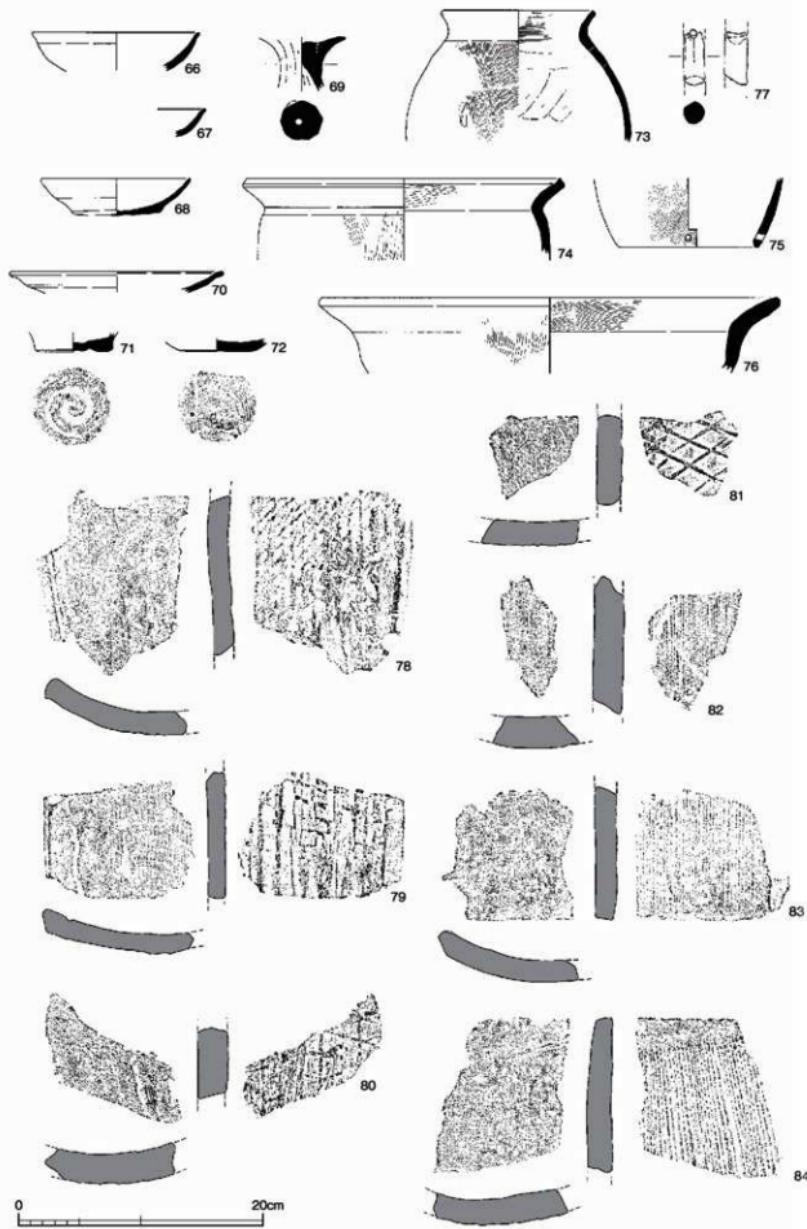


図版41 A・D地区出土の遺物 (2)

A-2地区 SD-A230

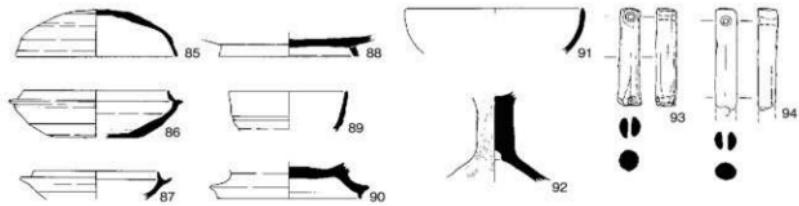


図版42 A・D地区出土の遺物 (3)

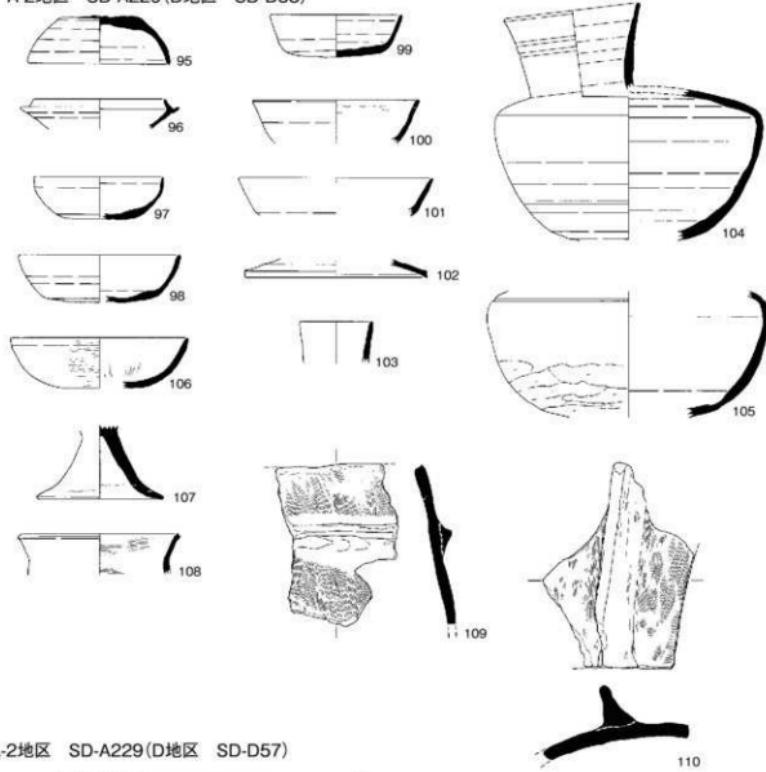


図版43 A・D地区出土の遺物 (4)

A-2地区 SD-A229



A-2地区 SD-A229(D地区 SD-D58)



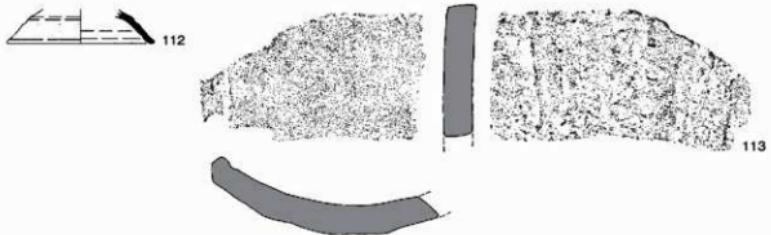
A-2地区 SD-A229(D地区 SD-D57)



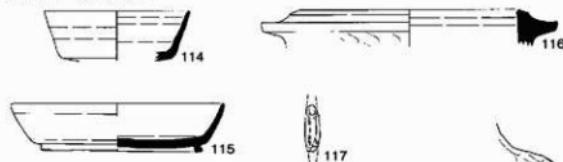
0 20cm

図版44 A・D地区出土の遺物（5）

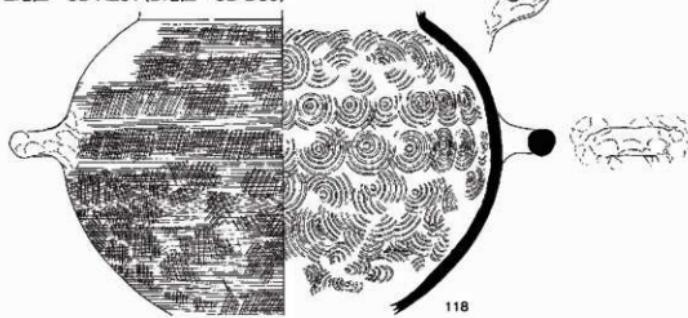
A-2地区 SD-A229・A230



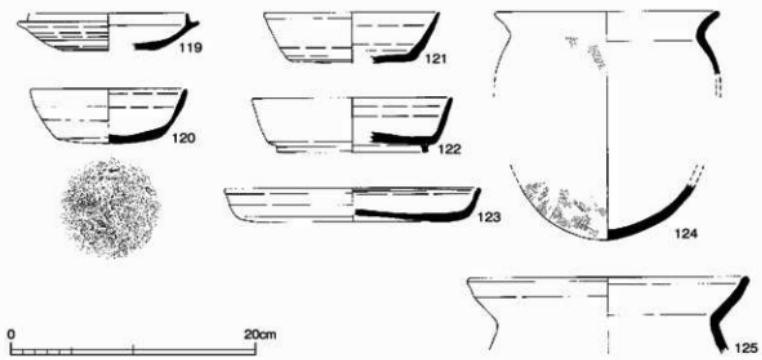
A-2地区 SD-A231



A-2地区 SD-A231 (D地区 SD-D59)

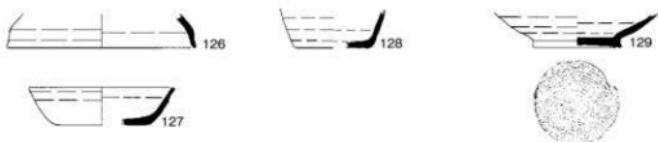


A-2地区 SD-A232

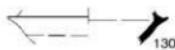


図版45 A・D地区出土の遺物 (6)

A-2地区 SD-A232(D地区 SD-D60)



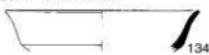
A-1地区 SD-A191



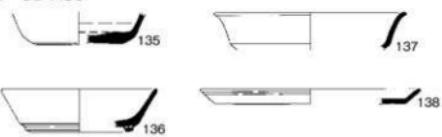
A-1地区 SD-A4



A-1地区 SD-A119



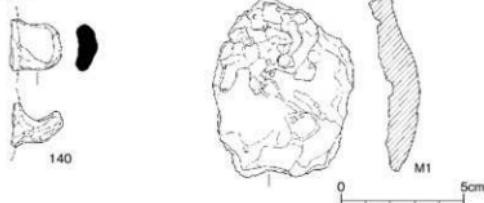
A-1地区 SD-A86



A-1地区 SD-A37



A-1地区 SD-A5



A-1地区 SD-A250

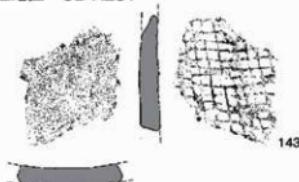


図版46 A・D地区出土の遺物 (7)

A-2地区 SD-A260



A-2地区 SD-A251



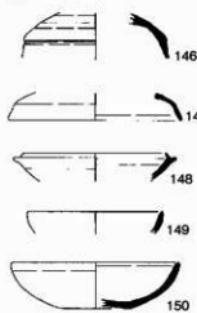
D地区 SD-D2



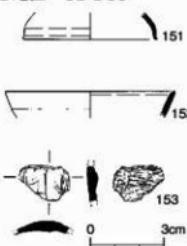
D地区 SD-D47



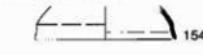
A-1地区 SB-A6



D地区 SB-D30



A-1地区 SB-A4



A-1地区 SB-A3



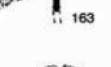
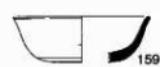
A-1地区 SB-A2



A-1地区 SB-A1



A・D地区 ピット



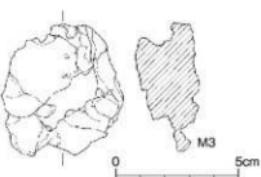
0 20cm



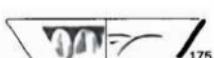
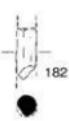
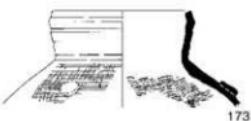
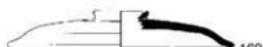
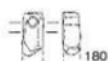
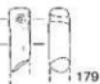
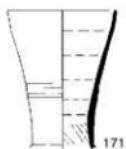
0 3cm

図版47 A・D地区出土の遺物 (8)

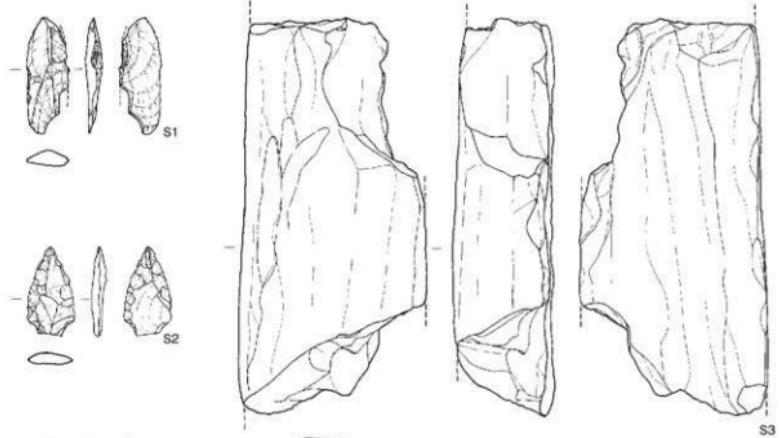
A-2地区 水田面249



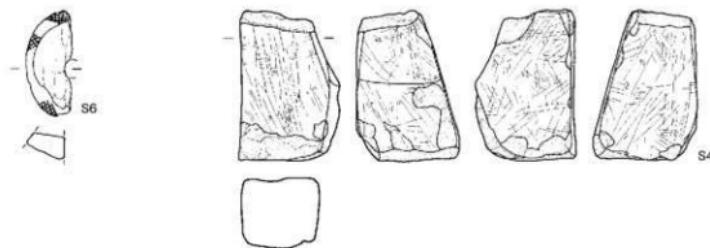
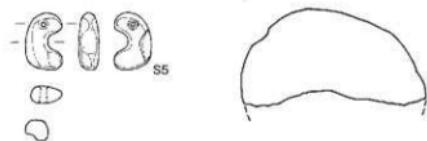
A・D地区 包含層



図版48 A・D地区出土の遺物 (9)



0 10cm



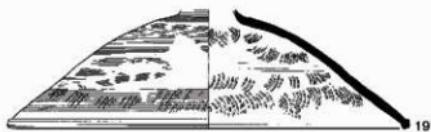
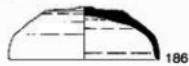
0 10cm

図版49 B・E地区出土の遺物（1）

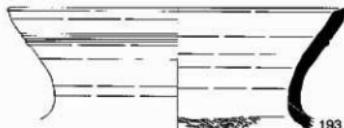
B地区 SK-B7



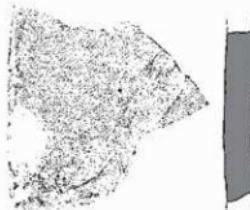
E地区 SK-E45



E地区 SK-E119



E地区 SK-E120



E地区 SK-E143

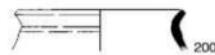


E地区 SK-E168

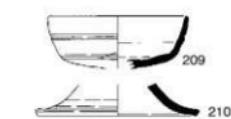
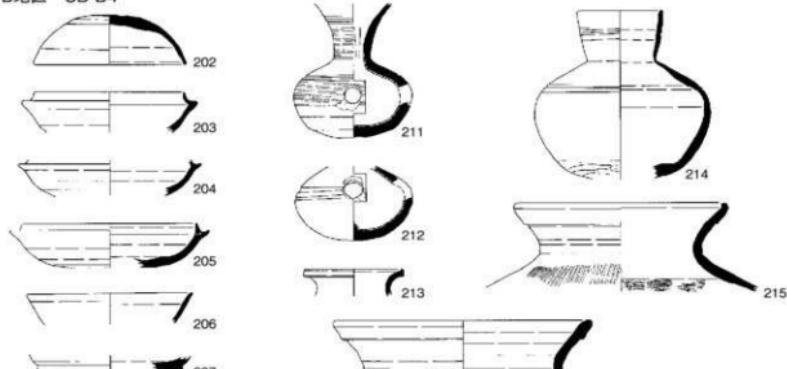


図版50 B・E地区出土の遺物（2）

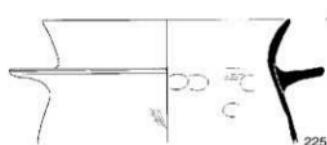
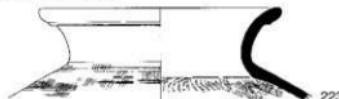
B地区 SD-B2・B3



B地区 SD-B4



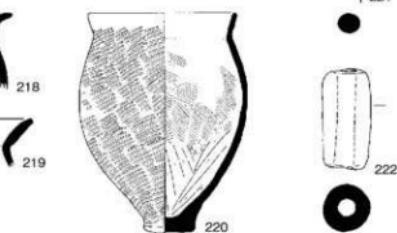
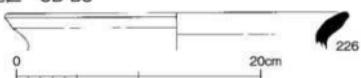
B地区 SD-B42



B地区 SD-B9

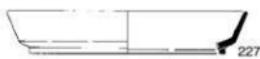


B地区 SD-B8



図版51 B・E地区出土の遺物（3）

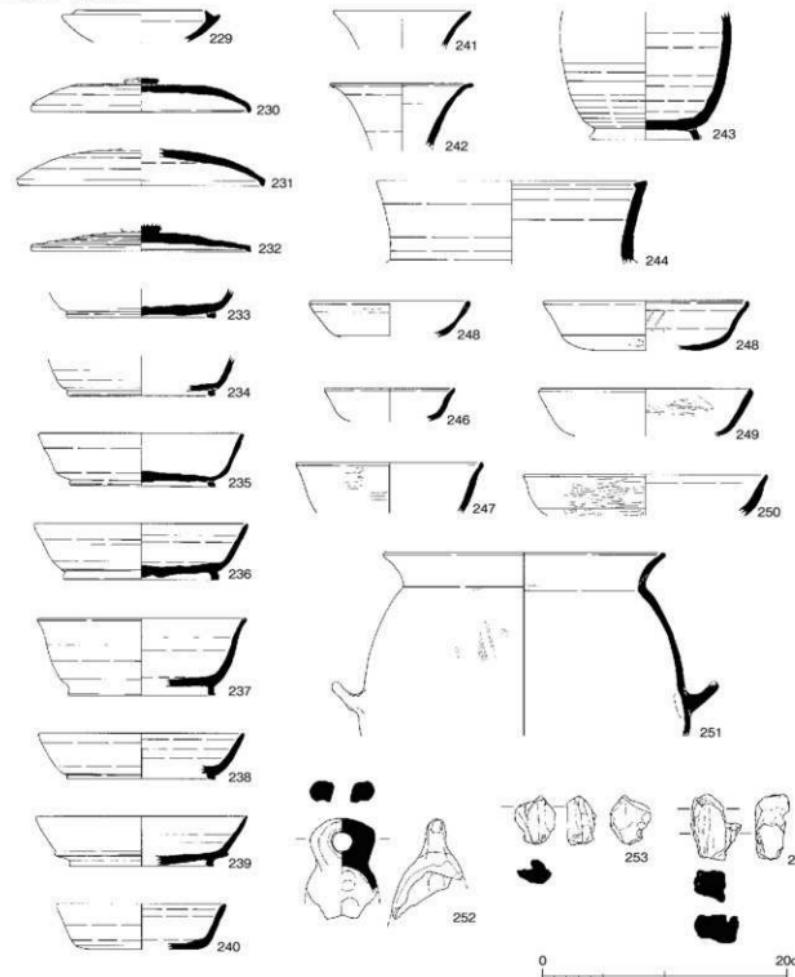
B地区 SD-B31 (E地区 SD-E7)



B地区 SD-B32 (E地区 SD-E8)



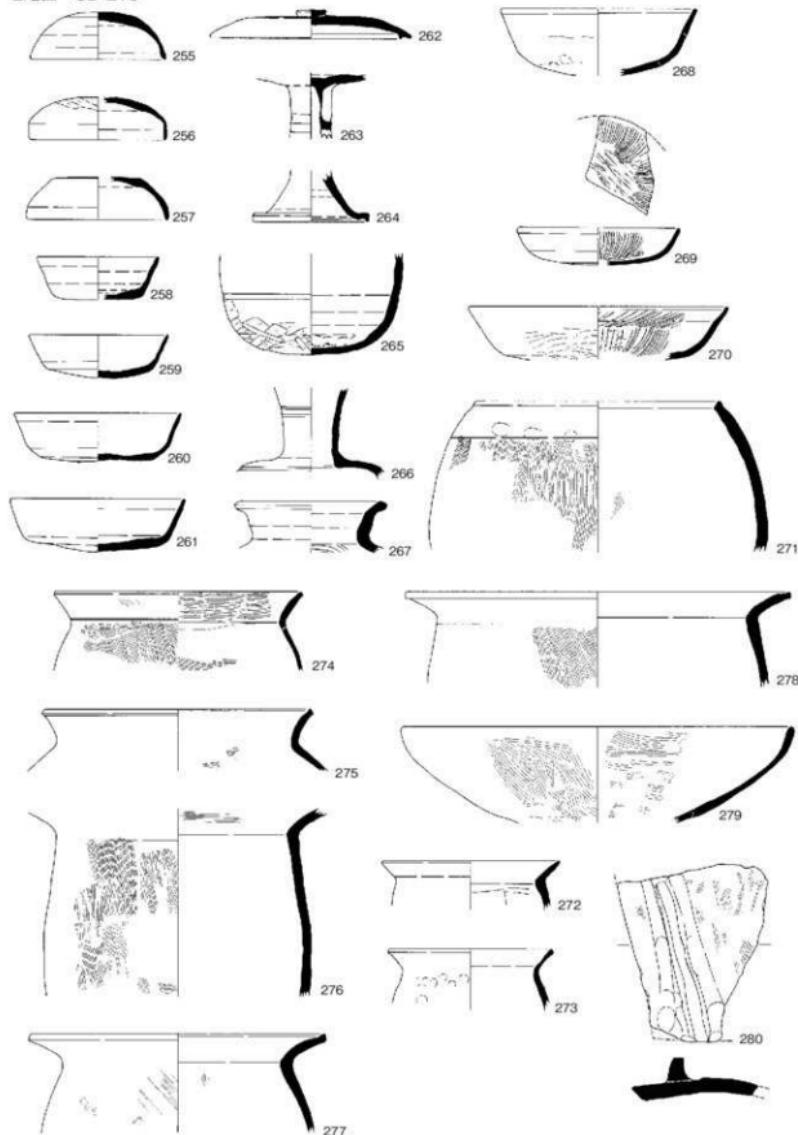
E地区 SD-E12



0 20cm

図版52 B・E地区出土の遺物 (4)

E地区 SD-E16



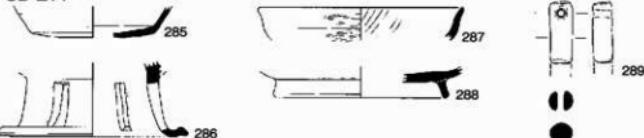
0 20cm

図版53 B・E地区出土の遺物（5）

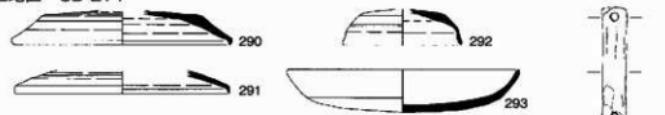
E地区 SD-E10



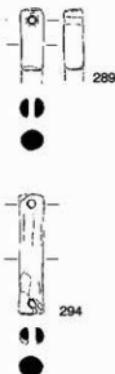
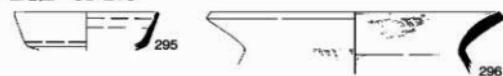
E地区 SD-E11



E地区 SD-E14



E地区 SD-E15



E地区 SD-E17



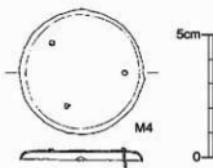
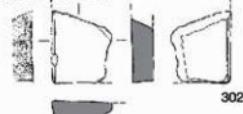
E地区 SD-E66



E地区 SD-E68



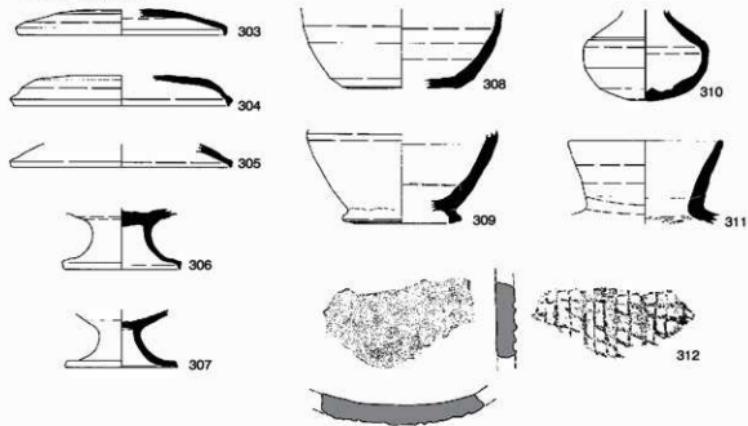
E地区 SD-E1



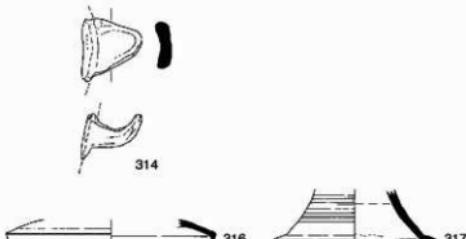
0 20cm

図版54 B・E地区出土の遺物 (6)

E地区 SD-E88



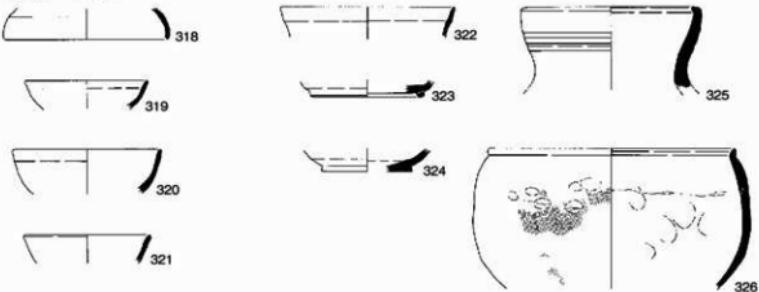
E地区 SB-E1



E地区 SB-E4



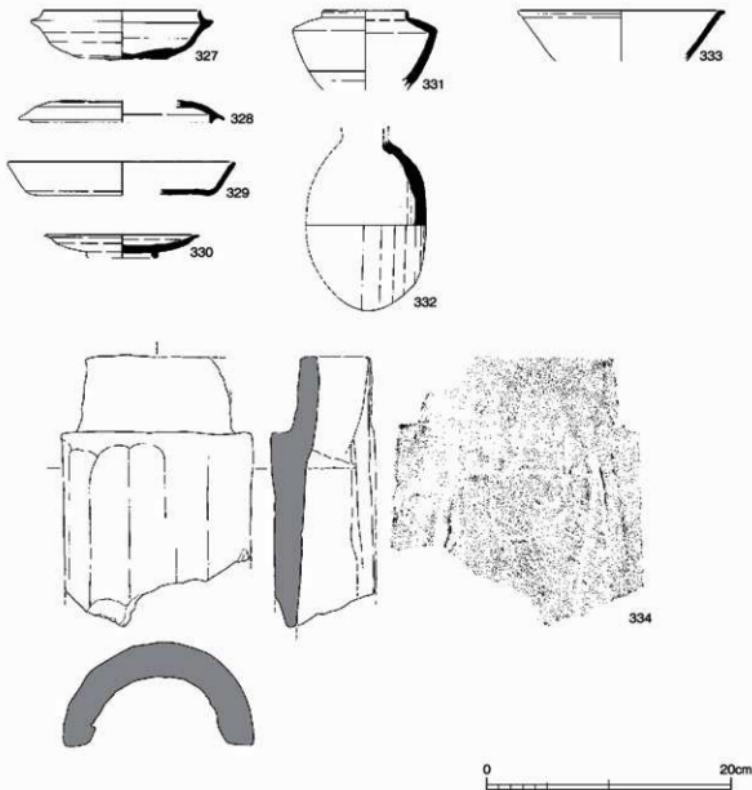
B・E地区 ピット



0 20cm

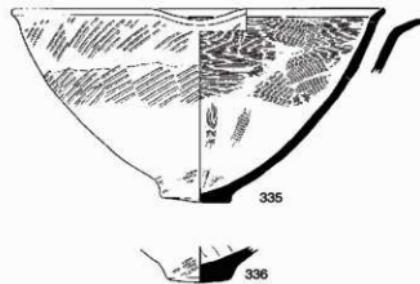
図版55 B・E地区出土の遺物 (7)

B・E地区 包含層

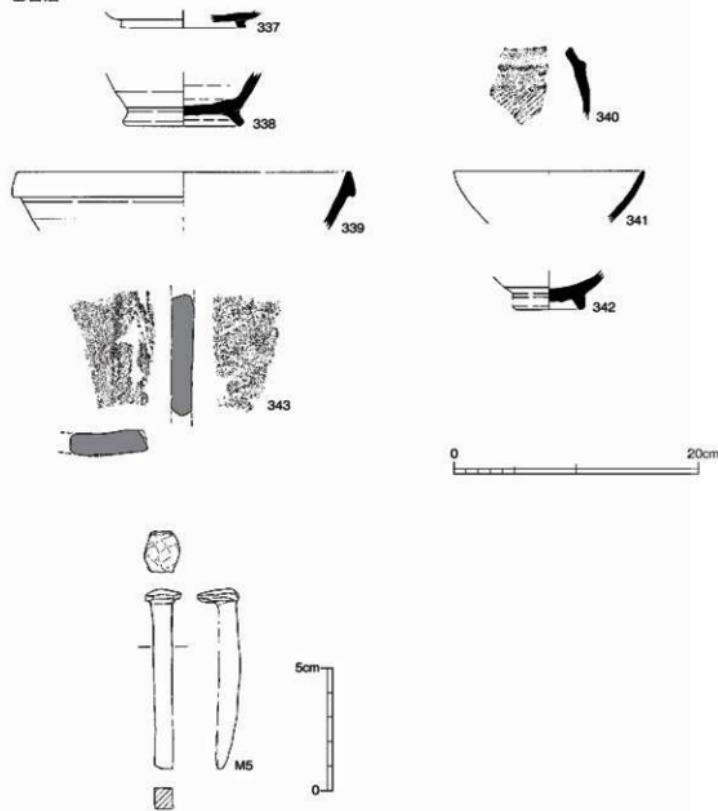


図版56 C地区出土の遺物

C地区 SD-C2



C地区 包含層



写 真 図 版



耳環 (A-1地区P-A207出土)



勾玉 (A-1地区SD-A5出土)

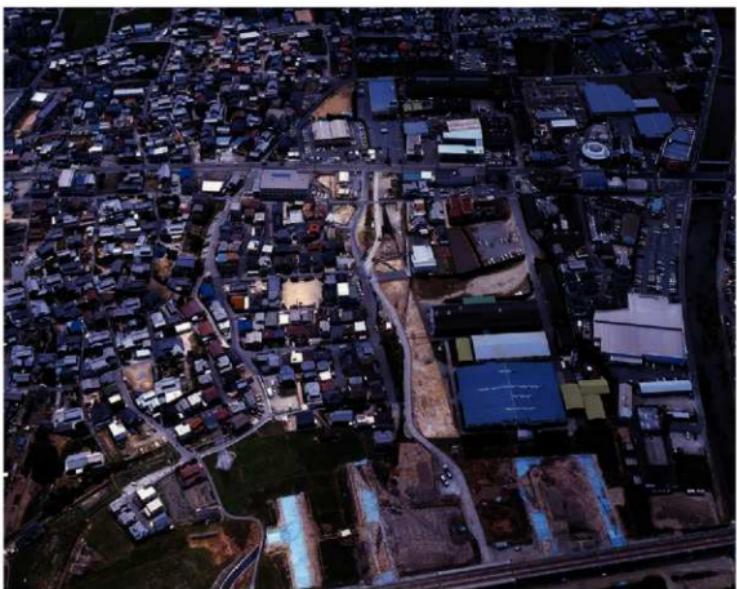
写真図版2 空中写真



遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（北から）



遺跡近景（北から）



遺跡近景（東から）

写真図版4 空中写真



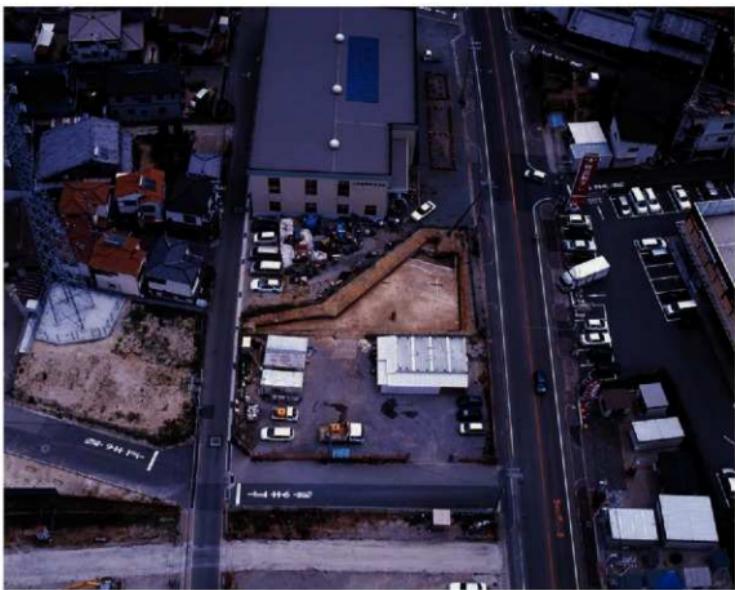
A地区（東から）



B地区（東から）



D・E地区（北から）



C地区（西から）

写真図版 6 空中写真・G地区全景



F地区（東から）



G地区全景（北西から）



全景（南から）



全景（北から）

写真図版 8 A・B地区



A-2・B地区全景（北から）



A・B地区全景（南から）



B地区全景（北から）



写真図版10 A・D・B地区



SB-A4 (北東から)



SB-D4 (南から)



SB-B1 (北東から)



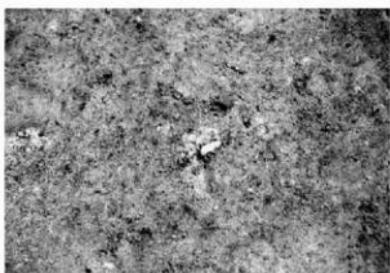
1. 西壁断面（東から）



2. SB-A1内焼土検出状況（西から）



3. SD-A5断面（南から）



4. SD-A5下底勾玉出土状況（南から）



5. SD-A230あぜ断面（西から）



6. SD-A229・230断面（西から）



7. SD-A231・232断面（西から）



8. SD-A230下底土器出土状況（西から）

写真図版12 A-1地区



SK-A69遺物出土状況（東から）



SK-A69遺物出土状況（東から）



SK-A69遺物出土状況（東から）



1. SD-A230土器出土状況（西から）



2. SD-A231土器出土状況（北から）



3. SD-A230上層土器出土状況



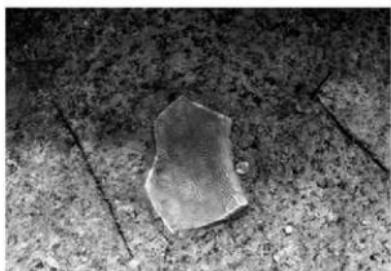
4. SD-A232土器出土状況（南から）



5. P-A107土器出土状況（北から）



6. P-A117土器出土状況（東から）



7. SD-D59土器出土状況（西から）

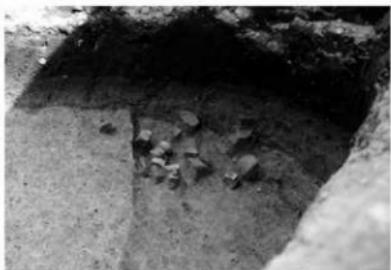


8. SK-D39断面（西から）

写真図版14 B地区



1. SD-B4断面（南から）



2. SK-B42東端土器出土状況（西から）



3. SK-B42土器出土状況（北から）



4. SK-B42断面（東から）



5. SK-B7南北セクション（東から）



6. SK-B7土器出土状況（北から）



7. SD-B4（東から）



8. 作業状況（北から）



D・E地区全景（南から）



E地区遺構密集部（西から）



D・E地区掘立柱建物跡群
(南から)

写真図版16 D・E地区



S B-E4 (西から)



S B-E1 ~ E3 (北から)



S B-D4 (南から)



1. 南部全景（南から）



2. SD-E1~E5 (北から)



3. SK-E45断面（西から）



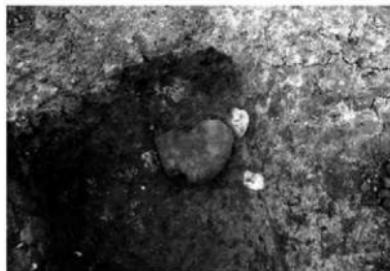
4. SK-E45遺物出土状況（東から）



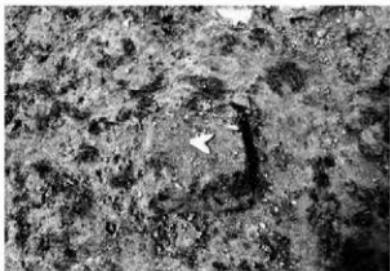
5. SD-E10~E12断面（西から）



6. SD-E12土器出土状況（西から）



7. SD-E14下底土器出土状況（南から）



8. SK-E45石鏃出土状況（東から）

写真図版18 C地区



全景（西から）



SD-C2（南から）



SD-C2北端土層断面（南から）



全景（北から）



全景（東から）



S D-F7と西国街道（南から）

写真図版20 C・F地区



1. C地区SD-C2内土器出土状況（北から）



2. 西国街道の現状（西から）



3. SD-F7（東から）



4. 西国街道北側溝検出状況（東から）



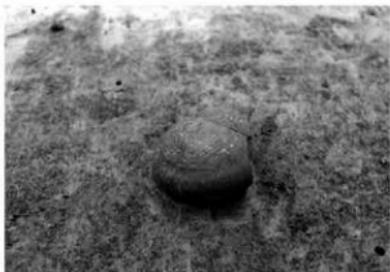
5. SD-F7西端部土層断面（東から）



6. SD-F7中央部土層断面（東から）



7. Po-F10包含層下部土器出土状況（西から）



8. Po-F1遭構面上土器出土状況（西から）



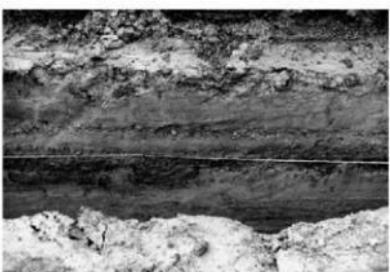
1. A-1地区地質トレンチ（北から）



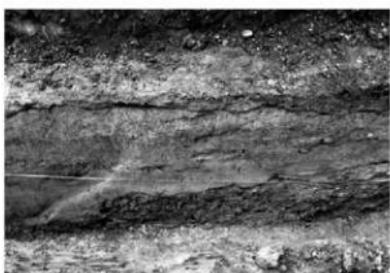
2. A-1地区地質トレンチ断面（東から）



3. A-2地区地質トレンチ（南から）



4. A-2地区地質トレンチ断面（東から）



5. A-2地区地質トレンチ断面（北東から）



6. F地区地質トレンチ（北から）

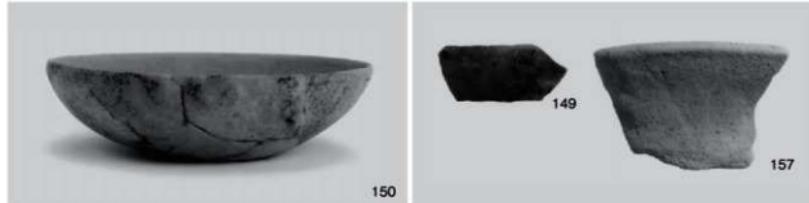
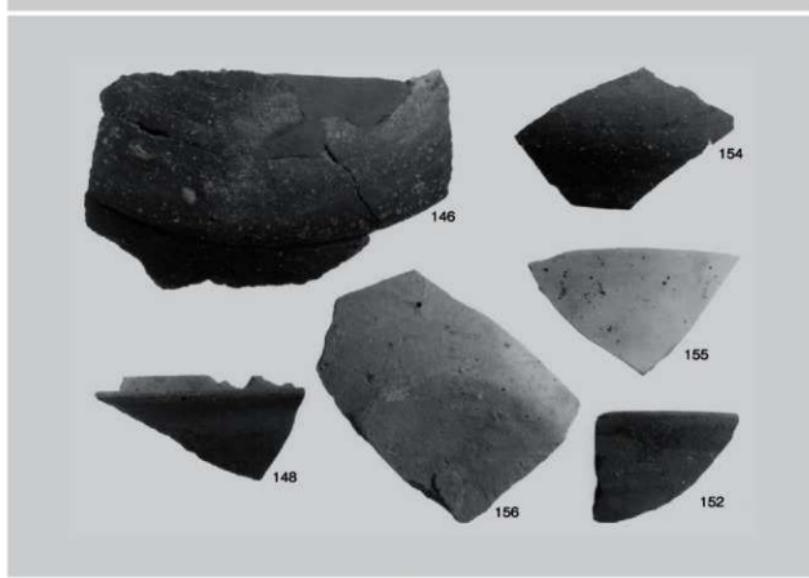
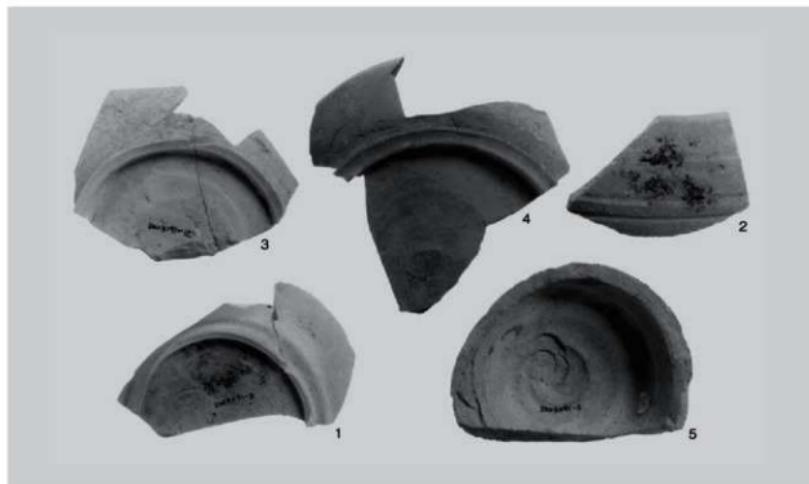


7. F地区地質トレンチ断面（東から）

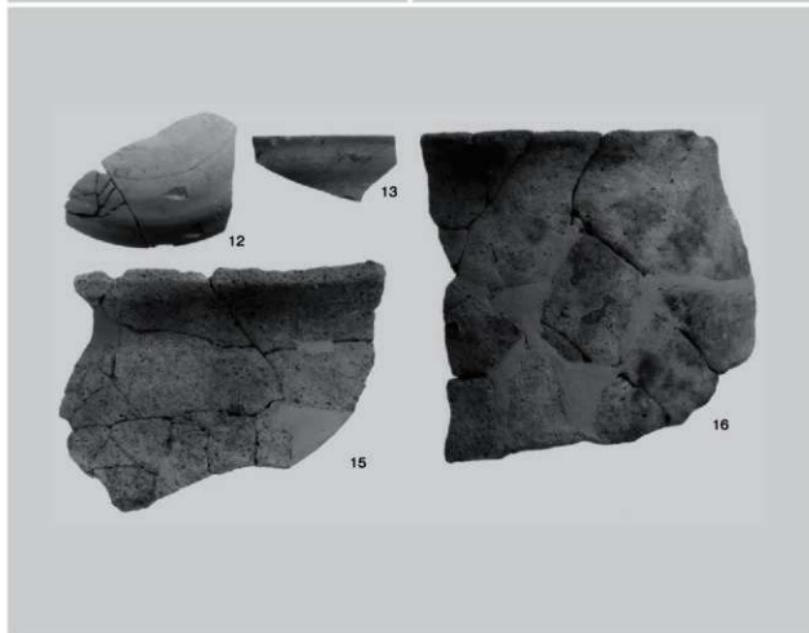


8. F地区地質トレンチ断面（東から）

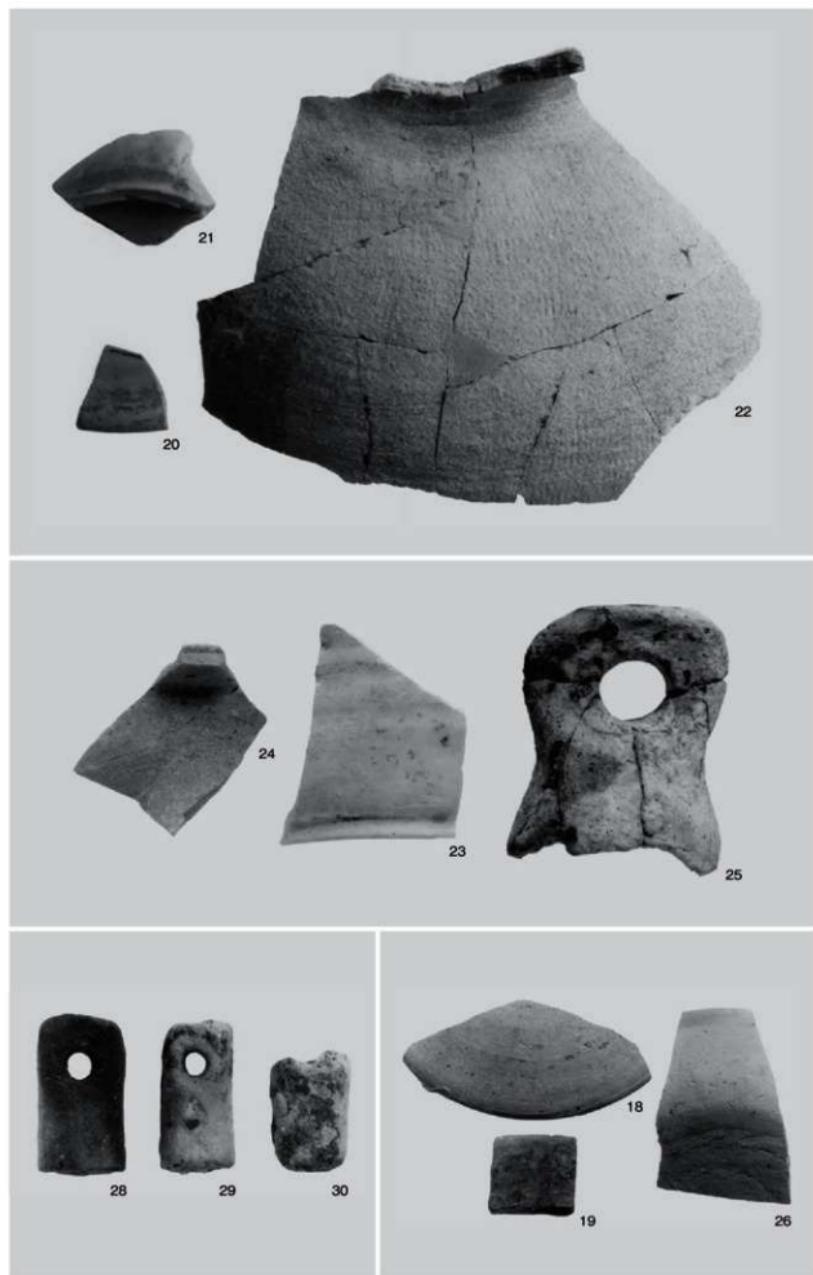
写真図版22 A・D地区



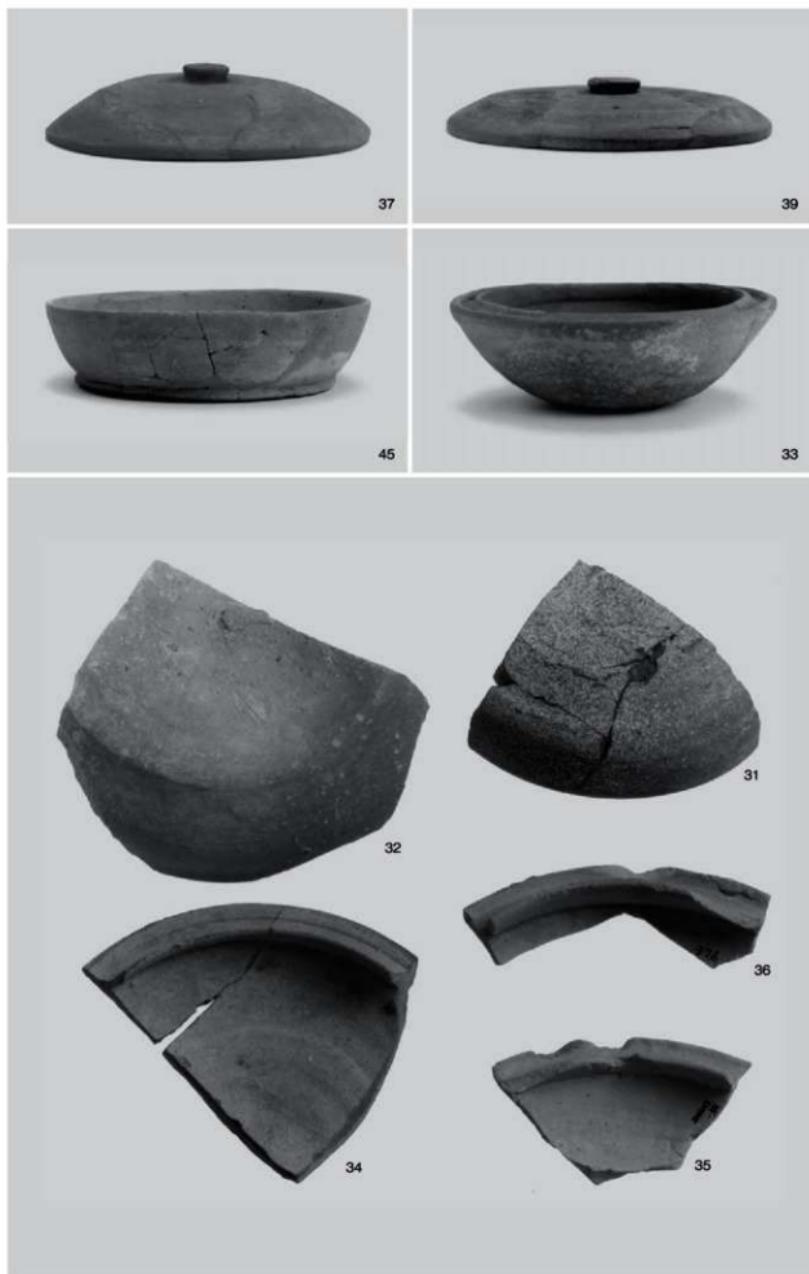
出土遺物 (1)



出土遺物 (2) SK-A69・A90



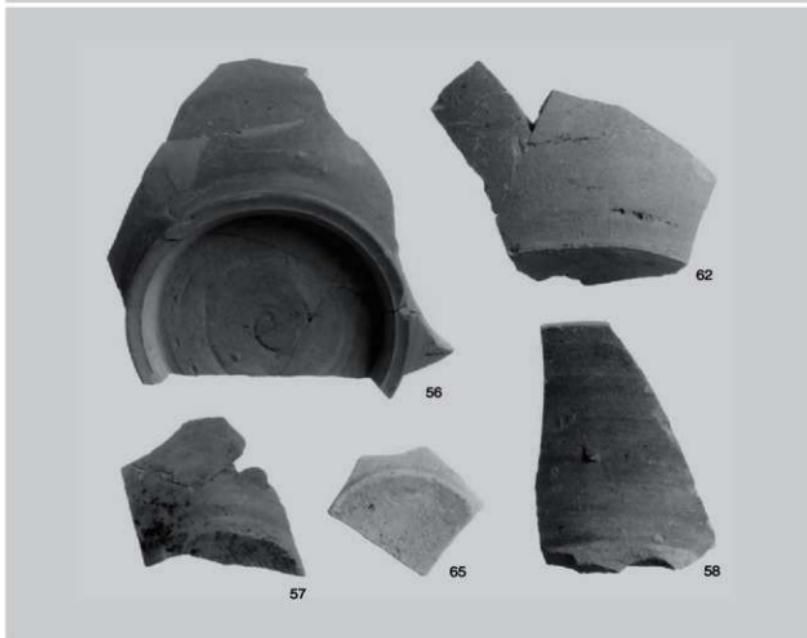
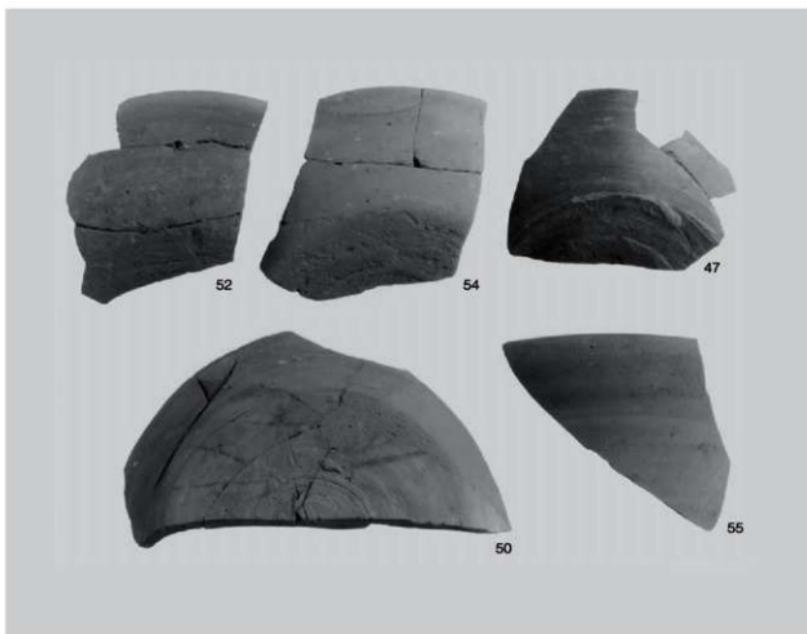
出土遺物 (3)



出土遺物 (4) SD-A230



出土遺物 (5) SD-A230

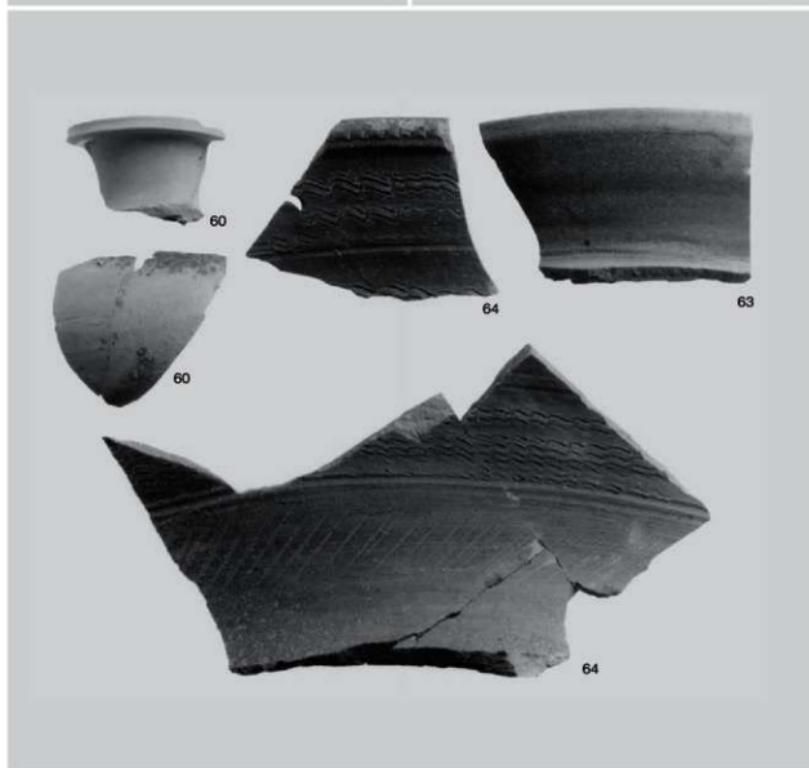


出土遺物 (6) SD-A230



59

61

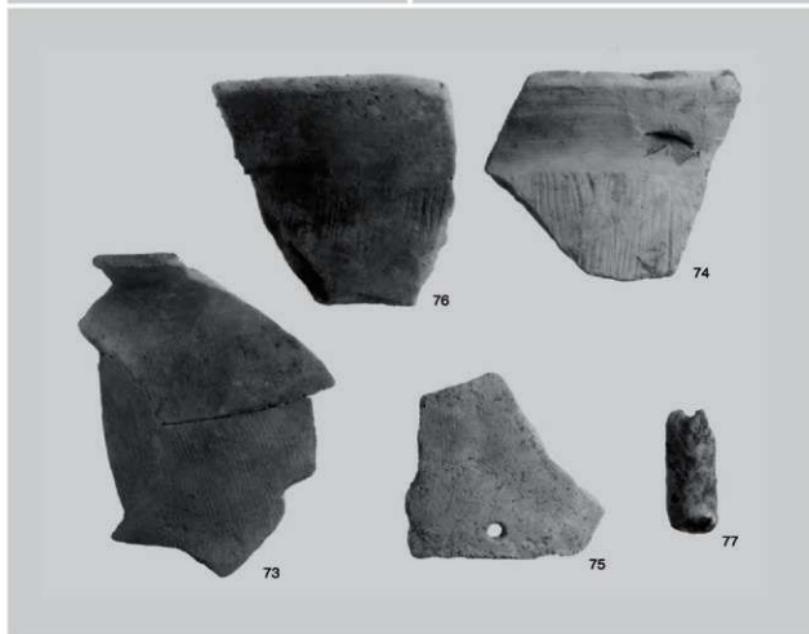


60

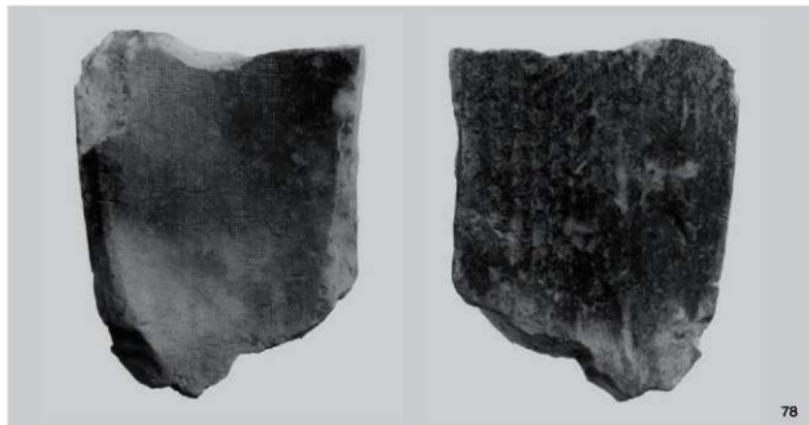
64

63

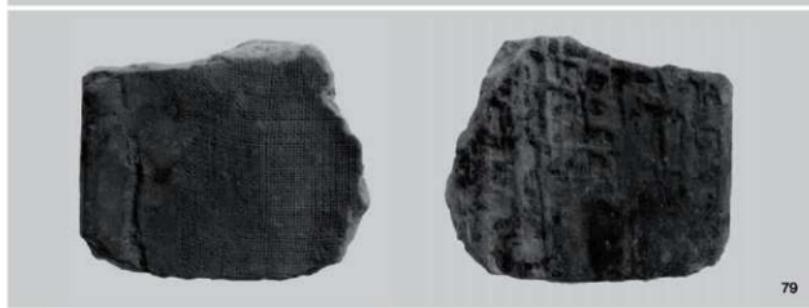
64



出土遺物 (8) SD-A230



78



79



80



81



82



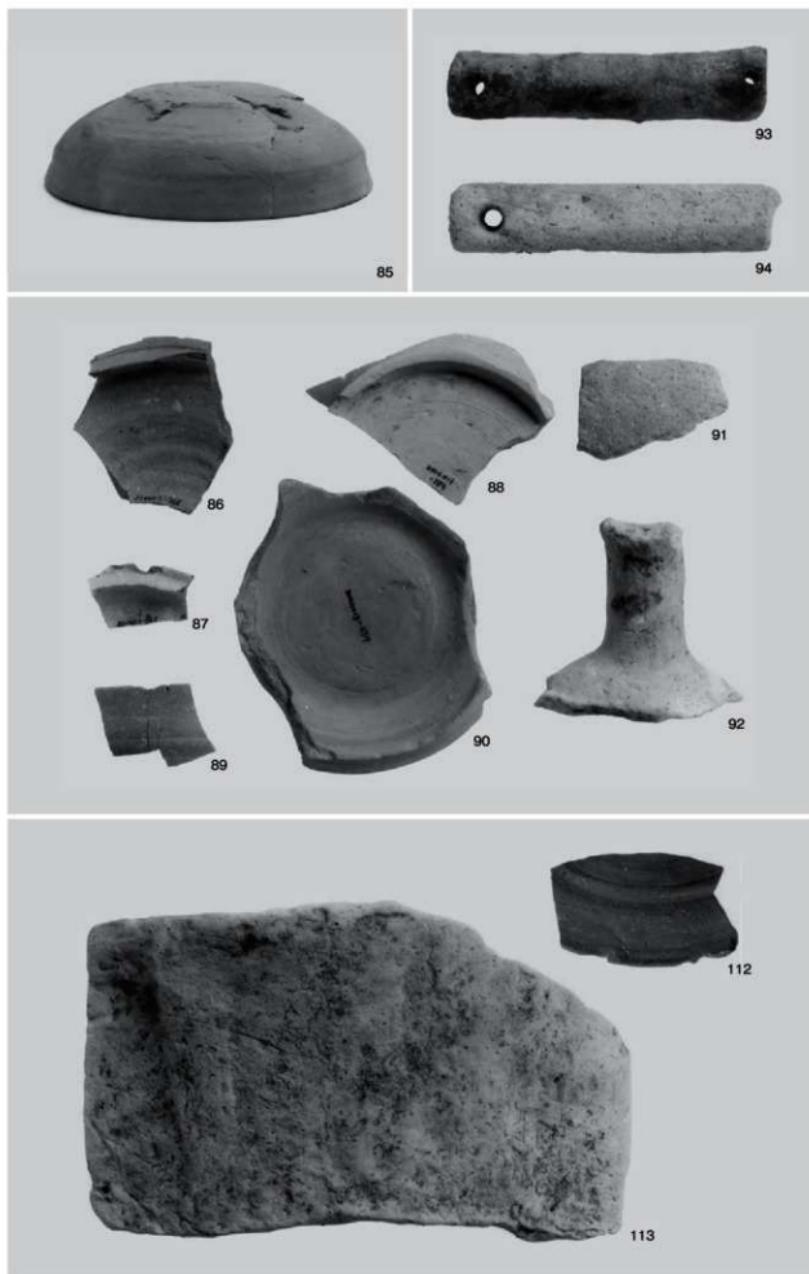
83



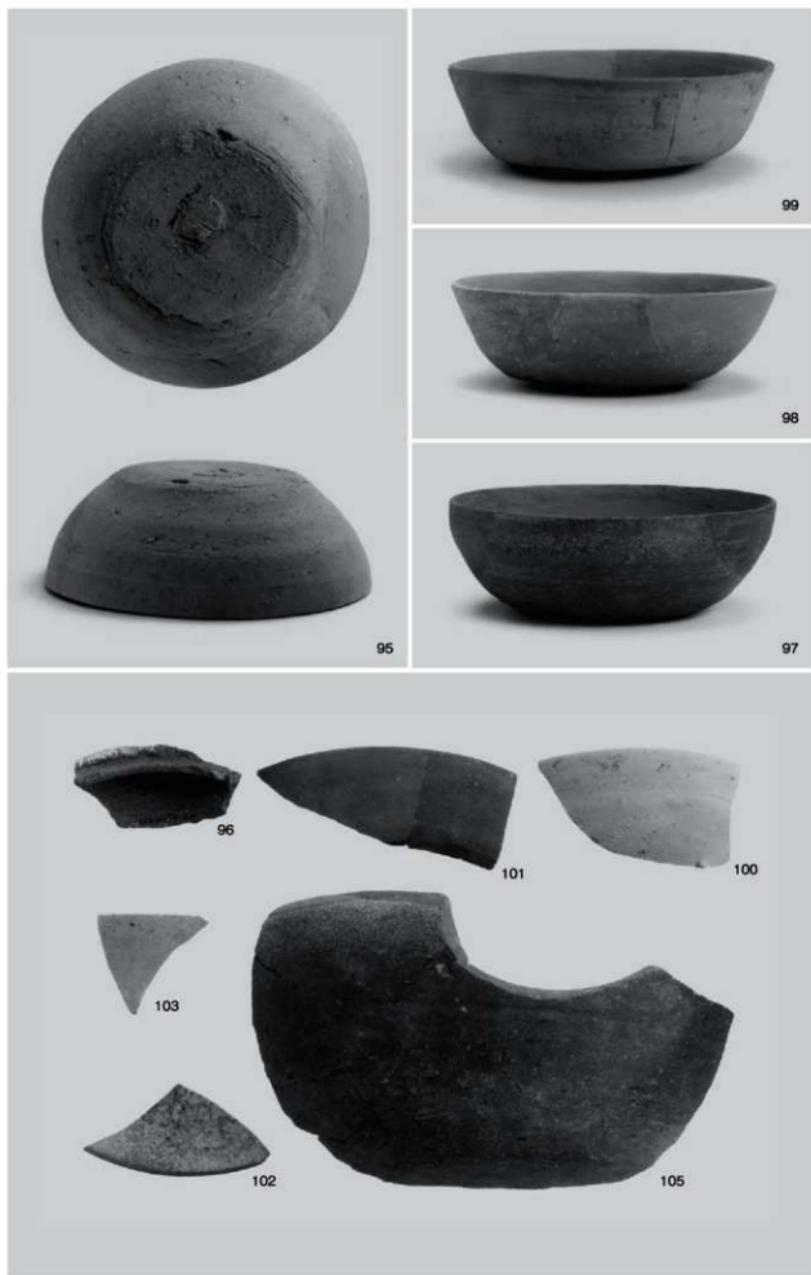
84

出土遺物 (10) SD-A230

写真図版32 A-2地区



出土遺物 (11) SD-A229・A230



出土遺物 (12) SD-D58

写真図版34 D地区



106



108



107



109



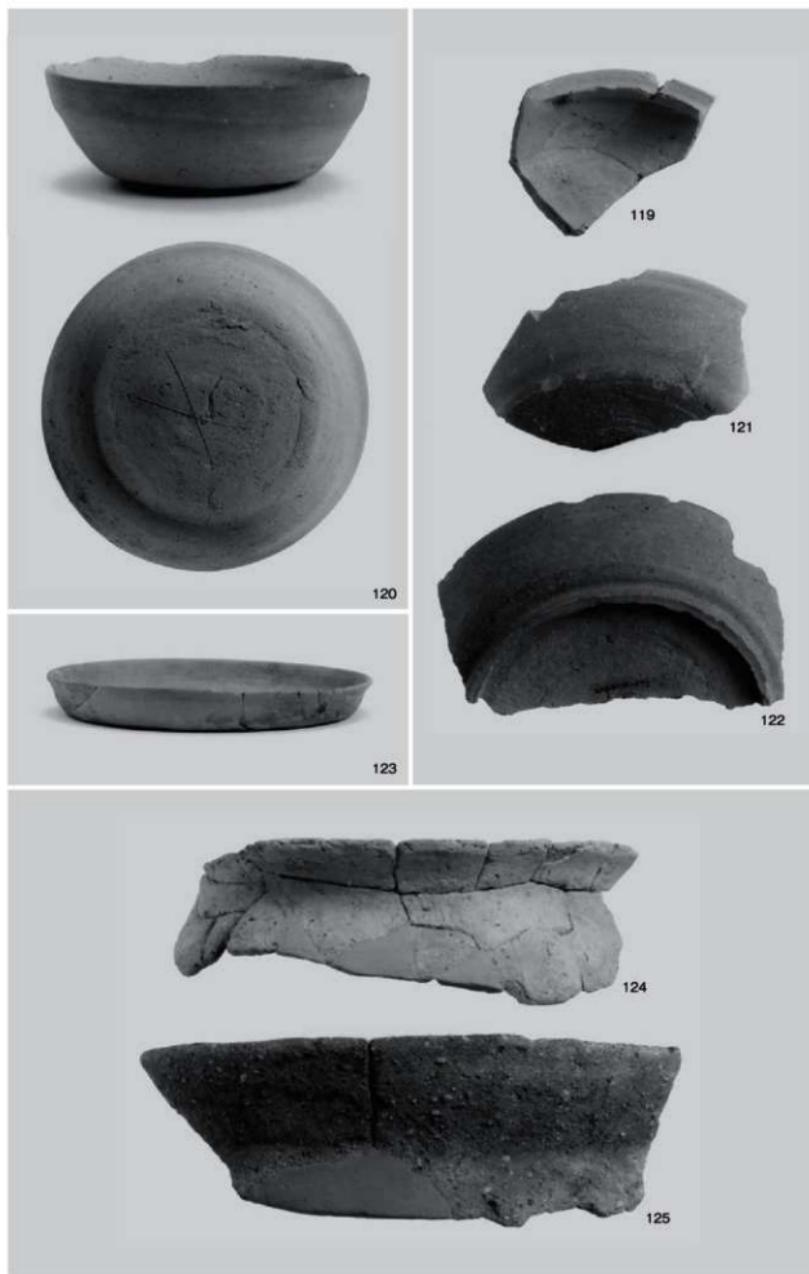
110

出土遺物 (13) SD-D58

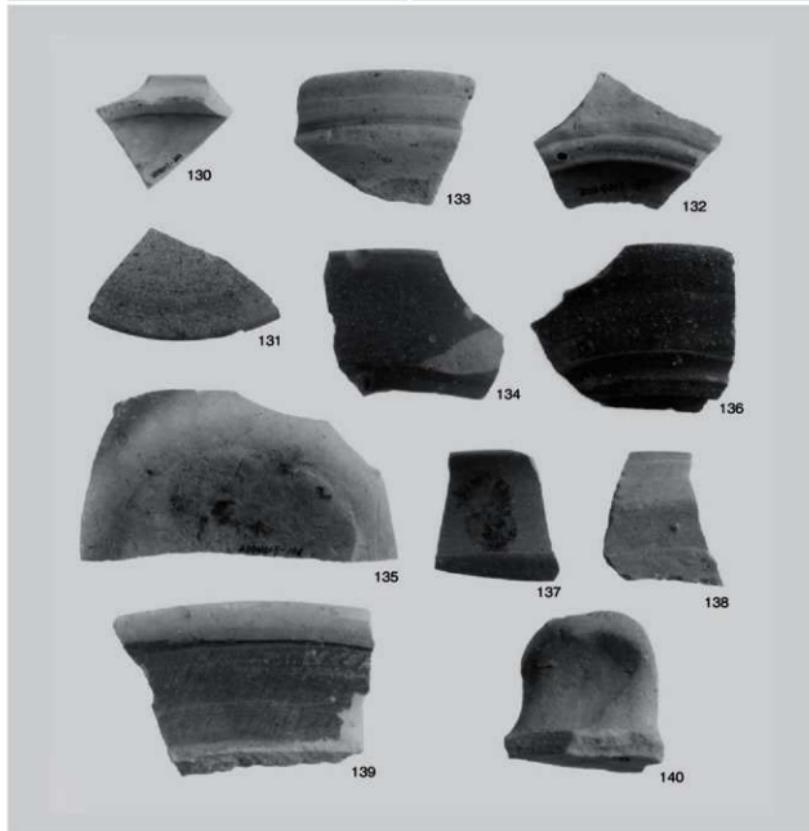
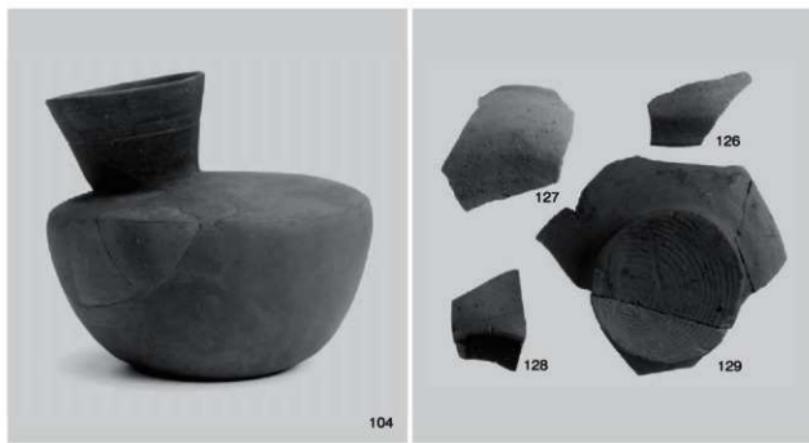


出土遺物 (14) SD-A231・D57・D59

写真図版36 A-2地区

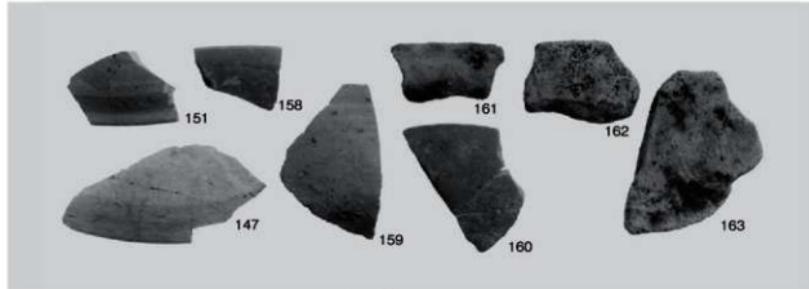
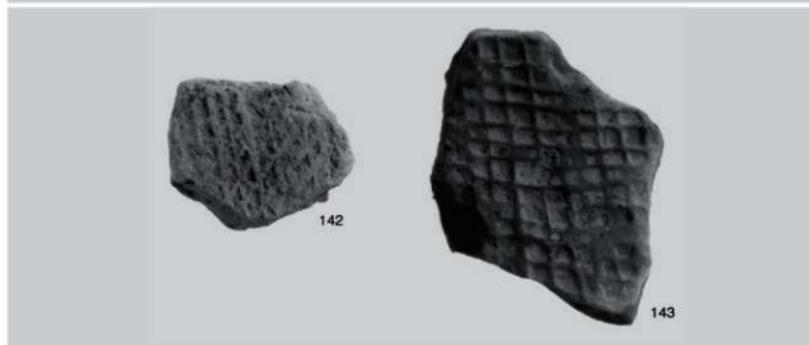


出土遺物 (15) SD-A232

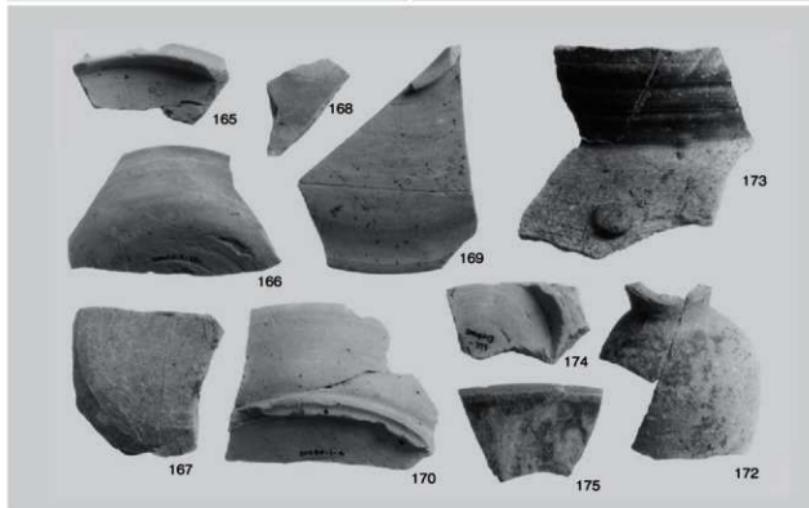


出土遺物 (16)

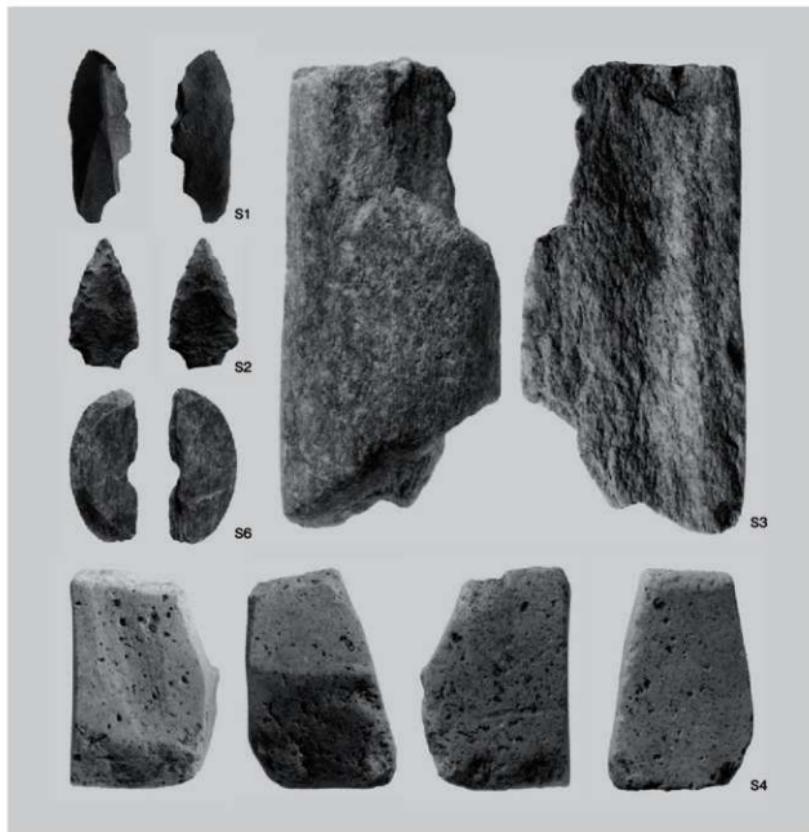
写真図版38 A・D地区



出土遺物 (17)



出土遺物 (18) 包含層



出土遺物 (19) 石器・金属器



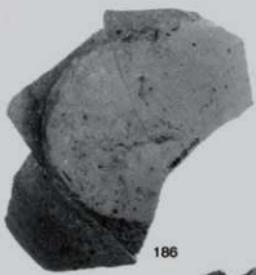
189



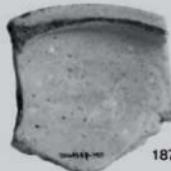
188



191



186



187



192

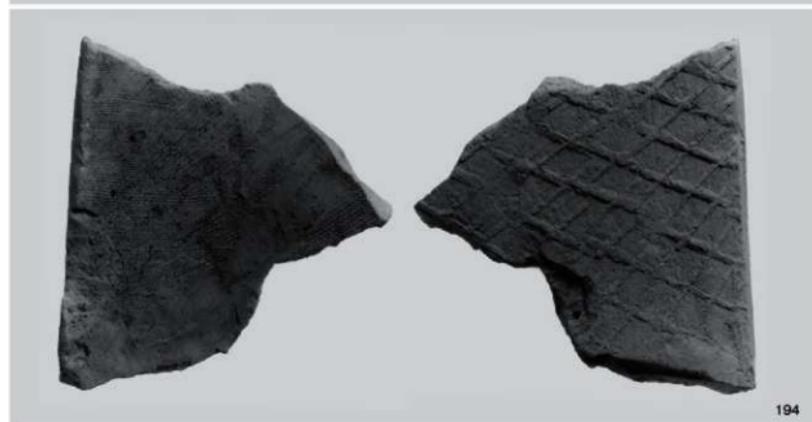
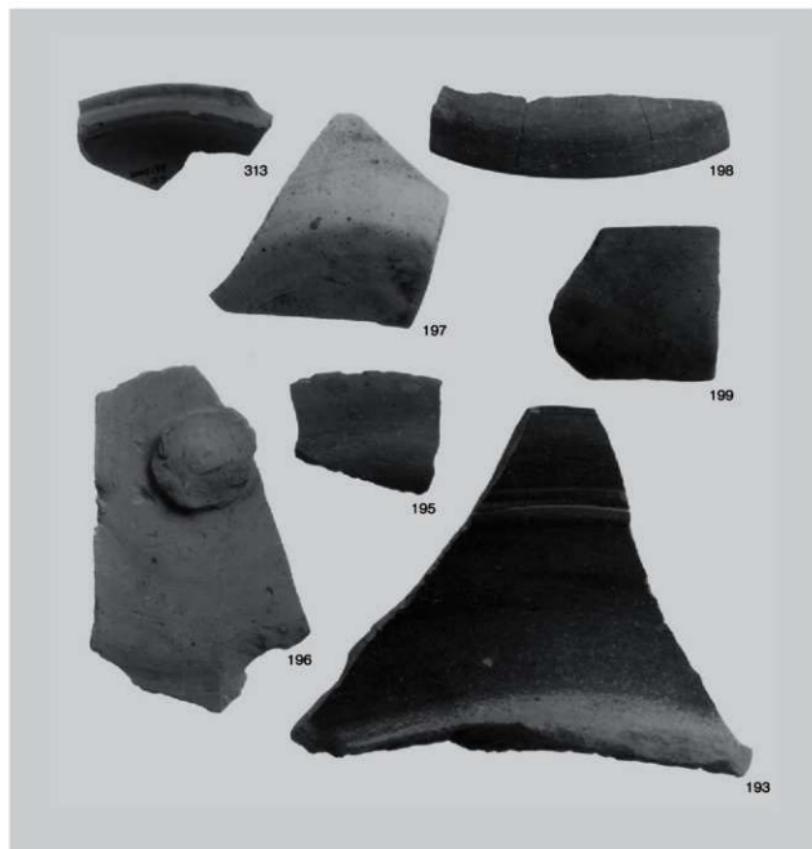


185



190

写真図版42 E地区

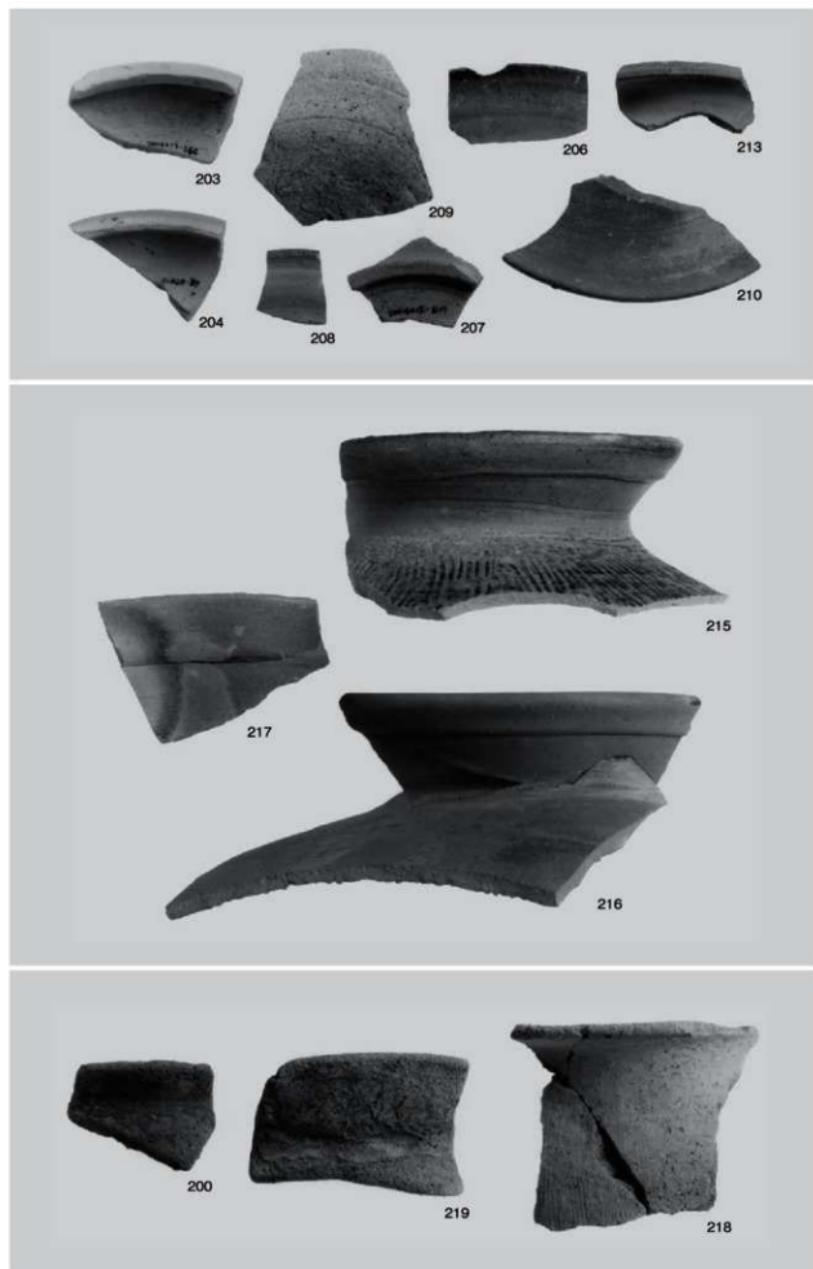


出土遺物 (21)

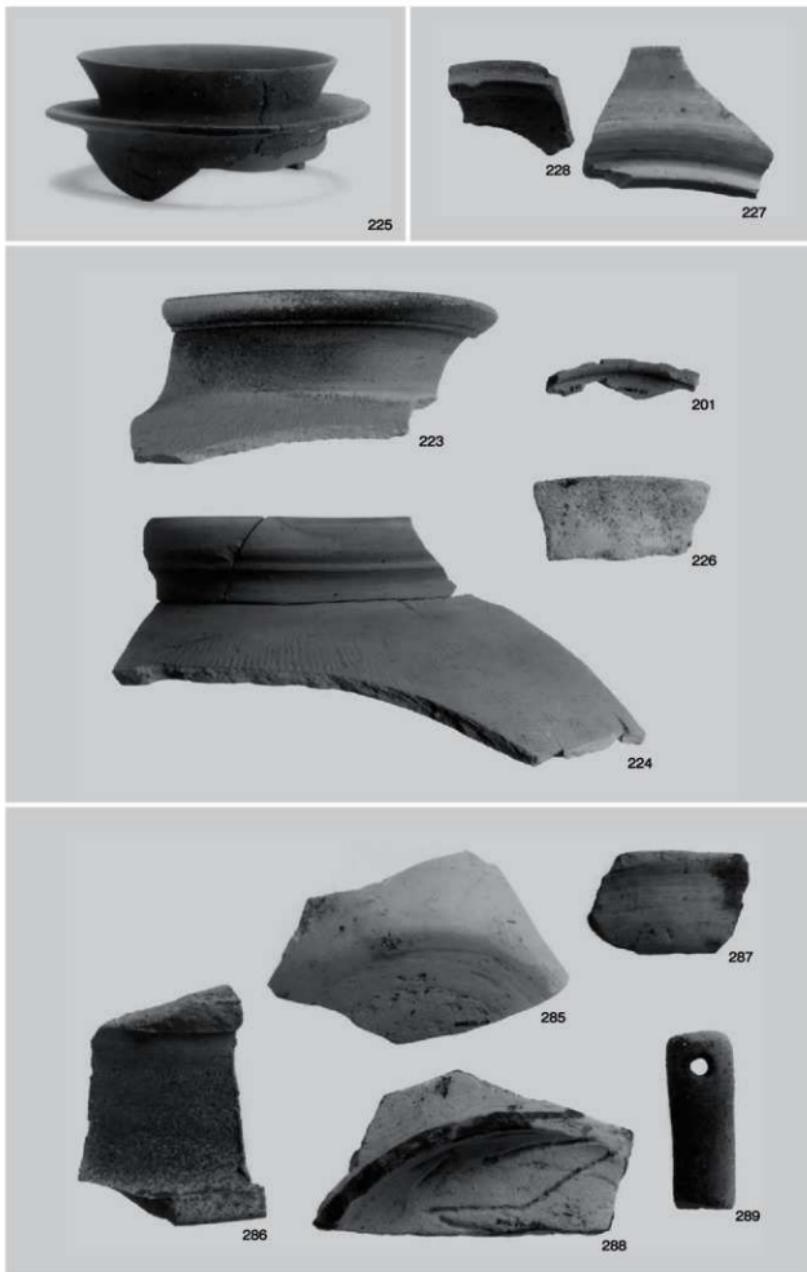


出土遺物 (22) SD-B4

写真図版44 B地区

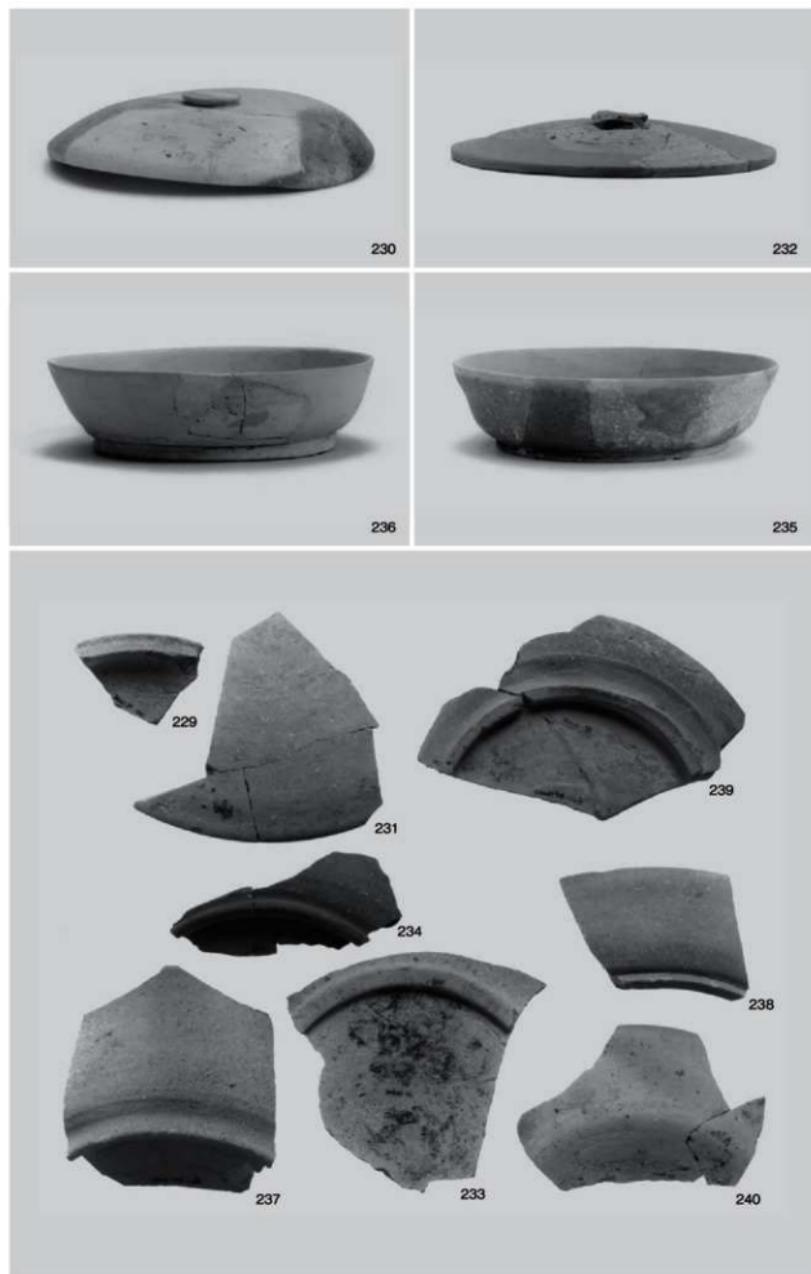


出土遺物 (23) SD-B2~B4

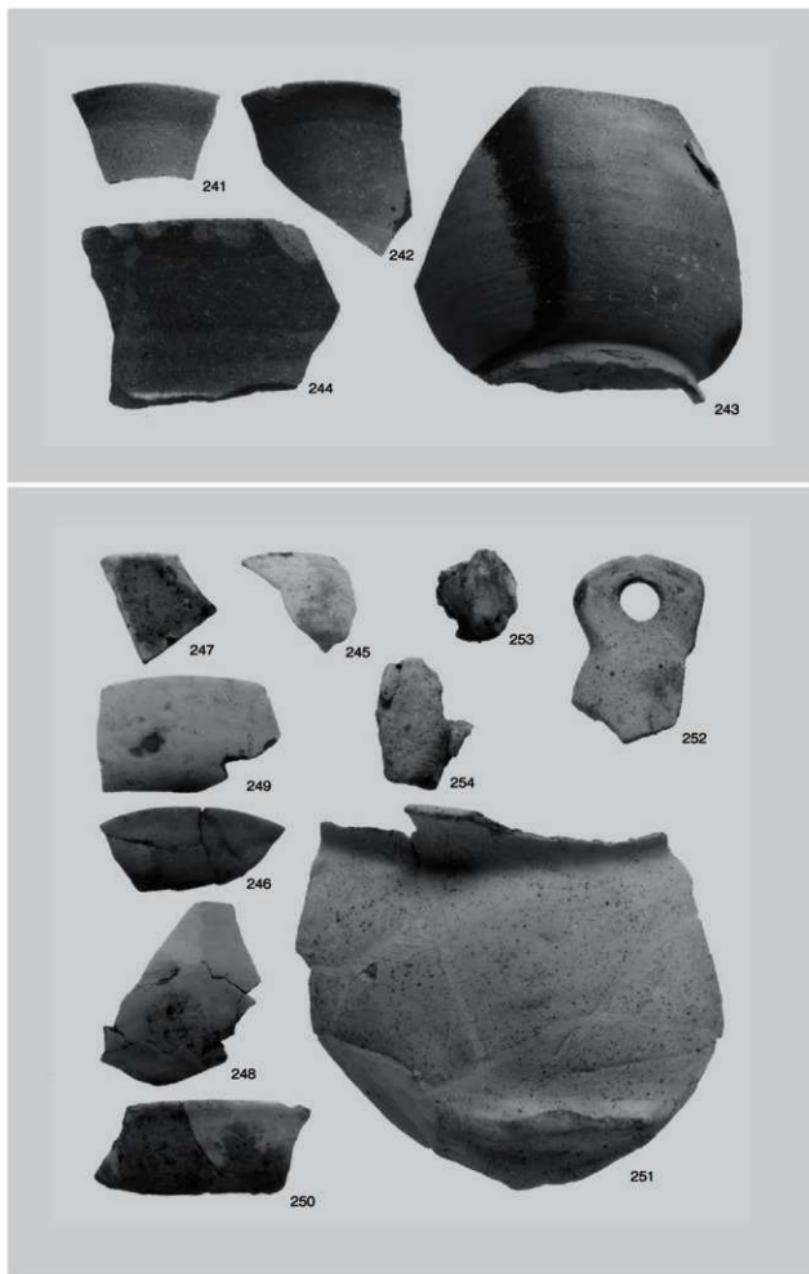


出土遺物 (24)

写真図版46 E地区



出土遺物 (25) SD-E12



出土遺物 (26) SD-E12

写真図版48 E地区



256



257



258



259



260



261



262

260

262

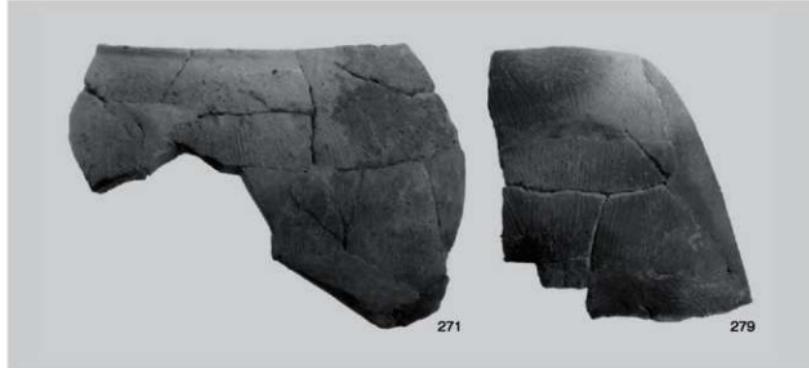
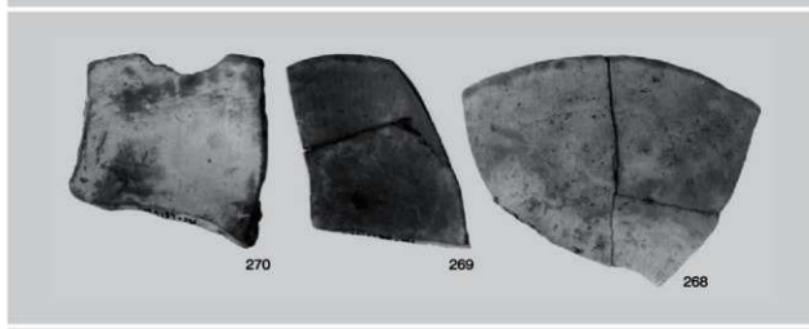


263



264

出土遺物 (27) SD-E16



出土遺物 (28) SD-E16

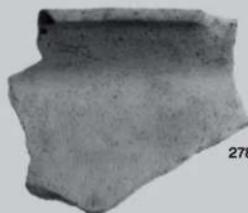
写真図版50 E地区



273



272



278



277



275



274



276



280

出土遺物 (29) SD-E16



出土遺物 (30) S D-E 10・E 14

写真図版52 E地区



307



306



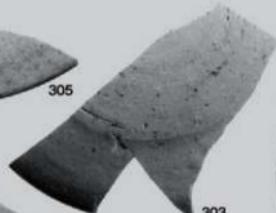
310



312



305



303



304



311

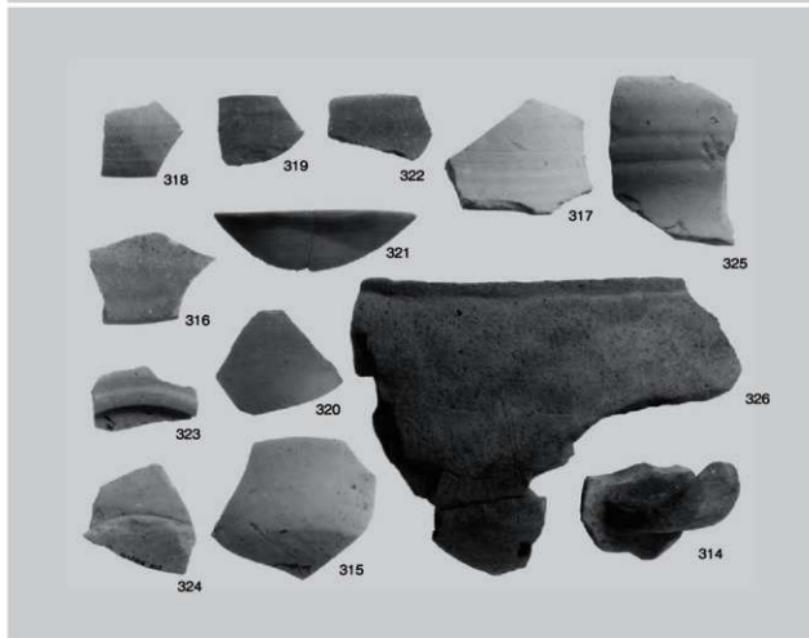
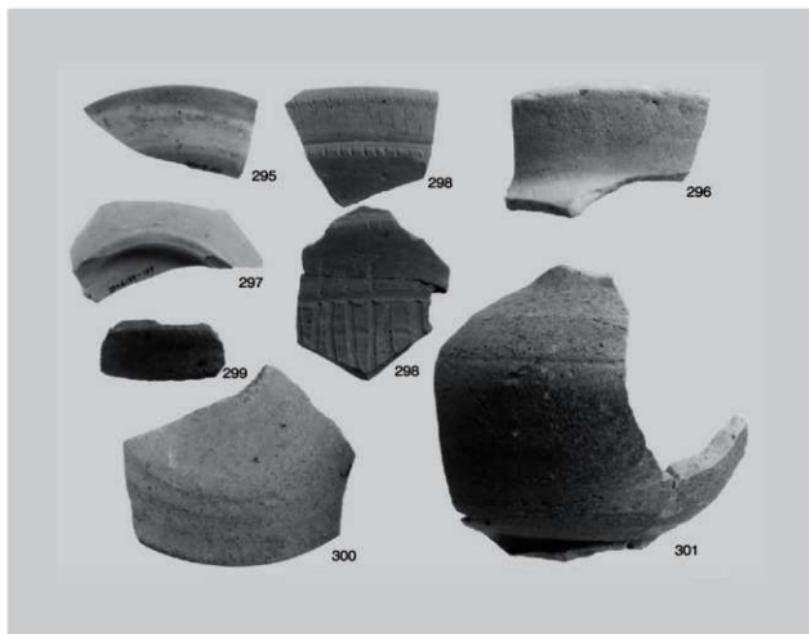


309



308

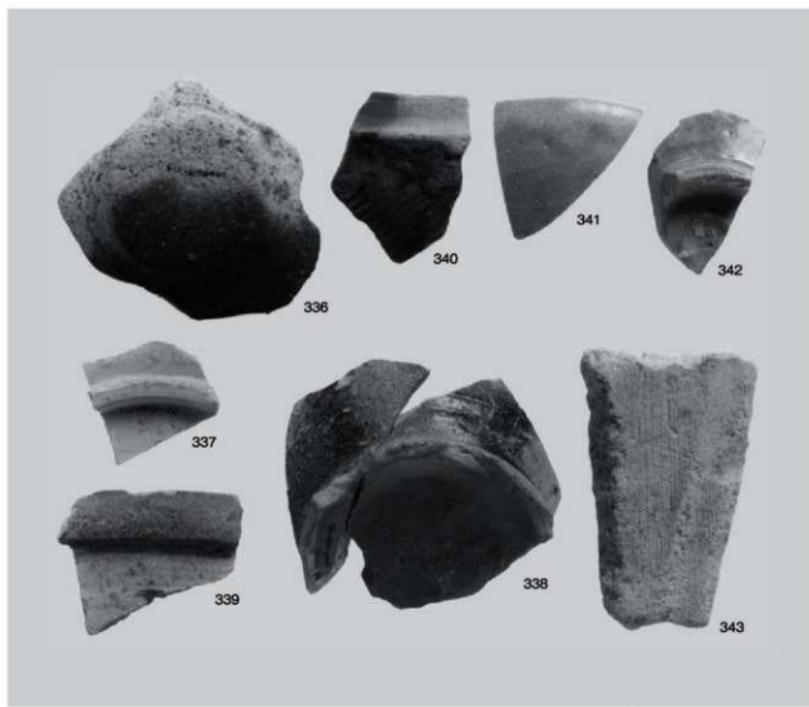
出土遺物 (31) SD-E88



出土遺物 (32)



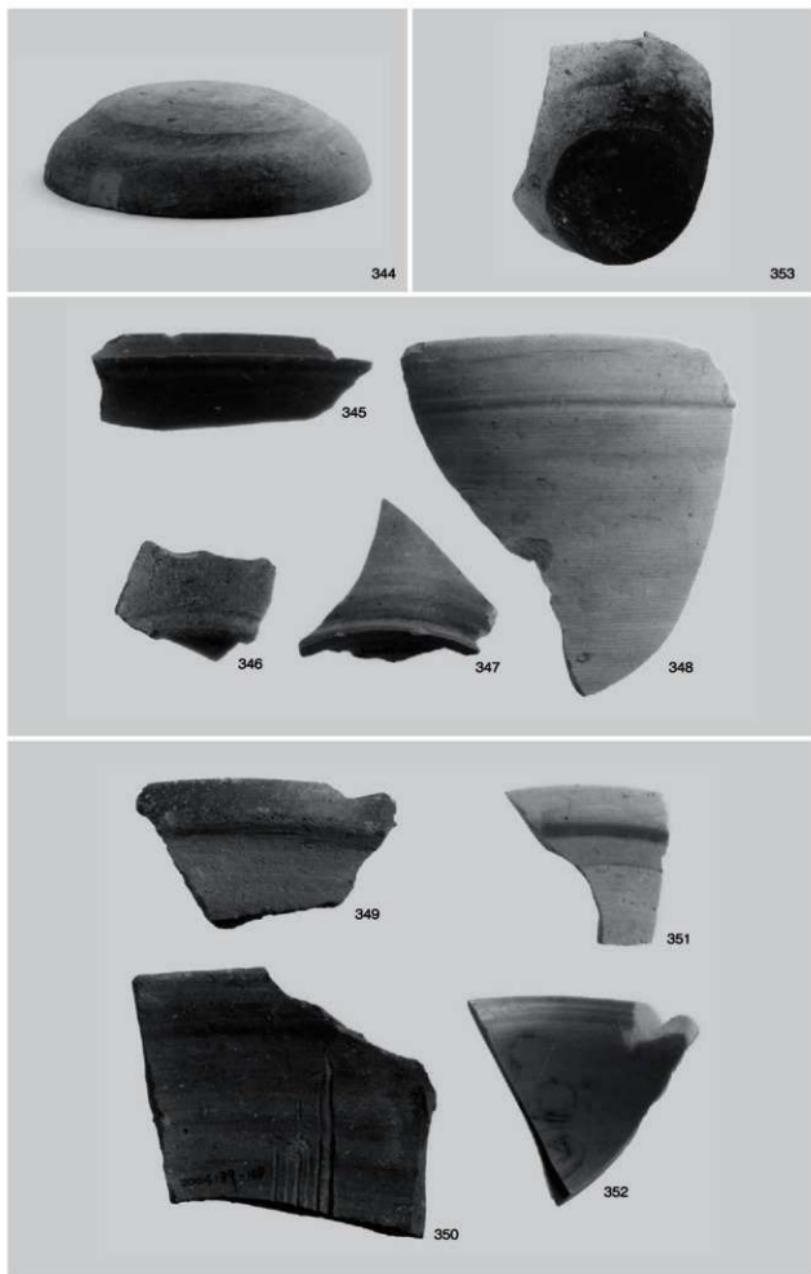
出土遺物(33) 包含層・石器・金属器



出土遺物 (34)

335

M5



出土遺物 (35)

報告書抄録

報告書抄録 (Outline of the Report)

ふりがな	さかもといせきさん			About the Report				
書名	坂元遺跡 III			Excavation Report of the Sakamoto site				
副書名	(主) 加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴う発掘調査			Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 404				
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告			The Author/Editor : Hiroyuki Kubo/Kazuhiro Kishimoto /Tadashi Shinomiya/Kiyotomo Yamada				
シリーズ番号	第404冊							
編著者名	久保弘幸・岸本一宏・篠宮正・山田清朝			Hyogo prefectoral museum of Archaeology Address :				
編集機関	兵庫県立考古博物館			1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan				
所在地	兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号							
発行年月日	平成23(2011)年3月24日			Publication : March 24, 2011				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経			
坂元遺跡	加古川市野口町坂元・ 野口	市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude			
		28210	110634	34°45' 26"	134°50' 58"			
遺跡調査番号	調査の種別	調査期間		調査原因				
2004013	本発掘調査	2004年5月27日~2004年11月6日		(主) 加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業				
2004139	本発掘調査							
2007101	本発掘調査							
遺跡の種別	主な時代	主な遺構			主な遺物			
集落遺跡	弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代	掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑			弥生土器・須恵器・土師器			
要約	本書に収録した調査では、弥生時代・古墳時代の溝、飛鳥時代・奈良時代の建物跡群、溝、土坑等が検出された。							
Address of the site	Sakamoto and Noguchi, Kakogawa city, Hyogo pref. Japan	Date of the Excavation	27, May ~ 6, Nov. 2004 01, Oct. ~ 23, Oct. 2007					
Category of the site	Settlement	Archaeological Features						
Period of the site	Yayoi period, Kofun period, Asuka period, Nara period	Posthole-type buildings, Postholes, Pits, Gutters,						
Main Relics	Yayoi pottery, Sue wares, Haji wares, Porcelains							
Summary	On this excavation, we found relics and archaeological features that belong Yayoi, Kofun, Asuka(7th century), Nara(8th century) period and Kamakura period(12th ~ 13th century).							

加古川市

坂元遺跡発掘調査報告書Ⅲ

(主) 加古川小野線(東播磨南北道路) 道路改築事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年3月24日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675 0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発行 兵庫県教育委員会

〒650 8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 野崎印刷紙業株式会社

〒603 8151 京都市北区小山下総町54 5
